

博士学位請求論文

指導教員 石原 宏 准教授

箱庭制作者の主観的体験に対して多元的方法を用いた質的研究

— M-GTAによる促進機能に関する理論生成と  
単一事例質的研究による系列的理解を中心に —

佛教大学大学院

教育学研究科臨床心理学専攻

楠本 和彦

## 目 次

I 章. 本研究全体の問題および目的	
I-1. 目的	1
I-2. 用語の定義	1
I-3. 第1研究および第2研究に共通する研究内容に関する検討	2
1) 箱庭制作過程における, 箱庭制作者の主観的体験	2
2) 継続的な箱庭制作面接	8
I-4. 第1研究および第2研究に共通する調査・分析に関する検討	9
1) 箱庭制作過程に関する先行研究における調査・分析方法	9
2) 多元的方法・トライアングレーション	9
3) 本研究における多元的な調査・分析方法の採用	11
第1研究 M-GTAによる箱庭制作面接の促進機能に関する研究	
II 章. 問題および目的	
II-1. 第1研究の研究内容に関する検討	12
1) 箱庭制作面接の促進機能	12
II-2. M-GTAによる箱庭制作過程に関する主観的体験に 焦点を合わせた研究	12
1) M-GTAを箱庭制作過程に関する研究に採用する際に検討すべき論点	13
2) M-GTAによる箱庭制作過程についての先行研究	14
II-3. M-GTAを採用するに当たって検討すべき他の論点	18
1) 単一事例修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ	18
2) 同一調査参加者に対する複数回のインタビュー実施	18
III 章. 方法	
III-1. 調査参加者・調査方法	20
1) 箱庭制作面接	21
2) ふりかえり面接	21
3) 全過程のふりかえり面接	22
III-2. 分析方法	23
1) 基礎資料の作成	23
2) M-GTAによる分析	23
IV 章. 第1研究の結果の概要	
IV-1. 促進要因間の交流の全体像	25
IV-2. カテゴリー, 概念, 具体例等の表記について	26
V 章. M-GTAのコアカテゴリー①【内界と装置の交流】の結果および考察	

V-1. 「装置」から「内界」への影響の結果および考察	27
1) [ミニチュアにより喚起される内的プロセス]の結果および考察	27
V-2. 「内界」から「装置」への影響の結果および考察	35
1) <ミニチュアに付与された内的プロセス>の結果および考察	35
2) [不明瞭なミニチュアの意味や特性]の結果および考察	40
V-3. 「内界」と「装置」との双方向の影響の結果および考察	42
1) [ミニチュアの多義性]の結果および考察	43
2) [ミニチュアによる自己のイメージや心理的状況や特性への気づき]の結果および考察	46
VI章. M-GTAのコアカテゴリ②【内界と構成の交流】の結果および考察	
VI-1. 「構成」から「内界」への影響の結果および考察	51
1) [構成により喚起される内的プロセス]の結果および考察	51
VI-2. 「内界」から「構成」への影響の結果および考察	61
1) [構成に付与された内的プロセス]の結果および考察	61
2) [内的プロセスの構成への影響]の結果および考察	67
VI-3. 「内界」と「構成」との双方向の影響の結果および考察	70
VI-3-1. <<創造における受動性と能動性>>と、その中のカテゴリ、概念の結果および考察	70
1) <<創造における受動性と能動性>>の結果および考察	70
VI-3-2. <イメージの自律性>と[作品の今後のイメージが湧いてくる]の結果および考察	75
1) <イメージの自律性>の結果および考察	75
2) [作品の今後のイメージが湧いてくる]の結果および考察	77
VI-3-3. <イメージの自律性>に含まれない2概念の結果および考察	80
1) [イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]の結果および考察	81
2) [非意図的な構成を基に、意図的に構成する内的プロセス]の結果および考察	83
VI-3-4. <創造をめぐる肯定的感情と否定的感情>内の2概念の結果および考察	85
1) [創造の喜び]の結果および考察	85
2) [作品に対して、否定的な感情や感覚をもつプロセス]の結果および考察	87
VI-3-5. 内界と構成との双方向の影響を示す、他5概念の結果および考察	91
1) [構成による表現の多義性]の結果および考察	91
2) [他の領域の構成への影響]の結果および考察	95
3) [ミニチュアが置かれない領域についての意図や感覚]の結果および考察	98
4) [構成による自己のイメージや心理的状況や特性の表現]の結果および考察	100
5) [不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]の結果および考察	103

## VII章. M-GTAのコアカテゴリー④【内界と装置と構成の交流】の結果および考察

VII-1. 「装置」が中心となる概念群の結果および考察	110
1) [砂や砂箱の底の色を巡る内的プロセスやその構成への影響]の結果 および考察	110
2) [ミニチュアを巡る内的プロセスやその構成への影響]の結果および考察	115
3) [ミニチュアの他領域との関連]の結果および考察	119
VII-2. 「構成」が中心となるカテゴリー・概念群の結果および考察	121
VII-2-1. <ミニチュア選択の内的プロセス>と[構成を巡る内的プロセス のミニチュア選択への影響], [代替としてのミニチュア選択や 装置の利用]の結果および考察	121
1) <ミニチュア選択の内的プロセス>の結果および考察	121
2) [構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響]の結果および考察	123
3) [代替としてのミニチュア選択や装置の利用]の結果および考察	125
VII-2-2. <ミニチュア選択の内的プロセス>に含まれない[作られなかった 構成]と[説明過程で, ミニチュアを置きかえるプロセス]の結果 および考察	128
1) [作られなかった構成]の結果および考察	128
2) [説明過程で, ミニチュアを置きかえるプロセス]の結果および考察	132
VII-3. 「内界」が中心となるカテゴリー・概念群の結果および考察	137
VII-3-1. <ぴったり感の有無>と[ぴったり感の照合], [ミニチュアとの 出会い]の結果および考察	137
1) <ぴったり感の有無>の結果および考察	137
2) [ぴったり感の照合]の結果および考察	139
3) [ミニチュアとの出会い]の結果および考察	143
VII-3-2. <イメージや作品が主体となる>と[箱庭に入る], [枠外の イメージ]の結果および考察	146
1) <イメージや作品が主体となる>の結果および考察	146
2) [箱庭に入る]の結果および考察	149
3) [枠外のイメージ]の結果および考察	152
VII-3-3. 上記カテゴリー外の概念の結果および考察	157
1) [身体感覚・ボディーイメージ]の結果および考察	157

## VIII章. M-GTAのコアカテゴリー⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や 変化の交流】および⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・ 成長の交流】の結果および考察

1) ⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】の [以前の作品との関連], [作品の変化]の結果および考察	165
2) ⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】の [連続性とイメージ特性との関連]の結果および考察	167
3) ⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】の	

[自分の心や生き方への気づき], [心や生き方の変化や成長]の結果 および考察	168
4)⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】の [面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]の結果および考察	171
<b>第2研究 質的研究による系列的理解</b>	
<b>Ⅸ章. 問題および目的</b>	
Ⅸ-1. 質的研究による系列的理解	178
<b>X章. 方法</b>	
X-1. 分析方法	179
X-2. 質的研究による系列的理解における具体例等の表記について	179
<b>XI章. 箱庭制作面接の質的研究による系列的理解 —箱庭制作者A氏—</b>	
XI-1. A氏の主な箱庭制作過程と主観的体験の詳細	180
1) 第1回箱庭制作面接	180
2) 第2回箱庭制作面接	181
3) 第3回箱庭制作面接	183
4) 第4回箱庭制作面接	184
5) 第5回箱庭制作面接	185
6) 第6回箱庭制作面接	186
7) 第7回箱庭制作面接	187
8) 第8回箱庭制作面接	190
9) 第9回箱庭制作面接	191
10) 第10回箱庭制作面接	192
XI-2. A氏の主観的体験の変容と面接の展開に関する考察	194
1) 主なテーマと自己像の変遷	194
2) 宗教性(命, 守り, 神聖な場所・生き物)	197
3) 女性性, 母性	197
4) 自己の多様性と能動性の獲得, 他者との関係性の変容	198
5) 受動性と能動性, 面接内外での深い関与	199
<b>XII章. 箱庭制作面接の質的研究による系列的理解 —箱庭制作者B氏—</b>	
XII-1. B氏の主な箱庭制作過程と主観的体験の詳細	201
1) 第1回箱庭制作面接	201
2) 第2回箱庭制作面接	204
3) 第3回箱庭制作面接	207
4) 第4回箱庭制作面接	210
5) 第5回箱庭制作面接	211
6) 第6回箱庭制作面接	213

7) 第 7 回箱庭制作面接	214
8) 第 8 回箱庭制作面接	216
XII-2. B 氏の主観的体験の考察	218
1) 宗教性を中心とした心や生き方の変容の考察	218
2) 心の多層性の観点からの考察	225
XIII 章. 総合考察	
XIII-1. 本章の目的と構成	228
XIII-2. 本研究の調査方法・分析方法についての考察	229
1) 調査方法	229
2) 分析方法	231
XIII-3. 箱庭制作面接における促進機能についての総合考察	232
XIII-4. 継続的な箱庭制作面接における連続性に関して	239
1) M-GTA により見いだされた連続性	239
2) 単一事例質的研究により見いだされた連続性	240
XIII-5. 今後の課題	241
注	243
謝辞	245
引用文献	246
初出一覧	251
資料	
資料 1	252
資料 2	253
資料 3	254
資料 4	265

# I 章. 本研究全体の問題および目的

## I-1. 目的

本研究は,第 1 研究と第 2 研究から成る。第 1 研究は,a.継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験(subjective experience)を精緻に分析し,概念化することを通して,箱庭制作面接が箱庭制作者の自己理解や自己成長をどのように促進するのか,その機能について検討することを目的とする。目的 a は,以下の 2 つの下位目的から成る。a-1.箱庭制作面接の中心的過程である箱庭制作過程に主に焦点を合わせ,箱庭制作過程にはどのような促進機能があるのかを考察する。その結果および考察を V 章から VII 章に亘って記述する。a-2.箱庭制作面接の継続性・連続性は,箱庭制作者の自己理解や自己成長をどのように促進するのかを検討する。その結果および考察を VIII 章に記述する。

第 1 研究は,目的 a を達成するため,2 名の箱庭制作者の継続的な箱庭制作面接における主観的体験の語りや記述のデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)によって分析し,理論生成する。

第 2 研究は,b.継続的な箱庭制作面接における,箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開,その個人的意味を検討すること,を目的とする。目的 b を達成するために,2 名の箱庭制作者の継続的な箱庭制作面接における主観的体験の語りや記述のデータを質的研究による系列的理解によって分析する。その結果および考察を XI 章と XII 章に記述する。

両研究において,主に分析・検討したデータは,箱庭制作過程に関する箱庭制作者の主観的体験の語りや記述である。そのデータは主に箱庭制作について説明する過程(説明過程)における語りや箱庭制作過程についての内省報告によって得られた。

## I-2. 用語の定義

本研究では,十分に一般化されていない用語を使用するため,その定義を以下に記す。

本研究では,箱庭作品を制作し,その後,それについて箱庭制作者が説明を行う面接を箱庭制作面接と記す。箱庭制作面接は箱庭療法とほぼ同義の面接であるが,本研究は,厳密には箱庭制作者に対するセラピーを目的としていないため,このように記す。

箱庭制作過程とは,箱庭制作者が作品を制作していく過程である。説明過程とは,箱庭制作過程について,箱庭制作者が説明する過程である。本研究の説明過程には,自発的説明過程と調査的説明過程がある。自発的説明過程は,通常箱庭療法と同様に,箱庭制作後,箱庭制作者が自発的に,箱庭制作過程や作品について語る過程である。調査的説明過程は,本研究の調査目的のために,自発的説明過程直後に追加された。調査的説明過程は自発的説明過程に比べ,調査者がより積極的に対話や質問を行い,箱庭制作過程と自発的説明過程における箱庭制作者の主観的体験の言語化を促す説明過程である。

ふりかえり面接は,箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験を,調査者と共有し,内容を明確化するために行われた面接である。ふりかえり面接では,箱庭制作面接の VTR を視聴し作成された,箱庭制作者の内省報告をデータとして用いた。

内的プロセスとは,箱庭制作面接において生じる,意図,感覚,感情,イメージ,連想,意味,記憶,直観などの心理的プロセスである,と定義する。主観的体験とは,箱庭制作面接において,

生じる事象やそれに伴う内的プロセスをどのように体験し,そのような体験をどのように感じ,把握するのかという主観であり,意識化された内的プロセスである。

このように定義するとしても,内的プロセスと主観的体験という両概念は非常に似通った意味をもっている。内的プロセス,主観的体験,語りや内省報告の記述との関連を以下のように考えることができるだろう。箱庭制作面接において,箱庭制作者には様々な内的プロセスが生起する。しかし,その中には意識化されないプロセスも存在する。内的プロセスの中で意識化されたものが,箱庭制作者の主観的体験となる。その主観的体験はあくまでも箱庭制作者の意識内のものであるため,調査者はそれを直接的に把握することはできない。箱庭制作者の主観的体験が表現されてこそ,調査者は箱庭制作者の主観的体験を理解することが可能になる。箱庭制作面接における表現には,箱庭制作過程・箱庭作品による非言語的表現と,制作過程・箱庭作品を言語化した語り・内省報告がある。そこで本研究では,箱庭制作面接における非言語的表現の理解を補うものとして,語りや内省報告の記述を利用した。それによって,箱庭制作過程における箱庭制作者の主観的体験をより適切に理解することを目指した。

本研究のデータは,主観的体験の語りや内省報告であるため,本研究で示す「内界」とは基本的には意識化された心的内容である。本研究では,砂箱,砂,ミニチュアを「装置」と記す。「構成」には,ミニチュアを選択する行為,砂やミニチュアで作品を作り上げていく構成行為,その結果としての構成内容が含まれる。

第 1 研究では,箱庭制作者の自己理解や自己成長の促進に寄与する箱庭制作面接の機能を「促進機能」,それに関与する要因を「促進要因」とする。また,『交流』とは,促進要因同士が相互作用により,相互に影響を及ぼし合うプロセスをいう。交流は,相互作用とほぼ同義である。データに示された,要因間の *interaction* の力動感を含め表すため,この語を用いた。なお,交流という用語は,箱庭療法の論述に,以下の使用例がある。「こころにあるぴったりするものは,置かれたものとの交流を形成する」(東山,1994,p.38),「イメージと意識の交流性」(伊藤,2005,p.63),「意識と無意識の交流」(近田・清水,2006,p.54),他。

第 2 研究は事例研究と類似点をもっている。第 2 研究では,継続した箱庭制作面接におけるテーマについての系列的理解を行ったが,この研究ではデータ収集・データ分析において多元的方法を用いた点で,一般的な事例研究と異なっている。そのため,ここでは,この研究を質的研究による系列的理解と呼ぶこととする。

### **I-3. 第 1 研究および第 2 研究に共通する研究内容に関する検討**

本研究の第 1 研究と第 2 研究ではともに,1)箱庭制作過程における,箱庭制作者の主観的体験,2)継続的な箱庭制作面接に焦点を合わせる。それぞれの観点について,先行研究をレビューし,先行研究と本研究との関連性を明らかにするとともに,本研究において上記 2 観点到焦点を合わせる意義を確認する。

#### **1)箱庭制作過程における,箱庭制作者の主観的体験**

本項では,まず,箱庭制作過程に焦点を合わせることの意義について検討する。

箱庭療法研究において,箱庭療法過程の事例研究は中心的な研究方法であり,多くの知見が



積み重ねられている。箱庭療法過程を扱う事例研究では、箱庭作品の内容の系列的な把握と治療展開を追う視点が中心となる(伊藤,2005,p.52)。箱庭療法過程に関する膨大な数の事例研究を積み重ねることによって、箱庭療法は心理療法として有効であることが明らかになっている。

そのような箱庭療法過程の事例研究に加え、近年、箱庭制作過程を精緻に分析する実証研究が報告されるようになった。箱庭制作過程の研究はミクロな視点から箱庭制作者やセラピストが体験している世界(箱庭制作過程)の理解の深化を目指している(伊藤,2005,p.52)。伊藤(2005)は、箱庭療法において、一つの箱庭作品が完成に至る過程そのものに、セラピストがどのように参与し、付き添っていきのかが重要な問いであるとする。さらに、以下のように指摘している。実際の箱庭療法場面では、箱庭作品全体としてのイメージやテーマに思いをはせると共に、棚から取り出され、置かれたり、取り除かれたりするミニチュアや砂の動き、その際に感じる箱庭制作者の息遣いや言葉などにセラピストは心を細やかに働かせつつ時を過ごす。このようなミクロな視点から、箱庭制作者とセラピストがどのような世界を体験しているのかを理解することが箱庭療法の実践には非常に重要である(pp.51-52)。本研究においても、伊藤が指摘するミクロな視点を重視したいと考える。

次に、箱庭制作者の主観的体験に焦点を合わせることの意義について検討する。石原(2008)は箱庭制作者の主観的体験に焦点を合わせる意義として以下の四点を挙げる。箱庭療法において、a.表現内容ではなく、制作者の主観的で内面的な感覚・感情体験の研究が必要であること、b.ミニチュアに意味を見出していく制作者の主観的体験に本質があると考えられること、c.セラピストが制作者の体験そのものに注目することが重要であること、d.箱庭療法に関する事柄を理論的にニュートラルな観点から位置づけなおすことが可能となること、としている。aとして、石原は、心理療法において、問題にしなくてはならないのは、クライアントの主観であるとの言及(河合隼雄,1991,p.10)や、心理臨床の営みの本質的照準が、クライアントの感覚・感情体験あるとの言及(藤原,2001,p.178)を引用しつつ、箱庭療法においても、表現内容でなく、箱庭制作者の「主観的で内面的な感覚・感情体験」に焦点を合わせた研究が必要であるとしている。bとして、石原は、箱庭療法では、施設・セラピストにより、用意されているミニチュアが異なり、バラエティーに富んでいることに着目する。もしも、ミニチュアそのものに本質的意味があるとするれば、特定のミニチュアがないことによって、治癒の機会を逃すことが起こりうるはずだが、実際には、そのようなことが起こらないことを指摘する。そして、箱庭療法では、ミニチュアそのものに本質的意味があるのではなく、ミニチュアに意味を見出していく箱庭制作者の主観的体験に本質があると考えられる、としている。cとして、セラピストが箱庭を見るときに、単なる表現や体験の潜在的可能性としてではなく、箱庭制作者の生きた体験そのものを見るように心がけるようになったという言及(Bradway,1997)などを引用しつつ、箱庭に表現されたものの意味を考察していくよりも、セラピストが箱庭制作者の体験そのものに注目することに意義があることを、石原は指摘している。dとして、石原は、箱庭制作者の主観的体験そのものは、特定の理論に依拠しているものではなく、理論的にニュートラルなものであるとしている。そこで、箱庭制作者の主観的体験から箱庭を見直すことによって、箱庭療法に関する事柄を理論的にニュートラ

ルな観点から位置づけなおすことができるのではないかと、考えている(p.7-9)。

岡田(1984)は「制作中の制作者の心の動きは大切であり、これこそが箱庭療法の核心でもある」と指摘している(p.6)。河合隼雄(2003)は、「主観的体験の客観化」という節の中で、「臨床心理学において心理療法の問題を考える場合、まず対象となるのは、クライアントの主観的体験である。[中略]クライアントに接するとき大切なのは、クライアントの主観の世界である」と述べている(pp.36-37)。そして、深層心理学では、個人的体験を基礎として、それを可能な限りの客観化、普遍化する努力がなされていると指摘し、それを明確に自覚することによってこそ、臨床心理学は有用になると言及している(p.37)。本研究の研究対象は、主に箱庭制作者の箱庭制作過程に関する主観的体験の語りや記述である。本研究は、箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験を客観化する一つの試みと位置づけることができる。

以下に、箱庭制作過程における、箱庭制作者の主観的体験に関する先行研究を概観する。

第1研究は、箱庭制作面接の促進機能の検討を目的としている。促進機能は単一の機序によるのではなく、多岐に亘る機序が関連していると考えられる。そのため、まずは、研究開始時点で、箱庭制作過程における箱庭制作者の主観的体験の検討に焦点を合わせ、より詳細な研究テーマを設定していない先行研究について概観する。

箱庭制作過程における箱庭制作者の主観的体験に関する調査研究のうち、最も体系的な研究は、石原(2008)である。石原(2008)は、同一調査参加者が、2回に亘って、一つのミニチュアを選び、置く箱庭制作過程の調査研究を行っている。箱庭制作者の主観的体験のデータをM-GTAを準用して質的に分析した。その分析により、箱庭制作者の主観的体験を検討するための大枠として、【A.砂箱という前提との間で】【B.モノとイメージの交錯】【C.ミニチュアを置く】の3つのカテゴリーに到達した。それらカテゴリーの中には、複数の概念が含まれている。それぞれのカテゴリー、概念およびそれらが生成されるデータとなったバリエーションが詳述され、分析されている。さらに、臨床事例が提示され、最後に、調査研究の結果と臨床事例とを包括した考察がなされている。この研究は、箱庭制作者の主観的体験のデータに密着した理論生成がなされており、砂箱の制限が制限として意識されない主観的体験、モノとイメージの交錯における同時性、感覚やイメージを大切にすることに内包された箱庭における身体性など独自で、新たな視点が提示されたとても興味深く、意義深いものとなっている。

石原は、この研究に先立ち、異なる方法を用いた研究(石原,1999)や、石原(2008)につながる探索的な数量的データの検討(石原,2003)を行っている。石原(1999)は、PAC分析を用いて、箱庭制作過程に関する箱庭制作者の主観的体験を明らかにしている。

近田・清水(2006)は、10回に亘る継続的試行箱庭療法における箱庭制作者の主観的体験に焦点を合わせ、その変遷の分析を行っている。2名の箱庭制作者に対して、以下のような調査や分析がなされた。箱庭制作過程は録画された。各回の制作直後に、a.作品の説明を調査者が箱庭制作者に求めた。b.ビデオ録画を視聴し半構造化面接によるインタビューが行われた。c.10回の箱庭制作終了後、振り返り面接が行われた。振り返り面接では、10回分の箱庭作品の写真を提示しながら、箱庭制作者に制作体験を振り返ることを求めた。

収集されたデータは以下のように分析された。a.作品の説明の逐語録が作成された。b.語りのデータの文節化とオープンコーディングが実施された。c.箱庭制作過程と語りのデータの対応表が作成された。その対応表には,制作経過・質問,語り,コード名,制作過程の映像が記載された。d.コードのグルーピングがなされた。その結果,〔玩具を選択する際の経験〕〔砂箱に表現する際の経験〕〔意識的にとっていた構え〕〔意図せずに生じた経験,心理状態〕〔箱庭表現や制作体験に対する評価〕〔箱庭制作が日常生活に及ぼした影響〕の6つのカテゴリーが抽出された。e.2事例に対して,6カテゴリーに属するコードがどのように生じているか分析された。f.eで作成された資料を基に,2事例の制作体験過程が記述された。それらの分析を通して,箱庭表現過程で起こることについて考察がなされた。そして,1.箱庭表現によって内的な体験,感情により深く触れ,気づきを深める,2.箱庭表現過程で,意識と無意識の交流が深まり,内界に存在する要因の影響を受けて,自我のあり方に変化が生じる,3.表現の展開に伴って,意識と無意識の間の対立,葛藤が強まり,停滞や抵抗の動きが生じることがある,の3点に関する知見が得られた。

近田・清水(2006)は,a.10回に亘る継続的な調査研究である点,b.全箱庭制作面接終了時点で,全面接過程をふりかえる面接を採用している点,さらに,c.分析において,箱庭制作過程と語りのデータの対応表が作成され,制作経過と箱庭制作者の語りの関連を捉えようとしている点において,オリジナリティーのある意義深い研究であると考えられる。

上田(2012)は,1回の箱庭制作における,箱庭制作者の一連の制作体験を包括的に抽出し,箱庭制作者の体験プロセスのモデル化を目指した研究を行っている。18名の箱庭制作者に対して,箱庭制作後に半構造化面接を行った。そのインタビューデータをM-GTAにより分析した。その結果,「箱庭制作時の心的内容」と「作品の構成」,「つくりあげられた箱庭作品に対する評価」とのあいだに相互作用があることを明らかにしている。また,その相互作用にもとづく循環的なプロセスのなかで,箱庭制作者の不安がワークスルーされていくことが重要であるとしている。

花形(2012)は,初回箱庭制作における内的プロセスについて,M-GTAを用いて分析している。この研究は,研究開始時点から,初回制作にのみ限定しているものの,それ以外はより詳細な研究テーマは設定せず,データに密着して理論生成を試みている。そして,【事前イメージ】⇒【戸惑い】⇒【体験過程の変化】⇒【制作意欲】という,初回箱庭制作における箱庭制作者の内的プロセスのモデルを構築している。

上田(2012)と花形(2012)では,理論的サンプリングによる追加データの収集を実施している点で,M-GTAの手続きとの整合性を高めている。

朝比奈(2013)は,箱庭制作者の内的体験過程の理論化を目的として,箱庭制作者のインタビューデータをグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)によって分析している。そして,箱庭制作過程に関する循環二重表象化モデル,構成的表象化過程に関する連関過程モデルを提唱している。循環二重表象化モデルには,棚からミニチュアを選ぶ選択的表象化過程,砂箱にミニチュアを配置したり,砂を造形する構成的表象化過程,ミニチュアをもって砂箱に向かう,あるいは,砂箱にミニチュアを配置後棚に向かう移行象徴化過程の3つの過程がある。違和判定ループを含めた構成的表象化過程に関する連関過程モデルでは,構成

的表象化過程を連関草案リード,連関操作,連関照合,連関表象化という4段階の連続的な過程であるとする。そして、「連関照合による違和判定によって,連関操作が継続され,照合枠により適合し,精緻化された表現形が探索される」とする(pp. 751-755)。

上田(2012),花形(2012),朝比奈(2013)は,ともに箱庭制作者の箱庭制作過程に関する語りをデータとして,箱庭制作過程における箱庭制作者の内的プロセスを明らかにした点で意義深い。しかし,当該の語りのデータに関する,箱庭制作過程における箱庭制作者の行動のデータが明示されていない。そのため,箱庭制作過程における箱庭制作者のどのような行動を巡って,データとなった箱庭制作者の主観的体験の語りが生じたのかを比較検討できない点が惜しまれる。

箱庭制作者の主観的体験をデータとし,研究開始時点で,研究者が箱庭制作過程に関するより詳細な研究テーマに焦点を合わせた調査研究には,平松(2001),後藤(2004),清水(2004),伊藤(2005),片畑(2006),大石(2010),中道(2010),花形(2014)などがある。本研究の目的と関連が深い,伊藤(2005),後藤(2004),片畑(2006),大石(2010)を概観する。

伊藤(2005)は,箱庭制作過程におけるイメージと意識の関係性の位相とその推移の検討を研究テーマとしている。そのために,制作中と制作後の内観のデータを収集し,分析を行っている。4事例の分析を通して,箱庭制作過程では,イメージと意識の関係性の力動的な位相が様々に推移し,その中で箱庭作品が展開すること,また,それには,a.イメージと意識の主従関係,b.イメージに対する意識の方向性,c.イメージと意識との交流性,の3点が関わってくることを示された。

後藤(2004)は,箱庭制作におけるぴったり感に焦点を合わせ,箱庭制作者の箱庭体験過程のデータをPAC分析により分析・検討している。箱庭療法における「ぴったり感」を,関係性が開かれ,主体が身体感覚に導かれ「さぐり」の動きをすること,主体が再発見されること,つまり自らの存在の本質に関わる体験をすることだ,としている。

片畑(2006)は,箱庭制作におけるアイテムの位置を決める体験の中で,触覚を含めた箱庭制作者の身体感覚に関する制作プロセスに焦点を合わせ,検討している。調査参加者28名の内,一人の報告が主に取り上げ,考察された。そして,a.イメージの中で感じられた内的起原性をもつような主観的な感覚(どの感覚器官にも属さず,身体全体で感じるような,より未分化な「身体を感じる」)が,実際に置くときにも反映されるプロセス,b.実際の知覚によって目の前にある箱庭から感じとられた感覚によって,未分化で主観的な内的感覚が修正されたり,強まったりするプロセス,の2つのプロセスが存在すると考えている。さらには,このような2つの視点で見られる「身体感覚」が相互作用しつつ箱庭制作プロセスが構成される,としている。

大石(2010)は,箱庭制作における砂にまつわる箱庭制作者の主観的体験に焦点を合わせている。箱庭に砂を敷いた場合(砂条件)と板を敷いた場合(板条件)の2条件における,箱庭制作者の主観的体験のデータを収集し,そのデータをKJ法により分類している。砂条件では,砂・玩具・箱庭制作者の循環的・連鎖的作用に巻き込まれる形で,箱庭制作者が箱庭と

一体的に制作に関与していくことを見出した。砂との関わりは箱庭制作者の主体性への取り組みであるとしている。

箱庭制作過程における,箱庭制作者の主観的体験に関する研究の内,面接目的が調査だけでなく,箱庭制作者の自己理解や自己成長の促進をも目的とした,箱庭制作面接を取り上げた研究がある。先に挙げた近田・清水(2006)もこのタイプの研究の一つである。

中道(2010)には,中道がクライアントとして体験した教育カウンセリングにおける,主観的体験のデータに基づいた研究がある(pp.200-223)。あるセラピストとの間で行われた30回の箱庭制作の内,第8回面接が取り上げられ,分析されている。この研究に関して,中道は,教育カウンセリングの枠組みの中で,箱庭療法を体得するために箱庭療法面接を希望したものであり,箱庭を制作した際には,研究目的で置くという発想はまったくなかったと述べている。本研究の箱庭制作面接は,箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進が,面接目的の一つとなっている。箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進を目的とした面接における,箱庭制作者の主観的体験をデータにしている点で,中道(2010)のこの研究と本研究は共通点がある。

このタイプの研究は,箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進を目的とした箱庭制作面接における,箱庭制作者の主観的体験について焦点を合わせている点において,意義深い,希少な研究である,と考えられる。

ここまで,箱庭制作過程における,箱庭制作者の主観的体験に焦点を合わせることの意義の検討と,この領域における先行研究について概観してきた。ここで,箱庭療法以外の学問領域における主観的体験に関する研究について,概観しておきたい。そのことを通して,主観的体験に焦点を合わせることの意義をより広い視野から検討したい。

subjective experience は,主観的体験または主観的経験と翻訳されている。森(2008)は,近年,社会認知の領域で,人間を単純なコンピューター・メタファで捉えることの限界が指摘され,その限界を示す一つの現象として,主観的経験が関心を集めているとする。そして,2000年に出版された『秘められたメッセージ:主観的経験が社会的認知と行動に果たす役割(The Message Within :The Role of Subjective Experience in Social Cognition and Behavior)』(Bless & Forgas,2000)の中で,Wegner & Gilbert(2000)が「主観的経験の理解こそが,現代の社会心理学の中心課題」だと述べていることに言及している。遠藤(2007)も社会心理学における主観的経験の研究の意義について指摘している。人は単なる知識の収蔵庫ではなく,ある時空間に身体を置いている者であり,そこに世界が立ち現われ,圧倒的迫力でその人に迫り,その人はそうとしか思えないやり方で世界やそこで起きていることを経験する。その主観的経験において,人は世界を理解するとする。脳の活動・自動的処理過程の上に形を結ぶ主観的理解こそが,人がどのように社会を理解しているのかを明らかにする鍵である,としている(p.37)。

Solms & Turnbull(2002 平尾訳 2007)は,『脳と心的世界』において,神経科学の知見と心理学的知見の融合を目指す試みを行っている。その中で,精神分析学の知見と神経科学と

の知見との融合に多くのページを使っている。その著作の中で、主観的経験という用語が使用されており、主観的経験の一例として、情動、感情、思考、記憶、直感などが取り扱われている(pp.38-39,p.57,pp.256-259,など)。

他にも看護学、社会福祉学、認知科学、障害児教育学、文化人類学、医学、建築学、デザイン学など様々な領域で、主観的体験のデータを用いた研究がなされている。

箱庭制作者の主観的体験は、箱庭療法がセラピーとして機能する上で重要な要因であり、箱庭療法を理論的に検討する上でも、それを詳細に検討することには意義がある、と考えられる。箱庭療法において、感覚、感情、イメージ、意味などの内的プロセスを箱庭制作者自身がどのように体験するのかということ自体が、心の治癒力や成長力が賦活する重要な要因の一つとなると考えられる。また、そのような箱庭制作者の主観的体験に対して、セラピストが理解を深化させていくことによって、箱庭療法においてセラピストがセラピーの場に存在する意義を高め、クライアントの治癒に貢献できる。このような意味で、箱庭制作者の主観的体験の研究は、箱庭療法研究の一分野として、意義があると考えられる。

## 2) 継続的な箱庭制作面接

本研究は、箱庭制作面接の継続性・連続性に焦点を合わせる。箱庭制作面接の継続性・連続性が、箱庭制作者の自己理解や自己成長をどのように促進するのかの検討を、目的の一つとしている。また、継続的な箱庭制作面接における、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討すること、も目的の一つである。箱庭療法では、面接が継続される中で、クライアントの心に変化や成長が生じてくる。そのため、箱庭療法で継続的に箱庭制作が成された場合、その作品を系列的に理解しようとするセラピストの態度が重視されている(河合隼雄,1969,p.15,p.31,他)。箱庭療法過程を扱う事例研究は、まさにこのような態度に従ってなされる研究法である。

それに対して、箱庭制作過程を精緻に分析しようとする実証的研究では、継続的な箱庭制作に焦点を合わせている研究が希少である。1)に挙げたように、近田・清水(2006)は、10回に亘る継続的試行箱庭療法における箱庭制作者の主観的体験に焦点を合わせ、その変遷の分析を行っている。平松(2001)では、12回に亘る継続的な箱庭制作の面接がなされ、その事例研究が行われている。そして、それらの事例について、箱庭療法面接のための体験過程スケールを用いた実証的な研究を行っている。しかし、その実証研究は、説明過程における体験過程を評定するものであり、箱庭制作過程での体験を直接的に評定したものではない。

上記研究以外の箱庭制作過程を精緻に分析しようとする実証的研究では、調査または分析する同一調査参加者の箱庭制作回数を1回または2回に限定する研究が多い(清水,2004;伊藤,2005;石原,2008;大石,2010;他)。そこで、本研究では、箱庭制作面接が継続することによって生じる連続性に焦点を合わせることにした。第1研究では、a-2.箱庭制作面接の継続性・連続性は、箱庭制作者の自己理解や自己成長をどのように促進するのかを検討する、を下位目的の一つとする。第2研究は、b.継続的な箱庭制作面接における、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討すること、を目的とする。

## I-4. 第1研究および第2研究に共通する調査・分析方法に関する検討

### 1) 箱庭制作過程に関する先行研究における調査・分析方法

本項では、本研究と同様に、箱庭制作過程に焦点を合わせた先行研究の調査方法と分析方法について検討する。以下に詳述するが、それらの先行研究では多元的方法・方法のトライアンギュレーションを採用していることが確認された。本研究においても、多元的方法・方法のトライアンギュレーションを採用することが妥当であろう。

近田・清水(2006)は、以下のようなデータ収集法をとっている。a.箱庭制作過程を録画している。b.作品の完成後、作品の説明を求めている。c.続いて、ビデオ録画が再生され、半構造化面接によるインタビューが行われている。d.10回の箱庭制作終了後、振り返り面接が行われている。

清水(2004)では、調査Iにおいて、a.制作過程をビデオ録画している。b.制作終了後、制作者と立会人から、質問紙によるデータ収集を行っている。質問項目は、1.制作過程全体と箱庭作品に対する印象、2.制作体験/立会い体験/箱庭制作をビデオ記録で見る体験、3.最初の玩具を選ぶまで、4.最初の玩具を置いた時、5.作品完成時、の感想であった。c.調査Iの翌日に行われた調査IIでは、制作者に箱庭制作のビデオ記録を見せ、その中の注目場面に関して、自由な語りを求めている。また、質問紙の記述内容の補足説明を求めている。そのインタビューを録音している。そして、分析においては、d.注目場面毎に、制作者・立会人・非立会人の主観的体験を一覧表化し、その資料を基にプロセス研究を行っている。

朝比奈(2013)は、a.箱庭制作過程をビデオ録画している。b.制作終了後、ビデオ録画が再生され、半構造化面接によるインタビューを行っている。c.そのインタビューを逐語録化して、分析データとしている。d.ビデオ映像や観察された行動を補足的な分析データとしている。

上記先行研究では、調査によるデータ収集方法において、複数の方法が組み合わせられている。

平松(2001)は、a.箱庭療法面接のための体験過程スケール(EXPsp)を用いた数量的調査研究を行っている。b.2事例に対して、事例研究とEXPspによる評定との総合的研究を実施している。

石原(2008)は、M-GTAを準用した調査研究の成果と臨床事例とを総合的に検討・考察している。また、M-GTAの調査手続きにおいて、a.箱庭制作過程をビデオ録画している。b.制作終了後に制作者の主観的体験に関する質問紙によるデータ収集を行っている。c.質問紙の回答に対して、インタビューを行い、それを録音している。

平松(2001)と石原(2008)では、複数の研究法を組み合わせた総合的な分析がなされている。それに加え、石原(2008)では調査によるデータ収集方法において、複数の方法が組み合わせられている。

### 2) 多元的方法・トライアンギュレーション

1)で検討した先行研究では、複数の調査方法の組み合わせや複数の研究方法の組み合わせた研究計画がとられていた。このような研究計画は、調査方法、分析方法における多元的

方法(multiple methods),方法のトライアンギュレーションと捉えることができる。

まずは,多元的方法とトライアンギュレーションの定義について確認したい。多元的方法とは,「同じ研究デザインの中で異なる方法を組み合わせること。方法を組み合わせる目的は主に2つに分かれる。一つは加法的なもので,異なる(しばしば一連の)下位トピックスをそれぞれ異なった方法で扱い,これらの方法を組み合わせることである。もうひとつは,相互作用的なもので,同じ下位トピックスに対し異なる角度からアプローチするものである」(Bloor & Wood,2006 上淵他訳 2009,p.132)。また,トライアンギュレーションとは,「ひとつの現象に対してさまざまな方法,研究者,調査群,空間的・時間的セッティングあるいは異なった理論的立場を組み合わせることを意味する」(Flick,1995 小田他訳 2002,p.282)。

次に,質的研究において,多元的方法とトライアンギュレーションという方略をとることの意義について確認したい。Flick(1995 小田他訳 2002)は,「トライアンギュレーションは質的方法で得られた知見を基礎づけるひとつの手段である。この場合には,基礎づけは研究結果をテストすることではなく,認識の可能性を系統的に広げ完全なものにすることで達成される。この点で,トライアンギュレーションは,研究の結果と手続きとを妥当化する戦略というよりも,調査手続きのはばの広さ,深さ,一貫性を高める妥当化の一戦略といえる」としている(pp.282-283)。トライアンギュレーションに対する同様の評価は,他の研究者によってもなされている。Denzin & Lincoln(2000 平山訳 2006)もまた,トライアンギュレーションに対して,Flick(1995 小田他訳 2002)と同様の評価を下している。Bloor & Wood(2006 上淵他訳 2009)は,「多元的方法の使用には,相互作用的な多元的方法を使えば,分析結果の妥当性を保証できるといった誇張気味の主張がつかまとう。これは事実ではない。[中略]しかし,多元的方法(加法的,相互作用の両方)をとることは厳密な研究デザインの証となっている」と評価している(p.133)。また,トライアンギュレーションに関して,「異なる方法から導き出された結果からの補強で,妥当化を成し遂げられないことは明らかである。しかし,異なる方法から得られたデータの比較は役に立たないわけではない。逆にそうした比較が分析を深め,広げることになるだろう。実際に,上記の比較が多元的方法を用いるリサーチデザインが人気のある主な理由のひとつであり,それが分析を刺激している」との結論にいたっている(Bloor & Wood,2006 上淵他訳 2009,p.154)。もともとトライアンギュレーションは,個別の方法で得られた研究結果を妥当化する方略,人間の意識とは関係なく一つの客観的事実を明らかにするために発想・使用されはじめたものであるが(Flick,1995 小田他訳 2002,p.283,Bloor & Wood,2006 上淵他訳 2009,p.152),現在では,そのような意味での方略ではなく,質的研究に厳密さ,広がり,精緻さ,豊潤さ,深み,一貫性を付加する研究戦術と理解されていることがわかる。

続いて,Flick (1995 小田他訳 2002,pp.282-283)の記述から,Denzin(1989)のトライアンギュレーションの4つの分類を取り上げ,方法のトライアンギュレーションについて,確認する。

#### a.データのトライアンギュレーション

異なったデータを用いることである。[中略]この下位タイプとして,デンジンは時間,空間,人



を分けて考えている。そして、ある現象について異なった時点や場所で調べたり、またさまざまな人からデータをえることが勧められている。

#### b. 調査者のトライアンギュレーション

研究者の個人的傾向が研究に与える歪みを明るみに出したり、また最小限に抑えたりするために、異なった複数の観察者やインタビュアーを研究に参加させるというものである。[中略] 異なった研究者が調査対象や研究結果に対して及ぼす影響を系統的に比較することに重点がある。

#### c. 理論のトライアンギュレーション

この出発点は「さまざまな視点や仮説を考慮に入れてデータにアプローチすることであり、その際にさまざまな理論的立場を、それらの有用性と説明力とを検証するために並行して用いることである」(Denzin, 1978, p. 297)。このタイプのトライアンギュレーションによって認識の可能性を基礎づけたり拡大したりすることが目指される。

#### d. 方法のトライアンギュレーション

ひとつの方法内のトライアンギュレーションと、異なった方法間のトライアンギュレーションという2つの下位タイプに区別される。前者(方法内のトライアンギュレーション)の例は、ある質問紙の内部でひとつの事象を測るためにさまざまな質問項目を用いることである。その質問紙を半構造化インタビューと併用すれば後者(方法間のトライアンギュレーション)の例となる。

先にも記したように、トライアンギュレーションは、質的研究において、重要な方略である。Bloor & Wood(2006 上淵他訳 2009)は、この4つのタイプのトライアンギュレーションのうち、「一般的には方法論的トライアンギュレーションが最も着目されており、トライアンギュレーションを通して妥当性に耐えうるものとするためには、多元的方法調査デザインによって方法論的な厳密さを示すことが、質的研究者にとって研究を計画する際に、ほとんど義務的なものとなっている」と述べている(p. 152)。方法のトライアンギュレーションや多元的方法調査デザインが質的研究において、有意義なものであることがわかる。

### 3) 本研究における多元的な調査・分析方法の採用

以上検討してきたように、箱庭制作過程における先行研究では、調査方法、分析方法において多元的方法、方法のトライアンギュレーションが採用されていた。そして、多元的方法や方法のトライアンギュレーションは、調査手続きのはばの広さ、深さ、一貫性を高める妥当化の一戦略として、質的研究において重要な研究方略であることが一般的な知見となっている。そこで本研究においても、複数の調査方法を併用することが、箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験の精緻なデータを包括的に収集するために、重要であると考えられる。さらに、分析方法においても、本研究の目的に適った複数の分析方法を採用すべきであると考えられる。

## 第 1 研究 M-GTA による箱庭制作面接の促進機能に関する研究

### II 章. 問題および目的

第 1 研究は, a. 継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験 (subjective experience) を精緻に分析し, 概念化することを通して, 箱庭制作面接が箱庭制作者の自己理解や自己成長をどのように促進するのか, その機能について検討することを目的とする。目的 a は, 以下の 2 つの下位目的から成る。a-1. 箱庭制作面接の中心的過程である箱庭制作過程に主に焦点を合わせ, 箱庭制作過程にはどのような促進機能があるのかを考察する。a-2. 箱庭制作面接の継続性・連続性は, 箱庭制作者の自己理解や自己成長をどのように促進するのかを検討する。

#### II -1. 第 1 研究の研究内容に関する検討

##### 1) 箱庭制作面接の促進機能

第 1 研究の目的 a. と下位目的 a-1., a-2. は, 箱庭制作面接の促進機能に焦点を合わせている。第 1 研究では, 制作者の自己理解, 自己成長の促進に寄与する箱庭制作面接の機能を「促進機能」, それに関与する要因を「促進要因」, と定義する。

石原 (2013) は, 箱庭表現について, クライアント個人に属するものとして捉える intrapersonal な視点や要因と, クライアントとセラピストの関係性という interpersonal な視点や要因との 2 つの視点や要因があることを指摘する。そして, 箱庭表現がその 2 つの要因の掛け合わせたところに現れてくるという仮説に基づき, クライアントの箱庭表現を考察している (pp.16-17)。intrapersonal な視点の場合, 箱庭制作者の内的世界と箱庭作品という外的世界の交流に焦点が合わされる。石原 (2013) は, interpersonal な視点や要因として, クライアントとセラピストの関係性に焦点を合わせている。本研究では, 箱庭制作者と見守り手との関係性に焦点を合わせていない。しかし, interpersonal な要因として, 箱庭制作者の日常生活での人間関係や出来事を含めることができるだろう。箱庭制作において, 箱庭制作者の日常生活での営みや生き様が反映した箱庭作品が作られることは少なくない。箱庭制作面接では, 箱庭制作者の内的世界と, 箱庭作品や箱庭制作者の日常生活という外的世界とが相互に密接な関連をもち, 交流する中で, 箱庭作品が構成されていく。このように, 内的世界と外的世界の交流が, 箱庭制作面接の促進機能の重要な一因である, と考えることができる。第 1 研究では, 箱庭制作過程に関する「内界」, 「装置」, 「構成」という促進要因間の交流や, 継続した箱庭制作面接における, 「作品の連続性や変化」, 「心や生き方の変化・成長」という促進要因が関与する箱庭制作面接の連続性について, 箱庭制作者の主観的体験の語りや記述のデータを精緻に分析・概念化し, その促進機能について考察する。

#### II -2. M-GTA による箱庭制作過程に関する主観的体験に焦点を合わせた研究

第 1 研究の目的 a. を達成するためには, 分析および理論生成の方法において M-GTA を採用することが適切であると考えられる。詳細は以下で検討するが, 端的に言えば, M-GTA はデータに密着した理論生成に優れていると同時に, 分析手順が明確であるため, 恣意的な分析に陥ることを防ぐことが可能なためである。

そこで、本節では、まず、M-GTA を箱庭制作過程に関する研究に採用する際に検討すべき論点について確認する。その後、箱庭療法に対して、M-GTA によって分析を行った先行研究について検討する。ところが、箱庭制作過程における主観的体験を M-GTA によって分析した公表されている研究は、石原(2008)、花形(2012)、上田(2012)のみである。そこで、本節では、考察の対象をやや広げ、M-GTA によって、箱庭制作者の主観的体験およびそれと密接に関連したデータに対して分析を行った研究も含め、考察したい。

#### 1) M-GTA を箱庭制作過程に関する研究に採用する際に検討すべき論点

本研究では、分析および理論生成の方法として、M-GTA を採用することが適切であると考えられる。本研究も含め、箱庭制作過程の研究において、M-GTA を採用するのであれば、検討が必要な論点がある。それは研究計画によっては、M-GTA が求める手続きを完全に実行することが困難な場合があるためである。そこで本項では、データ収集と理論的サンプリングと理論的飽和化に関する問題を中心に提起し、確認する。

まず、データ収集と理論的サンプリングについて考える。木下(2003)を参照すると、データ収集と理論的サンプリングとの関連性は、2 種に大別できる。つまり、a.データ収集と分析の同時並行、理論的サンプリングによる新たなデータの収集という方法、b.ベース・データと追加データへの 2 方向への理論的サンプリング、の 2 種である。

a.は、GTA のオリジナル版などで説明される方法であり、フィールドワークによる調査方法と適合的である。この場合、「最初のデータは関連しそうなものであればよいのであって要はそこから分析を開始し、理論的サンプリングを作用していくということになる」。「明らかになりつつある解釈に基づきその適否を見極め、解釈を確定するために、比較思考に立脚する理論的サンプリングにより次に収集すべきデータが何であるか判断する」ことになる(木下,2003,pp.114-116)。

それに対して、b.は、M-GTA で提唱されている方法であり、面接(インタビュー)型調査への適用が強く意識されている。M-GTA は、データに基づいた(grounded-on-data)分析であり、データとの関係はデータから(from data)とデータに向かって(toward data)の 2 方向に分かれ、相互に関連させて分析が進められるとしている。その後者は、「概念を比較材料としてそれと類似あるいは対極の概念の可能性を考え、データに向かって実際にそうであるかどうかの検討」を行うことである。その自分の解釈に照らして目的的にデータに向かう流れを、理論的サンプリングと呼ぶとしている(木下,2007,pp.50-51)。M-GTA では、「理論的サンプリングと継続的比較を行うが、データの収集と分析の同時並行性に関しては最初にまとめて収集したデータ(これを『ベース・データ』と呼ぶ)と分析過程にもとづき追加収集されたデータ(同様に『追加データ』と呼ぶ)の二段階に分けて進める」(木下,2003,pp.123-124)。そして、理論的サンプリングは、ベース・データと追加データに対する二方向で行い、その基本は、ベース・データに対する理論的サンプリングであるとする。また、すでに、収集が終わっているデータを分析する場合は、方法論的限定として、ベース・データと追加データをはっきり 2 段階に区別する方法の変形であり、以下のような点に留意する必要があることを指摘する。追加データは収集できないため、a.ベース・データに対する限定をいっそう明確に提示すること、b.データとの確認が不十分な概念や理論的サンプリング

リングにより確認すべきデータがわかっていても実際にできなかった部分について、論文にその旨を明示する必要がある,としている(木下,2003,pp.128-129)。

次に,理論的飽和化について,検討する。GTAにおいて,分析の終了は理論的飽和化をもって判断する。つまり,「継続的比較分析により分析を進めていったときにデータから新たに重要な概念が生成されなくなり,理論的サンプリングからも新たにデータを収集して確認すべて(ママ)問題点がなくなったときをもって,飽和化したと判断するとされている」。木下(2003)は,このような説明では,どのように理論的飽和化の判断を行うのか難しいことを指摘している(pp.220-221)。そこで,M-GTAでは,grounded-on-dataが成立しやすいように分析対象とするデータを限定的に確定した上で,a.分析の最小単位である概念について分析ワークシートの完成度で「小さな理論的飽和化」の判断を下し,次に,そうして確認的に判断された概念によって構成される分析結果全体に対して「理論的飽和化」の判断を下す(木下,2007,p.52)。また,理論的飽和化は,理想的な形であり,完璧に実践しなくてはならないものではなく,その意味を理解した上で,それぞれの分析において収斂化と拡大化との現実的な最適バランスで判断し,その判断根拠を明示する,としている(木下,2003,pp.221-222)。

## 2)M-GTAによる箱庭制作過程についての先行研究

M-GTAもしくはGTAによって,箱庭制作過程の主観的体験について分析した先行研究には,石原(2008),花形(2012),大石・高橋・森崎・浅田・井芹・千秋・加藤(2011),朝比奈(2013),花形(2014)がある。以下に本研究の方法と関連の深い先行研究を概観すると共に,先に挙げたM-GTAを箱庭制作過程に関する研究に採用する際に検討すべき論点について検討する。花形(2012),上田(2012),朝比奈(2013)はI-3.1)で検討したため,本節では割愛する。本項では,まず,石原(2008)をM-GTAの分析手続きの観点から検討し,続いて大石他(2011)について概観する。

「I-3. 第1研究および第2研究に共通する研究内容に関する検討」に記したように,石原(2008)は,箱庭制作者の主観的体験に関して,M-GTAを準用して,独創的な研究を行っている。「準用して」としたのは,石原が自身の研究に対して,以下のように記しているためである。その部分を直接引用する前に,その記述の前提となる部分をまず記す。

石原(2008)は,木下(2003,p.35)を参照し,GTAと呼びうる研究法の満たすべき5要件を挙げ,自己の研究法をその要件から検討している。その5要件は,a.データに密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法であること,b.分析において,コーディング方法としてのオープン・コーディングと選択的コーディング,c.基軸となる継続的比較分析,d.その機能面である理論的サンプリング,e.理論的飽和化の5点である。そして,自己の研究を検討し,a.の「データに密着した分析」とb.とc.に関しては,それらが該当すると考えている。しかし,自己の研究が,a.の「分析から独自の理論を生成する質的研究」とは,おそらく呼べないとしている(pp.16-19)。

石原(2008)がその理由として挙げている部分を長くなるが,以下に直接引用する(pp.17-18)。

本研究で得られるデータは、一つのミニチュアを選び、置くという箱庭制作過程における制作者の主観的な体験(の語り)である。そこから記述できるのは、制作者が制作過程でどのような体験をしているのかということであり、データに密着した分析によって、さまざまな体験のヴァリエーションを描くことができたとしても、そこから「独自の理論」を生成するところまで至るのはおそらく困難であろう。このことは、「理論的サンプリング」や「理論的飽和化」という問題ともつながってくる。

「理論的サンプリング」とは、データの分析を行うなかで、さらなるデータを収集すべき必要が出てきたときには、分析経過から見えてきた必然性に基づいて対象(サンプル)を決定していくことを指す。そして、この「理論的サンプリング」は、これ以上新たなデータを収集する必要がないと判断される、つまり「理論的飽和化」するまで繰り返される。この考え方自体は、研究を緻密に遂行していくうえで、欠かせないものである。

さて、本研究で扱うのは、箱庭制作過程における制作者の主観的な体験である。たとえば、はじめにいわゆる適応した大学生を対象に調査研究を行い、データを集めるとしよう。そこから得られるデータを一通り分析していったとして、次に必要なデータとは、どのようなデータとなるだろうか。

ここで、本研究が心理臨床学の立場から行う研究であることが、大切になってくる。心理臨床の研究は、心理臨床の実践から乖離してしまってはならない。制作者の主観的な体験に目を向けることで、本来照準を当てたいのは、心理臨床の実践において出会うクライアントが、箱庭制作過程においてどのような体験をしているのかということである。したがって、いわゆる適応した大学生を対象に行った調査の次の段階で、そのデータを充実させていこうとすると、今度は、実践場面でのクライアントの体験に目を向けていく必要が出てくるのである。つまり「理論的サンプリング」を行うならば、臨床実践におけるクライアントの主観的体験を「サンプル」としなければならない。

ここに、心理臨床の実践に照準を合わせた心理臨床学の研究が、M-GTA の手法に馴染まない局面が立ち現われてくるように思う。心理臨床学においては、当然のことながら、心理臨床の実践が最優先事項となる。臨床実践の場を訪れるクライアントは、クライアント自身の意思で来談するのであって、セラピストがクライアントを選ぶのではない。心理臨床学の研究者は、まず何よりも心理臨床の実践家なのであり、研究者から能動的に「理論的サンプリング」を行っていくというようなあり方は、心理臨床の実践家としてのあり方と両立しない。したがって、一通り分析を終えたデータを臨床事例によって、充実させていこうとするためには、それに適した臨床事例に出会うという偶然を頼りにするより他ないということになる。

臨床事例によってデータを充実させていくことができないからと言って、いわゆる適応した大学生のデータをどんどん増やしていくというような研究を行うとしても、どこまで行ってもそれは、非臨床事例である大学生のデータであって、臨床実践で出会うクライアントの体験に直接的に迫ることにならない。

以上のような心理臨床学の研究の独自の問題と深く関連して、臨床実践に照準を当てる心理臨床学の研究では、M-GTA で言うところの「理論的飽和化」に達するのは非常に困難であると考えられる。

このようなわけで、本研究でも、おそらく「理論的飽和化」を達成するところまでデータを充実させることはほぼ不可能と考えられ、「独自の理論」を生成するところまで到達することは困難だと考えられる。

長い引用のため、整理すると、石原が挙げている論点は、a.理論的サンプリング、b.理論的飽和化、c.データの質(適応した調査参加者と臨床事例のクライアント)、d.心理臨床学における独自の理論生成となるだろう。

これらの論点を検討するには、さらに、M-GTAの分析テーマと分析焦点者と【応用者】の観点に加えらる必要があると考える。まずは、これらの用語について、確認したい。M-GTAでは、分析テーマと分析焦点者の2つの視点に絞って、データをみていき、解釈を行う(木下,2007,p.143)。「研究テーマをデータに即して分析していけるように絞り込んだものが分析テーマ」である(木下,2007,p.144)。研究テーマをgrounded on dataの分析がしやすいところまで絞りこむ必要が生じるために、分析テーマが設定される(木下,2003,p.131)。分析焦点者は、M-GTAの方法論的限定の一つである。「分析結果として提示するグランウンデッド・セオリーの適用可能範囲、一般化可能範囲は分析焦点者である、『人(限定集団)』から示すことになる」(木下,2007,p.157)。また、【応用者】は、発表されたグランウンデッド・セオリーの評価と関連する。M-GTAは、「発表されたグランウンデッド・セオリーは、応用されて、つまり、データが収集された現場と同じような社会的な場に戻されて、そこでの現実的問題に対して試されることによってその出来ばえが評価されるべきとする立場である。応用が検証であるという視点と、それから、応用者が必要な修正を行うことで目的に適った活用ができることを重視する。だから、ここでいう応用とは提示されたグランウンデッド・セオリーをただ機械的に当てはめるという意味での応用なのではなく、また、調査が行われたのとまったく同一の場面で当てはめるという意味でもなく—それは不可能である—、応用者がそのときの自分の状況特性と目的に基づき必要な修正をしながら用いていくのである」(木下,2003,pp.20-30)。

石原(2008)は、自身の研究に対して「分析から独自の理論を生成する質的研究」とは、おそらく呼べないとしているが、筆者には、それは厳しすぎる自己評価に思える。先に挙げた、(1)理論的サンプリング、(2)理論的飽和化、(3)データの質(適応した調査参加者と臨床事例のクライアント)、(4)心理臨床学における独自の理論生成、の4点について検討していきたい。

### (1) 理論的サンプリングについて

石原(2008)が、理論的サンプリングに関して述べていることは、「I-5. M-GTAによる箱庭制作者の主観的体験に関する研究」で確認した、データ収集と理論的サンプリングとの関係の問題である。石原の説明は、「a.データ収集と分析の同時並行、理論的サンプリングによる新たなデータの収集という方法」(p.13 参照)に準じたものとなっている。しかし、M-GTAの場合、理論的サンプリングは、ベース・データと追加データに対する二方向で行い、その基本は、ベース・データに対する理論的サンプリングであると考えられるわけであるから、石原の研究の場合、ベース・データに対する理論的サンプリングは実施されていると考

えてよいのではないか。そして、追加データを収集できなかった場合の留意点に関して、明示することで、一定の要件を満たすと考えてよいのではないか。

## (2) 理論的飽和化について

この論点は、M-GTA における理論的飽和化についての考え方、分析焦点者と関連していると考えられる。石原(2008)の場合、分析焦点者は、例えば、「適応した箱庭制作者」となるだろう。そのような限定を行った上で、理論的飽和化に関しては、やはり本研究の p.16 で検討した木下の考えに従うことで、解決されるのではないだろうか。つまり、概念について分析ワークシートの完成度で「小さな理論的飽和化」の判断を下し、次に、そうして確認的に判断された概念によって構成される分析結果全体に対して「理論的飽和化」の判断を下す(木下,2007,p.52)。理論的飽和化は、理想的な形であり、完璧に実践しなくてはならないものではなく、その意味を理解した上で、それぞれの分析において収斂化と拡大化との現実的な最適バランスで判断し、その判断根拠を明示するとの考えである。

## (3) データの質(適応した調査参加者と臨床事例のクライアント)と(4)心理臨床学における独自の理論生成について

この両論点は、密接に関連している。このテーマに関する石原(2008)の論は、確かに納得できる点がある。しかし、c.に関して、M-GTA の研究手法で言えば、分析テーマと分析焦点者の限定を行うという方法で、解決可能だとも考えられる。つまり、「箱庭制作の過程における制作者の主観的体験に焦点を当て、この観点から箱庭療法について検討する」(石原,2008,p.20)ことを分析テーマとし、先ほどの分析焦点者の限定を加えるということである。これでは、確かに、M-GTA の分析において、臨床事例におけるクライアントの主観的体験を包含することにはならない。しかし、だからと言って、筆者には、石原の研究の価値が著しく低下するように思えない。

そして、心理臨床学における独自の理論生成に関しては、【応用者】による評価を待つということになるだろう。つまり、石原(2008)で得られた知見が、臨床事例におけるクライアントの箱庭制作に関する主観的体験と、どの点では合致し、どの点では違いがあるのかは、多くの箱庭療法家による実践や生成された理論の【応用】や事例研究などにより、評価されていくべきだということである。臨床事例には、確かに、その独自性が存在する。しかし、臨床事例のクライアントの心性と心理的に健康な人々の心性の間には、隔絶された溝があるのではなく、「スペクトラム」と表現できるような連続性もある。それゆえに、心理的に健康で、適応した箱庭制作者の主観的体験からデータに密着して生成された理論には、臨床事例にも適応可能な理論が存在する可能性は十分にあると考えられる。

石原自身、臨床事例と調査事例の比較を行っている。そして、砂箱が制作者にどのように体験されるのかを検討している。そこには、a.両者に共通する体験として、空間を限定する現物の砂箱と、b.調査事例にのみ見られた、まるで枠などないかのようにどこまでも広がるイメージの中で背景に溶け込む砂箱体験があった(pp.219-226)。また、箱庭療法が、臨床事例だけでなく、心理的に健康な人々の自己実現や自己理解の促進のために行われることもある。それらを総合的に勘案して、研究内容が評価される必要があるだろう。

以上、検討してきたが、石原(2008)が M-GTA による調査研究および事例研究から総合的

に得た知見には、確かに石原自身が述べる一定の限界をもちつつも、単なる調査研究を超え、心理臨床につながった独自の理論が存在する、と考える。

M-GTAによる箱庭制作過程についての先行研究として、次に、大石・高橋・森崎・浅田・井芹・千秋・加藤(2011)の研究について検討する。大石他(2011)は、M-GTAにより、特別養護老人ホーム入居者の箱庭制作における制作者と箱庭とのかかわりを分析している。この「かかわり」に関するデータとして、調査者が記録した、制作者の箱庭とのかかわりの様子や周囲の状況が用いられている。概念の具体例を見ると、制作者の発言に加えて、調査者の観察記録が用いられている。本研究との関連でいえば、制作者の主観的体験のデータに加えて、箱庭制作者の行動や周囲の状況に関する観察データが含まれている点で異なっている。大石他(2011)では、このようなデータが M-GTA で分析され、「Ⅰ.『鮮やかさ』に触発される感情,Ⅱ. アイテムとのやりとりを通した『鮮やか』とのかかわり,Ⅲ. かかわりのなかで浮かび上がる『鮮やかさ』,Ⅳ.『鮮やかさ』から距離を置く動き,という四つの大カテゴリーが生成された」(p.317)。そして、「入居者と箱庭とのかかわりとは、両面的な感情,さまざまな距離感や濃淡のなか、『鮮やかさ』とのかかわりを積み重ねることで、揺さぶられつつ、そこに自身の存在感が織り込まれ,新たな『鮮やかさ』として浮かび上がるプロセスであった」との結論を得ている(p.326)。このように、大石他(2011)は、データに密着した分析から、独自の理論を生成した、興味深い研究となっている。

### II-3. M-GTA を採用するに当たって検討すべき他の論点

#### 1) 単一事例修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

第1研究において M-GTA による分析を採用するにあたり、M-GTA の変法である単一事例修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ法(Single Case Modified Grounded Theory Approach:SCM-GTA)についての確認が必要である。SCM-GTA は、斎藤(2005)が痛みを主訴とした一事例に対して、M-GTA によって分析したオリジナルな分析法である。その分析法について、斎藤(2014)は、単一事例(実践 1)から生成された理論が、似ているが異なった特性をもつ別の事例(実践 2)へ継承されることについて以下のように述べている。実践 2 において、実践 1 から生成された理論が必要最小限の修正によって有効に作用し、改変された理論が明示知として記述されるならば、理論は継承されたことになり、理論の有効性がある程度検証されたことを意味する。臨床の知の生成と応用というモデルにおいて、実践者、研究者、応用者という個別性をもった人間を設定し、人間とデータ、人間とセオリー、人間と事例との相互交流するプロセスは、臨床における明示知と暗黙知を有効につなぎ合わせる循環的なプロセスとして機能する(pp.131-133)。

#### 2) 同一調査参加者に対する複数回のインタビュー実施

Charmaz(2006 抱井他訳 2008)は、GTA において、同一の調査参加者に複数回インタビューすることの意義について言及している。本研究でも、同一調査参加者に対する複数回のインタビュー実施を予定している。Charmaz の言及を確認する。Charmaz は、同一の調査



参加者に複数回インタビューすることを行っている。それは,a.データの深さと範囲の広さにより違いが生じる研究の質や信用(憑)性(credibility)を高めるための一方法であり(pp.24-25),b.理論的サンプリングのための一方法である,と説明している(pp.116-117,p.120)。本研究で,同一調査参加者に対して,複数回面接が実施されたのは,理論的サンプリングのためではなく,継続的な箱庭制作面接のプロセスを研究対象にしたためである。しかし,継続的な面接は,調査参加者から得られるデータが深さと広さをもったものとなることに寄与する,と考えることができる。

### Ⅲ章. 方法

#### Ⅲ-1. 調査参加者・調査方法

本調査の箱庭制作者は以下の2名であった。両調査参加者とも、心理的問題のセラピーのために箱庭制作面接を希望したのではない。A氏は、40歳代女性、夫との二人家族。女性性とキャリア形成に課題を感じ、自己理解、自己成長のために面接を希望した。B氏は、40歳代男性、独身。心理療法家としての教育分析のために面接を希望した。そのような申し出があった際、筆者は一つの選択肢として、本調査参加者として箱庭制作を10回程度継続的に実施することができることを伝え、両氏がそれを選択した。調査開始前に当該研究に関する説明を行った。そこで、研究目的、研究計画、内省報告の項目などに関する説明を文書と口頭で行うと共に、調査参加者からの質問に答えた。説明終了後、調査参加者から、研究参加に関する同意文書を得た\*1。

本調査は、以下の1)箱庭制作面接、2)ふりかえり面接、3)全過程のふりかえり面接を複数回行う契約で実施された(図1)。これらの面接はすべて調査者(=筆者)の研究室で実施された(図2)。A氏は、箱庭制作面接およびふりかえり面接各10回、全過程のふりかえり面接4回を実施した。B氏は、箱庭制作面接およびふりかえり面接各8回、全過程のふりかえり面接1回を実施した。B氏の場合も、箱庭制作面接およびふりかえり面接を各10回、全過程のふりかえり面接を複数回行う契約であったが、B氏の勤務地が遠方になったため、上記の実施形態となった。

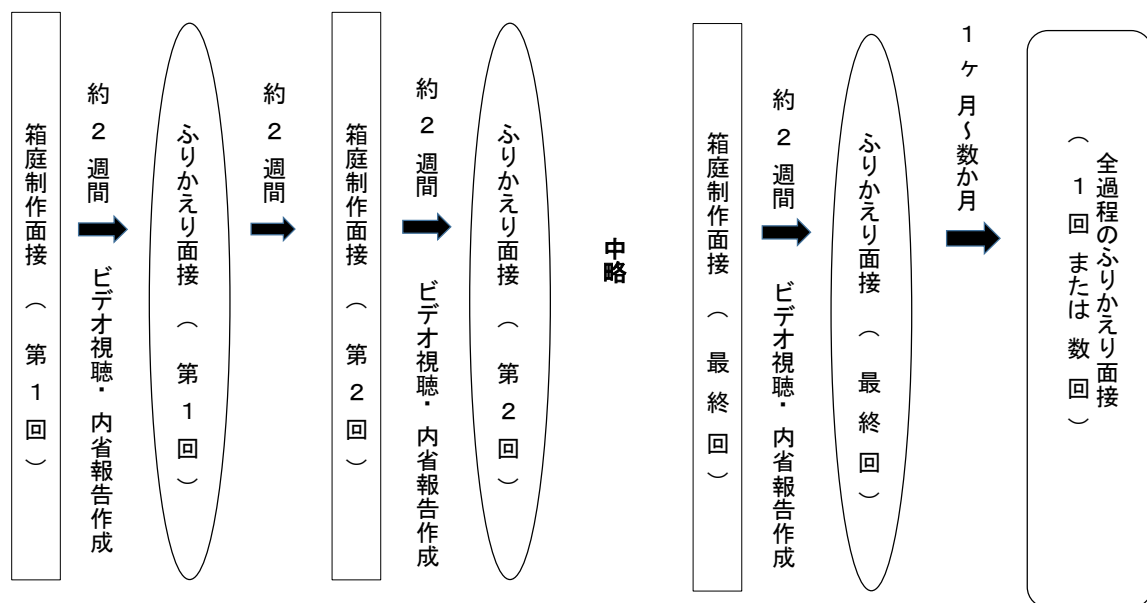


図1 調査の流れ

## 1) 箱庭制作面接

この面接では、通常の箱庭療法面接と類似の箱庭制作が実施された。調査のため、筆者は、三脚に備え付けられたビデオカメラの位置や方向を操作する以外は、通常の見守り手と同様の形で、制作者の移動に合わせて筆者も移動し、箱庭制作を見守った。A氏第10回箱庭制作面接以外の箱庭制作において、両箱庭制作者は、砂箱の長辺が自分の正面になるように砂箱を使用した(図2)。両箱庭制作者は、

無言で箱庭を制作する 경우가多かった。制作者が無言で箱庭を制作している時には、筆者も無言で箱庭制作を見守った。砂に水を含ませるなどの依頼が制作者からあった場合には、筆者はそれに応えた。

箱庭制作過程終了後、通常の説明過程を経て、さらに調査目的のための言語化の過程が追加された。そのため、説明過程は以下の2つの過程から構成された。

### (1) 自発的説明過程

箱庭制作後、通常の箱庭療法と同様の説明過程(自発的説明過程)が実施された。自発的説明過程で、箱庭制作者は、制作中と制作終了時点での意図、感覚、感情、イメージ、連想、意味などを自発的に語った。筆者は、それを傾聴することを基本的な態度として臨んだ。

### (2) 調査的説明過程

自発的説明過程終了後、続けて、調査目的のため、調査的説明過程が実施された。調査的説明過程では、筆者は、より積極的に対話や質問を行い、箱庭制作過程と自発的説明過程における、箱庭制作者の主観的体験の言語化を促した。

箱庭制作面接の時間は、制作過程・両説明過程を含めておよそ1時間~1時間30分であった。この過程はVTR録画された。三脚に備え付けられたビデオカメラは箱庭制作者が砂箱に向いた場合に、視野に入らないように設置された。箱庭制作過程で、箱庭制作者が砂箱に向かって箱庭作品を制作している時には、箱庭制作者からドア側に約2m離れた位置に置かれた。箱庭制作者が棚に移動し、棚に向かい、ミニチュアを選択している時には、箱庭制作者の行動を撮影できるように、筆者が三脚に備え付けられたビデオカメラの位置や方向を変え、箱庭制作者の後方から撮影した。説明過程では、三脚に備え付けられたビデオカメラは、箱庭制作者らドア側に約2m離れた位置に固定して置かれた。

## 2) ふりかえり面接

### (1) 内省報告作成

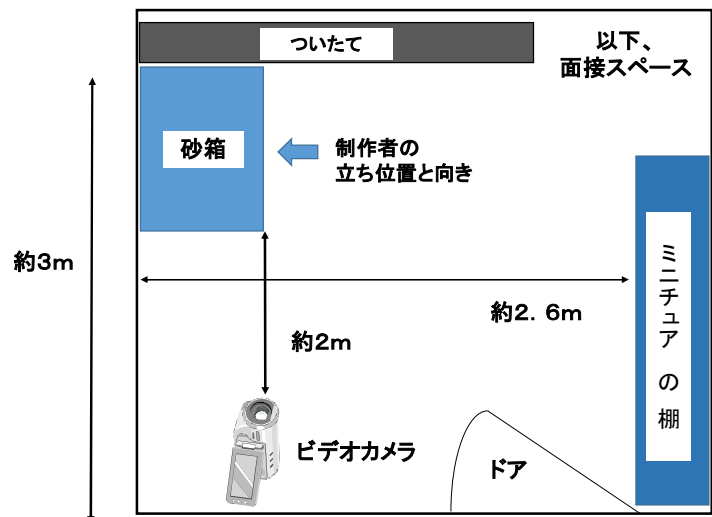


図2 研究室内の面接スペースのセッティング

箱庭制作面接のビデオを箱庭制作者・筆者が視聴し内省報告を書き綴った。箱庭制作面接終了後、筆者はビデオをDVDにコピーし、箱庭制作者の自宅宛に簡易書留で郵送した。A氏は自宅のリビングまた書斎で、パソコンの動画再生ソフトでDVDを再生し、各回約3~4時間かけて、エクセルファイルに内省報告を書き綴った。B氏は自宅の書斎で、パソコンの動画再生ソフトでDVDを再生し、各回約2時間~2時間30分かけて、エクセルファイルに、内省報告を書き綴った。

内省報告の内容、様式を表1に示す。筆者が設定した「意図」「感覚・感情・イメージ」「連想」「意味」の4カテゴリー(表1参照)について、箱庭制作過程では5要因(a.ミニチュアの選択,b.ミニチュアの配置,c.砂の造形,d.ミニチュア・造形の変更,ミニチュアの位置や方向の変更,e.見守り手の存在・行動)に関して、説明過程では箱庭制作者や筆者の言動に関して、内省報告を記述した。これらのカテゴリーや項目は、清水(2004)、伊藤(2005)、近田・清水(2006)などの先行研究の質問項目、インタビュー内容、コード名などを参照して決定した。箱庭制作過程や説明過程における箱庭制作者の主観的体験をできる限り網羅的に報告できることと、カテゴリー分けがあまりにも複雑にならないことを考慮して、決定した。箱庭制作過程全体を、箱庭制作者は任意に区切り、その箱庭制作過程毎に内省報告した。例えば、A氏は、第1回箱庭制作面接を17過程に区切り、内省報告した(表1に一部抜粋を例示、詳細は資料1参照)。

## (2)ふりかえり面接

ふりかえり面接は、箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験を、筆者と共有するとともに、その内容を明確化するために行われた。ふりかえり面接は、箱庭制作面接の約2週間後に実施された。ふりかえり面接では、箱庭制作者の内省が報告され、筆者はそれを傾聴した。筆者は、意識化が過度な知性化とならないように考慮しつつ、明確化したい点に関して、質問や対話を行った。箱庭制作者の内的プロセスへの影響を考慮して、筆者の内省報告は控えた。その会話はICレコーダーで録音された。

ふりかえり面接の約2週間後に、次の箱庭制作面接が実施された。

## 3)全過程のふりかえり面接

ふりかえり面接の最終回終了後に、全面接過程をふりかえるための面接を実施した。ふりかえりの内容、形式は、調査参加者に委ねられた。全過程のふりかえり面接はICレコーダーで録音された。

### (1)A氏

第10回ふりかえり面接終了約3ヶ月後に、全面接過程をふりかえるための面接を開始した。全過程のふりかえり面接は、ほぼ1ヶ月に1度、計4回行われた。第1回では、箱庭制作面接全10回における、各回のタイトル、印象的なミニチュア、連想、制作前後の箱庭制作者の現状などが、箱庭制作者から報告された。第2回では、「10回の箱庭制作を終えて感じる今の私」について報告された。第3回では、作品の構成・自己像の変化と、サポーター役、見守り手(=筆者)のイメージ、宗教的要素などについて、報告された。予定時間内で報告を終了できなかったため、続きを10日後の第4回面接で行った。

## (2) B 氏

第8回ふりかえり面接終了約1ヶ月後に,全面接過程をふりかえるための面接を1回実施した。B氏の全過程のふりかえり面接で,B氏は,各箱庭制作面接につき,「作る」「語る」「影響」に関する主観的体験を自発的に一覧表化し,それに基づいて報告した。

### Ⅲ-2. 分析方法

#### 1) 基礎資料の作成

すべての面接の終了後,筆者がVTRを視聴し,制作過程内容をできる限り事実忠実に記述した。箱庭制作面接の両説明過程とふりかえり面接での会話を逐語録化した。

その後,箱庭制作面接各回の箱庭制作過程,自発的説明過程,調査的説明過程,内省報告の各データの関連を探るために,各過程のデータを箱庭制作者が任意に区切った箱庭制作過程毎に,一覧表に再構成し,比較可能とした(表2にA氏第2回面接の一部抜粋を例示,詳細は資料1参照)。ただし,B氏の場合,内省報告が単語で記されている場合も少なくなかったため,その主観的体験をより明確に把握するため,該当箇所に関するふりかえり面接での言及の逐語録を一覧表に追加した。

箱庭制作者の内省報告に記された,各箱庭制作過程における制作行為を,制作過程の〔〕内に記した。制作過程内容を筆者が一部追加した。両説明過程,内省報告,ふりかえり面接の〔〕内の言葉は筆者が記述した。筆者の発言は<>で示した。両説明過程で説明が複数過程に亘る場合,適切と思われる箱庭制作過程に分類した。

#### 2) M-GTAによる分析

第1研究の目的である,a.継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験を精緻に分析し,概念化することを通して,箱庭制作面接が箱庭制作者の自己理解や自己成長をどのように促進するのか,その機能について検討することを達成するために,基礎資料として整理された各箱庭制作者のデータに対して,M-GTAによって,データに密着した理論生成を目指した。

A氏とB氏の自発的説明過程と調査的説明過程の逐語記録,内省報告を,木下(2003)のM-GTAに従い,質的に分析した。M-GTAでは分析テーマと分析焦点者の2点から分析を進める。分析テーマを「継続的な箱庭制作面接における促進機能」とした。グラウンデッド・セオリーの適用可能範囲を示す分析焦点者を「自己理解,自己成長を目的として,継続的な箱庭制作を実施した心理的に健康な制作者」とした。

表1 箱庭制作過程に関する内省報告例(A氏 第1回面接 制作過程(13)一部抜粋)

経過時間	制作過程内容	意図	感覚・感情・イメージ	連想	意味
27:00	壺を選び,波打ち際奥の方に半分うずめ,砂をかける。	サンゴを棚に戻しに行ったら,壺が視野に入った。「あ,これも置こう」と思った。ガラスの壺の蓋をあげようか迷ったが,閉まったままにした。(後略)	青い壺とガラスの壺。青いのは色と形はいいが大きすぎる。ガラスの壺は大きさは手ごろだが,透明で中が見えてしまうのがちょっと引っかかっていた。(後略)		制作終了後の話し合いで,thから「そういう物があるって気づいてるんだ」と言われ,(後略)

表 2 A 氏第 2 回箱庭制作面接における主な主観的体験(一部抜粋)

制作過程	自発的説明過程	調査的説明過程	内省報告	ふりかえり面接
(3)[川によつて二つに分けられた土地を見ている]	【制作中の苦しさ】(3)しばらく作ってて、苦しいですよ。なんかくはあ、苦しい>うん。苦しいっていうかね。人気がないというか。寂しいというか。二つに分かれちゃったなと思って。(後略)		(3)[制作・感覚]大地もいまだ生命がなく、乾燥していて、荒涼としたイメージが私に迫ってきた。「こんなに広い川を作ってしまったてどうしよう」「生命のない大地がおそろしい」と感じていた。	
(11)[白い石を左の陸地奥、川岸に置く。左手前の山を奥に移し、ふもとに土偶と埴輪を置く]	【石と土偶,埴輪】(11)この辺の手前のほうにはちょっと置けない。手前のほうにいる生き物とはちょっと違う生き物のような気がして置けなかったですね。	【土偶,埴輪】(11)なんか命なんだけど、命を持って人として持ってきたんですけどね。半分命じゃないものになっているっていうか。何ていうて言うんでしょうね。人間ではない命になってるというか。そういう感じがして、こう動物や人の世界には、ちょっと、いけないんだな、入ってきちゃっていう。そういう感じですかね(後略)	(11)[制作・感覚]土偶もいのちの表現だと思っていたが、ふもとに置いたことで、命としての人間の代わりにやうでもあるし、山の番人のよくな気もしてきた。【制作・意味】石は「かたまり」。自然の造形物だけれども、生命感は薄くて、動き出すことがないもの。私が左側に置きたかった命とは、そのようなものだったのではないか。はっきりとした形をまだ持たない、抽象的なものがよかつたのだと思う。	【土偶,埴輪】(11)土偶はだいぶ神様の方に近い。象徴的になってしまっている。深く土の中にもぐって何世紀も経って命の感覚がひどく微かになってしまっている。 【お山】(11)信仰の対象になるようなお山のイメージがありましたね。そうすると、お山のふもとに土偶達はいかにもふさわしい。ちようど山と平地とのちようど境目辺りに居てくれると、ちようどころあいがいい。

自発的説明過程,調査的説明過程,内省報告それぞれの独自性と共通性を確認するため,概念生成はそれらの過程毎になされた。1 概念につき,1 分析ワークシートを作成し,データから概念を生成した。ワークシートには,概念名,概念の定義,具体例,分析中の思考の記述である理論的メモを記した(資料 2)。類似例の確認だけでなく,対極例の比較を行うことにより,概念の解釈が偏る危険を防いだ。各過程で,調査参加者のデータからの概念生成と修正が終了したと判断した段階で,主観的体験に関する各過程(自発的説明過程,調査的説明過程,内省報告)の概念を総合的に検討した。そして,同一であると判断された概念は,具体例を統合し,一つの概念として扱った。概念相互の関係を検討し,カテゴリーを生成した。

そのデータを基に,結果図(図 3,p.25 参照)を作成した\*2。

恣意性を極力排除するため,論文をまとめる過程で箱庭療法や質的研究を実践している研究者に指導を受けた。また,調査参加者に原稿の内容確認を依頼し,若干の字句修正を行った。

## IV章. 第1研究の結果の概要

### IV-1. 促進要因間の交流の全体像

箱庭制作面接における促進要因間の交流の全体像を示す。分析テーマ,分析焦点者に照らして,カテゴリーや概念に基づいた適切なモデルか検討し,結果図(図3)を作成した。M-GTAの分析結果から,促進要因が単独で,箱庭制作面接における自己理解,自己成長に寄与するのではなく,それぞれの促進要因同士が交流し,影響を及ぼし合う過程において,促進機能が働くと捉えられた。そこで,本研究では,箱庭制作面接の中心的な促進機能を,箱庭制作面接の促進要因間の『交流』であると解釈した(図3)。図3に描かれた双方向の矢印は,促進要因間の『交流』を示す。

相互に交流しあう促進要因として,以下の要因が見いだされた。『制作過程』,その内の「内界」,「装置」,「構成」と,『単一回の制作過程・作品』,その内の「作品」と,『箱庭制作面接のプロセス』,その内の「説明過程」,「見守り手」,「作品の連続性や変化」と,『制作者の生活・人生・環境』内の「外界・日常生活」,「内省」,「心や生き方の変化・成長」である。

図3に示したように,促進要因間の交流を示す12個のコアカテゴリーが見いだされた。『単一回の制作過程・作品』内の『制作過程』では「内界」と砂箱,砂,ミニチュアという「装置」と「構成」とが交流している(①,②,③,④)。さらに,『制作過程』は「作品」と交流し(⑤),それらが総合して,『単一回の制作過程・作品』の促進機能として働くと考えられた。

『制作過程』は『制作者の生活・人生・環境』内の「外界・日常生活」と交流している(⑥)。『単一回の制作過程・作品』は『箱庭制作面接のプロセス』内の「説明過程」,「見守り手」と交流している(⑦,⑧)。「説明過程」と「見守り手」は交流している(⑨)。「内省」は『箱庭制作面接のプロセス』と交流している(⑩)。

上記促進要因間の交流の総合的効果により,「作品の連続性や変化」や箱庭制作面接の最終的目標である「心や生き方の変化・成長」が生まれる。その変化は『箱庭制作面接のプロセス』や『制作過程・作品』にフィードバックされると考えられた(⑪)(⑫)。

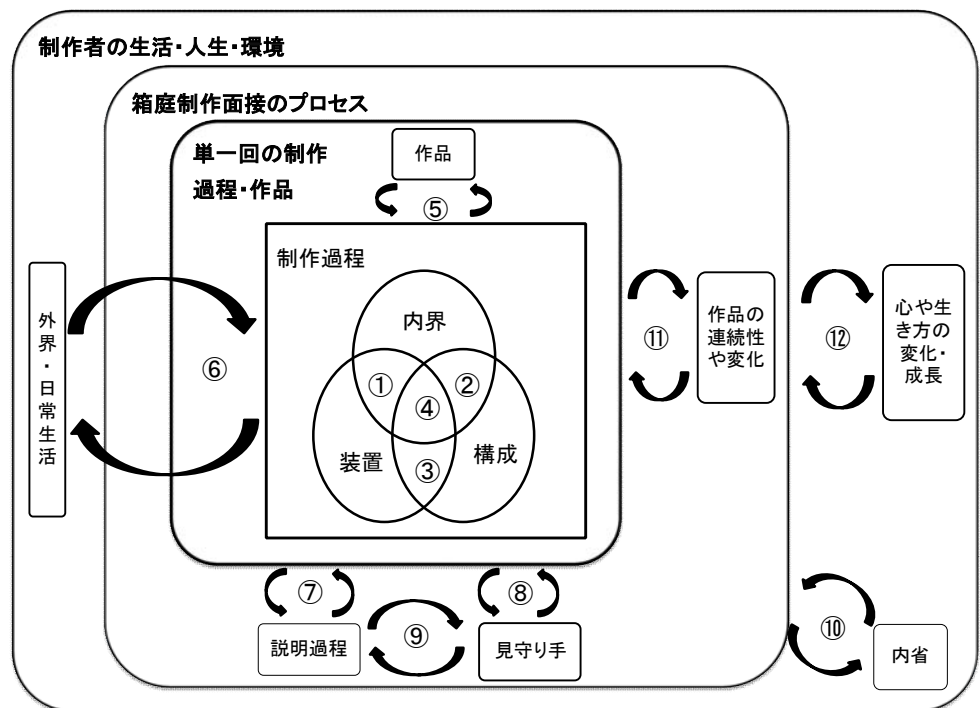


図3 箱庭制作面接の促進要因間の交流(楠本,2012を一部修正)

①【内界と装置の交流】には、カテゴリー1個と概念4個があった。②【内界と構成の交流】には、カテゴリー3個と概念13個があった。③【装置と構成の交流】には具体例がなかった。装置と構成との関連には、内界も同時に関与し、④に分類されるためと考えられる。④【内界と装置と構成の交流】には、カテゴリー3個と概念12個があった。⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】には、概念3個があった。⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】には、概念3個があった。

具体例に基づかず、理論的に生成したカテゴリーは、②【内界と構成の交流】内の〈創造をめぐる肯定的感情と否定的感情〉のみである。2概念[創造の喜び]と[作品に対して、否定的な感情や感覚をもつプロセス]を包括するカテゴリーとして、〈創造をめぐる肯定的感情と否定的感情〉を生成した。

#### IV-2. カテゴリー, 概念, 具体例等の表記について

具体例の記し方について、〈貝殻ってやっぱりそういう女性的なっていうイメージある？〉この辺のは‘砂箱の左上を指して’そういう感じがありますね。〈あ、この辺のは〉こっちは‘右上の貝を指して’もうちょっと違った感じですね。〈ああ、なるほどね。〉ええっと、何ていうんだろ、自然のもの、海のもの、んと、〈うん、そっか〉うん、自然界のものっていう感じですねくなるほど、タコが隠れてるところは自然界〉うんそうですそうです (A氏調査, 3-6), を例として説明する。カテゴリー, 概念の具体例とその前後の箱庭制作者の言葉を網掛け, ゴシック体で示した。概念の具体例に当たる部分に\_\_\_\_\_を付した。箱庭制作者の行動や様子を‘ ’内に記述した。具体例内の筆者の言葉を〈〉内に示した。具体例の最後の()内にデータの 출처を記した。(A氏調査, 3-6)は、「A氏」の「調査的説明過程」における言葉であり、それは「第3回面接」の「6番目の制作過程」における言動に関する主観的体験の語りである。また、(B氏内省, 2-4, 制作・意図)は、「B氏」の「内省報告」に記された主観的体験の記述であり、「第2回面接」の「4番目の制作過程」における「制作過程」の言動に対する「意図」である。

促進要因間の交流を示すコアカテゴリーを【】に統一した。カテゴリーは〈〉→《》の順に抽象度が高い。概念は[]で示した。概念, カテゴリー名は, ゴシック体で示した。

カテゴリー, 概念の具体例の詳細や検討において, データを補足するために, ふりかえり面接における調査参加者の言葉を記載する場合がある。ふりかえり面接における調査参加者の言葉は[]内に明朝体で示した。ふりかえり面接における言葉で, 考察している具体例に係る箇所に\_\_\_\_\_を付した。考察の中で, 他概念の具体例を示す場合があった。そのような場合には, 考察している概念の具体例と区別するために, 検討する部分に\_\_\_\_\_を付した。



## V章. M-GTAのコアカテゴリー①【内界と装置の交流】の結果および考察

本章では、M-GTAのコアカテゴリー①【内界と装置の交流】の結果および考察を記す。

①【内界と装置の交流】は、『単一回の制作過程・作品』内の『制作過程』における「内界」と「装置」との交流に関するコアカテゴリーである(図4)。「内界」と「装置」は、交流し、双方向で影響を与えあっている。それには、1)「装置」から「内界」への影響、2)「内界」から「装置」への影響、3)双方向の影響があった。1)には、概念[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]があった。2)には、カテゴリー<ミニチュアに付与された内的プロセス>、その中に概念[不明瞭なミニチュアの意味や特性]があった。3)には、概念[ミニチュアの多義性]、[ミニチュアによる自己のイメージや心理的状況や特性への気づき]があった。

2) <ミニチュアに付与された内的プロセス>と[不明瞭なミニチュアの意味や特性]とでは、意識化の明瞭度に、差があった。<ミニチュアに付与された内的プロセス>の具体例では、箱庭制作者は、その内的プロセスをかなり明瞭に意識化していた。それに対して、[不明瞭なミニチュアの意味や特性]では、ミニチュアの意味や特性は明瞭には意識化されていない部分があった。以下に、カテゴリー、概念、具体例を挙げ、①【内界と装置の交流】で見いだされた促進機能について考察する。

### V-1. 「装置」から「内界」への影響の結果および考察

1)[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]の結果および考察

「装置」から「内界」への影響には、概念[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]が見いだされた。[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]は、「ミニチュアを見たり、触れることにより喚起される感覚、イメージ、感情、考えなどの内的プロセス」と定義された。

本概念の具体例を比較すると、喚起される内的プロセスが比較的シンプルなものから、複雑・多様なものまで、さまざまであることがわかる。

#### ◆具体例1：B氏第8回箱庭制作面接制作過程1

例えば、B氏は第8回箱庭制作面接の箱庭制作過程1で、船を選んだ。その箱庭制作過程について内省報告に船出をしていくイメージが湧く(B氏内省, 8-1, 制作・意図図)と記した(写真1)。これは、棚に船を見つけた時に船出のイメー

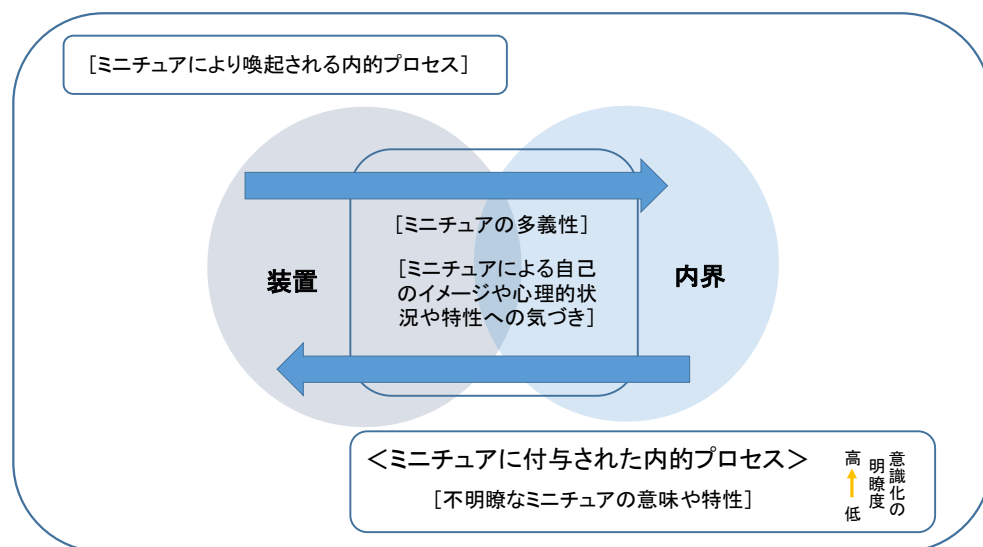


図4 ①【内界と装置の交流】

ジが喚起されるというシンプルな内的プロセスである、と捉えられる。

それに対して、一つのミニチュアから複数の内的プロセスが生まれるやや複雑な具体例もあった。

#### ◆具体例 2: A 氏第 8 回箱庭制作面接制作過程 5

A 氏は、第 8 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 5 で、白い女性の人形を選んだ。その箱庭制作過程について、内省報告に 白い陶器の肌が床に伏せている義母の弱々しい感じをイメージさせる。それで大切に扱わなければという気持ちが私の中におきてきた (A 氏内省, 8-5, 制作・感覚) と記した (写真 2)。

この具体例では、白い陶器の女性のミニチュアからまず義母のイメージが喚起され、それに伴ってイメージされた現実の人物に対する感情が展開されていくという内的プロセスが見いだされた。

#### ◆具体例 3: A 氏第 1 回箱庭制作面接制作過程 11

A 氏は、第 1 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 11 で、ベルとマリア像を棚から選び、砂箱左上の家がある領域でその 2 つのミニチュアを置き比べた。マリア像を選び、砂箱左奥に置き、ベルは棚に戻した。その箱庭制作過程について、調査的説明過程で 金色のベルの、あの金色の感じは、あれ、素敵だなと思ったんだけど、でも、ちょっと、ま、なんだか、ちょっと頼りなくって。<ふーん、頼りなかった>頼りなかった。<ふーん>なんかくベルでは>うん、ベルでは (A 氏調査, 1-11) と語った (写真 3)。この語りの前半部は、ベルというミニチュアの色から素敵な感じが喚起されたことについての語りであり、本概念の具体例となる。後半部は、構成における置き比べによって喚起した感覚であるため、本概念の具体例とは言い難い。しかし、同じミニチュアからアンビバレントな感じが喚起される主観的体験の語りであることは確かである。

このように、箱庭制作では、現物のミニチュアによって、様々な内的プロセスが触発され、喚起される。藤原(2002)は、「実際手続きをつうじて、現物としての箱庭が、



写真 1 B 氏第 8 回作品

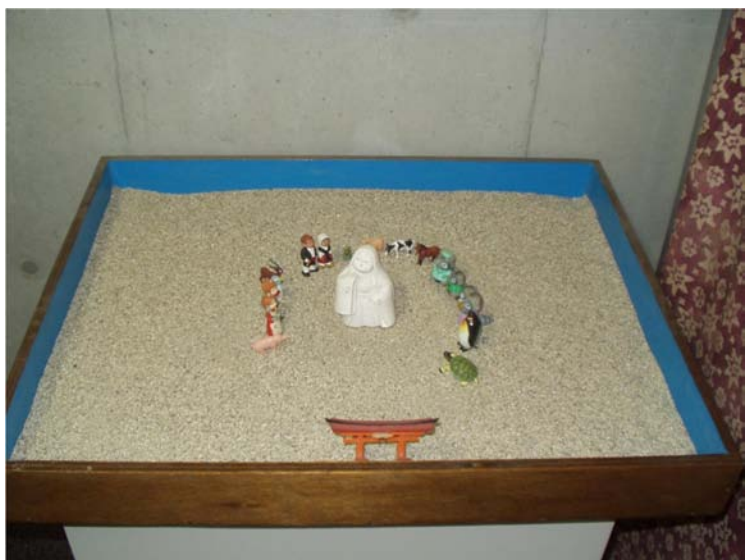


写真 2 A 氏第 8 回作品

はたして現物としての〈もの〉からどのように内的なイメージの世界のことになっていくのか、また箱庭がどのように〈こころのこと〉として機能をもつようになっていくのかということ」が、箱庭療法における基本的な課題であるとする(p.128)。「ミニチュアにより喚起される内的プロセス」によって、ミニチュアは単なるモノではなくなり、箱庭制作者の内的プロセスがミニチュアに重なりあっていく。



写真3 A氏第1回作品

この内的プロセスは、ミニチュアが〈こころのこと〉になっていく過程に関する促進機能であると考えられる。「ミニチュアにより喚起される内的プロセス」は、現物の〈もの〉が〈こころのこと〉になっていく過程を促す促進機能をもつことが確認された、と考える。

さらに、多様な内的プロセスが喚起される場合があった。

#### ◆具体例4：A氏第4回箱庭制作面接制作過程4～6

A氏は、第4回箱庭制作面接の箱庭制作過程4で、砂箱中央でベンチと家を置き比べた。制作過程5で、砂箱中央でベンチと貝殻を置き比べた。箱庭制作過程6で、最終的に鳥の巣を置いた(写真4)。それらの箱庭制作過程について、調査的説明過程で、以下のように語られた。‘ ’内の記述は箱庭制作者の行動や様子を示す。ベンチは空っぽでなんだかさみしいん

ですよね。〈ふうんうん〉(A氏調査, 4-4)で、貝殻もうーん、棚に行った時は貝殻が目に留まって、あ、これいいかもと思って持ってきたんですけど、置くとなんとなく周りとはそぐわない感じもするし、〈ふん、ふん〉やっぱり空っぽだし、〈うん、うん〉なんかさみしいなって〈ふん〉(A氏調査, 4-5)で、もうベンチや貝殻を見ているときから、〈ふん、ふん〉鳥の巣は目に入っていたんです‘見守り手の顔を見ながら’。〈ふん、うん、うん〉で、でも、なんだろうこう素直



写真4 A氏第4回作品

に手が伸ばせなくって<ふうん>ベンチやら貝殻にしていたんですけど、(A氏調査, 4-複数過程に亘って) <ふうん>やっぱり鳥の巣を置いてみようと思って。で持って来て、あの、そいで、卵もなくてもいいかも知れないと思ってどけたら、やっぱりすごくさみしくなって、‘見守り手に顔を向けて’ <ふん, なるほどね>これは卵はいるんだと思って、置きましたね。<素直に、手が伸ばせないって言うのは、もう少し言うるとどんな感覚>うーん、なんとなくね、こう(間8秒) なんてしょうね、素直に手が伸ばせない(間7秒) これ、あの、貝殻もそうでしたけど<うん>貝殻も、この、巣も、<うん>卵を抱えた巣もそうなんですけど、<うん>すごくその女性のことを<うん>意識させる感じが<うん>私にはあるんですよ。<うん, うん, うん>特にこれは‘巣を指差しながら’ こう子どもをかえすっていうね。<そうだね>うん私は<ふん>子どもがいないというところで<ふん>何か引っかかっている様な気も<うん>しますね (A氏調査, 4-6)。ベンチや貝殻から、空っぽなので、さみしいという感情が喚起させられた。また、鳥の巣から、素直に手を伸ばせないという思い、女性や子どもを意識させられる感じ、自分には子どもがいないという現状、そのことによる何か引っかかっているような気持ちという多様で、輻輳する内的プロセスが喚起されている。

A氏第4回箱庭制作面接での鳥の巣に関する主観的体験の語りについて、イメージの集約性、直観的な意識、図と地、気づきに関する層のシフト、前概念的体験の観点から考察する。

#### ◆具体例5：A氏第4回箱庭制作面接制作過程6

◆具体例4に続く調査的説明過程でA氏は以下のように語った。‘ ’内の記述は箱庭制作者の行動や様子を示す。たぶん持たずに一生生きて行くだろうなっていうのは(間28秒)(小さな声で)それで手が伸ばせなかったんでしょうね。(中略)ちょっとなんだかつらいような切ないような気分になりますね。(中略)‘ハンカチで目の下をぬぐって’でも、いいもんだなと思いますね、やっぱりこうやって見て<うん>(間15秒)すごいですね、そういう風に考えると。この箱庭の意味って何か全然違ってくる‘声が震えて’、作ってる最中は<うん>もうちょっとね<うん>なんか、あのお、(間)自己実現じゃないですけど、そんなような社会的役割を果たすとか、自分の成長とか<うん>そういうことなのかしらと思っていただけ、<ふん, うん>ふふふ(笑)ね。卵が、巣だと思うと<ふん>ね、全然意味が、置いている最中はちょっとそういう感覚では見ていなかったの<うん>ちょっとなんだかつらいような切ないような気分になりますね。‘声が震えて’<そうだね。そうだね>‘箱庭を見つめながら、黙って、時折ハンカチで涙をぬぐっている’(間45秒)(A氏調査, 4-6)。

このように鳥の巣から喚起される、女性や子どもを意識させられる感じは、調査的説明過程で初めて明示的に語られた。説明過程で新たに生起した内的プロセスは、本来であれば、⑦【単一回の制作過程・作品と説明過程の交流】や⑨【説明過程と見守り手の交流】で取り上げるべきである。しかし、この鳥の巣を巡る調査的説明過程で生まれた箱庭制作者の内的プロセスは、制作時での内的プロセスがどのようなものであるかを吟味する上で重要であるため、本章で検討しておきたい。

箱庭制作過程では、鳥の巣は、自己実現や自分の成長という内的意味を表すのか、とA氏は思っていた。このように鳥の巣は、自己実現や自分の成長という側面と、調査的説明過程で初めて語った女性のことを意識させる感じという異なる内的意味やイメージが集約され

ていた。これは、河合隼雄(1969)が述べるイメージの集約性に関する主観的体験が示されていると考えられる(pp.17-18)。**素直に手が伸ばせない**という身体感覚の再度照合を通して、鳥の巣に多義的なイメージが集約されていたことにA氏が気づいたことで、A氏は鳥の巣の、自分にとっての意味について理解を深めることができた。また、湧き上がっている様々な感情とともに、自分の女性性・母性に関する気づきをえたと考えられる。このように[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]は、箱庭制作者の自己理解の促進に寄与する。

A氏第4回箱庭制作面接での鳥の巣に関する主観的体験の語りは、「直観的な意識」の観点からも考えることができる。本研究では、直観的な意識を「意味の認知は伴わないが、ぴったりだと感じることができる意識」と定義する。直観的な意識は、光元(2001)の下記の言及とほぼ同義である。光元(2001)は、ミニチュアを選び、それを置く過程における箱庭制作者の認識に関して、木を選び、置くことを例に挙げて以下のように記している(pp.24-25)。

このとき私は自覚的には「木を1本、箱の中においた」という感覚をいただいています。しかしながら、私たちはこの木が含意的・象徴的意味を担っているであろうことを知っています。ということは私はこの木がいったい何を意味しているのか、含意しているのか、自分自身で必ずしもわかっていないということです。ところが、私の内奥の何かが「そう、そこでいいんだ」と答えてくれます。[中略]しかしながら、ただ一つははっきりしていることがあります。「理由はわからないが、この木は、箱庭の中のここにあることで、なぜだかピッタリしている」ということ(=認識の成立)、このことだけははっきりしているのです。

光元はこのような意識の有り様の概念名を記していない。そこで、本研究では、直観的な意識という概念名を採用する\*<sup>1</sup>。光元(2001)では、ミニチュアを選び、置くという構成に関する箱庭制作者の認識について言及されているが、直観的な意識は、さらに広範な場面や過程、例えば、本節で検討しているミニチュアを巡る内的プロセスにも関連している可能性がある。以下にこの観点から考察する。

鳥の巣がもつ箱庭制作者にとってのイメージや意味の一側面である、自己実現や自分の成長との内的意味やイメージは、制作時に意識されている。それに対して、もう一方の側面である女性のことを意識させる感じについて、調査的説明過程で、**なんだろうこう素直に手が伸ばせなくて**と語っていることから判断すると、箱庭制作者は制作時には、素直に手が伸ばせないという身体感覚として捉えられていたことがわかる。そして、筆者の**<素直に、手が伸ばせないって言うのは、もう少し言うとどんな感覚>**という質問を受けて、**うーん、なんとなくね、こう(間8秒)なんでしょうね、素直に手が伸ばせない(間7秒)**と、その身体感覚を再度照合した後に、女性のことを意識させる感じが明確になり、語られた。つまり、その鳥の巣から触発された内的プロセスについて、制作時に、少なくとも、素直に手が伸ばせないという身体感覚は存在していた。箱庭制作過程では、鳥の巣から触発された内的プロセスの内的意味やイメージを明確に意識することはなくても、ミニチュアによって触発された自己への影響を身体感覚として捉え、鳥の巣を手にとることを留保するという行動をとっていたことになる。鳥の巣を手にとることを留保するという行動を、この時点では、ぴったりだと感じられなかった内的プロセスの現れと考えるならば、鳥の巣を手にとること

の留保を巡る一連の内的プロセスや行為は、直観的な意識の表れと解釈することが可能であろう。[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]には、直観的な意識という心理的機制が関与している場合があることが見いだされた。◆具体例4では、意味の認知は伴わないが、A氏がミニチュアから喚起された自分の身体感覚に従い、箱庭制作面接に臨んでいる例が示された。先にみたように、A氏は調査的説明過程で、鳥の巣の意味や自己への気づきをえた。このように箱庭制作面接では箱庭制作者の意図を超えた表現が生じ、それが箱庭制作者の自己理解の促進に寄与する場合がある。◆具体例4と5は、[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]の促進機能の一端を示していると考えることができる。

さらに、◆具体例4と5の自己実現や自分の成長との内的意味と、女性のことを意識させる感じを巡る内的プロセスを、「図と地」(Perls,1969 倉戸監訳 2009,p.73;倉戸,2011,pp.20-21;氏原,1990,pp.65-78),「図地反転」(Perls,1973 倉戸監訳 1990,p.17;倉戸,2011, pp. 20-21),気づきに関する層のシフト,前概念的体験の観点から検討したい。

A氏第4回ふりかえり面接では、調査的説明過程における上記の会話に関して、以下のように語られた。考察する部分に\_\_\_\_\_を付した。[あの時は、あのことを思い出すと、すぐうるうとくるのはなんでかな。あの時はね。私の声が震えだしたのは自分でもわかって、思わぬところから自分の何か大事なところが明らかになってきたっていう驚きのような、戸惑いのような気持ちもあったんですね]。

◆具体例4と5と第4回ふりかえり面接での会話を総合的に捉えると、鳥の巣に関する箱庭制作者の主観的体験を、「図と地」(Perls,1969,倉戸,2011;氏原,1990,pp.65-78)という観点から捉えることができる。つまり、箱庭制作時には、自己実現や自分の成長との内的意味やイメージの側面が主に、意識の前景に出ていた(図)と考えられる。しかし、調査的説明過程で、自らが語る中で、また、筆者とやりとりすることを通して、鳥の巣のもう一方の側面である女性のことを意識させる感じが、図となっていく。このように「図地反転」(Perls,1973,倉戸,2011)が起こる。この「図地反転」は、[思わぬところから自分の何か大事なところが明らかになってきたっていう驚きのような、戸惑いのような気持ち]を引き起こさせる、箱庭制作者にとって大きなインパクトを伴った主観的体験であった、と捉えられる。このように、ミニチュアを巡る内的プロセスには、多様な意味やイメージのうち、ある時にはその一つの側面が図となるが、別の場面では、図地反転が起こり他の側面が図となるという特性をもつ場合があると考えられる。図地反転することにより、箱庭制作者は、ミニチュアの多様な意味やイメージに関する気づきや、自己への気づきをえることができると解釈できる。このように[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]において、「図地反転」が起こることによって、箱庭制作者は自己理解を深めることができると考えられる。

また、鳥の巣を巡る感覚について、制作時には、素直に手が伸ばせないという身体感覚として捉えられていたが、筆者の質問を受けて、その身体感覚を再度照合した後に、女性のことを意識させる感じが明確になり、語られたことについて、気づきの観点から検討することができる。ゲシュタルト療法では、気づきには、a.内層,b.外層,c.中間層の3つがあるとする。内層の気づきとは、身体内部で起きていることの意識化,外層の気づきは、身体の外側,外界で起きていることの意識化,中間層の気づきとは内層と外層の中間にあるファンタジーの世界での想像,空想,思い込み,評価,コンプレックスなどの意識化である(Perls, 1973, 倉戸監訳 1990p.79,p.148,倉戸,2011, pp.17-19)。この考えを参照すれば、鳥の巣を巡るA氏の

主観的体験は、制作時の内層の気づきであったものが、調査的説明過程で中間層の気づきにシフトしたのだと、解釈することができる。◆**具体例 5**では、調査的説明過程で中間層の気づきにシフトしたことによって、A氏は鳥の巣の意味や自己への気づきをえることができたと考えられる。このように[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]において、中間層の気づきにシフトすることによって、箱庭制作者は自己理解を深めることができると捉えられる。

ここで検討しているA氏第4回箱庭制作面接での鳥の巣に関する主観的体験の語りは、弘中(2014)の指摘とも深く関連している。弘中(2014)は箱庭療法など非言語的・イメージ的表現が中心となる面接の治療メカニズムを検討している。その中で、Gendlinの考えを参照しつつ、前概念的体験の重要性について述べている。前概念的体験は情緒性や身体感覚が優位な「！」とでも表されるべき体験であり、箱庭制作はクライアントに言葉では表現し尽せない感情や身体感覚を伴う体験を引き起こす、と指摘している(pp.188-190)。鳥の巣に関するA氏の主観的体験は、箱庭制作過程ではでも、なんだろうこう素直に手が伸ばせなくてという身体感覚が優位で、言語化しにくい体験であった。この主観的体験は、前概念的体験であった、と考えることができる。調査的説明過程で、筆者とやりとりする中で、私の声が震えだしたのは自分でもわかって、思わぬところから自分の何か大事なところが明らかになってきたってという驚きのような、戸惑いのような気持ちもあったんですね](A氏第4回ふりかえり面接での語り)、と感情が湧き出してくると共に、自分の思わぬところから自分の何か大事がところが明らかになってきたという意識化のプロセスを経ていった。そのような内的プロセスを通して、鳥の巣がすごくその女性のことを(中略)意識させる感じが(中略)私にはあるんですよや特にこれは‘巣を指差しながら’こう子どもをかえすっていうね。(中略)うん私は(中略)子どもがいないというところで(中略)何か引っかかっている様な気も(中略)しますねという自己への気づきが生じた、と理解することができる。

ここまで、第4回箱庭制作面接での鳥の巣に関する主観的体験の語りに関する、A氏の気づきを図と地、図地反転、気づきに関する層のシフト、前概念的体験の観点から検討してきた。これらの検討を通して、[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]の促進機能の一端を確認できた、と考える。

ここで、[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]について、心理療法における他の概念と比較検討することを通して、本概念の特徴を明らかにする。

概念名のうち「内的プロセス」という用語について考える。ミニチュアの治療的要因の一つとして、弘中(2002)は、「ミニチュアがクライアントの潜在的イメージを引き出す役割」を挙げている(pp.84-85)。例えば、◆**具体例 4**にあった、女性のことを意識させる感じは、箱庭制作中には意識化されていなかったため、「ミニチュアがクライアントの潜在的イメージを引き出す役割」に近接した、無意識的要素を含んだ主観的体験についての語りと考えられる。ただ、鳥の巣から触発された内的プロセスについて、制作時に、少なくとも、素直に手が伸ばせないという身体感覚は存在していた。この主観的体験の場合、その内的意味やイメージを明確に意識することはなくても、ミニチュアによって触発された自己への影響を身体感覚として捉え、鳥の巣を手にとることを留保するという行動をとっていたことになる。す

ると、この主観的体験は、より厳密には前概念的体験と考えた方がよいだろう。

本概念には他にも以下のような具体例があった。

#### ◆具体例6：B氏第1回箱庭制作面接制作過程2

B氏は、第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程2で、砂箱中央で砂を掘り、水源を作った(写真5)。それは、B氏にとって、命とか生活とかいう、この中心に湧きあがるもの(B氏自発,1-2)であり、核になる中心の部分(B氏調査,1-2)であった。その箱庭制作過程について、調査的説明過程で、以下のように語られた。実際にそれを表わすのに、十字架を置くとか、マリア像を置くかという、それには、抵抗があったわけです。〈なるほど〉で、つまり、それが、あの、いかに、その、表現しつくせない人為的な、その、形っていうんでしょうか。シンボルっていうか、うん、で、それを置くとかえって、その、自分が感じているとか、思っている、その、こんこんとわき出るような躍動感とかいう意味でなんか、表わすにはちょっとみすぼらしすぎるといふか。うん、でまあ、それは逆に選ぶ気になれなかった(B氏調査,1-2)。実際には選ばれなかった十字架やマリア像は、置くには抵抗感があり、躍動感を表すには、みずぼらしすぎるといふ感覚があったことが語られた。また、それらのミニチュアは、人為的な形、シンボルであり、自分が感じているものを表現しつくせないとの考えが喚起されたことが語られた。この具体例では、イメージの躍動感とミニチュアとの照合がなされ、ミニチュアから喚起されたみずぼらしい感じが明瞭に意識されている。

このように本概念の具体例には、明瞭な意識化を伴う例や直観的な意識という部分的な意識化を伴う主観的体験の語りや記述が共にあった。そのため、触発・喚起されるものは「潜在的イメージ」よりも幅広い「内的プロセス」とした方が、本概念の具体例で示された主観的体験の語りや記述のデータに適うと考えた。

本概念を、河合隼雄のいう「外在化されたイメージ」との関連から考えることもできる。河合隼雄(1977)は、こころの中にイメージが存在し、それを表現するのではなく、「最初から、絵画なり箱庭なりを表現の手段として用い、そこに表現したものを頼りにしながら、イメージをつくりあげていくような方法もある」として、それを「外在化されたイメージ」としている(p.39)。また、このようなできる限り自由な表現活動によって、「作っているうちに自分でも思いがけない表現が生じてきたり、作ったイメージに刺戟されて、おもいがけぬ発展や変更が生じたり」する場合があるとしている(河合隼雄,1991,p.26)。このようなことが生じるのは、箱庭作品と制作者との相互作用による効果と考えられる(岡



写真5 B氏第1回作品



田,1984, pp.19-20,p.36)。木村(1985)も、箱庭制作において、箱庭作品と制作者の相互作用が頻繁に起こることを指摘している。そして、その中で視覚的体験のフィードバックの効果についても触れ、箱庭作品が目に見える形で目前に展開し、極めて具体的な様相を呈することにより、制作者自身がそこから気づくことが多い、と指摘している(p.15,pp.22-23)。さらに、岡田(1984)は、ファンタジーグループのイメージ涌出法に触れ、刺激により、無意識に刺激を与え、無意識からイメージが湧き出てくることを期待するとしている(pp.24-25)。河合の「外在化されたイメージ」に関する記述、岡田や木村の箱庭作品からの作用・フィードバックは、必ずしも、ミニチュアだけを指したものではない。しかし、これらの指摘は、イメージ涌出法の刺激のように、箱庭制作において現物のミニチュアに刺激されて内的プロセスが喚起される様相にも当てはまる、と考えられる。

ここまで本概念を様々な観点から考察してきた。[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]は、現物の〈もの〉が〈こころのこと〉になっていく過程に関する促進機能であると考えることができた。さらに、[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]の促進機能を、イメージの集約性、直観的な意識、図と地、気づきに関する層のシフト、前概念的体験の観点から考察した\*<sup>2</sup>。このように[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]は箱庭制作者の自己理解の促進に寄与すると考えられる。

## V-2. 「内界」から「装置」への影響の結果および考察

「内界」から「装置」への影響には、カテゴリー〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉、その中に概念 [不明瞭なミニチュアの意味や特性]があった。

カテゴリー〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉は、M-GTA の分析当初は、データに密着して生成された概念であった。そのため、基礎データとしての具体例を内包している。その後、概念相互の関係を検討する中で、〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉は、カテゴリーに移行し、[不明瞭なミニチュアの意味や特性]がこのカテゴリーに包含されることになった\*<sup>3</sup>。そのため、ミニチュアに内的プロセスが付与されるという特性においては、上記カテゴリーおよび概念は共通性をもっている。

しかし、〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉と[不明瞭なミニチュアの意味や特性]とでは、意識化の明瞭度に関して、差があった。〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉の具体例では、箱庭制作者は、その内的プロセスをかなり明瞭に意識化していた。それに対して、[不明瞭なミニチュアの意味や特性]では、ミニチュアの意味や特性は明瞭には意識化されていない部分があった。

以下に、本カテゴリーおよび概念が、箱庭制作面接の促進機能としてどのような特性をもっているか、考察していく。

### 1) 〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉の結果および考察

〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉は、「意図、感覚、イメージ、感情、連想、意味という内的なプロセスがミニチュアに対して付与される様」と定義された。以下にその具体例を挙げ、次の4観点から考察する。a.現物のモノを〇〇として見たてる、見なすという内的プロセス、b.箱庭制作過程において一定の意識化を伴ったミニチュアが作品のテーマにおいて重要なミニチュアとなる場合、c.意識と無意識の相互作用、d.内的プロセスをミニチュ

アに付与する過程の前後に、別の内的プロセスが存在し、それらが連動している場合。

◆具体例 7：A 氏第 6 回箱庭制作面接制作過程 12

A 氏は、第 6 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 12 で、島の下方、砂箱手前側に、インパラを置いた(写真 6)。インパラについて、自発的説明過程で以下のよう



写真 6 A 氏第 6 回作品

うに語った。**自分の乗り物**としてくはあ、ペンギンが？>ええ、置きました。え、あの、仲間と言うか子分と言うか、乗っけてもらって移動するくなるほど>ものですね (A 氏自発, 6-12)。A 氏には、インパラを自己像であるペンギンの乗り物、仲間、子分を表すものであるとの明確な意図があったことがわかる。この語りには、置きましたとの構成に関する語りがある。しかし、語り全体の文脈を考えたとき、この語りを、インパラというミニチュアに、ペンギンの乗り物、仲間、子分という内的プロセスを付与したと理解することが適当であると考えた。

それは、この語りが、インパラの位置や方向などの構成に関する要素についての語りではなく、インパラというミニチュアに付与されたペンギンとの関係性についての語りであると考えられたためである。

◆具体例 7 は、本カテゴリーの特性をよく表していると考えられる。◆具体例 7 は、a. 現物のモノであるインパラというミニチュアを、自分の乗り物として、見たてている、見なししている、と捉えることができる。これは、子どものごっこ遊びと同じ心の機能といえる。人形を親や自分にみたとた遊びを通して、子どもは内的ストーリーを表現する。この、現物のモノを〇〇として見たてる、見なすという内的プロセスが、箱庭制作面接でも生起している、と考えることができる。この見たてる、見なすという内的プロセスは、投影と類似点があるもの、異なった点をもつと考えることができる。◆具体例 7 は、投影とは異なり、そのプロセスが明瞭に意識されている。この点に内的プロセスの付与と投影の差異がある。しかし、内的プロセスの付与は、モノと内的なプロセスが重なりあい、<こころのこと>となる内的プロセスであり、箱庭制作面接における促進機能の一側面と考えることができる。

<ミニチュアに付与された内的プロセス>に見いだされた箱庭制作者の意識的な体験の促進機能について、別の観点から考察したい。

◆具体例 8：A 氏第 2 回箱庭制作面接制作過程 11

例えば、A 氏は、第 2 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 11 で、砂箱左上隅に白い石を二個置いた(写真 7)。その箱庭制作過程について自発的説明過程で、**そういうちょっと意味の分か**

らないものが置きたかった

(A氏自発, 2-11)と語った。内省報告には, 以下のように記された。石は「かたまり」。自然の造形物だけれども, 生命感は薄くて, 動き出すことがないもの。私が左側に置きたかったいのちとは, そのようなものだったのではないか。はっきりとした形をまだ持たない, 抽象的なものがよかったのだと思う (A氏内省, 2-11, 制作・意味)。

石に, 生命感は薄くて, 動き出すことがないもの, はっきりとした形をまだ持たない, 抽象的なものなど多様な意味が付与されていた。

この考察を深めるために, 石とその内的意味について, A氏第2回箱庭制作面接における他のミニチュアや構成についての主観的体験の語りや記述も含め, 考察する。A氏第2回箱庭制作面接では様々な様相の命が構成された。石は, A氏第2回箱庭制作面接のいのちというテーマに関する重要なミニチュアの一つであった。

A氏は「生命のない大地がおそろしい」と感じていた(A氏内省, 2-3, 制作・感覚)。A氏はこの土地に命を必要としていると考えられる。A氏は, 箱庭制作過程12で, 棚に青い鳥を見つけて, 白い石の上にのせた。青い鳥を見つかるまで, A氏は苦しさを感じていた。ところが青い鳥がたまたま目に入った時, 「ああ, これだ」と感じた。それを置くことで, 苦しさがなくなった。青い鳥は, 意図を超えているような感じもあり, 箱庭や自分の心の調子を変える大きな影響を及ぼしたことが自発的説明過程で語られた(p.51 ◆具体例20参照)。そして, もう少し命を感じたいと思った制作者は, 鴨を見つけ置くことができた。A氏は, 土偶や埴輪が半分いのちではないもの, 人間ではない神様の方に近い存在, 信仰の対象になるお山のふもとの番人であるとも感じていたことが調査的説明過程や内省報告で報告された(p.42 ◆具体例12, pp.44-45 ◆具体例14参照)。

A氏第2回箱庭制作面接には, まだ形をもたない抽象的な命(石), 生命感を感じさせる命, 半分命ではない神様に近い命というように, 命の多様な様相が表現されており, 今回の作品の主なテーマは命であると捉えられた。そのようなテーマの中で, 石は, 命の表現なのであるが, 生命感は薄くて, 動き出すことがないもの, はっきりとした形をまだ持たない, 抽象的なものという, 常識的な命のイメージを超えた独特の意味が付与されている。このように石は, A氏第2回箱庭制作面接のテーマを構成する重要なミニチュアの一つであった。また, 命が主なテーマとなったA氏第2回箱庭制作面接は, A氏の10回に亘る箱庭制作面接全体のテーマの一つである, 宗教性(命, 守り, 神聖な場所・生き物)に関する面接の展開において重要な回でもあった。



写真7 A氏第2回作品

以上、確認してきたように、A氏第2回箱庭制作面接において、b.石に付与された内的プロセスは、箱庭制作過程においても一定の意識化がなされているが、語りや内省によって、さらに明瞭に意識化されるという過程を経たものであった。また上述のように、石はA氏第2回箱庭制作面接における重要なテーマを構成するミニチュアの一つであった。〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉は意識的なものであるが、そうであるからといって一概に箱庭制作面接において、意義の小さい内的プロセスとはいえ、ミニチュアに付与された内的プロセスが箱庭に表現されることによって、箱庭制作者の自己理解の促進に寄与することができる、と考えられる。

さらに、〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉の箱庭制作面接における意義について、イメージの特性の面から検討する。Jung(1921 林訳 1987)は、イメージに関して以下のように定義している(pp.447-448)。

内的イメージは、さまざまな由来をもつ多種多様な素材から構成された、複合体である。ただし、これは寄せ集めではなく、それ自体でまとまりを持った産物であり、それ自身の独立した意味を備えている。イメージは心の全般的状況を凝縮して表すものであって、単に・あるいは主として・無意識内容だけを表すものではない。たしかにそれは無意識内容を表しているが、しかしそのすべてを表しているわけではなく、その時々には布置されている内容だけを表している。この布置は一方では無意識の独特の活動によって生じ、他方ではその時々意識状態によって生じる。この意識状態はつねに識閥下にある素材のうち関係のあるものの活動を促すと同時に、関係のないものを抑制する。したがってイメージはその時々無意識の状況と意識の状況を表している。それゆえあるイメージの意味を解釈することは、意識と無意識のどちらかのみから出発するのではなく、両者を互いに関連させることによって初めて可能になる。

このようにイメージは、意識と無意識との両方からの影響を受け、その心の全般的状況が凝縮されたものである。そして、その時々には布置された内容だけを表すとされている。また、箱庭制作は、意識と無意識とが相互に作用しあう、意識と無意識の協働作業である。c.〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉は、イメージの、あるいは意識と無意識の協働作業の、意識的側面により比重のある主観的体験についてのカテゴリーであるといえよう。このような主観的体験である〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉は、上記2具体例に示されたように、箱庭制作面接の促進機能として働く。

箱庭療法において、意識が勝ちすぎることの弊害が指摘される場合がある(河合隼雄, 1991, pp.132-134;他)。〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉に示された、意識的な過程が強く働いて作られた箱庭作品は、意識が勝ちすぎたものとなる可能性をはらんでいるとも考えられる。そのため、〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉に示された箱庭制作者の主観的体験の語りや記述について、さらに吟味する必要がある。箱庭制作が意識と無意識との協働作業となるためには、このカテゴリーで示された特性とは異なる、〈もの〉から〈こころのこと〉になっていく過程も必要になると考えられる。この点については、別に[不明瞭なミニチュアの意味や特性]で考察する。

ここでは以下のことを指摘するにとどめる。本カテゴリー内の具体例には、内的プロセスをミニチュアに付与する過程の前後に、別の内的プロセスが存在し、それらが連動している場合があった。

#### ◆具体例 9：B 氏第 2 回箱庭制作面接制作過程 2

例えば、B 氏は第 2 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 1 で、棚を見て、ミニチュアを探した。箱庭制作過程 2 で、砂箱中央に仕切りを、左右をへだてるように置いた(写真 8)。そして、箱庭制作過程 1 に関して、何か重いものを感じて蓋がされた感じ(B 氏内省, 2-1, 制作・感覚), 壁(B 氏内省, 2-1, 制作・連想) という主観的体験を内省報告に記した。「心苦しい思いを表現する仕切りを見つける」と B 氏が名づけた箱庭制作過程 2 に関して、気持ちを重たくさせる重さを表現したい(B 氏内省, 2-2, 制作・意図), 壁(B 氏内省, 2-2, 制作・意味) という主観的体験を内省報告に記した。第 2 回ふりかえり面接では、これらの内省報告に関して、以下のように語られた。以下に検討する部分に \_\_\_\_\_ を付した。「重いものを感じて、気持ちに蓋をされたような感じというのがあって。(中略)仕切りを見つけて、そのものはどういうものなのかっていうのを、なんか、そこから掘り起こすようなものが始まっていました。その仕切りということで、蓋や壁や仕切り、見えない壁みたいな。そういったものを、手にとることになりました。」<ここは、さきほどおしゃってくださったような「何か重いものを感じて、蓋がされた感じ」っていうのに、わりとぴったりの仕切りだった>そうですね]。つまり、B 氏は、箱庭制作過程 1 で、自らの内面に、重いものを感じて、気持ちに蓋をされたような感じをキャッチした。その感じから壁を連想した。それらに基づいてミニチュアを探し始めた。箱庭制作過程 2 で、仕切りが見つかり、それが、どういものなのかっていうのを、なんか、そこから掘り起こすような内的作業を行った。その内的作業によって、仕切りは、何か重いものを感じて蓋がされた感じ(B 氏内省, 2-1, 制作・感覚), 壁(B 氏内省, 2-1, 制作・連想) にぴったりであることが照合・確認され、気持ちを重たくさせる重さを表現したい(B 氏内省, 2-2, 制作・意図) という意図、壁(B 氏内省, 2-2, 制作・意味) という意味が付与された、と捉えられる。

壁という言葉は、箱庭制作過程 1 では、今、自分が感じている内的プロセスから連想された言葉であった。それが、箱庭制作過程 2 では、仕切りというミニチュアの意味として付与された、と理解できる。

このように、今自分に生じている内的プロセスをキャッチし、それらを付与できるミニチュアを探すという行為(コアカテゴリー④の<ミニ



写真 8 B 氏第 2 回作品

チュア選択の内的プロセス>),ミニチュアと内的感覚の照合(コアカテゴリー④の[ぴったり感の照合]),ミニチュアへのイメージの付与という複合的な内的プロセスが報告された。そのような複合的プロセスによって,ぴったりなミニチュアが選択され,それ用いた構成を可能にした,と考えることができる。d.<ミニチュアに付与された内的プロセス>に示された内的プロセスに関連してこのような複合的な内的プロセスが生じている場合には,意識(内界)⇒装置という一方向の影響に止まらず,内界と装置とミニチュア選択が相互に交流しあい,丁寧な照合作業が伴う内的プロセスとなるため,箱庭作品が,意識が勝ちすぎたものとなる可能性は軽減する,と考えられる。◆具体例9にも示されたように,ミニチュアに付与された内的プロセスが箱庭に表現されることによって,箱庭作品は<こころのこと>となり,箱庭制作者の自己理解の促進に寄与することができる,と考えられる。

<ミニチュアに付与された内的プロセス>を様々な観点から考察してきた。a.現物のモノを〇〇として見たてる,見なすという内的プロセス,b.箱庭制作過程において一定の意識化を伴ったミニチュアが作品のテーマにおいて重要なミニチュアとなる場合,c.意識と無意識の相互作用,d.内的プロセスをミニチュアに付与する過程の前後に,別の内的プロセスが存在し,それらが連動している場合から考察してきた。これらはどれも<もの>から<こころのこと>になっていく過程を示している。<ミニチュアに付与された内的プロセス>によって,<もの>であるミニチュアは,自己の内界が表現された<こころのこと>になっていき,箱庭制作面接の促進機能として働く,と考えられる。

## 2)[不明瞭なミニチュアの意味や特性]の結果および考察

[不明瞭なミニチュアの意味や特性]は,「ミニチュアの意味や特性が,箱庭制作者自身にとって不明瞭である様」と定義された。この概念は,<ミニチュアに付与された内的プロセス>とは異質の側面をもつ。ある種の内的プロセスがミニチュアに付与されている点では,上記カテゴリーと本概念とでは,共通点をもつ。しかし,上記カテゴリーは,その内的プロセスが明瞭に意識化されていたのに対して,本概念では,ミニチュアの意味や特性に明瞭には意識化されない部分が残る。

### ◆具体例10:A氏第3回箱庭制作面接制作過程10

A氏は,第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程10で,砂箱右上隅に,貝殻で半身が隠れるようにタコを置いた(写真9)。内省報告に,タコについて,以下のように記された。タコは,私にとって,人目にさらしたくない私自身のある側面なのかもしれない。できれば本当は自分でも気がつかずにいる。でも,確かにあると認め



写真9 A氏第3回作品

ざるを得ない自分の中の欲求や傾向。そんなものが自分の中に確かにあると気がついていながら、しかも、時に半身さらすような状態でいながら、あえて見ないようにしている。それが何なのか、その全体像を私自身把握できていないから、言葉にならないのかもしれない

(A氏内省, 3-10, 自発・意味)。A氏にとって、タコは意味が把握しがたい、不明瞭な特性をもったミニチュアである。いくつかの推測はできるのだが、タコがもつ自分にとっての意味の全体像を自分自身が把握できていないために、言語化・意識化が難しいのかもしれないと考えていることが示された。A氏は、タコに、自分の人目にさらしたくない部分を付与したのだらうと考えつつも、同時にその全体像を把握しきれない状態に気づいている。

#### ◆具体例 11：B氏第4回箱庭制作面接制作過程 4～5

B氏は、第4回箱庭制作面接の箱庭制作過程4で赤い橋を選び、制作過程5で砂箱中央に赤い橋を置いた(写真10)。その箱庭制作過程について調査的説明過程で、筆者の「この中で、現実の風景とは違うな」というところがありますか」という質問に対して、B氏は、以下のように語った。「今も、今、ちょっと質問受けて、改めて、どうしてだろうとかって思ったのは、なんで赤い橋を選んだのか、っていうのが。実際には、普通の、ありがちな、コンクリートステンの支柱で作られた橋なんだけども、最初、橋もってきた時に、この赤の、この橋っていうのが、その、気になったというか。印象に残って。で、まあ、あの橋があるんだけど。なんで、この赤の橋。現実とは全然違うな。なんでだろうっていうのは、私もわからないでいますね。(中略)大きさ的にも、まあ、この大きさがしっくり来て。でも、この赤の色のこの、やつに実際自分自身が動いてたっていうのは確かなんです。＜そうなんですね。なかなかちょっとどういう動きかは言葉にしにくいけれど、確かになにか動いてた、という感じなんですね。＞はい (B氏調査, 4-4)。B氏は、現実の風景の中にある橋とは違う赤い橋を選んだことに対して、それがなぜなのか、わからないと語った。しかし、同時に、大きさがしっくりきたことや、制作中この赤い橋に自分の心が動いたことが確かだと認識している。B氏は、この橋を選んだ内的プロセスの一部は意識されており、一部は不明瞭で意識化・言語化し難いことに気づいている。

◆具体例 10と11は、ミニチュアに意味を付与する際、部分的な意識化が伴うという過程を示している、と考えられる。逆の方向から言えば、ミニチュアを手にとったり、置いたりする過程において、無意識的な要因が作用してその過程が進められ、その内の一部の内的プロセスが部分的に意識化されるという様と考えられる。[不明瞭なミニチュアの意味や特性]は、箱庭制作面



写真 10 B氏第4回作品

接における、このような意識と無意識との関係性を示している、と捉えられる。

本概念を直観的な意識の観点から考察することもできる。直観的な意識とは、「意味の認知は伴わないが、ぴったりだと感じることができる意識」である。◆具体例 11 では、橋の大きさがしっくりきた上に、ミニチュアに自分の心が動かされる、という主観的体験が語られていた。このように直観的な意識に従って赤い橋のミニチュアを選択し、構成したため、B氏は現実の風景を意識して構成した作品の中で、現実とは異なる赤い橋を選んだ理由を明瞭に意識化し、言語化することができなかつたのだ、と捉えることができるだろう。

〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉に関する考察の中で、〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉に示された、意識的な過程が強く働いて作られた箱庭作品は、意識が勝ちすぎたものとなる可能性をはらんでいることに触れた。そして、このカテゴリーで示された特性とは異なる、〈もの〉から〈こころのこと〉になっていく過程に関して、別に検討するとした。[不明瞭なミニチュアの意味や特性]は、ミニチュアに意味を付与する際、部分的な意識化が伴う過程、と考えられた。また、直観的な意識の観点からも考察した。〈ミニチュアに付与された内的プロセス〉の具体例は、意識と無意識の協働作業の意識的側面により比重のある主観的体験であった。それに比べ、本概念は、無意識的な内的プロセスにより比重のある主観的体験の一様相である、と考えられる。[不明瞭なミニチュアの意味や特性]は、無意識的な要因が作用してその過程が進められ、その内の一部の内的プロセスが部分的に意識化されるという内的プロセスである。[不明瞭なミニチュアの意味や特性]は、箱庭制作面接において箱庭制作者の意識を超えた作品が生まれる一つの要因となり、そのような表現や表現についての語りや内省を通して、箱庭制作者の自己理解が促進されると考えられる。

### V-3. 「内界」と「装置」との双方向の影響の結果および考察

「内界」と「装置」の双方向の影響について結果および考察を記す。「内界」と「装置」の双方向の影響には、概念[ミニチュアの多義性]、[ミニチュアによる自己のイメージや心理的状況や特性への気づき]の2つの概念があった。この概念には、内界から装置への影響と、装置から内界への影響の双方向の影響関係が見いだされた。以下に具体例を挙げ、この概念が、内界から装置への影響と、装置から内界への影響の双方向の影響関係と考えた根拠を示す。

[ミニチュアの多義性]の具体例に以下のような箱庭制作者の主観的体験の語りがあった。

#### ◆具体例 12：A氏第2回箱庭制作面接制作過程 11

A氏は、第2回箱庭制作面接の箱庭制作過程 11 で、砂箱左上に土偶や埴輪を置いた(A氏の箱庭作品の写真は資料 3 を参照)。その箱庭制作過程について調査的説明過程で、なんか、いのちなんだけど、いのちを持ってる人として持ってきたんですけどね<ふんふんうん>半分いのちじゃないものだっていっていか(中略)人間ではないいのちになってるというか<ふんーん>そういう感じがして(A氏調査, 2-11)と語った。いのちを持ってる人として持ってきたんですけどねは、2)の内界→装置の影響であり、内的プロセスをミニチュアに付与する様相であると考えられる。ところが、半分いのちじゃないものだっていっていか(中略)人間ではないいのちになってるというか<ふんーん>そういう感じがして



は、1)の装置→内界への影響であり、ミニチュアにより喚起される内的プロセスと捉えられる。このように、一つのミニチュアに対して、1)と2)の両方の方向性をもった内的プロセスがともに生起している。ミニチュア⇄内界という双方向の影響関係となっている。

このような具体例を根拠として、[ミニチュアの多義性]、[ミニチュアによる自己のイメージや心理的状况や特性への気づき]は、3)内界と装置との双方向の影響の概念だと考えた。

### 1)[ミニチュアの多義性]の結果および考察

[ミニチュアの多義性]は、「ミニチュアの象徴的意味やイメージが多義的であること」と定義された。ただし、この概念の中には、タイプの異なる具体例があり、(1)イメージの集約性、(2)箱庭制作者とミニチュアとの関係性における多義性の2タイプにわけることができると考えられた。

#### (1)イメージの集約性の結果および考察

(1)の具体例では、ミニチュアの意味やイメージが多義的であった。その具体例を挙げる。

#### ◆具体例 13：A氏第1回箱庭制作面接制作過程6

A氏第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程6では、ミニチュアを探る中で、白い天使を一旦手に取った。制作過程7で乳白色の陶器のイルカを見つけ、ゴムのイルカと比べた。制作過程8で、砂箱で陶器のイルカと白い天使を置き比べ、イルカを海に起き、白い天使を棚に戻した。天使に関して、A氏は内省報告に以下のように記した。船の代わりだったけれど、「天使」であることも重要だった。何か聖なるものがよかったのだと思う。白い鳥ではいけないし、白いウルトラマンでもいけない。神の使いという要素が私の心に響いていた。だから、俗世間的なものではいけなかったのだと思う（A氏内省、1-6、調査・感覚）。天使は、神の使いという聖なるものという特性と、船の代りとして、進んでいくという特性の両方を兼ね備えたミニチュアであることが示された。

次に、「白」という色についてのA氏の主観的体験についての内省を記す。帆船の玩具はあったが、帆が張っていない。白い色、真っ白な帆が風をはらんで進むところが作りたいのにそれが無い（A氏内省、1-6、制作・意図）、白い帆、真っ白なものが今の私にはぴったりくるのに。白い天使には羽があり、空を飛んでいるような形。飛んでいるようなその様子、進んでいく様子に心が引かれる（A氏内省、1-6、制作・感覚）。箱庭制作過程6でA氏は、白い帆を備えた船を探していた。白い帆が風をはらんで進むところが作りたかった。しかし、そのような船がなかったため、白という色と飛んで進んでいく様子を兼ね備えた天使を代りに選んだ。白い色について、内省報告に以下のように記した。「白」い色を求めている。白は始まりの色。準備していない、これからいろいろな色に変わっていく可能性のある色。いつもはいろいろなことを準備したり、前もって備えたりしている私が、今日は何も準備をしない、まささらな気持ちでこの製作の場に臨んでいる。そのことが私には新鮮に感じられた（A氏内省、1-6、調査・意味）。白い天使がもつ属性の中で、「白」という色もA氏にとって重要であったことが記されている。天使の白い色に関連して、箱庭制作面接の初回を迎えるまでの自分の心境や行動が記された。そして、いつもとは違う自分の心境や行動を新鮮に感じた。いつもとは違う心境や行動への気づきを通して、A氏は自己理解を深めていった、と捉えることができる。また、これからいろいろな色に変わっていく可能性

のある色という記述には、これから進んでいく箱庭制作面接における自分の変化への期待が伺える。

上記 A 氏の主観的体験の記述を総合すると、白い天使は、a.神の使いという聖なるものという特性と、b.進んでいくという特性 c.始まりの色であり、これからいろいろな色に変わっていく可能性のある色という特性が重ね合わされたミニチュアであることがわかる。その内、b と c とを考えあわせると、初回の箱庭制作面接において、まっさらな気持ちで、始まりを迎えた A 氏が、これからの箱庭制作面接において、進んでいく中で、これからいろいろな色に変わっていく可能性を感じたという内的プロセスが集約されていると解釈することができる。または、白い天使からそのような一義的でない内的プロセスが喚起された。A 氏が多義的に意味づけたと捉えることもできよう。[ミニチュアの多義性]が関与する構成やその語り・内省を通して、A 氏は初回を迎えた自己の内的プロセスへの理解を深めることができたと考えることができる。

先に記したように、白い天使は、実際には選ばれなかった。すると、白い天使の、a.神の使いという聖なるものという特性と、b.進んでいくという特性 c.始まりの色であり、これからいろいろな色に変わっていく可能性のある色という特性はどのように表現されたのだろうか？この点について、A 氏の直接的な言及はないため、以下は筆者の推測である。

A 氏第 1 回箱庭制作面接では、砂箱左奥に、制作過程 10 で「白とあわい青色の家」(「内は内省報告の箱庭制作過程の内容に関する A 氏の記述)が、制作過程 11 で淡い青と白のマリア像が置かれた。それらの箱庭制作過程について内省報告に、青白くかすんだような色が、森の奥深くのひそやかな家とそれを守る聖母のよう (A 氏内省, 1-複数過程に亘って、自発・感覚)、私の中には意外に宗教性が根付いているのかもしれない (A 氏内省, 1-11, 調査・意味) と記された。白い天使の、a.神の使いという聖なるものという特性は、宗教性の特質をもつ淡い青と白のマリア像によって表現されたと考えることができるかもしれない。

また、箱庭制作過程 8 で置かれた乳白色のイルカについての内省報告にイルカの位置は、いよいよ始まった箱庭制作に取り組む私の心と同調しているようだ。現実(陸)からの距離はまだそんなに離れていない。イルカの進む方向はまだしっかりと定まったわけではないようにも感じる (A 氏内省, 1-8, 制作・連想) と記された。白い天使の、b.進んでいくという特性 c.始まりの色であり、これからいろいろな色に変わっていく可能性のある色という特性は、乳白色のイルカによって、表現されたと考えることができるかもしれない。

白い天使の多義的なイメージが、淡い青と白のマリア像と乳白色のイルカによって表現されたかもしれないというのは、あくまでも筆者の推測にすぎない。しかし、この推測が的を射ているならば、実際には選ばれなかったあるミニチュアに関する内的プロセスが、他の複数のミニチュアによって分担され表現される、あるいは、箱庭制作者の多面的な内的プロセスが複数のミニチュアに分け与えて表現される場合があることが示唆されたと解釈できる。

#### ◆具体例 14 : A 氏第 2 回箱庭制作面接制作過程 11

A 氏は、第 2 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 11 で、砂箱左上に土偶や埴輪を置いた。調査的説明過程で、A 氏は、土偶や埴輪は、いのちなのだが、半分いのちではないものでもあり、人間ではないいのちになっている、語った(p.42 ◆具体例 12 参照)。また、内省報告に、

土偶もいのちの表現だと思っていたが、ふもとに置いたことで、いのちとしての人間の代わり  
のようでもあるし、山の番人のような気もしてきた (A氏内省, 2-11, 制作・感覚) と記された。第2回ふりかえり面接では, [土偶はだいぶ神様の方に近い], と語った。また, 山に関して第2回ふりかえり面接で, [信仰の対象になるようなお山のイメージがありましたね。そうすると, お山のふもとに土偶達はいかにもふさわしい。ちょうど山と平地とのちょうど境目辺りに居てくれると, ちょうどころあいがいい], と語った。

このように土偶や埴輪は, 多義的なイメージをもったミニチュアであることが語り, 記された。命が主なテーマとなった A 氏第2回箱庭制作面接は, A 氏の10回に亘る箱庭制作面接全体のテーマの一つである, 宗教性(命, 守り, 神聖な場所・生き物)に関する面接の展開において重要な回でもあった。A 氏第2回箱庭制作面接には, ◆具体例14以外にも, まだ形をもたない抽象的な命(石), 生命感を感じさせる命, 半分命ではない神様に近い命というように, 命の多様な様相が表現されており, この回の作品の主なテーマは命であると捉えられた(pp.36-37 ◆具体例8参照)。土偶や埴輪は, A 氏第2回箱庭制作面接のテーマを構成する重要なミニチュアの一つであった。土偶や埴輪を巡る制作中の内的プロセス, 説明過程での語り, 内省報告とその語りを通して, A 氏は自分の中にある多義的なイメージや重要なテーマについて, 理解を深めていった。このように A 氏は[ミニチュアの多義性]の表現, その表現について語りや内省を通して, 自己理解を深めていったと考えることができる。

このように(1)の具体例は, イメージの集約性に関する主観的体験が示されていると考えられる(河合隼雄, 1969, pp.17-18)。A 氏第1回箱庭制作面接の天使は, a.神の使いという聖なるものという特性と, b.進んでいくという特性 c.始まりの色であり, これからいろいろな色に変わっていく可能性のある色という特性が集約されていた。A 氏第2回箱庭制作面接の土偶や埴輪には, 土偶や埴輪は, いのちをもっている人, 半分いのちではないもの, 人間ではないいのちになっている存在というように, いのちを巡る多義的なイメージが集約されていた。河合隼雄(1967)は, イメージの特性の一つとして, 集約性を挙げ, 一つのイメージが, それを取りまく様々な感情を伴って, 多くの事柄を集約している例を挙げている(pp.117-119)。(1)の具体例は, 河合が述べるイメージの集約性を箱庭制作者が体験して語ったものである, と考えられる。あるいは, 一義的ではない内的プロセスがミニチュアから喚起されたり, 一義的ではない内的プロセスを箱庭制作者がミニチュアに付与したと解釈することもできる。

## (2)箱庭制作者とミニチュアとの関係性における多義性の結果および考察

(2)の具体例は, 箱庭制作者とミニチュアの関係性についての多義性が示された。以下に具体例を挙げる。

### ◆具体例15: A 氏第1回箱庭制作面接制作過程1

A 氏は, 第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程1で, 棚に置かれた鳥の巣を手にとり, 12秒ほどじっと見るが, それを選ばず, 棚に戻した。その卵が入った鳥の巣について, 内省報告に, 自分は巣の中で守られているような気もするし, 巣を守っている存在のようにも感じる(A 氏内省, 1-1, 制作・感覚) と記した。自分自身と鳥の巣というミニチュアとは, 守り・守られるという両方の意味がともにあてはまるような関係であると, A 氏は感じていることが記された。この具体例の場合, 守られるという感覚は, 鳥の巣の中にある卵のことを指し

ている、と捉えられた。この具体例で、多義的であるのは、箱庭制作者とミニチュアの関係性であった。このように(2)では、多義性がミニチュアと制作者自身との関係性において語られている点において、(1)との差異があった。イメージに集約された多様な事柄の内、ミニチュアと箱庭制作者自身の関係に焦点化された、箱庭制作者の主観的体験の語りであると捉えられる。

この鳥の巣は、A氏第4回箱庭制作面接でも使用され、A氏が自分の女性性・母性について大きな気づきを与える重要なミニチュアとなった(pp.29-30 ◆具体例4と5参照)。第1回箱庭制作面接では、海の構成が主要なテーマの一つとなり、そのような構成の中で、ぴったりこないA氏は感じたため、鳥の巣は選ばれなかったが(pp.125-126 ◆具体例90参照)、◆具体例15は、A氏第4回箱庭制作面接を経て、後からふりかえれば、A氏が自分の女性性・母性を重要なテーマとしていった萌芽であったと解釈できる。この萌芽が継続的な箱庭制作面接を通して、発展し、A氏の自己理解・自己成長の促進に寄与したと解釈することができよう。このように箱庭制作者とミニチュアとの関係性における[ミニチュアが多義性]は箱庭制作面接の促進機能として働く。

2)[ミニチュアによる自己のイメージや心理的状況や特性への気づき]の結果および考察 [ミニチュアによる自己のイメージや心理的状況や特性への気づき]について、結果および考察を記述していく。[ミニチュアによる自己のイメージや心理的状況や特性への気づき]は、「あるミニチュアから、自己イメージ、自己の心理的状況や特性に気づく内的プロセス」と定義された。[ミニチュアによる自己のイメージや心理的状況や特性への気づき]は、両氏の語りに頻出するとともに、A氏の「質的研究による系列的理解」(XI章)で示されるように、自己像の変遷が箱庭制作者の内的プロセスや箱庭制作面接の展開に重要な意味をもったため、独立した概念として生成することとした。

#### ◆具体例16：A氏第3回箱庭制作面接制作過程13

A氏は第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程13で、砂箱奥中央にある亀の頭を陸に向かう向きから沖に向かう向きに置き換えた。A氏は、その箱庭制作過程について、調査的説明過程で以下のように語った。1回目のイルカが亀になったなっていう感じ（中略）そっちの方が、イルカ、ま、イルカは、ま、私だったんですけどね、前も。これも亀は私だろうなと思いますけど、このほうが等身大の感じがして、はあ、ぴったりきます（A氏調査, 3-13）。内省報告に泳いでいくもの、進んでいくのはわたしだと感じている。でもそれがイルカでなくなって、なぜ亀になったのか、よく分からない（A氏内省, 3-13, 調査・感覚）、イルカから亀に、何が変化したのか、と思う。箱庭制作も3回目になり、あまり自分を飾らなくてもいいと思えるようになったのか。陶器のイルカはちょっと作り物っぽくて、ちょっといたいけな感じがして、かわいらしく装っているような気がして、置けなかった。置きたくなかった？今はこの亀が頼もしい（A氏内省, 3-13, 調査・意味）と記した。等身大、泳いでいくもの、進んでいくものというイメージが、現在の自己のイメージとして明確に語られ、記されている。また、亀が頼もしいと明確に語られている。亀というミニチュアを巡る、箱庭制作中の内的プロセスやその語り、内省を通して、A氏は現在の自己イメージへの理解を深めることができた、と捉えることができる。

しかし、イルカから亀に変化した理由はわからない、とも記されている。自分を飾らなくてもいいと思えるようになったからか、と自己像が亀に変わったことの要因に関して、曖昧さが残る記述となっている。この具体例において、自己像は、等身大の感じというぴったり感に基づいて選択されたため、自己像の変化の意味はA氏にとって明確にならなかったのだと理解できる。変化の理由は明確でないものの、自己を表すミニチュアの変化は、自己イメージまたは、自己の装い方の変化が関与している、と捉えることができよう。

#### ◆具体例 17：B氏第8回箱庭制作面接制作過程 1, 18～20

B氏は第8回箱庭制作面接の箱庭制作過程1で砂箱左側に船出しようとしている船を置いた。制作過程17で頭をかく人形を選び、制作過程18で砂箱中央左寄りにそれを置いた。制作過程19で天使に導かれる子どもを選び、制作過程20でそれを置いた(B氏の箱庭作品の写真は資料4を参照)。それらのミニチュアについて、B氏は、この船と(B氏自発,8-1)この人形と(B氏自発,8-18)このまあ、ここでは子どもなんですけど、人、人は、(B氏自発,8-19)今のその、自分の、その、自画像っていうか、そのようなところがあって(B氏自発,8-複数過程に亘って)(中略)船で航海していくっていうこと、なんですけども(B氏自発,8-1)と語った。また、先に何があるのかなとかっていうところを、のぞき見るっていうところなんだけど、やああ、困ったことになったなーという自分自身もあるし、(B氏自発,8-19)(中略)心配せずに、(中略)導かれるままに行きなさいっていうような、あの、そういったものも感じるしっていう中で(B氏自発,8-19)と語った。第8回ふりかえり面接では、制作過程1について、[船出をしていくイメージというものが、船を見た中で湧きました]と語られた。制作過程17～制作過程19について以下のように語られた。[人を導く天使の人形を選ぶっていうことで、迷いというところからまた広がっていったことによるんですけども、意図として、不思議な導きと信頼っていうことで、(中略)連想としては、いろいろ迷っててもしょうがないということで、委ねるっていう]。

船、ルーペを覗く頭をかく人形、天使に導かれる子どもが自己像の表現であった。このように、一つの箱庭作品の中に、複数の自己像が置かれる場合がある。河合隼雄(1969)は、箱庭表現における自己像の問題は複雑であるとする。自己像には、意識的に明確に把握されたもの、理想像や未来像、無意識的に生じてくる面などを含む場合があり、また、それらが関連しているために複雑になるとする(p.42)。この具体例では、自発的説明過程と第8回ふりかえり面接の語りを総合すると、船を見る中で、自分が船出をしていくイメージが喚起された、と理解できる。船はミニチュアによって喚起された自己イメージであることがわかる。ルーペを覗く頭をかく人形に関しては、イメージが付与されたのか、喚起されたのかは明確ではないが、少なくともそのような自己イメージがあることは明確に認識されている。第8回ふりかえり面接の語りによると、人を導く天使の人形は、迷いを表す頭をかく人形から、イメージが広がっていき、選ばれたこと、いろいろ迷っててもしょうがないということで、委ねるという内的プロセスが喚起されたことがわかる。B氏はこの複数の自己像の表現と、それらを自己像として認識することを通して、自己を多面的に理解することができた、と捉えることができる。

#### ◆具体例 18：A氏第7回箱庭制作面接調査的説明過程での置きかえ

第7回箱庭制作面接の調査的説明過程で、A氏は、作品に愛着が湧かないと語った。A氏の残念な思いが筆者に伝わってきたため、筆者は、その思いを共感的に理解すると共に、愛着が湧く作品に修正できないかと思ひ、A氏が残したいミニチュアを残し、他は片付ける再構成の提案をした。A氏はそれに合意した。A氏は調査的説明過程での置きかえの最後に、砂箱右側の岬に置かれたカメの頭の向きを変えたり、内陸部や海に



写真 11 A氏第7回再構成後の作品

置いてみたり、カメを取り除いたりした(写真 11)。そして、以下のように語った。うん。やっぱり今日は休憩。<うん、休憩しよか>うんでも、あの亀、割といいです。<あ、ほんと>うん。あれはあれでいいんですけど、あはは(笑)、休憩中っていう感じ。<ああ、亀。亀が>そうそう。<ああ、ほんと>多分私もそうなんでしょうね。そういう感じ(A氏、7-調査、調査的説明過程での置きかえ)。カメの位置や向き、亀を置くか置かないかを照合することを通して、亀は休憩中であり、多分今の自分もそうなんだろうというA氏の心理的状況が喚起された。この具体例では、A氏は亀のミニチュアを通して、今の自分の心理的状況を理解できた、と考えられる。

#### ◆具体例 19：A氏第3回箱庭制作面接制作過程 11

A氏は第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程 11で、海に、サメ(砂箱右上)やシャチ(砂箱中央右寄り)を置いた。この箱庭制作過程について、自発的説明過程では以下のように語られた。この辺の生き物たちは全部こう海の中でこうゆらゆら泳いでいるっていうか、何気ない風に、置いたつもりなんですけど(A氏自発、3-11)。そして、調査的説明過程では、食物連鎖でいうと上のほうになると思うんですけど、割と、<そうだね、そうだね>そんなの意識して、<はあん>海にもいるし、<ふうん>私の中にもあるしと思って、いますね(A氏調査、3-11)と語った。調査的説明過程の語りでは、食物連鎖の割と上の方になるという特性は、サメやシャチの特性でもあり、同時に自分の特性でもあるという認識が語られた。この具体例では、A氏はこの構成を行い、調査的説明過程で構成について語ることを通して、自己理解を深めることができたと考えられる。

◆具体例 18 と 19 では、ミニチュアと自己は同一視されていない。◆具体例 18 は、休憩中のカメという感じから、自分の心理的状況が連想されたと理解できる語りである。◆具体例 19 の自発的説明過程の語りでは、サメやシャチは、まさに海の生き物として認識されていた。この具体例では、サメやシャチは自己と同一化して捉えられているのではなく、その特

性はサメにも自分にもあるとして、別箇の存在でありつつ、共通性をもつものとして、箱庭制作者に捉えられており、ミニチュアは自己と同一視されない。この点は、自己イメージの具体例として示した A 氏第 3 回箱庭制作面接の亀の◆具体例 16 や B 氏第 8 回箱庭制作面接の◆具体例 17 との差異と言えよう。

A 氏第 3 回箱庭制作面接の◆具体例 16 では、変化の理由は明確でないものの、自己を表すミニチュアの変化は、自己イメージまたは、自己の装い方の変化が関与している、と捉えることができた。また、本項の◆具体例 16～19 では、箱庭制作者がミニチュアを通して、自己イメージ、自己の心理的状況や特性への自己理解を深めることができた、と考えることができた。このように[ミニチュアによる自己のイメージや心理的状況や特性への気づき]は、箱庭制作面接の促進機能として働くと考えられる。

## VI章. M-GTAのコアカテゴリー②【内界と構成の交流】の結果および考察

本章では、M-GTAのコアカテゴリー②【内界と構成の交流】の結果および考察を記す。

②【内界と構成の交流】は、『単一回の制作過程・作品』内の『制作過程』における「内界」と「構成」との交流に関するカテゴリーである(図5)。「内界」と「構成」は、交流し、双方向で影響を与えあっている。それには、1)「構成」から「内界」への影響、2)「内界」から「構成」への影響、3)「内界」と「構成」との双方向の影響があった。

1)には、概念[構成により喚起される内的プロセス]があった。2)には、概念[構成に付与された内的プロセス]、概念[内的プロセスの構成への影響]があった。

3)には、3カテゴリーと10概念があった。カテゴリー《創造における受動性と能動性》内に、カテゴリー<イメージの自律性>があり、その中に概念[作品の今後のイメージが湧いてくる]があった。<イメージの自律性>とは別に、《創造における受動性と能動性》内には2概念[イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]、[非意図的な構成を基に、意図的に構成する内的プロセス]があった。

また、カテゴリー<創造をめぐる肯定的感情と否定的感情>内に、2概念[創造の喜び]、[作品に対して、否定的な感情や感覚をもつプロセス]があった。<創造をめぐる肯定的感情と否定的感情>は2概念[創造の喜び]と[作品に対して、否定的な感情や感覚をもつプロセス]を包括するカテゴリーとして、理論的に生成した。

それらのカテゴリーとは別に、「内界」と「構成」との双方向の影響として、5概念[構成による表現の多義性]、[他の領域の構成への影響]、[ミニチュアが置かれない領域についての意図や感覚]、[構成による自己のイメージや心理的状况や特性の表現]、[不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]、があった。

### ②【内界と構成の交流】

内の具体例の一部は、④【内界と装置と構成の交流】を重複している場合がある。それは、箱庭制作面接における構成では装置を用いるためである。構成には、a. 内界からイメージや感覚などが湧き上がってきて、それに基づいて

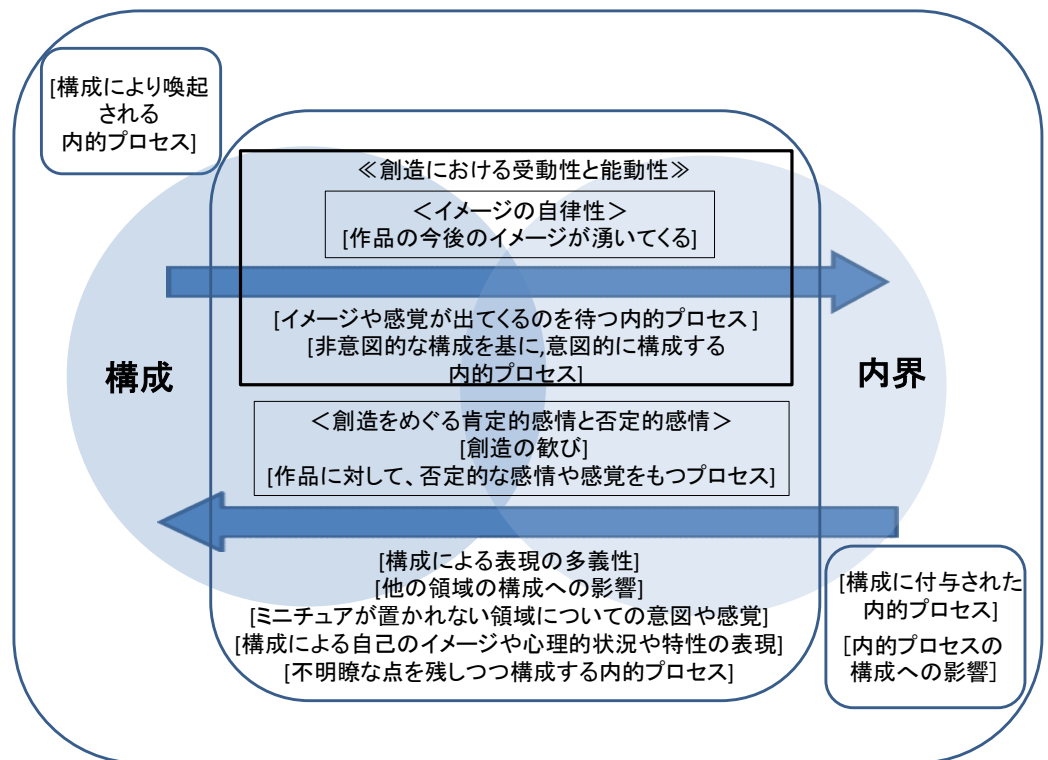


図5 ②【内界と構成の交流】



形作りたい、形作ろうとする段階と、b.ミニチュアや砂という装置を用いて実際に形作っていく段階がある。aの場合、基本的には内界と構成のみが交流している具体例が多い。しかし、[構成により喚起される内的プロセス]の場合、構成に含まれる装置からの影響がまったくないとは言えない。また、bの場合、装置を用いて構成を行っていくため、より装置との関連性は深まる。そこで、②【内界と構成の交流】内のカテゴリー、概念、具体例では、構成の要因に強調点を置き、その点を中心にして理論生成された。つまり、装置の要素が前面にくるのではなく、構成の要素が前面にくる主観的体験のデータを具体例として取り上げ、それを基に理論生成した。しかし、先にも述べたように、一部の具体例やその検討では、装置に関する記述が含まれる場合がある。

以下に、カテゴリー、概念、具体例を挙げ、②【内界と構成の交流】で見いだされた促進機能について結果および考察を記す。

## VI-1. 「構成」から「内界」への影響の結果および考察

### 1) [構成により喚起される内的プロセス]の結果および考察

1) 「構成」から「内界」への影響の結果および考察を記す。1)には、概念[構成により喚起される内的プロセス]が見いだされた。[構成により喚起される内的プロセス]は、「構成によって喚起された感覚、イメージ、感情、考えなどの内的プロセス」と定義された。本概念には、非常に多くの具体例があった。データの一部が他の概念の具体例と重複している例も多々あった。本節では、できる限り、他の概念と重複していない内容と具体例を取り上げる。

本概念の具体例を以下の観点・テーマごとに示す。(1)ある構成によって、箱庭制作者の気持ちやイメージなどの内的プロセスが大きく変化する主観的体験、(2)構成された位置や向きを巡る主観的体験、(3)区分、区画に分けることを巡る主観的体験についての具体例を示し、考察していく。

#### (1)ある構成によって、箱庭制作者の気持ちやイメージなどの内的プロセスが大きく変化する主観的体験の結果および考察

(1)ある構成によって、箱庭制作者の気持ちやイメージなどの内的プロセスが大きく変化する主観的体験について、具体例を以下に記す。

#### ◆具体例 20 : A氏第2回箱庭制作面接制作過程 12

A氏は、第2回箱庭制作面接で制作当初、土地を二つに分けたことによって、苦しさや寂しさを感じた。また、川が思った以上に広いことへの戸惑いや、荒涼とした命のない大地からおそろしさを感じていた。その後、A氏は、箱庭制作過程 12 で、棚に青い鳥を見つけて、白い石の上にのせた。その箱庭制作過程に関して、A氏は自発的説明過程で、以下のように語った。実はずっと作ってる最中なんか、こう、どうしていいんだろうとかねくうん>すごい苦しいんですね。<ふうん>で、あの青い鳥を見つけて、置いた時にああよかったと思いましたね。<ふうん>苦しさは>なくなりましたねくなくなった>はいほっとしました。あれも、何か他のものを探しに行ってたまたま眼に入って。青い鳥がああ、これだあ（不明）<ふうんうんうん>もう、で、あの青い鳥を置いた段階でほとんどもうこれでいいかな、完成にしてもいいかな思ったんですけれども（A氏自発、2-12）。制作中、ずっと苦しさを感じていたが、青い鳥を見つけ、置いたことで、苦しさはなくなり、ほっとしたこと、この段階で

完成にしてもいいかなと思ったという主観的体験が語られた。

◆具体例 21：A氏第4回箱庭制作面接制作過程 10, 14, 16

A氏は、第4回箱庭制作面接の制作開始後26分58秒～29分36秒にかけて、砂箱の枠に両手をつき、砂箱をじっと見つめていた（箱庭制作過程10）。その箱庭制作過程に関して内省報告に、この箱庭が私の作りたかったものなのか。いっそこれを壊して初めからやり直したいような気持ちもわいている。亀がまだ水路のごく始めにいることに違和感を抱く。まだそんなところにいるのか、もっと進んでいかないのはなぜかと、責めるようないらだちを感じていた（A氏内省, 4-10, 制作・感覚）という主観的体験を記した。

その後、箱庭制作過程14では、A氏は、亀がいるあたりの川幅を広げて、亀をもっと進めた。

その箱庭制作過程に関して、A氏は、自発的説明過程でだけど（間6秒）亀の位置を変えたら楽になりましたね（A氏自発, 4-14）と語った。内省報告にはなんとなくふっと、そうだ亀の位置を変えたらいいんだと思いつく。そして少し進めると、ちょっとほっとする。ああ、ここまで進んでいるんだという（A氏内省, 4-14, 制作・感覚）と記した。ふと、亀の位置を変えることを思いつき、亀を進めると、ここまで進んでいるんだと感じ、楽になったことが示された。

箱庭制作過程16で、A氏は、亀をもっと進めて、渦巻きの全行程の6割ほどの位置（右側中央部）に置いた。その箱庭制作過程16に関して、A氏は、自発的説明過程で、以下のように語った。あそこからここに移すのはだいぶ冒険だったような気がしてます。（中略）動かしてみたらくふん>結局ここまで来てしまったし（中略）とにかく亀が動かさせたので、それが、ちょっとこう、ホッとしたかなという感じですね（A氏自発, 4-16）。また調査的説明過程では、以下のように語った。だから、本当に不思議なんですけど、こう、箱庭のアイテムが増えていくと、ここまでやっとな進められたというか。<はああ、ふん>渦だけの形で、その、ここだけできた状態でくふん、ふん>動物入れたと思うんですけど、そこでいきなり亀をここには置けなかったんですね。<ふん、ふん>（間4秒）（A氏調査, 4-8）今はこの辺、無理なくこの辺、ひよっとしたらもうちょっとこう向こうの方まで行けるのかもっていうくらい（A氏調査, 4-16）。さらに内省報告に、亀を進めることに抵抗がなくなっている。亀は自分で進んでいく（A氏内省, 4-16, 制作・感覚）と記した。A氏にとって、亀を右側中央部まで進めるのは、冒険だったが、この位置に移動したことで、A氏はホッとした。その移動は、箱庭にミニチュアが増えたことによって、可能となった。さらに、亀は自ら進んでいき、もうちょっと向こうまでいけるかもしれないという感覚をもつことができた。制作者が亀を進めるという感覚から、亀が自分で進むという感覚に変わったことが示された。

◆具体例 20 と 21 には、ある構成がきっかけになり、箱庭制作者の内的プロセスが大きく変化する主観的体験の語りや記述があった。◆具体例 20 と 21 に共通しているのは、箱庭制作者が箱庭制作過程のある時点まで、苦しさやいらだちというような否定的な感情を抱いていることである。箱庭制作過程には、意識が関与している。しかし、だからといって、制作者が自分の思い通りに作品を構成していけるとは限らない。A氏は、◆具体例 20 では、どうしていいんだろうと考え、◆具体例 21 では、いっそこれを壊して初めからやり直したいような気持ちが湧いていた。しかし、A氏は、否定的な気持ちから解放される安易な方法をとっていない。A氏は、自分が作ったものでありながら、自分を苦しめたり、いらだたせたりする

構成に対しても真摯に向き合っていると考えることができる。それは A 氏が箱庭制作や自己の心に強く、真摯にコミットしていた、と解釈することができるだろう。河合隼雄(河合・中村 1984)は箱庭制作者のコミットメントについて述べている。河合は不登校であると同時に相当奇妙な行動をとる小学生男子が「骸骨城の戦い」というテーマの箱庭作品を置いた後、すごく改善された事例を示す。そして、そのような表現が可能となった一因として、箱庭制作者が「髑髏の手が動くのを感じたというくらいのコミットメントがあってこそ可能」となった、と考えている(pp.49-51)。A 氏は、箱庭制作や自己の心にコミットすることによって、安易な解放に頼らず、その状況に直面できた、と考えることができる。

このようなコミットメントをもって箱庭制作や自己の葛藤に向き合う中で、ある時、展開が生まれてくる。そして、展開を生んだきっかけは箱庭制作者の意図的行為ではない。A 氏第 2 回箱庭制作面接では、たまたま眼に入った青い鳥を白い石の上ののせることによって、A 氏第 4 回箱庭制作面接では、なんとなくふっと、そうだ亀の位置を変えたらいいんだと思いつくことによって、展開が生まれた。このように、ミニチュアの偶然の発見やふとした思いつきが、それまでの否定的な感情を大きく変えるきっかけとなっている。A 氏は、そのようなきっかけをとらえて、今度は、意図的に、青い鳥を白い石の上ののせたり、亀を進めるといった行為を行った。それらの行為の結果、構成が変化したことによって、箱庭制作者の内的プロセスにもまた、大きな変化が生まれている。

#### ◆具体例 22：A 氏第 3 回箱庭制作面接制作過程 13

A 氏は、第 3 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 13 で、回遊しているシャチ、イルカ、亀を見つめ、亀の頭の方を陸側から海の沖合の方に変えた。その箱庭制作過程に関して、自発的説明過程で、いろいろ試そうと思って、ふっと亀の置き方を変えたらばくうん>あー、急になんか違う感じになって、がらりと。あのああ、沖へ出て行くのも気分がいいなと思ってくうんうん>沖へ出て行く風に決めましたね (A 氏自発, 3-13) と語った。また、内省報告には、それまでの、亀・イルカ・シャチが頭をつき合わせながら回遊する形は、なんだかぬるま湯につかっているような、ぬくぬくして幸せだけれど、でもあえて言えば居心地が悪い、落ち着かない形だった。いつまでも回遊して、3 頭は親しそうだけれども先に進めない、発展しない、自分たちの領域から広い場所へ出て行けないような感じ。凡庸さに埋没させようとするような、お互いがお互いの動きを規制しているような、輪からはずれて独自の道に進み出すのを牽制しているかのような不自由さを感じた。その輪からはずれて、自分の道を進みたいと思っている、独自性を発揮したいと思っている、それが今の私なのだろうか (A 氏内省, 3-13, 制作・意味) と記された。

A 氏は、第 3 回箱庭制作面接で、いろいろ試そうと思ひ、ふっと亀の向きを沖合の方に変えた。すると、急に、がらりと違う感じになったこと、沖に向かうのも気分がいいなと思ったことを報告している。ここでは、いろいろ試そうとする意図性と ふっとという言葉で表される非意図性の両方が構成の変化に影響していた、と考えられる。それまでの構成は、ぬくぬくして幸せな反面 居心地が悪い、また、親しそうな反面 お互いがお互いの動きを規制しているような、輪というように、A 氏にとってアンビバレントな感覚や意味を感じられるものであった。構成の変化によって、輪からはずれて、自分の道を進みたいという内的プロセスが生じた。この具体例では、構成の変化によって、箱庭制作者の生き様の変化について気づき

がもたらされた,と考えることができる。沖へ出て行くのも気分がいいなと思って(中略)  
沖へ出て行く風に決めましたねという語りは,主語が途中で変化している,と読み取ること  
もできる。気分がいいなと思ったのは亀であり,沖に出ていく風に決めたのは箱庭制作者で  
あると考えることもできよう。すると,この構成は,箱庭制作面接中の構成の決定と箱庭制  
作者の生き方の選択とが密接に関連した主観的体験だと理解できる。

このように,構成によって箱庭制作者の内的プロセスが大きく変化する展開は,「意識と  
無意識の相互関係」(河合隼雄,1967,p.114),「意識と無意識の相互作用」(河合隼雄,1967,  
p.146),「意識と無意識,内界と外界の交錯するところに生じてきたもの」(河合隼雄,1969,  
p.17),意識と無意識の協働の顕れと考えることができよう。河合(1967)や河合(1969)は,イ  
メージや夢についての言及である。しかし,これらの言及は,構成によって箱庭制作者の内的  
プロセスが大きく変化する展開についても当てはまると考えられる。例えば,A氏が第2  
回箱庭制作面接で,偶然発見したミニチュアにああ,これだあと感じたことや,第3回箱庭  
制作面接での,亀の向きの非意図的変更という構成の変化によってその領域への感覚が大  
きく変わった内的プロセスは,「意識と無意識,内界と外界の交錯するところに生じてきた  
もの」と考えてよいだろう。これらの内的プロセスは意識的・意図的行為によって生じたも  
のではない。偶然や非意図的要素によって喚起された内的プロセスであり,その内的プロセ  
スが生じるまでは箱庭制作者に気づかれていなかった。それが一つのきっかけによって意  
識化されるとともに,外界である砂箱内に構成されることになった,と理解できる。

構成によって箱庭制作者の内的プロセスが大きく変化する場合があることが示された。  
箱庭制作面接の作品は,完成されたものだけを見ると,それは物理的には,動きのない静止  
した物体である。しかし,箱庭制作過程では,構成は動きをもって変化していく。そして,  
それに伴って,箱庭制作者の主観的体験にもまた大きな変化が生まれている。箱庭制作面接  
は,このように構成および内的プロセスのダイナミックな変化を伴った心理面接である。河  
合・中村(1984)のⅡ章の「風景が一変する一日常と非日常」という節で,場面緘黙児の母親  
が縦横まっすぐにすべてのものを置いた中に,もう一人の母親がちょっと斜めのものを置  
いた箱庭制作過程について述べられている。その箱庭制作過程で起こった出来事について,  
中村は「決まりきったパターンのなかに新しい着眼に基づく要素が一つ入ってくると,全体  
の風景が一挙に変わるということですね」と応えている(河合・中村 1984,pp.61-62)。本  
項の◆**具体例 20~22**では,箱庭制作者の気持ちやイメージなどの内的プロセスが大きく変  
化する主観的体験が示されたと考えることができる。それは,それまでの否定的な気持ちが  
大きく変わる主観的体験であったり,箱庭制作者自身の生き方についての選択と意思決定  
がなされるような内的プロセスの変化であった。

ここまで,(1)ある構成によって,箱庭制作者の気持ちやイメージなどの内的プロセスが  
大きく変化する主観的体験について,a.箱庭制作や自己の心へのコミットメント,b.意図性  
と非意図性,c.意識と無意識の相互作用の観点から考察してきた。箱庭制作者の箱庭制作や  
自己の心への真摯なコミットメントの下,構成の変化に関与する非意図的なきっかけが生  
まれ,続けて意図的な構成を行う場合があった。このような非意図性と意図性との協働は,  
箱庭制作面接における構成および内的プロセスのダイナミックな変化を生む要因の一部で  
あった。このように[構成により喚起される内的プロセス]は,箱庭制作面接の促進機能とし  
て働くと考えられる。

## (2) 構成された位置や向きを巡る主観的体験の結果および考察

次に、(2)構成された位置や向きを巡る主観的体験についての具体例を示す。

### ◆具体例 23：A氏第1回箱庭制作面接制作過程 8

A氏は、第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程8で、砂箱中央の浜辺近くの海に、砂箱右上隅の方を向けてイルカを置いた。その箱庭制作過程について自発的説明過程で、イルカはどこに置こうかな、もう少し沖の方にしようと思ったんだけどあまり陸から離れているのが、いやだったんでくはーそういう感じだったんだ>うんうんうん。まあこのへんかなあ、っていう。まあこのへんかって思いますね。あとアタマはどっち、アタマは一体どっち向いてるんだろうと思いつながら、このイルカのね。そんなにまだこうはっきりしてなくて、まこのへんがいいかなと（A氏自発、1-8）と語った。内省報告には、イルカの位置は、いよいよ始まった箱庭制作に取り組む私の心と同調しているようだ。現実（陸）からの距離はまだそんなに離れていない。イルカの進む方向はまだしっかりと定まったわけではないようにも感じる（A氏内省、1-8、制作・連想）と記された。イルカの置く位置に迷ったが、陸からあまり離れているのが嫌だったので、その感覚に基づいて位置が決められた、と捉えられる。さらに、内省報告によると、その位置は陸（現実）からそんなに離れていないという面で自分の心と同調しているようにも考えている。また、イルカの向き、進む方向はまだはっきり定まっていないことも示された。

この具体例では、箱庭制作者の内的プロセスと構成が密接に関連している。この具体例では、初回面接における箱庭制作者の内的プロセスと自己像の位置や向きが同調している、と考えられる。初回面接であるため、心の旅は始まったばかりであり、心は現実からそんなに離れていない。そして、その旅の進む方向もまだ定まっていない、という心理的状況であった。その心理的状況は、自己像の位置や向きにびったりな形で表現された、と理解できる。A氏は、イルカの位置や向きを巡る箱庭制作中の内的プロセスやその語り、内省を通して、自己の心理的状況の理解を深めることができた、と考えられる。

### ◆具体例 24：A氏第2回箱庭制作面接制作過程 11

A氏は、第2回箱庭制作面接の箱庭制作過程11で、砂箱左上に土偶や埴輪を置いた。土偶や埴輪は、人間ではないいのちになっているため、動物や人の世界には入ってはいけないという感じがあり、山のふもとに配置された、と捉えることができる語りが自発的説明過程と調査的説明過程であった（p.42 ◆具体例 12, pp.44-45 ◆具体例 14 参照）。内省報告に、土偶もいのちの表現だと思っていたが、ふもとに置いたことで、いのちとしての人間の代わりのようでもあるし、山の番人のような気もしてきた（A氏内省、2-11、制作・感覚）と記された。また、第2回ふりかえり面接で、[信仰の対象になるようなお山のイメージがありましたね。そうすると、お山のふもとに土偶達はいかにもふさわしい。ちょうど山と平地とのちょうど境目辺りに居てくれると、ちょうどころあいがいい]と語った。

この具体例では、あるミニチュアの位置が、作品全体あるいは作品内の他の構成との関連において、決定された。この具体例では、土偶や埴輪がもつイメージ・感覚・意味が他の構成と関連し、配置される場所に大きな影響を与えていることが示された。人間ではないいのちになっている土偶や埴輪は、動物や人の世界(平地)には入ってはいけない存在、信仰の対

象である山と平地の境目で山の番人をする存在として構成された。A氏は、土偶や埴輪の構成を巡る制作中の内的プロセスや、それについての語りや記述を通して、土偶や埴輪の構成が自分にとってどのような意味をもつのか理解を深めていった、と考えられる。そして、その構成についての理解の深化は、そのような構成を行った自分への理解の深化でもあった、と推測できる。

上に挙げた、箱庭作者の内的プロセスと構成との関連と、ミニチュアの位置の他の構成との関連とが複合的に表れる場合もあった。

#### ◆具体例 25：A氏第3回箱庭制作面接制作過程 14～15

A氏は、第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程14で、亀2匹とイルカを棚から持ってきて、既に置かれていた大きな亀の周囲で以下のような行為を行った。

- |         |  |
|---------|--|
| 28分37秒～ | 小さな亀を砂箱中央奥にある大きな亀の目の前に（砂箱の奥に）移動する。                   |
| 28分40秒～ | 小さな亀を、イルカと置き換え、しばらく見つめる。                             |
| 28分54秒～ | イルカを大きな亀の後（砂箱の手前に）移動し、見つめる。                          |
| 29分8秒～  | イルカを手にとり、小さな亀を大きな亀の目の前に（砂箱の奥に）置く。それも手にとる。            |
| 29分24秒～ | 陸の真ん中辺りで、2匹の亀を置き比べる。陸の亀を見たり、沖の亀を見たりする。小さな頭をもたげた亀を置く。 |

この箱庭制作過程について、A氏は自発的説明過程で以下のように語った。一頭だとなんか心もとないような気もして、いろいろ前後に置いてみたりしてたんですけど、くそうだったね、イルカも置き直したし。>はいはい、こ、この亀も、もうひとつの亀 <もうひとつの亀>リアルな亀を前後に置いてみたりしたんですけど、ですけど、うーん、ちょっとその、そういう感じじゃないなと思ってくふーん、うん>ま、一頭で行くのねと、一頭だけで行かせようと思いましたね。<なるほど>だけど、ま、まったく一頭っていうんじゃなくって、このこは見、見ているというかなるほど。波打ち際から>そうですね。ここがいいやと思って、そ、すぐ、すぐ前とか後ろとかじゃなくって（A氏自発、3-14）。この箱庭制作過程について、内省報告に以下のように記された。砂浜の亀は、沖に向かう亀を見送っている。いつかその亀が帰ってくるのを待っている？心の中は心配なような、安心なような、頼もしいような、淋しいような、複雑な気持ち。でも、心の奥で、何とかなるさと思っている、…沖に向かう亀を信頼しているようだ（A氏内省、3-15、制作・連想）、近すぎず、でもちゃんと見ているという距離がよかった（A氏内省、3-15、自発・感覚）。

A氏は第3回箱庭制作面接で、大きな亀1頭だけで、沖の方に向かわせようと思った。そして、その大きな亀を小さな亀が波打ち際から見ているような形に配置した。前項で取り上げたように、沖に向かう大きな亀は、A氏自身の生き方についての選択と意思決定が反映していた（p.46 ◆具体例16参照）。それは、第3回まで面接が進んでくることによって生じた内的プロセスの変化である、と考えることができる。箱庭作者の内的プロセスと構成との関連している。また、波打ち際の小さな亀と沖に向かう大きな亀との距離は、近すぎず、なおかつ沖に向かう亀を浜辺の亀がちゃんと見ているという距離感覚が反映していた。また、波打ち際の亀の位置は、沖に向かう亀を心の奥では信頼しているという感覚をも反映した

構成であった。この具体例では、箱庭制作面接が継続することによる箱庭制作者の内的プロセスの変化が構成に反映された、と理解できた。

石原(2008)は、ミニチュアを置く際の主観的体験として、「ここだ」という位置が直観される例を挙げている。そして、その下位カテゴリーとして、「ここだ」とともに「ここではない」が直観される例を挙げている(pp.140-149)。本項の◆具体例 23～25にも、この両者が見いだされたと考えられる。そして、その直観に関連する要因が示されたと捉えられる。その要因として、a.面接の進み具合によって、箱庭制作者が自己の内面に向かおうとする準備性があった。これは、◆具体例 23 と 25 の自己像が置かれる位置や向き、自己像の変化に示された。b.ミニチュアの位置は、作品全体あるいは作品内の他の構成とも関連していた。◆具体例 24, ◆具体例 25 の 2 つの亀の構成に示された。(2)構成された位置や向きを巡る主観的体験の具体例から、内的プロセスと構成とが密接に関連していることや、内的プロセスの変化が構成に影響することが示された。◆具体例 23～25 の分析から、[構成により喚起される内的プロセス]は、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与すると考えることができる。

### (3) 区分、区画に分けることを巡る主観的体験の結果および考察

(3)区分、区画に分けることを巡る主観的体験には、1.砂の構成による区分と、2.柵による区分の 2 種類があった。

#### (3)-1. 砂の構成による区分の結果および考察

砂の構成による区分の具体例を示す。

#### ◆具体例 26 : B 氏第 7 回箱庭制作面接制作過程 1～5, 7, 21, 31, 全体的感想

B 氏は第 7 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 1 で、10 数秒、砂箱を見つめた。制作過程 2 で、B 氏はケースの蓋(真珠を収納しているケースの蓋。9cm×6cm 大のプラスチック製)を取り、1 分間、ケースで砂をならした。制作過程 3 で、B 氏は、約 20 秒かけて、ケースの蓋で右から

左へ溝を作った。制作過程 4 で、約 20 秒かけて、

ケースの蓋で上から下へ溝を作った。制作過程 5 で、中央部に十字形に水源様の水を深く掘った

(写真 12)。これらの箱庭制作過程について、B 氏は自発的説明過程で、以下のように語った。

ここに立った時に、この箱庭

の中を 4 つに分けたくな

りまして。それで、その 4

つという。4 つができる

だけ均等になっていうこと

で。それで、砂をならすも



写真 12 B 氏第 7 回作品

のではないかっていうことで、ケースのカバーを使って、その、大まかにですけど、ならして、4つになりました。で、4つに割ったんですけど、完全に4つの区画ってというような風でもなくって。で、真ん中も、真ん中としてあって、つながりがありつつも、4つの区切りっていうところで（B氏自発、7-複数過程に亘って）。この語りから、砂をならす、4つの区画を作る、中央の十字形を作るという構成行為は、砂を見つめることで喚起されたイメージであることがわかる。4つの区画と真ん中の十字形は、十字形によってつながりがあると同時に、独立した区分である。

B氏は、箱庭制作過程5で構成された中央の十字形について調査的説明過程で、**やっぱり真ん中はちゃんと真ん中で、はっきり設けたかったみたいなところがあって**（B氏調査、7-全体的感想）と語った。別に、この十字形と4つの区画について、以下のように語った。**なんか。少しだけ、このところをもっとこの、円形状に、こういう風にやって、丸こく、池みたいなどこを、作ろうかな、とかって思ったんです。でも、あの、そんなに、こう前面に、なんか、この部分があるっていうよりか、まあ、その、背後とか、根底とかにあって、っていうようなところと、あと、自分自身作ってて思ったのは、この、一つ一つが、まあ、自分にとっては、まあ、小さな箱庭っぽいよなとってかいていうくああ。なるほど>4分割で。そんなような感じもして**（B氏調査、7-全体的感想）。

B氏は、同第7回箱庭制作面接の箱庭制作過程7で、箱庭左上の区画に花を植えた。その後、制作過程21で左上の区画にリスを置き、制作過程31で鳥を左上の区画に置いた。そのような箱庭制作過程について、自発的説明過程で以下のように語った。**四季を作りたくなっただんですけども。その四季を作りたくなって、ったところも、あるんですけど。同時に、それが、あの巡ってるっていうんでしょうか‘手を空中で左周りに円を描きつつ’**（B氏自発、7-複数過程に亘って）。巡るという時間感覚が、四季という内的イメージと反時計回りに腕を動かすという行為によって表された。

この動きと、4つの区画の形や性質との関連について調査的説明過程で、**これはどっちかという、出発もなく、あの、終点もなくっていうことの、この、が、もっと、うん、だから、なんかもっと均等かなと。この4つが**（B氏調査、7-全体的感想）と語った。出発や終点がない時間についてのイメージが、4つの区画は均等であるという形態と関連している、と捉えられる。

さらに、中央の十字形と4つの区画に表現された巡るという動きをもつ四季との関連について、調査的説明過程で以下のように語った。**中心はあるっていう感じはするんですけどね。こういう動きの中とか、こういうものを意識してる、あの、自分っていうものの中にも、うん、なんか、そういう意味では核になっているものみたいなものがあるって、こういう動きもあるだろうし。また、自分の、なんか、まあ、また、その春から数えてなんだけど、また、1年を始めるぞ、とかいうとこの、うん、動きの中にも、うん、真ん中に来るなんか、うん、核になるようなものがあるって**（B氏調査、7-全体的感想）。B氏は、4つの区画を構成していく中で、真ん中の部分もはっきり設けたいと感じた。それは、巡るという動きの中心や核になるものであり、同時に、動きを意識している自分の核でもある、という多義的な意味があることが報告された。

B氏第7回箱庭制作面接で作られた区分は、多義的で、様々な内的プロセスが複合された表現であることが示された。



a.平面としては、4つの区画と真ん中の十字形は、十字形によってつながりがあると同時に、4つの小さな箱庭として独立した区分である。垂直方向として、十字形の部分は背後、根底にあるものであり、4つの区画よりも深みにあるものと、捉えられる。

描画法が二次元的であるのに対して、箱庭療法は、三次元的表現が可能であり、それが多様な表現を可能とする(河合隼雄,1969,p.22)。B氏第7回箱庭制作面接における砂の区分において、中央部分の砂を掘った砂箱の底の水色の表現と4つの区分とによって、三次元的な表現がなされている。中央の十字架状の部分は、**根底**というイメージをもち、イメージの中では実際の構成よりもさらなる深みをもった表現であることがわかる。箱庭療法における三次元的表現は、現実的・物理的制限をうけつつも、イメージの力によって、はるかに広く、深い表現を可能にしている。石原(2008)は、ミニチュアの置く位置によって、「ズーッと、壁とかも取り払って向こうまで、先には海がある感じがする」という箱庭制作者の語りから、砂箱の枠がないかのように無限の広がりを感じさせる場合があることを報告している。そして、この主観的体験を「モノとイメージの交錯」によって、単なるモノ以上のイメージが展開したと考察している(pp.102-108)。第7回箱庭制作面接でのB氏の三次元的な主観的体験も同様の機能によるものと考えてよいだろう。

b.時間の要因としては、4つの区画は四季を表し、それは巡っている。巡るというイメージを、B氏は腕を反時計周りに動かすことで説明した。石原(2008)は、箱庭制作者が「時間の流れを生み出す」例を紹介している。そして、「制作者の主観的体験の中で三次元空間の表現に『動き』と『空間の移動』のイメージが交錯することで、そこに時間の体験が生まれ、制作者は四次元的に世界を体験することが可能になるのである」としている(pp.115-121)。B氏第7回箱庭制作面接の場合、四季という内的イメージに、時間の流れが包含されている。同時にそれは、腕を反時計周りに動かすという行為としても、4つの区画を移動する動きが表された。

c.十字形の部分は、巡るという動きの中心や核になるもので、同時に、動きを意識している自分の核でもあった。つまり、客観的時間とそれを意識する内的な核という多義的な表現であった。また、その巡る動きは、出発や終点がなく、それゆえに4つの区画は均等に構成された。時間の均等性と形態の均等性という時空間が一体的に表現された。中村は、箱庭療法の時間性について語る中で、「トポスでは、空間と時間が一体化している」と述べている。そして、その典型的な例として、ゲニウス・ロキ(場所の精霊、土地の精霊)という言い回しがあり、それは独特の雰囲気がある歴史的な空間であるとしている。河合隼雄はそれに、箱庭療法の場所、世界は、ゲニウス・ロキをもっていないといけないと応えている(河合・中村1984, pp.139-140)。B氏第7回箱庭制作面接に表現された時間と空間は、中村や河合が述べている、空間と時間が一体化した独特の雰囲気をもった時空間だと、理解することができよう。

d.このような多義的・複合的表現は、構成からある内的プロセスが喚起され、次の構成が生まれるという箱庭制作過程の連続性、連動性が関与したものであった。

箱庭制作面接における区分の表現には、上記のような多義的・複合的な内的プロセスが関連していることが示された。上記aからdの観点を総合して考えると、◆**具体例 26**の構成は、ある構成から内的プロセスが喚起され、次の構成が生まれるという箱庭制作過程の連続性、連動性が関与することによって、生じた。◆**具体例 26**の四次元的表現は、四季というイ

メージの内容と、「制作者の主観的体験の中で三次元空間の表現に『動き』と『空間の移動』のイメージが交錯することで、そこに時間の体験が生まれ、制作者は四次元的に世界を体験することが可能になる」(石原, 2008)ことによって生じた。そして、この構成は、時間の均等性と形態の均等性という、独特の雰囲気をもった時空間が一体的に表現された。◆具体例 26 は、このような構成についての語りと解釈できよう。

十字形の部分は、神様や仏様という直接的な宗教的イメージにとどまらず、巡るという客観世界の動きの中心や核になるものであり、動きを意識している自分の核でもあった。客観的時間の中心でもあり、時間の変化を見させ、新しい年度への気持ちを起こさせるような感覚の奥に存在する自分の内的な核でもあるという多義的な表現であった。このように第7回箱庭制作面接の砂による区分の構成は、B氏にとって重要な内的プロセスの表現であった(pp.57-58 参照)。

箱庭制作面接で、箱庭制作者は砂箱を「自由に区分可能な空間」として使用できる。そして、その「自由に区分可能な空間」で、本項の具体例でみたように、多義的で、様々な内的プロセスが複合された表現を構成することができる。「自由に区分可能な空間」という特性を生む[構成により喚起される内的プロセス]は、箱庭制作者の自己理解の深化に寄与することができる、と考えられる。

### (3)-2. 柵による区分の結果および考察

次に、柵による区分の具体例を示す。

#### ◆具体例 27: A氏第6回箱庭制作面接制作過程 6, 13 などの複数過程に亘って

A氏は、第6回箱庭制作面接の箱庭制作過程 13 で、牛と豚のエリアを柵で区切った。その箱庭制作過程について、A氏は調査的説明過程で以下のように語った。ぜんぜんそんなん意識してなかったですけども、えっと柵を置く時に、<うん、うん>あの一、あ、境界線を私作るんだなっていうのは思いましたけどね。あの、棲み分けると言うか、(中略)<柵だったりだとか、って言うようなものが、あるいはまあ、そういう人間くさいものって言ってもいいのかも知れないけど、>うん<そういうものは、あんまり、特に意識してわざわざ置いたわけではない>うん、わざわざ置いたわけではないです。(A氏調査,6-13)だけど、作りながら、そう言えばこれまでと違って、いるなっていうのは感じていて、何が違っているかって言うと、うう、えーと一、(間9秒)洞窟ができた段階で、でも違っているって言えば違ってる(A氏調査,6-6)‘小声で’なんだろう。んーんと、(間9秒)違ってるのかな、‘ささやくように’(間6秒)私が、<うん>っていうのははっきり意識して作ってました。<はあ>私が食べる物たち、私が食べる動物たちって言う風で(A氏調査,6-複数過程に亘って)。この具体例では、柵を置く時に、A氏に境界線を私作るんだ、棲み分けるという内的プロセスが喚起された。また、作りながら、これまでと違っているという内的プロセスが喚起されていたことを想起した。さらに、他の箱庭制作過程に思いが及び、「私」をはっきり意識し、私が食べるものという風な感じで構成していたことが語られた。本具体例では、構成やその語りを通して、この構成を行う自己の内的プロセスへの気づきをもたらされた、と理解できる。

A氏第6回箱庭制作面接での、牛と豚のエリアを柵で区切る構成について、筆者は、調査的説明過程で、<柵だったりだとか、って言うようなものが、あるいはまあ、そういう人間くさいものって言ってもいいのかも知れないけど、>うん<そういうものは、あんまり、特に意

識してわざわざ置いたわけではない」と質問している。それは、自己像が直接的に関与するものとしては、初めて人工物が置かれたような感覚を筆者がもったためであった。自己像はペンギンという動物として表現されているが、それまでの自己像であったイルカや亀に比べて、家畜を柵で囲むという人間的な行動をとる特性をもった自己像に変化したように、筆者には感じられた。◆具体例 27 では、自己像の特性の変化が柵によって区分を作るという構成を生んだのだと、理解することができる。

この自己像の変化の意味について検討する。A 氏第 5 回箱庭制作面接までは、イルカや亀という動物のミニチュアを自己像とした内的世界の表現であった。A 氏第 7 回箱庭制作面接で A 氏は、半島を作り、そこで暮らす男女の人形、家、家畜、船などを置き、人が登場する世界を作った(資料 3 A 氏第 7 回作品の写真を参照)。しかし、A 氏はその作品に愛着をもつことができなかつた。調査的説明過程で再構成された作品では、男女の人形、家、家畜、船は取り去られ、人が登場しない世界となった(資料 3 A 氏第 7 回再構成後の作品の写真を参照)。A 氏第 8 回箱庭制作面接以降、人間のミニチュアを自己像とした内的世界へと移行していった(pp.185-191 参照)。そのような箱庭制作面接の展開の中に、A 氏第 6 回箱庭制作面接は位置づけられる。A 氏第 6 回箱庭制作面接では、自己像は動物のミニチュアであるが、家畜を柵で囲むという人間的な行動をとる特性をもった自己像に変化したと解釈できた。つまり、A 氏第 6 回箱庭制作面接における柵で区分を作るという構成は、今後の箱庭制作面接の展開、内的世界の移行のはじまりを示唆している、と解釈できる。[構成により喚起される内的プロセス]の具体例には、◆具体例 27 のように、自己の特性の変化と構成とが密接に関連し、構成の変化が生じ、さらには、その構成から自己への気づきが生まれる場合があることが示された。このことも、[構成により喚起される内的プロセス]が、箱庭制作面接の促進機能として働くことを示している、と考えられる。

ここまで、[構成により喚起される内的プロセス]の(3)区分、区画に分けることを巡る主観的体験の具体例を考察してきた。(3)-1 で取り上げた B 氏第 7 回箱庭制作面接の◆具体例 26 には、箱庭制作者の内的プロセスと構成との連動性から生じた、三次元空間の表現と「動き」・「空間の移動」とのイメージの交錯による、時空間の一体化が見いだされた。そのようにして構成された区分は、B 氏の内的プロセスの重要な表現であった。(3)-2 で取り上げた A 氏第 6 回箱庭制作面接の◆具体例 27 では、自己像の特性の変化に示された A 氏の内的プロセスの変化が、構成の変化をもたらしたと捉えられた。両具体例から見いだされた内界と構成の交流は、箱庭制作面接が箱庭制作者の自己理解の深化を促進する機能の一側面であると考えることができる。

## VI-2. 「内界」から「構成」への影響の結果および考察

「内界」から「構成」への影響について、詳述し、検討する。VI-2 には、概念[構成に付与された内的プロセス]、概念[内的プロセスの構成への影響]があった。

### 1) [構成に付与された内的プロセス]の結果および考察

[構成に付与された内的プロセス]について詳述・検討する。[構成に付与された内的プロセス]は、「意図、感覚、イメージ、感情、連想、意味という内的なプロセスが構成に対して付与される様」、と定義された。本概念には、非常に多くの具体例があった。また、データの一部

が他の概念の具体例と重複している例も多々あった。ここでは、できる限り、他の概念と重複していない具体例を挙げる。本節では、(1)構成による時空間の表現、(2)明示されない境界線のテーマを取り上げ、結果を示し、考察する。

#### (1)構成による時空間の表現の結果および考察

B氏は第4回箱庭制作面接の冒頭、この回テーマが思いつかなかったため、棚にあるミニチュアによって気持ちが動かないかなと思って、箱庭制作を開始した(自発的説明過程での語り)。箱庭制作過程3(制作開始後2分13秒～2分19秒)で、ロッキングチェアを砂箱の左上隅に置いた。そして、海や陸の構成を行っていった。B氏は、制作を続ける中で構成された風景から、確かこんな風景あったぞ(B氏調査、4-複数過程に亘って)と、かつて行ったことのある土地やそこにいた人々のことを思い出した。

その後、意図的に、その土地やそこにいる人々に関連する構成を行っていった(pp.210-211 参照)。

#### ◆具体例28：B氏第4回箱庭制作面接制作過程14～40

人と人のつながりであったりとか。まあ、その、自然っていうのでしょうか。そういう風景だとか、というところで。ああいう世界とか、その、人との関係とってというのが、自分にとって、あの、まあ、心地よっていうか、そういう世界なんだな(B氏自発、4-複数過程に亘って)。この具体例では、かつてB氏が訪れ、その土地やそこにいる人々から受けた心地よさが構成に付与されていた。

#### ◆具体例29：B氏第4回箱庭制作面接制作過程42

制作過程42(制作開始後22分37秒～22分45秒)で、ロッキングチェアに星の王子様を置いた。その箱庭制作過程42について、B氏は調査的説明過程で以下のように語った。どちらかっていうと、少し小高いところということ言えば、私のその位置から言ったら、今、現在ってところの部分から、鳥瞰しているっていうか。そういうようなところで、この場面(?)になったと思います。だから、あの、この風景の中にあって、実際、あの、まあ、実際は、箱庭の外にあって、‘砂箱左上中央、左上、左上隅の砂箱の枠に手をもっていき、3か所を示しつつ’こういう風に見ているようなものっていうか。そのようなところでしょうかく鳥瞰。鳥瞰してる>で、まあ、ほんとに、そういう意味では、ちょっと一息つけるようになったら、また、遊びにいきたいなー。っていう風な、そういうような自分の姿も含めて(B氏調査、4-42)。また、内省報告に、くつろいで概観する人(B氏内省、4-42,制作・意図)、ゆったりとした気持ち(B氏内省、4-42,制作・感覚)、現在、今(B氏内省、4-42,調査・連想)と記した。第4回ふりかえり面接では、[箱庭を作っている現在とか、今現在とかというもので。できあがったものを眺めてる自分っていうんでしょうか]と説明した。自己像である星の王子様は、現在という時点から、できあがったものをくつろぎ、ゆったりとした気持ちで眺めているというイメージが付与された、と捉えることができる。また、一息つけるようになったら、また、遊びにいきたいなーという将来の希望も語られた。

B氏第2回および第3回箱庭制作面接(写真13)では、日常生活の中での攻撃的な人々やそれに苦しんでいる自分の心情の表現や、山あり谷あり、障壁もありという生き様が中心的なテーマとなった(pp.204-210 参照)。そのような箱庭制作面接の流れの中で、第4回箱庭

制作面接は、第2回および第3回箱庭制作面接とは雰囲気の違いと筆者が感じるような構成がなされた。B氏は、人と人のつながりや自然が自分にとって心地よい場所を思い出し、その心象風景を、くつろぎ、ゆったりとした気持ちで自己像である星の王子様が眺めているという構成を行った。星の王子様は、自分にとっての大切な場所を砂箱の外から俯瞰するという空間の構成を行った。その構成は同時に、過去の思い出、現在の自分、将来の希望という過去－現在－未来に亘る時間の表現でもあった。



写真 13 B氏第3回作品

このような時空間の構成には、自分自身がいたいという雰囲気（B氏調査、4-全体的感想）というB氏にとって大切な人間関係や場についての内的プロセスが付与されていた。

このような時空間の構成は、確かこんな風景あったぞと気づきが構成から喚起され、その後、B氏が意図的に構成に内的プロセスを付与して制作されていったものである。内的プロセスを構成に付与することによって、B氏は自分が大切にしたいものを再確認することができた。また、これらの構成を通して、B氏は現在の自分の内的プロセスや希望に気づき、表現していった。これらの構成によって、B氏は自己への理解を深めることができたと考えられる。

◆具体例 30：B氏第6回箱庭制作面接複数過程に亘って

B氏は、第6回箱庭制作面接の箱庭制作過程5でイルカを左上隅の海に置いた。制作過程7で島の中央やや上のあたりから中央に樹木を置いた。制作過程9で海草を島の下方の浜辺に置き、針葉樹を島に点在させた。制作過程11で鳥の巣を島の中央の林の横に置いた。制作過程13で島の左側に石仏を埋めた。制作過程20



写真 14 B氏第6回作品

で埴輪を島中央の上の部分に埋もれさせた。制作過程 22 で、埴輪の右横にガラス片、真珠の一部が埋まるように置いた。制作過程 24 で亀、魚を右側の海に置いた。制作過程 28 と 30 で、島中央の樹木を増やした(写真 14)。そのような箱庭制作過程について、B 氏は自発的説明過程で以下のように語った。どちらかというと、気持ち的には、再生していく、という印象、気持ちがあって。だから、そういうようなところでは、そういう木々が生えてきて、草が、実の(?)、生えてきて、多少なりとも、実のなるものをこうやってついているような状況の中で、鳥もやってきて、巣を作ったりとかというものを、その、この中心に置きたかったと。(中略)まあ、その再生ということをいったんですけど、そういう意味では、昔、いろいろ、人が住んだり、なんかやってたという。そういう痕跡みたいなものが。その、そうですね。この遺跡に近いような。遠い昔にそういう風にあったけれども、なんらかの理由でうち捨てられて。でも、しばらく経って、まあ、あの、自然みたいなもの、環境も落ち着いて、草木が萌え出て、鳥もやってきて。その周りでは、この陸地のことや状況と関係なく、まあ、その、海に生きるものは、それまで通り、ずーとその、生活をしてる。そういう営みがあってっていう。そういう、状況を作りましたね (B 氏自発, 6-複数過程に亘って)。

調査的説明過程では、B 氏と筆者との間で以下のようなやりとりがあった。私の印象では、なんか、例えばですね。どでかい、その、小高い、この木がどーんと 1 本あるっていうようなイメージはなくて。とにかく、低い、背が低くて、広がっている。その、でも緑が深くあるっていうような。だから、ちょっと、ほんとは、広葉樹をもっとぐあーとしきつめたような感じとか。(中略)だからここはイメージとしては、低い>こんな高さのイメージの、はい。<ぐらゐの木が、なんて、いうのかな、みっしりと>わりあい、その、はい、広がってて、<広がって、っていうことなんですね。わかりました。了解です。そういう空間、そして、そこは、再生、今、してるということなんですよ。(はい) まあ、島の中心が緑で再生している。(はい)> (B 氏調査, 6-複数過程に亘って)。

箱庭制作過程 13 での島の左側に石仏を埋めた構成の内省報告について、第 6 回ふりかえり面接で以下のように説明した。[意味としては、死と再生という言葉を用意したんですけども、たとえば、まあ、人が生きて、いろんな出来事があって、その、つらい思いをしたりとか、苦労したりとか、でも、そこからなにかまた取り組み始めるとか、立ち上がっていくとかっていう。こういう、そのものの繰り返してっていうのは、人が続けてきたっていうような、そういうところで、繰り返してっていう]。

また、これらの箱庭制作過程についての調査的説明過程における、海の生き物が陸での営みとは関係なく生きていくという説明について、第 6 回ふりかえり面接で以下のように説明した。[遺跡の(中略)ガラスのものとか、真珠とかっていうのは、(中略)人あつての価値、価値づけられたものっていう。(中略)内的現実。でも、その、内的現実だけが現実じゃないっていうか。外的ななんか、そういう自然の営みがあって、まあ、世界っていうのは、自分ばかりの思いで見ている世界がすべてで出来上がっているわけじゃないとかっていうところも含めて、全体的っていうか]。

この具体例では、島の中央の木々、周辺部の木々、鳥は、再生というイメージが付与された、と捉えることができる。再生が中心部から周辺へ広がっていった。そして、海の生き物は、石仏や埴輪に表された人の営みの遺跡や陸地の状況とは関係なく、それまで通りにずっと生活しているというイメージが付与された、と考えられる。つまり、この構成には、中央から

周辺へという空間的広がり、過去、現在、未来（再生の継続）という時間軸、また、陸地とは関係なくずっと続いている海の営みという時間という多様な時間の流れが表現されている、と捉えられる。

過去の遺物は、過去にも人が生きて、つらい思いや苦勞など様々な出来事があったとしても、また取り組み始めるとか、立ち上がっていくという生き様を示していた。そして、それは繰り返し、人が続けてきたものであることが表現されたものであった。遺跡は、人によって価値づけられ、人あってのものである。しかし、世界には海の生物のように人の価値観や感情とは関係なく生きているものがある。それらをすべて含めて、世界の全体であると、B氏が感じ、考えている、と理解できる。

B氏第2回～5回箱庭制作面接までの作品は、B氏の現実の状況や個人的体験を反映した作品であった。第6回箱庭制作面接の作品は、今までの作品と非連続的な作品と筆者が感じられるほど、構成が大きく異なっていた。そのような作品になった一因は、◆具体例30に示された多様な世界の表現であった。この多様性の表現は、「(3)-1. 砂の構成による区分の結果および考察」(pp.57-60 参照)で検討した空間と時間が一体化しているトポス、空間と時間が一体化し、独特の雰囲気をもった時空間の構成だと、理解することができよう。このような時空間構成によって、B氏は第2回～5回箱庭制作面接の作品とは異なる自己の内界を表現できたと考えられる。B氏が第6回箱庭制作面接で、第2回～5回箱庭制作面接の作品とは異なる自己の内界を表現できたことは、B氏の自己理解・自己成長の促進に寄与できたと考えられる。

◆具体例28～30には構成による時空間の表現が示された。第4回箱庭制作面接における時空間の構成によって、B氏は自分が大切にしたいものを再確認することができた。また、これらの構成を通して、B氏は現在の自分の内的プロセスや希望に気づき、表現していたと捉えられた。第6回箱庭制作面接における時空間の構成によって、B氏はそれまでの回とは異なる内界の表現が可能になったと解釈できた。このようにして、[構成に付与された内的プロセス]は、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与すると考えられる。

## (2) 明示されない境界線の結果および考察

以下の具体例は、[構成に付与された内的プロセス]のやや特殊な主観的体験を示している。それは、境界線が構成として明示的ではないが、箱庭制作者にとっては、あるラインから領域が異なると感じる具体例である。

### ◆具体例31：A氏第3回箱庭制作面接制作過程6

A氏は、第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程6で、貝殻(巻貝・二枚貝)、サンゴを右奥隅に置き、左奥の海藻の脇にも二枚貝や他の小さな貝殻を置いた。その箱庭制作過程について、A氏は自発的説明過程で「貝殻とか、珊瑚とかがあって豊かな海ですね。<うん、そうだね>うん、きれいなものもあるなあって印象ですね、貝 (A氏自発, 3-6) と語った。調査的説明過程で、以下のように語った。「<貝殻ってやっぱりそういう女性的なっていうイメージある?>この辺のは‘砂箱の左奥を指して’そういう感じがありますね。<あ、この辺のは>こっちは‘右奥の貝を指して’もうちょっと違った感じですね。<ああ、なるほどね。>ええっと、何ていうんだろ、自然のもの、海のもの、んと、<うん、そっか>うん、自然界のものっていう感じですねくなるほど、タコが隠れてるところは自然界>うんそうですそうで

す（A氏調査, 3-6）。また, 内省報告に, 以下のように記した。右側の部分は自然の造形。左側は, 自然の造形でもあるけれど, それだけではない, 私の内側の何かだと思う（A氏内省, 3-6, 制作・意味）, そう言えば, 左側の貝と, 右側の貝では意味合いが違ったわ, と思う, 気づく（A氏内省, 3-6, 調査・意味）。同じ箱庭制作過程で置かれた貝殻であるが, 右奥の貝殻は自然の造形として置かれ, 左奥の貝殻は女性的な感じを表現したものでもあったことが語られた。内省報告では, 左側はA氏の内側の何かだと思いと記された。しかし, 右奥と左奥との違いは, 箱庭制作中には, 明確には意識化されず, 調査的説明過程で語ることを通して, 気づいたことであった。

#### ◆具体例 32 : A氏第3回箱庭制作面接制作過程 10

また, 同回の箱庭制作過程 10 で A氏は, エビをいろんな角度から見て, 左上隅の海藻のところに置いた。その箱庭制作過程についての説明の中で, 貝殻についての説明と同様に, 左上の領域と右上の領域とでは異なっていることを, 以下のように語った。くうん, なるほどそれがまあ, この領域というか, ある種, ちょっと, ここまでとはここからとはちがった>そうですね(中略)この辺のところから‘左奥の領域を区切りながら’こう, ちがうくそうだね, この辺からね>はい, はい（A氏調査, 3-10）。この具体例でも, 砂箱の左奥の領域と右奥の領域では性質が異なることが語られた。

A氏第3回箱庭制作面接では, 境界線が構成として明示的ではないが, 箱庭制作者にとっては, あるラインから領域が異なると感じる主観的体験が報告された。A氏第3回箱庭制作面接の語りや内省報告には, どのような機序によって, 左側の貝殻に女性的な感じが付与されたのかを確定できるデータがない。そのため, その機序に関しては推測の域をでないが, 以下に検討したい。

橋がついた岩や金色の貝殻の領域は, 右側の貝殻の領域よりも後に構成された。橋がついた岩や金色の貝殻の領域を構成する時点では, それらが大切に特別な領域であることが明確に意識されていたが, 右側の貝殻の領域を構成する時点では, 箱庭制作者は異なる意識の状態であった, と推測できる。同回の箱庭制作過程 2 の内省報告に海の生き物に気持ちが悪かれると記された。A氏は, このような感覚に基づいて, 意味の認知は伴わないが, ぴったりだと感じる直観的な意識によって, 制作過程 6 で貝殻を選択し, 右側の貝殻の構成を行ったのかもしれない。あるいは, 制作過程 11 で砂箱左奥に,大事なものなんだよねと思って置いてましたねと自発的説明過程で語られる金色の貝殻の領域が構成されたことによって, 同じ砂箱左奥に先に置かれていた貝殻にも, 女性的な感じが後から付与されていったのかもしれない。

◆具体例 31 で, 筆者の問いに A氏がすぐに答えていることから, 左奥の貝殻に女性的な感じが付与されていることに A氏は箱庭制作中に気づいていたと推測できる。しかし, 右奥と左奥との違いは, 箱庭制作中には, 明確には意識化されず, 調査的説明過程で語ることを通して, 初めて気づいたことであったと捉えられる。このように, 部分的に明確な意図を伴わない表現が構成され, その構成について語ることを通して気づきが生まれている。◆具体例 31 と 32 のように, 箱庭制作面接では, 明確に意図されたわけではない構成が生じる場合がある。明確な意図を伴わない表現がなされることは, 箱庭制作面接が箱庭制作者の意図を超えた表現となることの一因であると考えられる。明確な意図を伴わない表現を生む[構



成に付与された内的プロセス]は、構成とその構成についての語りを通して、箱庭制作者の自己理解の深化に寄与すると考えられる。

## 2) [内的プロセスの構成への影響]の結果および考察

概念[内的プロセスの構成への影響]は、「感覚や感情やイメージなどの内的プロセスが及ぼす構成への影響」と定義された。本概念の具体例を以下に挙げる。

### ◆具体例 33 : A 氏第 9 回箱庭制作面接全体的感想

A 氏は第 9 回箱庭制作面接の調査的説明過程で、今回の箱庭制作過程について以下のように語った(写真 15)。作るときに(中略)明け渡して作ったと言ってた時があったですね。あの、あの、雰囲気をちょっと思い出して、あの、あんまり考えずに作ろう。で、わからなくなったら玩具を見に行けばいいやと思って、ま、迷ったら玩具を見に行って、ピンと来たものを持ってきて、というのを繰り返したんですね。そうすると、こういうつくり、これになった(中略)どうするどうするって考えて、こう、固まっちゃうよりは、ふあ~って、(間 3 秒)何でもいらっしやいじゃないけど(笑)あの、そういう風にして作るのも、あの、気持ちいいもんだな~って (A 氏調査, 9-全体的感想)。

A 氏は第 8 回ふりかえり面接で、第 8 回箱庭制作面接では[自分自身をね。あけはなすというか。(中略)あけはなす。手放す。そんな感じで作っていたような気がします]と語っていた。今回の第 9 回箱庭制作面接では、その雰囲気を思い出して、あまり考えずに作ろうとした。そのような雰囲気や考えに従って、ミニチュアを選択し、構成した。

### ◆具体例 34 : A 氏第 9 回箱庭制作面接制作過程 6

同回で、A 氏は、砂箱右中央にある建物を制作途中までは、ふつうの建物として置いていたが、最後の箱庭制作過程 6 で、その建物を教会にすることにした。その箱庭制作過程について調査的説明過程で以下の

ように語った。私いっちは  
ん最後に、あのー、マリア  
様か十字架が、どこかに欲  
しいなと思ったんですね。  
<ほー、うんうん>あのそ  
ういうのが何にもない箱庭  
って、私作ったことがない  
ような気がして、さてどう  
しようかと思ったんですけ  
どね。まあ、これ‘右端の  
建物を指差しながら’が教  
会という事にして、あえて  
置かなくていいや今日は、  
と思って終わりましたね。  
(中略)あえて置かなくても



写真 15 A 氏第 9 回作品

いいや、この、この建物の中にあるでしょう‘笑’っていう、そういう感じですね。(中略)最後に、ないなーと思った。ない、ないなと思ったときに、あ、そうだ、教会の建物にしてしまって、この中にそういう神社の鳥居だとか、あのマリア像だとか、キリスト像に当たるものがこの中にあるんだということで私は、納得して、あの、これまでのマリア様や神社とは違う性格の教会ですね、これは<そうだね>もっと、もっとちゃんと現実の世界に降りてきてるもの。<うん。うん。うん。なるほどね。現実の世界に降りてきてるものっていうことでもあるし、意識して、だから、そういう教会的なもの、マリア様的な物、意識して今回置かなかつた、ってことなんだね、今回ね、選んでる途中で>ちょっとうれしいですね、何か。<ふーん、うれしい>うん、なんか私の内側にそういうものが根付いたようなそんな感じがします (A氏調査, 9-6), と語った。また、内省報告に表に出なくていい、表に出さなくていい、そんな感じ。大事なものだから、自分の中であって、それを自分がわかっていたらいいんだ (A氏内省, 9-6, 調査・意味), と記した。今までの回と違って、マリア像や十字架や鳥居は置かれていないが、A氏は教会にした建物の中に宗教的なものがあるということで納得し、もともとあった建物を教会にするという構成を行った。そして、宗教的なものが外に表れていないことについて、それは大事なものだから、表に出さなくてよい、自分の中にあることを自分がわかっていたらいいと考えた。A氏の宗教性に関するイメージや考えがこのような構成に反映された、と捉えられる。そして、このような構成とこの構成の自分にとっての意味を納得していくことを通して、宗教性が自分の内側に根付いたような喜びを感じた。

第9回箱庭制作面接で、A氏がとった明け渡して置こうとする態度は、構成に大きな影響を与えている、と捉えられる。明け渡すという態度は、教会にした建物の中に宗教的なものがあるということで納得し、もともとあった建物を教会にするという構成にも影響したと推察できる。また、宗教的なものは大事なものだから、表に出さなくてよい、自分の中にあることを自分がわかっていたらいいという考えも、この教会の構成に影響している。そして、この教会は、これまでのマリア様や神社とは違い、現実の世界に降りてきているものというように、A氏の宗教的イメージの変化を表現することとなった。このような構成を通して、A氏は自分の変化や成長に気づき、喜びを感じる事ができた。このようにして[内的プロセスの構成への影響]は、箱庭制作面接の促進機能として働くことができる。

#### ◆具体例 35 : B氏第2回箱庭制作面接制作過程1~3

B氏は、第2回箱庭制作面接の箱庭制作過程1で、「イメージを引き出してくれそうな人形を探す」ため、棚にあるミニチュアを見た。「」内は、B氏が内省報告の箱庭制作過程内容として記した言葉である。制作過程2で、「心苦しい思いを表現する仕切りを見つけ」た。制作過程3で、仕切りを砂箱中央に置いた。それらの箱庭制作過程について、内省報告にB氏は以下のように記した。何か重いものを感じて蓋がされた感じ (B氏内省, 2-1, 制作・感覚), 壁 (B氏内省, 2-1, 制作・連想)。自発的説明過程ででまあ、自分自身の今日の、今の気持ちの中核になるような感じもしたことがあって、真ん中に置くというのがしっくり、あの、しました (B氏自発, 2-3), と語った。この回の最初の箱庭制作過程で、B氏は、重いものを感じて蓋がされた感じがしており、その感覚から連想されるものは壁であった。そして、その感覚に合った仕切りを見つけ、それを砂箱中央に置いた。その構成には、重さや壁という感

覚やイメージ、心苦しいという思いが今の気持ちの中央にあるという主観的体験が反映したものであったことが示された。

◆具体例 36：B 氏第 2 回箱庭制作面接制作過程 24～25, 30～31

同回の箱庭制作過程 19 で B 氏は砂箱左中央にイグアナを置いた。制作過程 24 で、B 氏は、砂箱中央手前に水の道を作った。制作過程 31 で、2 体の天使をテーブルの前に置いた。それらの箱庭制作過程に関して、B 氏は自発的説明過程で「この水の部分なんですけど、亀が生き生きとして泳ぐとか、その、まあ、その、その、進んでいく道のりとか、泳いでいく道のりというところの、そういったものに向かっては、あの、進んでいくとかいうところを、まあ、表現したくて」（B 氏自発、2-25）と語った。調査的説明過程で B 氏は、イグアナとして表現された攻撃的な人に自己像である亀は足を引っ張られている感覚があると語った（pp.161-162 ◆具体例 129 参照）。それに続いて、筆者は、水の道の構成について、「水を作っていく中で、なにか感覚的な変化みたいものがあつたか」と質問した。その質問に対して、B 氏は以下のように語った。「ここに天使、置いてっていうところも、繋がるような気がするんですけども。（B 氏調査、2-31）その、そうであっても、まあ、まあ、生かされてるっていうんでしょうかね。その水というところの（中略）そういった中で自分自身も、その、その、道のりというところでは、砂漠を歩いているわけじゃなくて、そういう中で、うん、その、たどってるっていうか、たどりきったっていう、そういったことじゃんですけど、そういう実感も確かにある。あるな—と。そんな感じをしたんですよね（B 氏調査、2-25）。内省報告に「乾きと寄るべき者、道筋の存在に気づく」（B 氏内省、2-24、制作・意図）、「どうにか支えられてきたことを思い返す」（B 氏内省、2-24、制作・感覚）、「神、仲間」（B 氏内省、2-24、制作・連想）と記した。攻撃的な人物に足を引っ張られているような状況が確かにある中でも、亀が生き生きを泳ぎ、進む道として、また、砂漠を歩いているわけではなく、自分は生かされ、道をたどっているという実感が反映した構成として、B 氏は水の部分を構成した。水の道の構成は、神や仲間になんか支えられて歩いている道筋の存在を B 氏が気づくという内的プロセスを反映したものであつた、と理解できる。

B 氏は第 2 回箱庭制作面接の冒頭では、重いものを感じて蓋がされた感じがしており、それが気持ちの中核にあると感じがしたため、仕切りを砂箱中央に置いた。その後、攻撃的な人物に足を引っ張られているような感覚があり、イグアナや亀の構成を行った。そのような苦しい状況が構成された後、水の道が構成された。水の道は、砂漠を歩いているわけではなく、亀が生き生きを泳ぎ、進む道であつた。また、自分は生かされており、自分が神や仲間になんか支えられて歩いていることに気づくという B 氏の内的プロセスを反映したものであつた。◆具体例 35 と 36 には、B 氏が自分の内的プロセスに従って、構成していることが示された。そのような構成は、現在の苦しさを表現することを可能にするとともに、そのような構成の後に、亀が生き生きを泳ぎ、進む道があることや神や仲間の支えに気づくという内的プロセスの変化を生むものであつた、と解釈できる。

◆具体例 33～36 には、[内的プロセスの構成への影響]が示されていた。Kalff(1966 大原他訳 1972)は、箱庭療法では、内から外への変化が自然な仕方では生まれるとする(p.iv-v)。「内的プロセスの構成への影響」は、このような内界から構成という外界への影響に関する概念である、と考えられる。A 氏第 9 回箱庭制作面接での明け渡すという感覚、態度や、今ま

では異なる宗教的な構成の意味を納得していく内的プロセスは構成に影響を及ぼしていた。そして、構成を通して、A氏は自分の変化や成長に気づき、喜びを感じることができた。B氏第2回箱庭制作面接で、B氏は自分の内的プロセスに従って、構成していた。そして、水の構成は、蓋がされた感じや攻撃的な人に苦しむという内的プロセスから、亀が生き生き泳ぐ道があり、自分は生かされていることに気づくという内的プロセスの変化を生むものであったと解釈できた。このようにして[内的プロセスの構成への影響]は、箱庭制作面接の促進機能として働くと考えられる。

### VI-3. 「内界」と「構成」との双方向の影響の結果および考察

3)「内界」と「構成」との双方向の影響には、3カテゴリーと10概念があった。これらの概念には、「内界」から「構成」への影響と、「構成」から「内界」への影響の双方向の影響関係が見いだされた。

カテゴリー「創造における受動性と能動性」内に、カテゴリー「イメージの自律性」があり、その中に概念「作品の今後のイメージが湧いてくる」があった。「イメージの自律性」とは別に「創造における受動性と能動性」内に、概念「イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス」,[非意図的な構成を基に、意図的に構成する内的プロセス]があった。

カテゴリー「創造をめぐる肯定的感情と否定的感情」内に、2概念「創造の喜び」,[作品に対して、否定的な感情や感覚をもつプロセス]があった。

それらのカテゴリーとは別に独立して、「内界と構成との双方向の影響」として、5概念「構成による表現の多義性」,[他の領域の構成への影響],[ミニチュアが置かれない領域についての意図や感覚],[構成による自己のイメージや心理的状况や特性の表現],[不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]があった。

#### VI-3-1. 「創造における受動性と能動性」と、その中のカテゴリー、概念の結果および考察

「創造における受動性と能動性」内にカテゴリー「イメージの自律性」があり、その中に「作品の今後のイメージが湧いてくる」があった。また、「イメージの自律性」とは別に、2概念「イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス」,[非意図的な構成を基に、意図的に構成する内的プロセス]があった。

##### 1)「創造における受動性と能動性」の結果および考察

「創造における受動性と能動性」は、「創造において、箱庭やイメージが主体となってそれを自己が受けとめるという受動性と、意識的に構成するという能動性との両側面についての内的プロセス」と定義された。以下にその具体例を挙げる。

##### ◆具体例 37: A氏第4回箱庭制作面接制作過程2~3

A氏は第4回箱庭制作面接の箱庭制作過程2と3で、砂箱左上隅から反時計周りに渦を作った。その箱庭制作過程について、自発的説明過程でA氏は以下のように語った。こないだ私。(中略)博物館で、あの曼荼羅の展示会をやっていたので<はああ>観て来たんですよ<ああ、なるほど>そいであの丸い図形とか、おもしろいなと思って、ま、でも、ね、そんなのを作りたいと思っているわけでもなく。でも砂を見ていたら、う、渦巻きだというふうに

思ったので、すー‘息を吸う音’ ちょっとどうなるかわからなかったんだけど、渦巻きが浮かんできても消えないから、うんじゃあ作ってみようと思ったのが、今日の‘筆者に顔を向けて’ 作品なんですね (A 氏自発, 4-2)。A 氏は砂を見ていたら、渦巻きだと思った。先日、曼荼羅を博物館で観たが、それを作りたいと思っていただけではなかった。A 氏が渦を意図的に作成しようと思っていたわけではないため、この過程は受動的な過程と捉えることができる。A 氏は、渦巻きのイメージが浮かんで消えないので、どうなるかわからなかったが、渦巻きを作ることにした。この過程は能動的な過程と考えることができる。

この箱庭制作過程について、A 氏は調査的説明過程で、以下のように語った。丸い形をここに見たって言うかね。見たのは丸だけど、私は渦を作ったんですよ。<ふん、なるほどね>何かそのえっと丸とか、渦が見えると思ったときに<ふんうん>その、流れを作りたいとか、何かやっぱり何か動きのあるものが作りたくなかったですね。<うんうんうん>それで渦にしたら動くかもしれないと思ったのかもしれない (A 氏調査, 4-2)。この説明で、A 氏は、丸とか渦が見えると思った時に、流れや動きのあるものが作りたいという思いが湧いたことを語った。この説明も、創造における受動性と能動性に関する主観的体験の語りである、と捉えることができる。

本カテゴリーは受動性と能動性という 2 つの方向性を併せもち、それらが協働する内的プロセスであると考えられる。◆**具体例 37** では、曼陀羅展で見たような丸い図形を作りたいと思っていたわけではなかったが、A 氏は砂に丸い形を見て、渦が浮かんで消えないという主観的体験について語った。そのような受動的な過程を尊重し、A 氏は渦を作るという能動的な行為を行っている。実際に制作されることによって、浮かんで消えなかった渦は砂箱の中に形をえることができた。受動性と能動性という 2 つの方向性について、箱庭療法と関連させて記されている言及を確認する。河合隼雄(1969)は、「治療の場合は、まず自我の防衛を弱めて、無意識内の心的内容をいわば受動的に表出させる作業と、次にそれを積極的に自我に統合していこうとする働きが行われねばならない。この点箱庭は[中略]この両者の作業が適当に行われる方法であると考えられる。これは『心像の表現』に重点を置く方法として、水島恵一らの行っている『イメージ面接』の手法と類似の面を多く持っているが、クライアントが自ら外的に作品として作りあげていく点が箱庭の特徴であることができる」と指摘している(pp.23-24)。このように河合は、箱庭療法では、無意識の心的内容を受動的に表出させる作業と、それを積極的に自我に統合していく作業の両方の作業が適当に行われるとしている。本項で検討する受動性は河合の記述と同義である。しかし、本項でいう能動性は、自我に統合する働きを直接的に指しているわけではない。本項の能動性は、河合の「クライアントが自ら外的に作品として作りあげていく点」に主に焦点を合わせる。本項の能動性は、以下に示す Kalff の指摘と関連が深い、と考えられる。Kalff(1966 大原他訳 1972)は、無意識的内容が外的現実的世界においてははっきりした形をとることを箱庭療法の長所の一要因として挙げている。そして、箱庭療法においては、無意識的内容が箱庭の中に一つの形を見出しており、そのように一つの形を与えられるとき無意識の内容は、意識によって把握される前に、夢よりももっと集約され、幾分明瞭になる。そのような内から外への変化は、内的内容が外的形態を見出すという遊びの本質であるため、自然な仕方でもまれてくる、としている (p. v)。◆**具体例 37** と河合(1969)や Kalff(1966 大原他訳 1972)を総合すると、浮かんできた内的なイメージを無視することなく、尊重し、砂箱

の中に形作ることは、箱庭制作者の内界を表現することであり、そのような表現活動である「創造における受動性と能動性」は、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与すると考えることができる。

#### ◆具体例 38：A 氏第 6 回箱庭制作面接制作過程 2

A 氏は第 6 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 2 で、両手でざくざくと砂をかき混ぜ、砂を固めるという行為を行った。その行為について、内省報告に、「手を動かすうちに気分が高揚してくる。何を作ろう、何が出てくるだろう、どうなっていくのかなという気分。何でもいいので、それにのっついていこう」（A 氏内省, 6-2, 制作・感覚）と記した。何がでてくるだろうか、どうなっていくのかという内的プロセスは、イメージが出てくるのを待つ受動性であり、それに乗っついていこうという内的プロセスは能動性である、と捉えることができる。

◆具体例 38 に関して、まず、受動性について検討する。この具体例には「何が出てくるだろう、どうなっていくのかなという気分」という報告があった。織田は、箱庭療法を基礎づけている想像力を検討している。想像力を用いて自身のこころに向き合う行為を瞑想と呼び、瞑想の定義として、10 項目を挙げている。その④に「瞑想のためには必ずしも想念を集中させる必要はない。むしろ想念に自由を与えるということである。わたしたちのこころの奥から自然発生的に、何らの思いが浮かび上がるのを待つということである」と記している（織田・大住, 2008, pp.40-41）。また、田嶋(1992)は、「イメージ面接でもっとも大切なことは、患者の内的イメージの流れを活性化させ、かつそれに対してなるべく受容的な構えを向けるように援助することある。[中略] 大事なことは、意識的・能動的に『浮かべよう』『見よう』という感じではなく、『待っていれば浮かんでくるかもしれないという態度で待つ』『眺める』という受動的・受容的態度でイメージを浮かべ、体験することである」としている（p.46）。この具体例の「何が出てくるだろう、どうなっていくのかなという気分」は、イメージが出てくるのを待つ受動的・受容的態度であると、考えられる。

織田(2008)や田嶋(1992)の考えを参照すると、本項で検討している受動性は、箱庭制作面接において、箱庭制作者の内的プロセスが心の奥から自然発生的に浮かび上がるのを待つ態度であり、そのような態度を基盤とすることによって、箱庭制作面接における表現は箱庭制作者の内的プロセスにぴったりとしたものになると考えることができる。

次に、◆具体例 38 を創造における能動性の側面から考察する。箱庭制作面接では、浮かんできたイメージをとらえること、そして、それを砂箱の中に形作っていくという過程が生じる。創造における能動性はそのようなイメージをとらえ、形作るという過程に関連した箱庭制作者の主観的体験の語りや記述であると、考えられる。A 氏第 6 回箱庭制作面接で、A 氏は、何がでてくるだろうか、どうなっていくのかという気分を感じた後に、「何でもいいので、それにのっついていこう」（A 氏内省, 6-2, 制作・感覚）という感じをもった。この具体例では、自分の心の中から何が出てくるのがわからないにも関わらず、それが何であれ、その出てきたものに、のっついていこうとする A 氏の思いが記されている。この場合の「のっついていこう」は、出てきたものを尊重し、それを形づくっていこうという意味だと推測できる。

織田は、瞑想の定義⑤には「瞑想は自然発生的なこころの動き、つまりこころの思いにゆだねられるべきものであるが、同時に、わたしたちが浮かび上がってくる思いを捉えようとしなければならない」と記している（織田・大住, 2008, pp.40-41）。この態度は、イメージを

意識が能動的に「捉えよう」とする積極的な態度と考えられよう。A氏のそれによつていこうという言葉は、織田の「思いを捉えよう」とする能動性を示している、と考えられる。

また、田嶋(1992)は、イメージ療法において、自分の内界のイメージに対して、受容的・探索的構えをとることによって、イメージの体験様式の変化を引き出すことができるとしている。受容的・探索的構えの探索的構えについて、以下のように述べている(pp.112-113)。

「このところを味わってみよう」とか、「これには今はとても取り組めそうにない」とか、「もう少しは感じつづけられそうだ」などといった具合に、自分の心的構えについての判断を本人自身が行えることが必要であり、さらには「このところはこういうふうにしてみよう」などと決定したりすることが必要である。

探索的構えは、イメージへ働きかける際の安定した心的構えであり、それが必要となると、田嶋は考えている。A氏第6回箱庭制作面接の何でもいいので、それによつていこう(A氏内省, 6-2, 制作・感覚)という感じは、田嶋の探索的構えであるとも考えられる。

織田(2008)や田嶋(1992)の考えを参照すると、本項で検討している能動性は、浮かんできた内的プロセスを「捉えよう」とする積極的な態度であり、さらに捉えた内的プロセスを実際に形作り、表現していこうとする能動的な内的プロセスであると考えられる。

#### ◆具体例 39 : B氏第1回箱庭制作面接制作過程1

B氏は、第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程1で、砂箱中央付近の砂を指先で触れた。箱庭制作過程2で、砂箱中央に水源を創った。箱庭制作過程1について、内省報告に、制作する気持ちを高める(B氏内省, 1-1, 制作・意図)、何かを湧き立たせる、かきまぜるイメージ(B氏内省, 1-1, 制作・感覚)、呪術(B氏内省, 1-1, 制作・連想)、集中(B氏内省, 1-1, 制作・意味)と記した。そして、第1回ふりかえり面接で、以下のように語った。[砂の感じを探るってところからなんですけど、さあ実際作るぞ、っていうところで、まあ、自分自身気持ちを集中させるとか、湧き立たせるとか、実際砂をさわるというところで、その作業がかきまぜるっていうようなイメージであったわけです。そういったところで、連想としては、呪術(笑)っていうような、そんな、呪術って言っても自分がなにかできるわけじゃないんだけど、そんな、そういった気持でしたね。そういった中で、何かを湧きあがらせるというところの中で、真ん中に水源を作る<(中略)呪術っていうことで、もう少し言葉を加えられることってありますか？>それは、なにか、その、まあ、あの、その、自分で、頭で、意識の中で作るというよりも、呼び起こすとか、その、頭わさせるっていうんでしょうか。そんなような気持ちが動いてたっていうんでしょうか。だから、それは、変な感じかもしれないんですけど。例えば、自分の無意識下にあるものって言えば、自分のものになるし、もしくは、その、イメージを受けるっていう意味では、なんか、そういう作業に自分自身が委ねるとか、任せるとかそういう意味で]。

B氏の内省報告に記された制作する気持ちを高める(B氏内省, 1-1, 制作・意図)、何かを湧き立たせる(B氏内省, 1-1, 制作・感覚)、集中(B氏内省, 1-1, 制作・意味)は、創造における能動性と考えることができる。B氏は、砂箱中央付近の砂を指先で触れることを通して、制作に集中し、気持ちを湧き立たせ、制作する気持ちを高めようとしたのだと捉えるこ

とができる。初回の箱庭制作面接の開始にあたって、B氏が自分の内面に真摯に向き合おうとする姿勢が感じ取れる。

織田は、箱庭療法の本質の一つは、箱庭という方法が心理療法的な想像活動に実体的な形を与える技法となっている点であると指摘する(織田・大住,2008,p.9)。さらに、「箱庭療法の場合には、わたしたちの手が砂やアイテムに触れて、実体として箱庭表現を行うとともに、その表現の作業には必ず想像力が働いているのである。結局、想像力というあいまいな世界と、実体的な箱庭のアイテムに触れる体験とをつなぐものとしては、わたしたちがいかにして心理的に、さまざまな経験を切実に体験できるのかということであろう」と述べている(織田・大住,2008,p.51)。織田の指摘は、箱庭制作面接における形作っていくことの重要性について述べていると考えられる。そして、その形作る際に、箱庭制作者が心理的に真摯で、切実な体験していることが必要であるとの指摘である、と捉えられる。

織田(2008)を参照すると、制作する気持ちを高める(B氏内省,1-1,制作・意図)、集中(B氏内省,1-1,制作・意味)は、B氏が指先で砂箱中央付近の砂に触れるという行為を行うことによって、自分の中の何かを沸き立たせるとともに、沸き立ってくる何かを形にしようとしている切実で、能動的な態度と理解することができる。砂に触れるという行為によって、かきまぜるイメージが喚起される。そのイメージは砂をかきまぜると同時に内界をかきまぜるという両方の意味があったと推測することができる。そうであるならば、砂に触れる行為は、外界と内界とつなぎ、イメージに実体的な形を与える重要な準備となった、と解釈することができるだろう。

次に、呪術(B氏内省,1-1,制作・連想)という具体例について考察する。第1回ふりかえり面接での説明によると、呪術(B氏内省,1-1,制作・連想)は、受動性という能動性の両面が含まれていると考えることができた。

先に◆**具体例 38**で考察したように、箱庭制作者の内的プロセスが心の奥から自然発生的に浮かび上がるのを待つ受動性は箱庭制作面接の促進機能と考えることができる。また、河合俊雄(2002)は、箱庭療法と主体について述べる中で、「主体であるということは、むしろ自分を何かに委ねてしまい、いわばコントロールを失うことである。[中略]むしろ箱庭の方が主体のようになって、自分はできていく作品のもつ必然性にいわば従っているようになってくる。だから主体的であろうとすることは、できていく箱庭に主体を委ね、主体をいわば逆に捨てることなのである」としている。[イメージを受けるっていう意味では、なんか、そういう作業に自分自身が委ねるとか、任せる]という具体例はイメージが自然に浮かび上がってくることに委ね、任せ、意図的・意識的に作品を構成することを敢えて放棄しようとする受動的態度だと解釈できる。

[自分で、頭で、意識の中で作るというよりも、呼び起こすとか、その、顕わさせるっていうんでしょうか]は、能動的な態度であるが、箱庭を意図的・意識的に構成しようとするものではない。意識下にあるであろうイメージにB氏が呼びかけ、意識に顕れていくことを促そうとする態度と解釈できよう。イメージが顕れてくるように意識的な働きかけは行うが、構成する内容を意識的に作ることを敢えて放棄しようとする能動性だと考えることができる。

◆**具体例 39**の受動性と能動性との協働は、B氏の意図を超えた箱庭作品が作りあげられる可能性をはらんでいると理解できる。



ここまで、「創造における受動性と能動性」の具体例について様々な観点から考察してきた。a.河合隼雄の箱庭療法における受動的に表出させる作業と、積極的に自我に統合していく作業、b.Kalffの箱庭療法では無意識的内容が外的現実的世界においてはっきりした形をとるという指摘、c.織田の瞑想や心理療法的な想像活動に実体的な形を与える技法、d.田嶋の受容的・探索的構え、e.河合俊雄の主体、と関連させ、◆具体例 37～39 について考察した。これらの考察を通して、「創造における受動性と能動性」のもつ箱庭制作面接としての促進機能について確認できたと考える。

## VI-3-2. <イメージの自律性>と[作品の今後のイメージが湧いてくる]の結果および考察

### 1) <イメージの自律性>の結果および考察

「創造における受動性と能動性」の中に、カテゴリー<イメージの自律性>を位置づけた。<イメージの自律性>は、「イメージが自律的に動いたり、イメージによって思いがけない感情や感覚が生まれる内的プロセス」と定義された。<イメージの自律性>単独では、「構成から内界への影響」を表す具体例のみであった。しかし、カテゴリーの意味としては、「創造における受動性と能動性」の創造における受動性と考えるのが適切であると考え、「創造における受動性と能動性」の中に位置づけた。<イメージの自律性>について考察する。

#### ◆具体例 40：A氏第8回箱庭制作面接制作過程 10

A氏は、第8回箱庭制作面接で、白い女性の人形の周囲にペンギン(大・小)、インパラ、羊、牛、豚、亀など置いた。その箱庭制作過程に関して、調査的説明過程で、だからすごく不思議なんですけど、これ作っている最中、この辺の動物を、なじみの動物を置く時に、なんかこれが母ではなくって私になっていくなってしまうような感覚が少しあって、<あ、なるほど>うん、あれあれあれと思いつながら(A氏調査、8-10)と語った。内省報告には、義母とそれを見守る人たちというつもりで作った作品だけれど、義母の周囲にこれまでに使った動物達を置くことで、白い人形は自分でもあるのだろうかという気分になった(A氏内省、8-10、調査・意味)と記された。白い女性の人形は、義母として置かれたのだが、その周りにこれまで使ったなじみの人形を置く中で、その人形が自分になっていくような感覚が生まれた。そして、それはA氏にとって、不思議な感覚であり、意外なことだったと捉えられる。

◆具体例 40 に続いて、A氏は以下のように語った。私にも母にも共通する何かがあるなっていう、あの、女性という、うん、(間3秒)女性っていう命が持っている何か、意味のようなものを感じると言うかね(中略)家族みんなに囲まれている(中略)母を作っているうちに、動物を置いて、これがなんとなく私の私のようにも思えてきたときに、あ、あれ、私にもこんな風に周囲にいろいろな人がいるのかしらとかね、何か(間9秒)そうであればうれしいし(A氏調査、8-10)。白い人形が自分になっていくことを通して、自分と義母に共通する女性という命がもっている意味を感じた。そして、自分の周囲にいろいろな人がいることにうれしさを感じた。◆具体例 40 のイメージ体験を通して、A氏は自己の女性性に関する気づきと、自分の周りにいろいろな人がいることの喜びを感じた、と理解できる。

A氏第8回箱庭制作面接で置かれた白い女性の人形は、現物のミニチュアとしては着物

をきたまっしろな女性像である。このミニチュアはミニチュアに固定的な属性が少なく、一義的な意味やイメージに限定されにくいと考えることができる。このようなミニチュアの特性によって、A氏は白い女性のミニチュアが義母でもあり、私でもあるかのような主観的体験をし、それを語ったと解釈できる。そして、自分と義母に共通する女性という命がもっている意味や、自分の周囲にいろいろな人がいることにうれしさを感じ、自己への理解を深めることができたとして理解できる。

#### ◆具体例 41：A氏第9回箱庭制作面接制作過程 4

A氏は、第9回箱庭制作面接の箱庭制作過程3で洋館を持ってきて、砂箱に仮置きした。制作過程4で、砂箱中央寄りやや奥のあたりに、左側から右側へ川を作り、川に橋を2本渡した。制作過程5で洋館を川向こうの土地に1軒、川の手前の砂地に3軒置いた。それらの箱庭制作過程について、自発的説明過程で、作ってる途中にこの川が、あの、小川になったり、あの、山の溪流になったりくふーん>ある時に、あのベネチアの水路のような、そんなイメージもあって。一体この川は何かしらと思いつつながら、結局はこんな風になりましたね（A氏自発、9-4）と語った。制作中、川のイメージは変遷し、A氏自身がこの川はどのような川なのか確定しない内的プロセスが報告されていると捉えられる。この制作過程についてA氏は調査的説明過程で以下のように語った。映画館と学校を同じ、土地に置けなかったんですよね。まあ、あの学校は多分、私がいつか行きたいと思ってる学校なんだろうなと思うんですけど、それはまだなんか、やっぱり遠いなあっていう感じがあって。で、遠ざけた、かな。だけど、川向こうにしちゃうとあまりにも遠くなってしまうので、それも嫌だから、橋を二本掛けて、これはその、人が通れる、あの、川の上にある町というか、なんですけど、それで川を作りましたね（A氏自発、9-複数過程に亘って）。また、内省報告に以下のように記した。私自身が希望しているのは、いつか大学院へ進学すること。私がたどり着きたい学校は川の向こうにある。そしてその川はある時は小川のようにひょいと飛んで渡れるほどのものに思えたり、流れが急峻な渓谷だったりする。ベネチアの水路のようにいろいろな建物の間を縫い、狭い路地、建物の裏側をかすめ、海に注ぐ。私がまだ渡ったことのない川（A氏内省、9-4自発・意味）。

これらの語りや記述を参照すると、川のイメージが変遷し、この川はどのような川なのか確定しない内的プロセスが生じた一因は、A氏が大学院への進学について、小川のようにひょいと飛んで渡れるほどのものに思えたり、流れが急峻な渓谷のようにも感じるというように難易に関するイメージが揺れていたため、と捉えることができる。川向うの学校はやっぱり遠いなあっていう感じがあって。で、遠ざけたが、あまりにも遠くなってしまうので、それも嫌だという気持ちが箱庭制作過程で生じていたことがわかる。このように、箱庭制作過程における大学院進学の難易についての内的プロセスは、川のイメージが意図せず変遷することの一端であると考えられる。A氏はこの箱庭制作とその語りや内省を通して、自己のキャリアに関する思いを再確認あるいはより明確にできたとして解釈することができる。

◆具体例 40と41は、意図とは関係なくイメージが移り変わる主観的体験の語りや記述や、それによって、不思議、意外に感じる主観的体験の語りや記述である。このような主観的体験は、イメージの自律性であると捉えることもできる。あるいは、一義的にイメージや意味

が固定されにくい構成から箱庭制作者は多様なイメージを喚起されるとも考えることができる。また、箱庭制作者が構成を認知し、意味づける際に意図しない変遷が生まれると捉えることもできる。河合隼雄(1991)は、箱庭などの表現活動において、作っているうちに自分でも思いがけない表現が生じてきたり、作ったイメージに刺戟されて、思わぬ発展や変更が生じたり、なぜそうしたのかわけのわからぬうちに作品ができあがる場合があると述べている(p.26)。◆具体例 40 と 41 や河合隼雄(1991)の指摘にもあるように、**<イメージの自律性>**は箱庭制作面接で箱庭制作者の意図を超えた作品が作られる一因であり、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与すると考えられる。

## 2) [作品の今後のイメージが湧いてくる]の結果および考察

**<イメージの自律性>**の中に、[作品の今後のイメージが湧いてくる]があった。この概念は、「現在の作品から今後展開していくイメージが湧いてくる内的プロセス」と定義された。以下にその具体例を挙げる。

### ◆具体例 42 : A 氏第 4 回箱庭制作面接複数過程に亘って

A 氏は、第 4 回箱庭制作面接で、渦巻きの中にいる亀を中心に向かって進めたり、戻したりという行為を繰り返した。その制作過程について A 氏は、調査的説明過程でだから、本当に不思議なんですけど、こう、箱庭のアイテムが増えていくと、ここまでやっと進められたというか (A 氏調査, 4-8) と語った。箱庭制作過程 16 で、亀をもっと進めて、渦巻きの全行程の 6 割ほどの位置(砂箱右中央部)に置いた。それらの箱庭制作過程について、A 氏は調査的説明過程で、動物がいる領域が構成されたことによって、最終的に置いた位置に無理なく亀を進めることができた。亀は制作で最終的に置かれた位置よりもさらに先にまで行けるかもしれないと語った(p.52 ◆具体例 21 参照)。

だから、本当に不思議なんですけど、こう、箱庭のアイテムが増えていくと、ここまでやっと進められたというかという語りからもわかるように、亀が進むという構成は、A 氏が意図したものではなく、他の構成からの影響があったことで、やっと進められたというものであった。亀が制作で最終的に置かれた位置よりもさらに先にまで行けるかもしれないという語りも、語りつつ自然に湧いてきた感覚である。これらの語りから、[作品の今後のイメージが湧いてくる]によって、A 氏第 4 回箱庭制作面接の構成は A 氏の意図を超えたものとなったと理解できる。意図を超えた構成とその語りを通して、A 氏は自己への理解を深めることができたと捉えられる。また、自己像である亀が先まで進んでいくというイメージは、A 氏の成長を示唆していると解釈できる。

### ◆具体例 43 : B 氏第 6 回箱庭制作面接複数過程に亘って

B 氏は第 6 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 11 で、鳥の巣を島の中央の林の横に置いた。その後、複数の制作過程に亘って、島の中央部の森に針葉樹を増やしていった。それらの箱庭制作過程について B 氏は自発的説明過程で気持ち的には、再生していくという印象、気持ちがあって (B 氏自発, 6-複数過程に亘って) と語った(pp.63-64 ◆具体例 30 参照)。

B 氏は第 6 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 11 について、内省報告に豊かな実りの予感(B 氏内省, 6-11, 制作・感覚)、発展の予感(B 氏内省, 6-11, 制作・意味)と記した。第 6 回ふ

りかえり面接では、その内省報告について、[陸地に住む生き物たちが増えてくっという。これもまあ、このところで、発展の予感っていうところです]と語った。豊かな実りや陸に住む生き物が増えていくというイメージを B 氏は明確にもった。それは、第 6 回箱庭制作面接で実際におかれた構成よりも、もっと実りが豊かで、生き物が増えている世界であると推測できる。それを鳥の巣を置くという構成で表したと捉えられる。

複数の箱庭制作過程に亘って、島の中央部の森に針葉樹を増やしていった箱庭制作過程について、B 氏は内省報告に これからも生い茂る感じ (B 氏内省, 6-17, 制作・感覚), 創造性 (B 氏, 6-17, 制作・意図), 再生と発展 (B 氏, 6-30, 制作・意味) と記した。そして、第 6 回ふりかえり面接で、箱庭制作過程 17 について、[イメージとしては、これからも生い茂る感じで、それは、創造性っていうか、まあ、なんていうんでしょうかね、だんだん森っていう生態系が出来上がって、広がっていくっていう意味での、そういう意味での創造性っていうところで]と語った。制作過程 30 について、[それは意味としては再生で、発展していくっていうか。そういうところが表現できたかなっていうところで]と説明した。島の中央部の森が、今後、実際におかれた構成よりも、さらに広がり、再生・発展していくイメージを B 氏が明確にもっており、その一端がこの箱庭制作過程で表現された、と捉えられる。

B 氏第 6 回箱庭制作面接では再生がテーマとなった。◆具体例 43 は、実際におかれた構成よりも、もっと実りが豊かで、生き物が増えていくイメージや、森が今後、実際におかれた構成よりも、さらに広がり、再生・発展していくイメージを示していると理解できる。

第 6 回箱庭制作面接で B 氏は再生を表す木々の構成について、調査的説明過程で 自然の状態。いわゆる、意識的にはなく、っていう感じで置きたかった (B 氏調査, 6-複数過程に亘って) と語った。島の貝殻について B 氏は調査的説明過程で できるだけ、自然な感じを出したくて、実いうと、貝殻とか、このあたりのものが、ほんとは最初は、ピーと投げて、偶然に、なんか、したかったんだけど (B 氏調査, 6-3) と語った。このように B 氏は島の木々や貝殻の構成を意識的ではなく、貝殻を投げることによって偶然の配置にしようとするほど自然な感じを出したいと思っていた。このような自然な感じを出したいという B 氏の思いを踏まえると、島の中央部の森が、実際におかれた構成よりも、今後さらに広がり、再生・発展していくイメージは、構成から自然に喚起されたものであり、今回の箱庭作品は、B 氏の意図を超えたものになったと理解できる。[作品の今後のイメージが湧いてくる]ことによる意図を超えた構成とその語りを通して、B 氏は自己の内的プロセスについて理解を深めることができたことと捉えられる。

以下の◆具体例 44 では、[作品の今後のイメージが湧いてくる]という内的プロセスが調査的説明過程で生じたことが明示的に語られている。そのため、◆具体例 44 は箱庭制作過程における促進機能ではなく、語りによる促進機能ということになる。ただ、[作品の今後のイメージが湧いてくる]の具体例としては、わかりやすい例であるため、以下に挙げる。そして、調査的説明過程で[作品の今後のイメージが湧いてくる]という内的プロセスが生じたことと箱庭制作過程における内的プロセスとの関連について考察する。

#### ◆具体例 44 : A 氏第 3 回箱庭制作面接制作過程 13

A 氏は、第 3 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 13 で、回遊しているシャチ、イルカ、亀を見つめ、亀の頭の方を陸側から海の沖合の方に変えた。A 氏はその箱庭制作過程に関して、

調査的説明過程で以下のように語った。説明し終わって感じることもなんですけどねくうん> (間 11 秒) カメが早く出て行きたがっているという感じがしてきますね。<はあん> 出て行け、出て行くというか<ふん> 向こうの方に進みたがっているというね (中略) これはこれである、私の箱庭ですけどもう一個できそうというかね、カメが<ふん> 沖へ進んでいくところが、何かそんなくはあん まださらに沖へ進んでいきそうな場面ができそう> うん <また違ったところなんやそしたらそれは> そうですね、違ったところですね景色として <ふんふん> (間 8 秒) ふんへえ (笑) へへ<なに?> へえ、自分で面白いなど。へえ、あ、そうなのと思って。へえ、あ、そうなの、カメさん早く行きたいわけ、へええ 知らなかった あと思いましたがね (A 氏調査, 3-13)。

箱庭制作過程 13 で亀の頭の方を変えろという構成についての A 氏の語りを確認する。A 氏は自発的説明過程で、いろいろ試そうと思って、ふっと亀の置き方を変えたらばくうん> あー、急になんか違う感じになって、がらりと。あのああ、沖へ出て行くのも気分がいいなと思ってくうんうん> 沖へ出て行く風に決めましたね (A 氏自発, 3-13) と語った。調査的説明過程で、本具体例の少し前に A 氏はもう亀は、そういう意味では亀は好き勝手にいきます。(中略) 亀は好き勝手にいきますね (A 氏調査, 3-13) と語った。その後、本具体例が、調査的説明過程の終盤に語られた。自発的説明過程の語りは、今回の箱庭制作過程におけるこの構成に関する内的プロセスを忠実に語っている、と捉えられる。調査的説明過程での亀は好き勝手にいきますねは、亀が自分の意思で進んでいくかのような語りになっている。この時点で、亀が自律的に、自分の意思で進んでいくというイメージの展開が生じた、と理解できる。さらにイメージが展開し、カメが早く出て行きたがっているという感じがして、今回の箱庭作品よりもさらに沖に亀が進んだ違った景色のもう一つの箱庭作品ができそうな感覚が生まれたと捉えられる。そして、そのようにイメージが展開したことについてへえ、自分で面白いな。へえ、あ、そうなのと思ってと A 氏は意外さや面白さを感じた、と理解できる。

このように、◆具体例 44 は、調査的説明過程で生じたと考えられる。では、◆具体例 44 は、箱庭制作過程とまったく無関係なのだろうか？ 箱庭制作過程 13 に関するデータを確認する。A 氏は箱庭制作過程 13 で以下のような行為を行った。

- |             |                        |
|-------------|------------------------|
| 26:16~      | 砂箱の様々な領域を見つめる。         |
| 27:02~      | カニが海に向くように方向を変える。      |
| 27:03~      | 砂箱を見つめる。               |
| 27:29~      | 亀の頭の方を陸側から海の沖合の方向に変える。 |
| 27:32~27:50 | 砂箱を見つめる。               |

箱庭制作開始 26 分 16 秒から 46 秒間、A 氏は砂箱の様々な領域を見つめていた。そして、27 分 2 秒でカニが海に向くように方向を変えた。その行為について、調査的説明過程でカニも多分こっち向いてたんですよ、最初、陸側をくうんうんうん> うーんと、ま、海から上がってきてるものもいるんだなくふうーん> と思って置いたんですけどくうんうん> うーんと、置き直してみても、海に帰って行くところくうん、うん> も悪くないなくうん、うん> 帰って行く方にしましたね (A 氏自発, 3-13) と語った。27 分 3 秒から 26 秒間砂箱を見つめ、27 分 29 秒で亀の頭の方を陸側から海の沖合の方向に変えた。

すると、いろいろ試そうと思って (A 氏自発, 3-13) いたのは、箱庭制作開始 26 分 16 秒

からの 46 秒間と、27 分 3 秒からの 26 秒間、砂箱を見つめていた時のことだと推測できる。いろいろ試そうと思い、まずカニの向きを海の方に向けた。その構成の変化に海に帰って行くところ(中略)も悪くないなと感じた。そう感じた後に、さらなる試みとして、亀の頭の方を陸側から海の沖合の方向に変えた、と推測できる。その構成の変化について、A 氏は自発的説明過程で、沖に出ていくのも気分がいいなと思って、沖へ出ていくように決めたと語った。

箱庭制作過程 13 で、A 氏はカニと亀をともに海の沖合を向く方向に変えている。その構成の変更は A 氏の内的プロセスの変化を反映していると考えられる。箱庭制作過程では、陸からそれほど離れていないところで亀は向きを変えろという構成で終わっている。しかし、沖へ出て行く風に決めましたねという自発的説明過程の語りには、すでに亀が沖に出ていこうとする動きが内包されていると解釈できる。箱庭制作過程と自発的説明過程のデータを総合すると、A 氏のイメージの中では、亀は沖に向かった動きを始めかけている、と推測できる。亀に進みだす準備が整っていたことは、調査的説明過程で、もう一つの箱庭ができそうという作品の今後のイメージが湧いてくる萌芽であったと推測できる。

[作品の今後のイメージが湧いてくる]は、イメージの自律性の特殊な例と考えられる。◆**具体例 42～44**には、実際の構成よりも展開されたイメージが顕れている。◆**具体例 42～44**は、自律的に動くイメージによって、最終的に作品に表現された構成からさらに展開されたイメージが箱庭制作者にもたらされた主観的体験の語りや記述だと捉えられる。

東山(1994)は、以下のように言及している。「初回に凝縮された箱庭で示された課題が、次回から別々なテーマで箱庭として置かれることは珍しくない」(p.19)。「箱庭療法では、第 1 回目の箱庭は、初回夢と類似して、全体的なテーマやプロセスの予測、目的地などが表現されるのに対して、次回からはどのようなテーマから取りかかるかとか、テーマの一部がより鮮明な形をとって示されることが多い」(p.89)。また、河合隼雄(1967)は、夢の機能の一つとして、展望的な夢を挙げ、それについて、遠い将来へのプランのように意味をもって現れるもの、としている(p.154)。東山(1994)や河合隼雄(1967)の指摘を参照すると、イメージは現時点よりも先の内的プロセスや面接の展開を展望する機能(以後、イメージの展望機能と記す)をもっていると考えられる。

◆**具体例 42～44**は、イメージの自律性やイメージの展望機能によって、実際に作られた作品よりも先のイメージが生じる場合があることを示していると考えられる。例えば、A 氏第 3 回箱庭制作面接では、調査的説明過程で、亀が自分の意思で進んでいくというイメージの展開、今回の箱庭よりもさらに沖に亀が進んだ違った景色のもう一つの箱庭作品ができそうな感覚が生まれた。そのようにイメージが展開したことについて、A 氏が意外さや面白さを感じたように、[作品の今後のイメージが湧いてくる]には、箱庭制作者の意図を超えたイメージの展開が示されたと捉えられる。箱庭制作者の意図を超えたイメージの展開によって、箱庭作品は、箱庭制作者の意図を超えた作品となる可能性をもつ。このようにして、[作品の今後のイメージが湧いてくる]は、箱庭制作面接の促進機能として働くと考えられる。

### VI-3-3. <イメージの自律性>に含まれない 2 概念の結果および考察

《創造における受動性と能動性》の中には、<イメージの自律性>に含まれない 2 概念 [イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]、[非意図的な構成を基に、意図的に構

成する内的プロセス]があった。[イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]は、創造における受動性と考えられた。[非意図的な構成を基に、意図的に構成する内的プロセス]は、創造において受動性から能動性に移行する内的プロセスと考えられた。

#### 1) [イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]の結果および考察

創造における受動性と考えられた概念[イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]は、「イメージや感覚などが自発的に出てくるのを待つ内的プロセス」と定義された。

#### ◆具体例 45 : A 氏第 1 回箱庭制作面接制作過程 2

A 氏は、第 1 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 2 で、以下のような行為を行った。

- 4:07～ 右手指先で砂に触る。一つかみして戻す。18 秒間右手甲側の指で砂をゆっくりならす。
- 4:35～ 砂を見つめる
- 4:48～ 右手で砂をつかみ、戻すことを繰り返す。
- 5:43～6:38 右手でつかんだ砂を左手にかける。

そのような行為に関して、調査的説明過程で、以下のように語った。さて、一体何をつくらうっていうので。こう、ねえ、手で触っていると、あの作りたいものが出てくるかなあくうんうん>ほんとは、もう少しこう、ねえざく、ざくって、遊んでみようかなと思ったんだけど、そうすると何か壊れちゃう気もしたので。<ああ。なるほど>で、こう、さらさらと遊んでみましたね (A 氏調査, 1-2)。

箱庭制作過程 2 における砂に触れる行為や砂を見つめる行為は、作りたいものが出てくるのを待つ内的プロセスの顕れ、と捉えることができる。ざく、ざくって、遊んでみようかなと思ったんだけど、そうすると何か壊れちゃう気もしたのでという語りがある。この語りは、A 氏がとても丁寧に自分の内面に触れていたことを示すと考えられる。そのような内的プロセスは、A 氏の砂の触れ方にも表れていた。上に挙げた A 氏の言葉を受け、筆者は、<優しい、柔らかく触れるような感じの触れ方だったなあ、って思った>と箱庭制作中に A 氏が砂に触れる様子を見て感じた筆者の主観的体験を語った。このように砂にも自分の内的プロセスにも丁寧に触れることを行いつつ、A 氏はイメージや感覚が顕れてくるのを待っていた、と捉えることができる。

#### ◆具体例 46 : A 氏第 6 回箱庭制作面接制作過程 1～2

また、《創造における受動性と能動性》でも検討した A 氏第 6 回箱庭制作面接の具体例では、砂をかきまぜる行為により、A 氏は、気分が高揚していくことを感じ、構成のイメージが出てくるのを待つ内的プロセスがあった(p.72 ◆具体例 38 参照)。

◆具体例 45 と 46 は、砂に触れるという行為に伴った[イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]についての主観的体験の語りや記述である◆具体例 45 は、砂にも自分の内的プロセスにも丁寧に触れることを行いつつ、A 氏はイメージや感覚が顕れてくるのを待っていた、と捉えることができた。A 氏が第 1 回箱庭制作面接の冒頭から、このように丁寧に自己の内的プロセスに関わり、イメージや感覚が顕れてくるのを待つ姿勢は、箱庭制作面接が A 氏の内的プロセスを反映した面接になるための重要な準備となったと理解できる。

◆具体例 46 では、砂をかきまぜる行為によって、A 氏は、気分が高揚していくことを感じが生まれている。このような砂をかきまぜつつ生まれた内的プロセスは、A 氏が箱庭制作に強くコミットすることを促したと解釈できる。このように[イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]は、箱庭制作者が箱庭制作面接にコミットすることを促したり、丁寧に自己の内的プロセスに関わることに寄与すると考えることができる。そのようにして作られた箱庭作品は、箱庭制作者の内的プロセスを反映したものとなり、その制作を通して、箱庭制作者の自己理解の促進に寄与する可能性があるだろう。

#### ◆具体例 47：A 氏第 9 回箱庭制作面接制作過程 2

A 氏は第 9 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 2 で、どの棚もとばさないで、あちらこちらの棚の玩具を見た。その制作過程について、内省報告に自分の心に触れる何かを探して、ゆっくり棚を見る。気持ちが惹かれるのは何かしら、と（A 氏内省, 9-2, 制作・意図）と記した。ミニチュアを見つつ生じた内的プロセスについて、A 氏は調査的説明過程で今日は砂を触らないですぐ玩具を見に行っただけですけど、くそだったね、そうだったね>その時に、あの、ザーッと玩具を見回して、今日は何か建物が気になるなと思ったんですね。うん、で、他の見てもぴんと来ないし、建物見てて、あのお、こういう、あの、なんていう、洋風の建物を見たときに、何か、映画館、最近ちょっと映画、あれ観たいなこれ観たいなあってのがあって、あの、映画を観に行きたいなっていうのがなんか思い出されて、あ、映画を観に行くところにしようというのがその何か建物と結びついたんですね（A 氏調査, 9-複数過程に亘って）と語った。A 氏はミニチュアを見回す中で、建物が気になることに気づき、さらに最近映画を観に行きたいということを思い出した。

#### ◆具体例 48：B 氏第 2 回箱庭制作面接制作過程 1

B 氏は第 2 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 1 の内省報告に、制作内容として「イメージを引き出してくれそうな人形を探す」と記した。その制作過程について内省報告に事前の制作意図がなく、初歩が踏めない（B 氏内省, 2-1, 制作・意図）と記した。そして、第 1 回ふりかえり面接で、[その目の前にあるフィギュアから気持ちが動かされるものによって、つながっていきこうという感じの中で、始まりました。その反面、なんか、重いものを感じて、気持ちに蓋をされたような感じというのがある。まあ、そういう、その、自分から、っていうよりも、他動的なっていうか。他から動かされて、制作を始めていきこうって、そんな感じ]と語った。この「つながろう」の目的語は不明であるが、自分の内的プロセスにつながり、それを受けとめるということかもしれないし、箱庭制作面接に入っていこうという意味かもしれない。その後、B 氏は重い感じ、気持ちに蓋をされたような感じにあう仕切りを見つけた。

◆具体例 47 と 48 は、棚でミニチュアを探す行為に伴う[イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]についての主観的体験の語りや記述である。◆具体例 47 では、気持ちが惹かれるミニチュアを探している。そして、A 氏はミニチュアを見てまわる中で、建物が気になることに気づき、さらに最近映画を観に行きたいということを思い出し、洋風の建物を選んだ。この具体例では、ミニチュアを見てまわることを通して、いま・この自分の内的プロセスに気づいた。そこから最近、自分が思っていたことが想起され、構成につながっている。◆具体例 48 では、ミニチュアから気持ちが動かされるものによって、つながろうとい



う感じがあったことが語られている。どちらの具体例も、ミニチュアを探す行為を通して、イメージや感覚が出てくるのを待っている内的プロセスであり、このようにして待った後に自然に浮かび上がってきた内的プロセスが構成に反映されていった。◆具体例 47 と 48 に示された[イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]は、構成が箱庭制作者の内的プロセスにぴったりなものになることに寄与し、そのような構成を通して、箱庭制作者は自己への理解を深めることができると推測できる。

◆具体例 45～48 は、《創造における受動性と能動性》でも検討した、受容的な構え、受動的・受容的態度(田嶋, 1992, p.46)や織田が瞑想について④に記した、こころの奥から自然発生的に、何らの思いが浮かび上がるのを待つ態度である、と考えられる(織田・大住, 2008, pp.40-41)。このような受動性は、箱庭療法で必要とされる「自我の防衛を弱めて、無意識内の心的内容をいわば受動的に表出させる作業」(河合隼雄, 1969, pp.23-24)であると理解できる。

また、箱庭療法において、砂に触れることが適度な退行を引き起こすことが多くの研究者によって指摘されている(河合隼雄, 1969, p.22; 木村, 1985, p.21; 他)。◆具体例 45 と 46 でも、箱庭制作者は砂に触れている。砂に触れることによって、気分が高揚する感じが生まれることが示された。

◆具体例 45～48 や先行研究に示されたように、[イメージや感覚が出てくるのを待つ内的プロセス]は箱庭制作面接の促進機能として働くと考えられる。

## 2) [非意図的な構成を基に、意図的に構成する内的プロセス]の結果および考察

創造において受動性から能動性に移行する内的プロセスと考えられた[非意図的な構成を基に、意図的に構成する内的プロセス]は、「意図せずにできた構成に触発され、それを基に意図的に構成する内的プロセス」と定義された。

### ◆具体例 49 : A 氏第 1 回箱庭制作面接制作過程 4～5, 10, 13

A 氏は、第 1 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 4 で、海を作るにあたって、砂を砂箱左上の領域に運び移した。制作過程 5 で、砂箱中央奥に針葉樹、広葉樹を置いた。制作過程 10 で、家を砂箱左上に置いた。制作過程 13 で、砂箱奥に花をたくさん埋めた。それらの箱庭制作過程について、自発的説明過程で、あちらにこう自然に山になっていたの<そうね>まあ、あの緑と飾るものとなんか、おうちが欲しくなった (A 氏自発, 1-複数過程に亘って)、と語った。海を作るために運んだ砂により、砂箱左上に意図せず、自然に山ができた。その意図しない構成に触発されて、その領域に緑や飾るものや家がほしくなり、それらが置かれた、と捉えられる。

### ◆具体例 50 : A 氏第 7 回箱庭制作面接制作過程 1～3

A 氏は、第 7 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 1 で、砂に水を含ませ、全体をよく混ぜた。手のひらで砂を押し付けたり、握ったりした。制作過程 2 では、砂を力強くかき混ぜつつ、「こうやって混ぜてますけど、さてどうしようという感じですね」と発言した。制作過程 3 で左側にけわしい崖のある半島を作っていた(写真 16)。その箱庭制作過程について調査的説明過程で以下のように語った。さてじゃあ、どんなのが出てくるかなってわくわくして、

いった部分があった。(A氏調査, 7-2)で, 何も決めずにやっているのだから, 混ぜている砂がなんとなくこう, 半島のような形と言うか, <うん。うん。うん。>そんなふうに固まってきたときに, そうだ半島, 陸続きの, 何か, 岬のような突端の部分を作るとおもしろいかもしれないと思って, やり始めて, その辺までおもしろかったですね (A氏調査, 7-3)。作るものを決めずに, A氏は



写真 16 A氏第7回作品

砂をかき混ぜていた。その砂

が半島のような形に固まってきたのを見たA氏は半島の岬のようなものを作るとおもしろいかもしれないと思い, その時点から意図的に半島を作っていたという主観的体験が語られた, と考えられる。

◆具体例 49 と 50 は, 砂の構成に関するものであった。次の具体例は, それに加えて, 置かれたミニチュアなども含めた構成全体が, 連想や記憶を触発し, 意図的な構成が始まる例である。

#### ◆具体例 51: B氏第4回箱庭制作面接複数過程に亘って

B氏は, 第4回箱庭制作面接で, 海や川, 陸地に橋や生き物を構成していった。そこに構成された風景を見て, 箱庭制作過程 14 で, かつて行ったことのある土地やそこにいた人々のことを思い出した。そして, その人々やその土地の風景を構成していった。それらの箱庭制作過程について, 調査的説明過程で以下のように語った。 <海を作る時に, 少しあれでしたっけ (えー) ここが高くなったんでしたっけ?>はい。あの, それも, 実のところ, ほんとに偶然できてきたというか。こうやって作って途中で, 砂を寄せる。寄せるとその部分が小高くなるということで, まあ, この部分をちょっと脇に追いやらなきゃということで。ポンポン, こっちがわに寄せたところで, そういった起伏もなんか連想をこの, 確かこんな風景あったぞみたいなところで。ええ。うん。はい。あの, なんか, 動かされていった。そんなしょうと思っていうより, こうやって置いていたら (B氏調査, 4-複数過程に亘って)。B氏は, 海を作るために, 砂を砂箱の上の方に寄せた。それによってその部分が小高くなった。それは意図したものではなく, 偶然の産物であった。その後, 制作を続ける中で, 確かこんな風景あったぞとかかつて行ったことのある土地やそこにいた人々のことを思い出した。このように, それまでの制作で作られた構成から, 連想が働き, こころが動かされ, その後, 意図的に, その土地やそこにいる人々に関連する構成を作っていたことについての主観的体験が語られた, と捉えられる。

◆具体例 49~51 はともに, 構成から非意図的に箱庭制作者の内的プロセスが刺激され,

その刺激によって生まれた感覚やイメージに基づいて、意図的に構成を始めるという場合があることを示している。これは、箱庭制作過程が「意識と無意識、内界と外界の交錯するところに生じてきたもの」(河合隼雄,1969,p.17)であり、意識と無意識の協働によって生み出されるものであること示している、と考えられる。これらの具体例もまた、受動性を基盤にして、能動性が発揮されたものと考えることができよう。また、この能動性は、箱庭療法の特徴の一つである、クライアントが自ら外的に作品として作りあげていく(河合,1969,p.24)、形作ることに関する能動性である。箱庭制作者は、浮かんできたイメージを受容的構え(田嶋, 1992,pp.112-113)で捉え、今度はそれを砂箱の中に能動的に形作っていくという創造における能動性が示されている、と捉えられる。このように[非意図的な構成を基に、意図的に構成する内的プロセス]は箱庭制作面接の促進機能として働くと考えられる。

#### VI-3-4. <創造をめぐる肯定的感情と否定的感情>内の2概念の結果および考察

3)内界と構成との双方向の影響に関するカテゴリー、概念として、VI-3-1.に挙げた「創造における受動性と能動性」とは別に、2概念[創造の喜び]と[作品に対して、否定的な感情や感覚をもつプロセス]があった。そして、それらを包括するカテゴリーとして、<創造をめぐる肯定的感情と否定的感情>を理論的に生成した。

##### 1)[創造の喜び]の結果および考察

[創造の喜び]は、創造をめぐる肯定的感情を示す概念である。本概念は、「制作を通して、自己の内的世界を創造できたことの喜び」と定義された。

#### ◆具体例 52 : A氏第1回箱庭制作面接全体的感想

A氏は第1回箱庭制作面接の自発的説明過程で、作りはじめ、大分、何にも気持ちの上でも用意してこなかったの、何をつくろうと思ってたんですけど。うん、ちょっと嬉しい。くあ、そう、ほんと、作品、満足・・・>うん、満足(A氏自発,1-全体的感想)と語った。調査的説明過程で、以下のように語った。こんな世界があたしの中にあっただ、いいもの見つけた、っていうような感じかな。(中略)作り始めたら、あの、どんどんこうしたいっていうのが出てきてくうん>わたしの中から、こんな世界が、あの、出てきてくれたんだなあ、って。自分でこういう世界を、わたしの目に見えるように、作ってあげられて、嬉しい、っていう。(中略)どうだ。<ん?>どうだっていや、ちょっと自慢げに訊いちゃいました(A氏調査,1-全体的感想)。A氏はこの回の作品全体について、制作できたことへの喜びを語った。この具体例には2種類の主観的体験が語られている。a.この世界が出てきてくれたことというのは、出てきたイメージを受け取る受動的な体験である。それに対して、b.いいものを見つけた、目に見えるように作ってあげられたというのは、イメージを見つけ、さらにそれを創造していく能動的な体験である。その両者が共に語られ、それにA氏は喜びを感じている。

まず、aの受動的な体験から考察する。A氏は、作り始めたら、あの、どんどんこうしたいっていうのが出てきてと語っている。この語りは、自分が意図的に作るのではなく、作りたいものが自然に湧き出てきたこと、そして、その湧き出てきたものに満足している内的プロセスであると考えられる。また、こんな世界が、あの、出てきてくれたんだなあという語りか

らは、世界が出てきてくれたことへの感謝が感じ取れる。

岡田(1984)は創造に関する Jung の考えを、無意識に創造的なものが内包されていると紹介し、創造は意識をいかに弱め、無意識的なものからのエネルギーを意識が把握するかにかかっている、と述べている(p.25)。河合隼雄(1991)もまた、「心の深い層が関連してくると、自分でも思いがけないものを作ったり、作っている過程において、『やった』というようなパフォーマンスの快感を感じる時もある」と述べている(p.127)。岡田(1984)や河合隼雄(1991)の考えを参照すると、◆具体例 52 の a の受動的な体験は、自分の内的世界が自然に浮かび上がってきて、その内的世界に対して、A 氏が いいもの と感じ、それに 満足 することができた体験であると理解できる。そして、そのいいものは、自分で作ったものではなく、自然に出てきてくれたものであるため、そのような内的世界を与えてもらったことへの感謝の喜びであるとも考えられる。

もう一方の側面 b は、箱庭制作者が自ら外的に作品として作りあげていくという箱庭制作面接の特徴に関連していると考えられる(河合隼雄,1969,p.24)。織田もまた、「箱庭療法が心理療法技法のひとつとして、ほかの技法と違うもっとも大きな特徴のひとつは、クライアントがこころの宇宙を再構築する過程に、自ら身体(両手)をもって参加できるという点であろう」と述べている(織田・大住,2008,p.34)。A 氏は、こんな世界があたりの中にあっただ、いいもの見つけた、っていうような感じかなと語っている。この見つけるという行為の主体は、A 氏である。A 氏は、出てきたものをちゃんと見つけることができたため、次に 自分でこういう世界を、わたしの目に見えるように、作ってあげられた。内的世界を A 氏自らが砂箱の中に、目に見えるものとして形づくることができた。そのような自己が行った能動的行為に 嬉しい と感じた。このようにイメージを見つけ、さらにそれを創造していく能動的な体験もまた箱庭制作面接の重要な過程の一つである。

◆具体例 52 で、心の深い層のイメージを受動的に受け取り、それを能動的に構成していくことができた、その両方に、A 氏は どうだ と言いたくなるような ちょっと自慢げ な感覚をもったと理解できよう。この具体例は、a の自然に出てきた内的世界を受けとめる受動的な体験と、b の箱庭制作者が自ら外的に作品として作りあげていく能動的な体験の協働による創造の喜びが示されていると解釈できる。A 氏は自己の内的世界を発見することを通して自己理解を深めることができたと理解できる。そして、A 氏が [創造の喜び] を感じることは、以後の箱庭制作への動機づけを高めることになったと推測できる。◆具体例 52 のように、自己の内的世界の発見を伴った [創造の喜び] は、自己理解を深めることや箱庭制作面接により深くコミットすることを促し、継続的な箱庭制作面接が A 氏の自己成長を促進する創造的なものになることに寄与すると解釈できよう。

#### ◆具体例 53 : A 氏第 9 回箱庭制作面接制作過程 6, 全体的感想

A 氏は、第 9 回箱庭制作面接で、初めて日常世界に近い、町の風景を作った。また、今回の教会について A 氏は、調査的説明過程で これはくそうだね>もっと、もっとちゃんと現実の世界に降りてきてるもの(中略)ちょっとうれしいですね、何か。<ふーん、うれしい>うん、なんか私の内側にそういうものが根付いたようなそんな感じがします(A 氏調査, 9-6) と語った。今回の構成を通して、A 氏は宗教的イメージの変化、自分の変化や成長に気づき、喜びを感じることはできた(pp.67-68 ◆具体例 34 参照)。

A氏は、今回の作品について、調査的説明過程で、制作中に感じた気持ちよさについて、この作品が10回の最終回のような気持ちがあったと語った。そして、その理由について、以下のように語られた。自分の中で思い描いていた10回目の箱庭って、何かこう、幸せな箱庭で終わるといふか、現場に帰るような感じで終わるといふか、そんなイメージがあるんですよね。で、これ作っていて私はとても気持ち良かったので、あ、もう、この気持ちよさは、とかね、あ、もうこの現実の感じは、あの、えー、楠本先生のドアを開けたらすぐ私はなんか映画館に行っちゃいそうなの、そんな感じがあって、作ってる最中に(A氏調査,9-全体的感想)。面接室のドアを開けたら、すぐに映画館に行ってしまうような感覚について、内省報告では、ドアを開けたらそのまま、自分の欲求のままに現実世界で自由に行動を始めそう。足が軽くなっているといふか、からだが出ているといふか、頭であれこれ考えないで、まず体が行動している、そんな感じ(A氏内省,9-全体的感想,調査・意味)と記された。A氏は、この作品が第10回の最終回の作品のように感じたことや、この箱庭制作を通して感じた幸せや気持ちよさを語っている。A氏が第9回箱庭制作面接で感じた気持ちよさは、足が軽く、からだが出た、まずからだが出ているような身体感覚を伴った自由さであったと捉えられる。

A氏が今回の箱庭制作面接で感じた喜びにはa.自分の宗教性に関する変化や成長に気づいた喜びと、b.身体性を伴った自由さ、気持ちよさ、の2つの要素がある。

a.教会で表されるような宗教性が自分の内面に根付いたことのような感じに気づいたことを通して、A氏は[創造の喜び]を感じた。この喜びは自己の変化や成長に気づいた喜びである。

b. A氏は、これ作っていて私はとても気持ち良かったと語っている。また、ドアを開けたらそのまま、自分の欲求のままに現実世界で自由に行動を始めそうとも語っている。これらの語りから、A氏が今回の箱庭制作面接で自由さを感じ、その自由さに気持ちよさを感じていたと解釈できる。Kalf(1966 大原他訳 1972)は、箱庭療法において遊びを重視している。そして、遊びの一要素として、自発的な自由なく喜びを挙げている。A氏第9回箱庭制作面接で感じた気持ちよさは、一つには、このような箱庭制作面接がもつ遊びの自由さがもたらしたものと考えられる。

足が軽くなっているといふか、からだが出ているといふか、頭であれこれ考えないで、まず体が行動している、そんな感じとあるように、A氏は、身体をもった自分が現実世界の中で、自由に行動できるという身体性を体験した。このような身体性の言及は、第9回箱庭制作面接で初めてなされた。箱庭制作過程でこのような構成を行い、自由に行動できる身体性を初めて体験したA氏は、その構成や体験から自己の変化・成長を実感したと理解できる。

このように[創造の喜び]には自己の変化や成長に関する喜びが表現されており、箱庭制作面接の促進機能として働くと考えることができる。

## 2) [作品に対して、否定的な感情や感覚をもつプロセス]の結果および考察

[作品に対して、否定的な感情や感覚をもつプロセス]は、創造をめぐる否定的感情を示す概念である。本概念は、「自分の作品に対して、否定的な感情や感覚をもつ内的プロセス」と定義された。

#### ◆具体例 54 : A 氏第 7 回箱庭制作面接全体的感想

以下に示す具体例は、作品全体に対する否定的感情が制作中のみならず、制作終了後も続いていた例である。A 氏第 7 回箱庭制作面接の自発的説明過程で、A 氏は途中で本当に何か嫌になってしまっていて、これ作るのが、作り続けるのが (A 氏自発, 7-全体的感想) と語った。調査的説明過程では、まず、この島と半島と灯台だけでよかったのかもしれないですね。〈ふん〉それと他のものはもう本当に、なんていうんでしょうね (間 34 秒) 表層的なものに感じられて、他のものが。愛着が湧かないです。〈あ、ふーん〉 ああ、でもそれを言うのがすごく悲しい。自分が作っておきながら愛着が湧かないなんて。すごく悲しいですね (A 氏調査, 7-複数過程に亘って) と語られた。そして、このような構成になった要因の一つとして、内省報告に以下のように記された。成り行きに任せて作ったことに少し後悔のような、残念なような気持ちがある。出来上がった作品を見ても喜べない。どこか白々しい感じを抱いている (A 氏内省, 7-複数過程に亘って, 自発・感覚)。さらに、以下のような要因もあった。私自身がこの箱庭の世界の中で、生き生きとしてられない。想像をふくらませて自由に生きることが (飛び回ることが) 出来ない。陸地の形状が出来たあたりで、こんな世界を作ろうというアイデアが浮かんできて、それに従って、途中で変更することもなく作り上げてしまった。あらかじめ出来上がったストーリーに玩具を当てはめて置いていったかのようで、そこには私のオリジナリティが感じられない。自分自身の気持ちを常にスキャンしながら作ったのではないような感じ。自分で作っておきながら愛着が湧かない部分がある (A 氏内省, 7-複数過程に亘って, 調査・意味)。この箱庭の世界の中で、自分が想像をふくらませて自由に生きることができないこと、出来上がったストーリーにミニチュアを当てはめて作ったかのようで自分のオリジナリティが感じられないこと、自分の気持ちをスキャンして作ったのではないように感じられることが記された。また、作品をつまらないと思ってしまう要因の一つとして、この人物を本当にあの、ぐ、具象的というか、具体的な人物像がいかにもこうあどけない女の子というか、そういうのが、あの、バンと出てしまうので、それが気に入らないというのもあるんですね (A 氏調査, 7-12) と語られた。それは自己像として置かれた女性像があどけない女の子であることが強調され、それが気に入らないと感じていた、と捉えられる。

10 回に亘る箱庭制作面接の中で、A 氏が自分の箱庭作品に愛着が湧かないというような強い否定的感情を抱いたのは、この第 7 回箱庭制作面接だけである。A 氏第 7 回箱庭制作面接における主観的体験を整理して記す。まず、a. 作品全体に対して生まれた否定的感情・感覚は、作り続けるのが嫌になったこと、作品に愛着が湧かず、つまらない、しらじらしいと感じること、自分の作品に愛着が湧かないことをすごく悲しく思うということであった。そして b. 否定的な感情が生まれるような箱庭制作過程になった要因は、箱庭の世界の中で、自分が想像をふくらませて自由に生きることができないこと、出来上がったストーリーにミニチュアを当てはめて作ったかのようで自分のオリジナリティが感じられないこと、自分の気持ちをスキャンして作ったのではないように感じられること、成り行きに任せて作ったことであった。その結果生まれた、c. 構成に対する印象は、半島と灯台以外のものは表層的なものに感じられること、自己像として置かれた女性像が気に入らないこと、であった。説明過程での語りや内省報告には、上に挙げた以外の要因も報告されたが、主な要因は上記

のものと考えられる。

ここでは、主に、b.否定的な感情が生まれるような箱庭制作過程になった要因について、考察したい。bとして、1.箱庭の世界の中で、自分が想像をふくらませて自由に生きることができなかったことが挙げられている。[創造の歓び]の具体例として挙げた**作り始めたら、あの、どんどんこうしたいっていうのが出てきてくうん>わたしのの中から、こんな世界が、あの、出てきてくれたんだなあ、って。自分でこういう世界を、わたしの目に見えるように、作ってあげられて、嬉しい、っていう**（A氏調査、1-全体的感想）という主観的体験の語りにあるように、A氏は箱庭制作過程で想像を自由にふくらませて構成するが多かった（p.85 ◆具体例 52 参照）。しかし、第7回箱庭制作面接ではそのような心理的状况ではなかったことがわかる。Rogers(1959 伊東編訳 1967)は、「経験に対して開かれていること (openness to experience)」を環境の形、色などの感覚刺激や過去の記憶痕跡や恐怖、快、不快などの内臓感覚などを完全に意識できる状態としている。そして、経験に対して、十分に開かれている人間を仮定するならば、その人の自己概念は経験と完全に一致するように意識上に象徴化されたものである、としている(pp.199-200)。Rogers の考えを参照すると、A氏第7回箱庭制作面接の内省報告にある**私自身がこの箱庭の世界の中で、生き生きとしてられない。想像をふくらませて自由に生きることが(飛び回ることが)出来ない**（A氏内省、7-複数過程に亘って、調査・意味）という具体例は、A氏が箱庭制作過程において、自分の経験に十分に開かれていることができなかつた内的プロセスについての記述、と捉えられる。また、Kalff(1966 大原他訳 1972)が指摘する、遊びがもつ自由さを感じるができなかつた、と考えられる(p.iii - iv)。第7回箱庭制作面接では、イメージが自然に生まれ、湧いてくるための心理的準備が整っていなかつた、と捉えることができよう。

1にあるような心理的状况であったため、2.自分の気持ちをスキャンして作ったのではないように感じられるという心理的状况が生じたと考えることができる。自分の気持ちをスキャンして作ったのではないというように、自分の内的プロセスを逐次照合することも充分になされなかつた。

1と2にあるような心理的状况であったため、3.箱庭制作過程で、成り行きに任せて作ってしまい、出来上がったストーリーにミニチュアを当てはめて作ったかのように自分のオリジナリティが感じられない作品になってしまったと捉えられる。一度思いついたストーリーがいま・ここの内的プロセスにぴったりしているのかの照合作業がうまくいかず、そのままストーリーにミニチュアを当てはめて作ったかようになってしまった。そのような箱庭制作過程を経て、生まれた作品のため、表層的なもの、自分のオリジナリティが感じられないものになった、と理解できる。

このように、箱庭制作者の意識状態が、箱庭を制作するにあたって、十分な準備が整っていない場合、箱庭制作者自身にとって、愛着が感じられない作品になってしまう場合があることが示された。◆具体例 54 は、箱庭制作面接において促進機能が十分に働かなかつた例であり、促進要因が十分に働かない場合の要因が示されていると考えることができる。◆具体例 54 で示した心理的状况は、箱庭制作面接において起こりうるものであり、見守り手は箱庭制作者のこのような心理的状况について理解し、必要な配慮があればそれを行うことが心理臨床上重要だと考えられる。

◆具体例 55：A 氏第 5 回  
箱庭制作面接制作過程 16  
～17

以下に示す具体例は、特定の箱庭制作過程、作品のある部分に関する否定的な感情や感覚についての主観的体験である。A 氏は、第 5 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 16 で、インコを島の右奥、山の中腹に置いた。制作過程 17 で、焚き火とキノコを島の左手前に置き、りんごを置き足した(写真 17)。それらの箱庭制作過程について、自発的説明過程では、出来



写真 17 A 氏第 5 回作品

上がったのこんなんですけど、うーんと、少し島がさみしいなと思うんですけど、これしか置けなかった。これが精一杯かなっていう感じですね (A 氏自発, 5-17) と 少し島がさみしい という感覚が語られた。そして、内省報告に以下のように記した。これからおきてくることのために残されている空間にしたかったというか。でもそうするとすごく不毛な感じがして、それがこれから起きてくることの厳しさを予想させて、怖かった。だからあえてインコと焚き火などを置いたのだと思う (A 氏内省, 5-複数過程に亘って, 自発・意図), 島の右奥、青いインコのいるあたり、壺を置こうかどうしようか迷ったあたりに、戦いのイメージが漠然とある。動物同士、もしくは人間同士が争っているような、不穏な空気がかすかにある。それが今思い返すと制作中からずっとあった (A 氏内省, 5-16, 自発・感覚)。箱庭制作過程 15 以前の段階では、島の右奥や手前側にはミニチュアが何も置かれていなかった。自発的説明時には、島がさみしいという感覚で捉えられていた。しかし、DVD 視聴による内省報告作成時に、箱庭制作過程を思い返した時、箱庭制作過程にも感じていたことが、より明確になった。何も置かれない空間から、A 氏は不毛な感じがした。それはこれから起きてくることの厳しさを予測させ、怖さを感じた。それはより具体的には、動物同士や人間同士が争っているような不穏な空気であった。その不穏な空気はかすかなものであったが、それは制作中にも感じていたことがあったことが報告された。

◆具体例 55 に示された否定的感情は、A 氏にとって怖さを感じさせるイメージが予感されたことによるもの、と捉えられる。その予感、箱庭制作過程中には、不穏な空気としてかすかに感じるにとどまっていた。むしろ、島がさみしいという感覚として捉えられていた。それが内省報告作成時に、動物同士や人間同士が争っているような不穏な空気、不毛な感じとして明確に捉えられた。このようなイメージは箱庭制作過程中の A 氏には脅威を与えるものであり、意識化することに心理的防衛が働いた、と考えることができるだろう。このようなこともまた、作品や構成が箱庭制作者に否定的感覚や感情を引き起こす要因の一つであることが示された。本具体例は、箱庭制作過程で感覚的に捉えられていた、あるいは、心理



的防衛が働き十分な意識化がなされなかった内的プロセスが、内省によって、より明確に意識化できた例と考えることができる。◆具体例 55 は、◆具体例 54 とは異なり、箱庭制作者が箱庭作品を内省することによって、自己理解が促進される主観的体験についての報告であると捉えられる。

また、本項では取り上げなかったが、A 氏第 2 回および第 4 回箱庭制作面接にも、特定の箱庭制作過程、作品のある部分に関する否定的な感情や感覚についての主観的体験があった。それらについては、「VI-1.「構成」から「内界」への影響の結果および考察」の「(1)ある構成によって、箱庭制作者の気持ちやイメージなどの内的プロセスが大きく変化する主観的体験の結果および考察」で、箱庭制作や自己の心への強く、真摯なコミットメントと関連させ、検討したため、その箇所を参照していただきたい(pp.51-53 ◆具体例 20 と 21 参照)。

#### VI-3-5. 内界と構成との双方向の影響を示す、他 5 概念の結果および考察

[構成による表現の多義性]、[他の領域の構成への影響]、[ミニチュアが置かれない領域についての意図や感覚]、[構成による自己のイメージや心理的状況や特性の表現]、[不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]は、《創造における受動性と能動性》、《創造をめぐる肯定的感情と否定的感情》に包含されない、内界と構成との双方向の影響を示す概念である。

##### 1) [構成による表現の多義性]の結果および考察

[構成による表現の多義性]は、「構成によって表現されたものの意味が多義的であること」と定義された。(1)構成の意味の多義性、(2)構成に表現された箱庭制作者の存在の多元性の観点・テーマごとに、具体例を挙げ、考察する。

##### (1) 構成の意味の多義性の結果および考察

#### ◆具体例 56 : A 氏第 5 回箱庭制作面接制作過程 4, 9

A 氏は、第 5 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 4 で、島(山)の左奥に鳥居を置いた。制作過程 9 で、亀を島の右手前の浜辺に置いた。箱庭制作過程 4 について、内省報告に以下のように記した。何かお守りがほしい、と思って鳥居を置いた (A 氏内省, 5-4, 制作・意図)、鳥居を置いたことで、島に命が芽生えたような安心感が湧いた (A 氏内省, 5-4, 制作・意図)。鳥居は、お守りであり、それを置いたことで、島に命が芽生えるような安心感を抱かせるものであった。同じ箱庭制作過程について、上に挙げたものとは異なる内的プロセスも報告された。A 氏は調査的説明過程で、以下のように語った。この具体例にある(不明)はその箇所の語りの内容が聞き取れなかったことを示す。また(?)はそのように聞こえるが言葉が違う可能性があることを示す。<鳥居を、この位置に置こうと思ったのは?> (間 10 秒) うーん、何ででしょうね、でもこの位置に置いた時に、えーっと、鳥居が門だとしたら、その時に、こっちから入ることになるのかなというのは思いながら置いてましたね。だけどお、だけどお、<ふんふん> だけどお、だけどお、(間 16 秒) そうですね、一瞬思ったんです 私も(不明) こっちにしちゃった(?) <うんうん> 何か多分手前には置けなかったんで・・・(A 氏調査, 5-4)。内省報告には、鳥居の部分の世界に、私はまだ足を踏み入れていないような気がする。足を踏み入れるのが怖い、恐れているような。島全体に鳥居の影響はあるけれど、島の裏側からならば、影響力を受けながらも徐々に近づいていけるか (A 氏内省, 5-複数過

程に亘って、調査・意味)と記した。

◆具体例 56 では、鳥居の構成について、お守りという意図、島に命が芽生えるような安心感が喚起される内的プロセスと、足を踏み入れるのが怖いという感覚、島の裏側からならば徐々に近づいていけるかという内的プロセスという複数の内的プロセスが報告されている。この多様な内的プロセスは、イメージの多義性と考えることもできるだろうし、複数の内的プロセスを A 氏が構成に付与したり、構成から複数の内的プロセスが喚起されたと理解することも可能である。A 氏はこの鳥居の構成やその構成についての語りや内省を通して、鳥居という構成の自己への多様な影響についての気づきを深めていったと理解できる。

#### ◆具体例 57 : B 氏第 7 回箱庭制作面接制作過程 3~5

B 氏第 7 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 3 で、B 氏は、約 20 秒かけて、ケースの蓋で右から左へ溝を作った。制作過程 4 では、約 20 秒かけて、ケースの蓋で上から下へ溝を作った。このようにして、砂箱は 4 つの区画に分けられた。制作過程 5 では、中央部に十字形に水源様の水を深く掘った。制作過程 7 で箱庭左上の区画に花を植えるなど、その後、それぞれに区画ごとに一つの季節を表現していった。その構成について B 氏は自発的説明過程でここに立った時に、この箱庭の中を 4 つに分けたくなりまして。それで、その 4 つという、4 つができるだけ均等についていうことで。(中略)4 つに割ったんですけど、完全に 4 つの区画ってというような風でもなくって。で、真ん中も、真ん中としてあって、つながりがありつつも、4 つの区切りっていうとこで (B 氏自発、7-複数過程に亘って)と語った。内省報告で、非連続と連続 (B 氏内省、7-複数過程に亘って、自発・感覚)、区分があるが繋がりがあがる感じ (B 氏内省、7-7、自発・感覚)と記した。このようにこの構成は、一見相矛盾する意味を含みこんだものとして作られた、と捉えられる。

また、第 7 回箱庭制作面接の調査的説明過程で、B 氏は中心にある十字形の部分は、根底になる、核になるようなものであると語った。その後、全体的な感想として、以下のように語った。それをどういう風に表現するか、っていうのは、なんか微妙なんですけどね。ええ、例えば、あの、宗教的に、その神様とか仏様とかっていうようなものも言えるだろうし。その、それは、その、あの、いわゆるもう少し、なんか、その、地球を動かすような、そういった力だとか、言えるだろうし。でも、気持ちの、内的には、そういうことを見させる自分の中にある、なんか、うん、さあ、また、新しい年度をやっていくか、という気持ちを起こさせる、自分自身のなんか、内にあるようなものを、なんか、あの、現実の四季とかじゃなくて、こういうものを見させる。あの自分の感覚の奥にあるものみたいな。そういうものもあるしって。で、そうすると、なんか表現しがたいなっていうか (B 氏調査、7-全体的感想)。この十字形の部分は、神様や仏様というような宗教的なものとも、地球を動かすような力とも言えるし、自分の感覚の奥にあるそういうものを見させる力、新しい年度に向かう気持ちを引き起こす内にあるものという表現しがたいものであると語った。

本具体例では、a.砂箱が 4 つの区画に分けられた構成、中央部の十字形の構成に、つながりがありつつも、4 つの区切り、非連続と連続、区分があるが繋がりがあがる感じという通常は相矛盾する特性が喚起された。4 つの区画にはそれぞれの季節の人々の様子や自然など地上の四季が表現された。十字形は中心・深部 (B 氏内省、7-5、制作・意味)にある根源的なもの (B 氏内省、7-5、制作・感覚)であった。B 氏には、地上の世界と深部にある根源的な

ものは、それぞれ別の世界、非連続なものであると同時に繋がりがあある世界や存在であると感じられたのだと理解できる。

また、b.十字形の部分は、神様や仏様というような宗教的なものとも、地球を動かすような力とも言えるし、自分の感覚の奥にあるそういうものを見させる力、新しい年度に向かう気持ちを引き起こす内にあるものという多義的な表現であった。

B氏は、4つの区画に分けられた構成と中央部の十字形の構成やその構成についての語りや内省を通して、これらの構成の自分にとっての意味について気づきを深めていったと理解できる。

◆具体例 56 と 57 では、一つの構成に多重の意味が含まれていたことが見い出された。これらの主観的体験の語りや記述は、イメージの集約性と考えることができる。あるいは、複数の内的プロセスを箱庭制作者が構成に付与したり、構成から複数の内的プロセスが喚起されたと理解することも可能である。このような多義的な構成やその語り・内省によって、箱庭制作者は自己理解を深めることができる。

## (2) 構成に表現された箱庭制作者の存在の多面性の結果および考察

前項の◆具体例 56 と 57 は、構成の意味が多義的であることについての主観的体験の語りや記述であった。それに対して、本項の具体例は、構成に表現された箱庭制作者の存在の多面性についての語りや記述であると捉えられた。この多面性も、イメージの集約性に関する事象であり、一種の多義性と言えるが、前項の具体例とは異なる部分もあるため、別に考察する。前項には、例えば、A氏第5回箱庭制作面接での、鳥居の構成の意味の多義性や、B氏第7回箱庭制作面接の十字架状の部分に関する、非連続と連続(B氏内省、7-複数過程に亘って、自発・感覚)、区分があるが繋がりがあある感じ(B氏内省、7-7、自発・感覚)があった。これらは、直接的には、自己イメージに関する多義性ではない。そのため、前項の具体例と本項の具体例では異なる側面がある、と考えた。前項の◆具体例 57 には、神様や仏様、地球を動かすような力、自分の感覚の奥にあるそういうものを見させる力、新しい年度に向かう気持ちを引き起こす内にあるものという自己を超えたものと自分の特性が集約する多義性があった。◆具体例 57 の場合、本項との類似性がある。しかし、本項の具体例は箱庭制作者という人間存在の多面性(◆具体例 58 の内面性と現実存在、◆具体例 59 の個人としての生と歴史性)に焦点化した主観的体験の語りや記述であり、自分以外の存在・力と自己の多義性とは、異なる側面をもつと考えた。

### ◆具体例 58 : B氏第1回箱庭制作面接全体的感想

B氏第1回箱庭制作面接の調査的説明過程で、B氏は左周りに空中に円を描きながら、こういう世界が自分の営みの中に回っている(B氏調査、1-全体的感想)と語った。この会話内容に関して内省報告に回っている世界、移り変わっている世界と記された。その構成や語りについて、B氏は内省報告に動きのある中に自分もいる気がする(B氏内省、1-全体的感想、調査・感覚)と記した。そして、第1回ふりかえり面接では、「回っている世界、移り変わっている世界」の話の中で、[この動きの中に、例えば、それは私自身の内面の中で、そういう風に、自分自身が生きているっていう実感をもっているっていう言い方もできるし、私自身が、その、この目を通して、見てる、そういう空間の中に、自分も生きてるっていうか。そういう両面含めて、この動きの、回ってる、巡ってるっていう(不明)中に自分があるんだって

いう、そんな気がするっていうこと]と述べた。つまり、作品に表現された「回っている世界、移り変わっている世界」は B 氏の内面世界であると同時に、外的世界の中で生きている自分でもあり、この構成は B 氏の内面と現実存在との両面が表現されている。

#### ◆具体例 59：B 氏第 6 回箱庭制作面接複数過程に亘って

B 氏第 6 回箱庭制作面接で、B 氏は、島の中央に樹木や鳥の巣を置き、周辺部にも樹木を置いた。また、島の左側に石仏を、埴輪を島中央の上の部分に埋もれさせた。そして、自発的説明過程で樹木や鳥の巣は再生というイメージがあること、石仏や埴輪は人が住んでいた痕跡、遺跡に近いようなものであると、語った。調査的説明過程で、筆者が、再生するということについての連想を尋ねると、B 氏は最近の生活の中で取り組みはじめたことや気持ちの回復について述べた。その後、筆者がこの箱庭における再生はどれくらいの年限がかかって起こってきたものかを尋ねた。すると、B 氏は、自分自身でも矛盾するようだがと言いつつ、中央部の再生は感覚的には 1 年と 2 年というわりと短い期間に起こったものであること、しかし、人の痕跡は、何十年、何百年前に自分とは無関係に作られたものが風に吹かれ、波に洗われて出てきたものというイメージがあると語った(pp.63-64 ◆具体例 30 参照)。そのような構成や語りについて、内省報告に、人としての自分 (B 氏内省, 6-複数過程に亘って, 調査・意味), 人の歩みの歴史 (B 氏内省, 6-複数過程に亘って, 調査・意味) と記した。そして、第 6 回ふりかえり面接では、以下のように語った。[矛盾するが、置いたのは昔のものである。近代的なものではない]。感覚的には 1 年とか、割合身近な感覚があるっていうことで。まあ、片っ方では自分自身の変化の兆しかなくってということだけでも、もう片っ方では、昔から人の営みは変わらないのと、こういうことを繰り返してきたんだろうっていう。(中略)人としての自分とか、人の歩みの歴史っていうとこの両方が、なんか、そこにあるかなって、意味として]。B 氏は、これらの表現について、意欲が戻りつつある今の自分と、昔から変わらないより普遍的な意味での人の歩みとの両方が表されていると捉えたのだと理解できる。つまり、個人的存在としての自分と、人の歴史の中に位置づいている自分との両方の側面がこの構成に表現されている、と考えることができる。B 氏は、この構成やその語り・内省を通して、自己の多面性への理解をより深めることができたと推測できる。

◆具体例 58 と 59 に示された主観的体験は、構成に表現された箱庭制作者の存在の多面性、と捉えられる。◆具体例 58 と 59 では、構成されたものは、箱庭制作者の異なる側面を表現している。B 氏第 1 回箱庭制作面接で構成された「回っている世界、移り変わっている世界」(◆具体例 58)は B 氏の内面世界であると同時に、外的世界に生きている自分でもある存在の多面性に関する主観的体験についての記述や語りであった。

B 氏第 6 回箱庭制作面接の再生と人が住んでいた痕跡の構成について、意欲が戻りつつある今の自分と、昔から変わらないより普遍的な意味での人の歩みとの両方が表されていると捉えていた。人は内的世界をもち、そこに生きると同時に、外的世界においても生きる存在である。人は、個人の生を生きると同時に、歴史の中に生きる普遍性をもった存在でもある。そのような様々な次元の中で、人は生きている。Jung (1921 林訳 1987)は、「一人だけでなく大勢の人々に同時に備わっている・すなわち社会や民族や人類に固有の・あらゆる心的内容を集合的と呼ぶ」としている。そして、「集合的の反対は個性的[中略]である」とする(p.478)。◆具体例 59 には、人の心の個性的特性と集合的特性の両者が、構成の中に表現

されている,と理解できる。◆**具体例 59**は,箱庭制作者が自分の心を個性的特性と集合的特性とを関連させて理解しようとする主観的体験の記述や語りと解釈できる。

上記 2 具体例で, B 氏は,自分の多面性(◆**具体例 58**の内面性と現実存在,◆**具体例 59**の個人としての生と歴史性)への気づきをえたと考えられる。[構成による表現の多義性]に関する構成やその構成についての語りや内省を通して,箱庭制作者は自己への理解を深化させることができると捉えられる。

## 2) [他の領域の構成への影響]の結果および考察

[他の領域の構成への影響]は,「ある領域の構成が,他の領域に影響を及ぼす内的プロセス」と定義された。以下にその具体例を示す。本概念には,(1)先に作られた構成がその後の構成に影響を与える箱庭制作過程についての内的プロセス,(2)ある構成が先に作られた構成の感覚や意味に影響を与える内的プロセスが見いだされた。

### (1) 先に作られた構成がその後の構成に影響を与える箱庭制作過程についての内的プロセスの結果および考察

以下に示す具体例は,一つの領域の構成が,後に作られた他の領域の構成に影響を与え,作品が形作られていく箱庭制作過程についての内的プロセスと考えられる。

#### ◆**具体例 60**: B 氏第 1 回箱庭制作面接複数過程に亘って

B 氏は,第 1 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 2 で,中央の砂を掘り,底の青の色を出して,泉(水源)を創った。制作過程 2 について,内省報告には以下のように記された。生命の源(B 氏内省,1-2,制作・意図),深部からこんこんと湧きでる,つきない泉(B 氏内省,1-2,制作・感覚),神,生命(B 氏内省,1-2,制作・連想)。制作過程 4 で陶器の魚,ブタ 1 個,子ブタ 4 個,牛を選び,制作過程 5 でそれらを泉の中や周りに置いた。

続く制作過程 6 で, B 氏は,「水の恵みを受けて育つ木々を探し,水源周り」に置いた(「」内は,内省報告に記された,当制作過程の内容を示した B 氏自身の記述)。制作過程 7 で,「木が足りないと感じられたので追加」した。制作過程 6 について,内省報告には,泉の生命が周辺に広がる(B 氏内省,1-6,制作・意図),生命が広がり及ぶ(B 氏内省,1-6,制作・感覚),育み(B 氏内省,1-6,制作・意味)と記された。その後 B 氏は,生活感のあるものがほしいと思い(制作過程 8),棚に家のミニチュアを見つけ(制作過程 9),左上の領域で,針葉樹の位置を少し上に移動し,その横に,わらぶき屋根の家を置いた(制作過程 10)。それらの箱庭制作過程について,第 1 回ふりかえり面接で以下のように説明した。[ある意味,世界って,なんていうんでしょう。広がっていくってところから,少し,なんていうんでしょうか。カルチャーっていうんでしょうか。やや自然発生的に,だーって広がっていくってところから,人の営みっていうようなところの部分がテーマとして,自分自身,その,思うようになってきた。生活感のあるものがほしいということを思い始めて,家の模型を置いて。家っていうことの中には,そこに生活している人がいてっていうことで],[木が増えてって,で,そこから,急に,ほんとに生活感とこの方にいつてしまったんですね,つまりジャングルを作っていくっていうことじゃなく,いくっていうことじゃなく。そこがこうやってできた時に,次はなんかそういったものが,置きたいなということ。それがなんだろうということ。家の模型とか,民家ってところから,それが,よく適合したというか]。

これらの箱庭制作過程について、説明過程、内省報告、ふりかえり面接における主観的体験を総合的に記す。B氏は、泉が生命の源であり、豊かで、安心や平和や憩いをもたらし、大事で、中心にくるものであると感じ、魚や動物を置くことで、それを表現した。そして、泉の生命が周辺に広がり、木々が育まれる様子を表現した。さらに木々が増えたことから、生活感がほしいと思いや、文化や人の営みというテーマが喚起され、そのイメージに基づいて構成していった。

◆**具体例 60**では、先に作られた構成が後の構成に影響を与える主観的体験が示されている。このように箱庭制作過程では、一つの構成が後の構成に影響を与え、連動し、連鎖的に構成される場合がある。河合隼雄(1969)は、「クライアントがその内的なものをまとめたものとして表現しにくいときは箱庭が作れない」としている(p.21)。内的なイメージをまとめたものとして、表現し、作品として作りあげていくためには様々な要因が関与しているだろう。その多様な要因の一つとして、ここで取り上げている、構成の連動性、連鎖する構成という要因がある、と考えることができよう。一つの構成に刺激され、イメージが浮かび、それを構成として砂箱内に表現するという過程が連動することによって、構成に結びつきが生まれる。そのような箱庭制作過程を経ることによって、構成されたものが、一つの作品として表現される場合がある、と考えることができよう。

このように複数の制作過程が連動して、構成に結びつきが生まれることによって、箱庭制作面接に、ストーリーが生まれると考えることもできる。河合隼雄(1991)は、箱庭の作品について、「一瞬に見られる一枚のスライドも、それを時間的に展開すると、ひとつの物語として表現される可能性をもっている」と述べている(p.136)。箱庭制作で生まれるストーリーは箱庭作者の内界の表現の一つの形である。

◆**具体例 60**では、ある構成に刺激され、他の領域と関連したストーリーが生まれ、そのことによって、構成が一つのまとめたものとして構成されていく内的プロセスについての主観的体験の記述や語りと理解することができる。複数の制作過程が連動して、構成に結びつきが生まれ、箱庭制作面接にストーリーが生まれることによって、箱庭作者は自己の内的世界をまとめたものとして表現できるとともに、その構成は自分の物語が表現されたものとなる。そのようにして作られた箱庭作品は、◆**具体例 60**の泉の生命が周辺に広がり、木々が育まれ、さらには文化や人の営みが作られるという構成の連動について、B氏が[よく適合したというか]と述べているように、箱庭作者の内界の表現として、ぴったりで、豊かなものとなりうる。内界にぴったりで豊かな表現を可能にする[他の領域の構成への影響]は、箱庭作者の自己理解の促進に寄与すると考えられる。

(2)ある構成が先に作られた構成の感覚や意味に影響を与える内的プロセスの結果および考察

本項の具体例は、ある構成が先に作られた構成の感覚や意味に影響を与える内的プロセスである。この具体例では、先に作られた構成に変更は加えられず、内的な感覚や意味に影響を与えている。

#### ◆**具体例 61**：A氏第8回箱庭制作面接制作過程 13

A氏第8回箱庭制作面接の箱庭制作過程 13で、A氏は白い人形の正面、砂箱の手前中央に赤い鳥居を置いた。その制作について、調査的説明過程でA氏は、以下のように語った。こ

れがないと、あの、(間 3 秒) うん (間 40 秒) うん、これがないと、こうお守りが無いというか、なんて言うんでしょう、どうやって言ったらいんだろ。‘玩具を見つめて、手で鳥居を隠したりしながら考えている’ (間 45 秒) 箱庭としてこれがないとこう、ここの世界に、命って意味をあげられない感じがして<ふん>命っていう (間 18 秒) (A 氏調査, 8-13)。そして、内省報告に、鳥居がない箱庭は、殺伐として、荒涼としている (A 氏内省, 8-13, 調査・意図), 赤い鳥居を置いたことで、箱庭の中の生き物達がいのちを持ったものに変った気がした (A 氏内省, 8-13, 制作・感覚) と記した。これは、後の構成がそれまでの構成の感覚や意味に変化を引き起こす可能性についての主観的体験の語りや記述である、と捉えられる。この具体例も一種の構成の連動性と考えられるが、この具体例は、先に作られた構成に変更は加えられず、内的な感覚や意味に影響を与えている点が特徴的である。

また、この箱庭制作過程に関して、A 氏は自発的説明過程で以下のように述べている。最後にこう鳥居というか、こういうのを置いたんですね。あの、丁度こう、こちら側が人を置かずにあいていたので、なにかこう、あ、あいてるな、他にもう最終的に置く物ないかしらと思って、<ふんふん>箱庭と玩具を見回していたときに、何かここがあいているな。でもなんなんだろう、空けておいてもいいしなと思っていたら、これが目に入ってくなるほど>うん、あの、あんまり、こう、いい意味も持ってないというかね、こう、現実と、その、いのちがなくなっからの世界の、境界線の、えーものだと思うので。この説明によると、箱庭制作過程の時点では、砂箱の手前が空いているので、鳥居が目に入れて置いたことと、鳥居は現実と命がなくなっからの世界の境界線というイメージを A 氏もっていたことが示されている。手前の空白部分に鳥居が置かれる箱庭制作過程は、意味の認知は伴わないが、ぴったりだと感じるができる直観的な意識によって構成された、と考えることができる。この具体例の場合、境界線という意味の認知は伴っているが、鳥居を置くことで箱庭の中の生き物が命をもったものに変化したことについての認知は伴っていない。その後、調査的説明過程で、手で鳥居を隠したり、手を除けて玩具を見つめたりしながら考え、45 秒の沈黙後、箱庭としてこれがないとこう、ここの世界に、命って意味をあげられない感じがして<ふん>命っていうという語り生まれた。鳥居があることで、砂箱中央の世界に命という意味が与えられたことが、この時点で初めて明瞭になった。そして、内省報告では、赤い鳥居を置いたことで、箱庭の中の生き物達がいのちを持ったものに変った気がしたと記された。このように、鳥居は、砂箱中央部分の構成に内的感覚や意味の変化をもたらそうとして、意図的になされた構成ではなく、構成後、調査的説明過程で語る中で、砂箱中央に置かれた人や動物についての内的感覚や意味に変化が生まれた、と捉えられる。この点も◆**具体例 61**の特徴的な点である。

このように A 氏の構成への理解は、調査的説明過程で構成の意味を吟味することを通して変化している。この主観的体験の語りや記述は、河合隼雄(1991)が「箱庭はイメージに『一応のおさまり』をつけて表現するので、言うならば、その作品そのものに作った人の『解釈』が入っているのである」という言及と関連があるのかもしれない(p.130)。しかし、続く「作者は作ってゆきながら、自分なりに『これではおさまりがつかない』などと考えて、適当にアイデアを変更したりしてゆく」という点は、◆**具体例 61**と異なる部分である(河合隼雄, 1991, p.130)。箱庭制作面接において、作品に箱庭制作者の解釈が入るという場合、河合の指摘にあるように、意図的・能動的に構成を行っていく場合に加えて、◆**具体例 61**に示さ

れたように構成は変更されず、ある構成が先に作られた構成の感覚や意味に影響を与える場合もある、と考えてよいのではないだろうか。

ある構成が先に作られた構成の感覚や意味に影響を与える内的プロセスをどのように理解すればよいだろうか？

a.箱庭制作過程では構成の内的プロセスは、明瞭に認知されていなかった。しかし、調査的説明過程で、手で鳥居を隠したり、手を除けて玩具を見つめたりしながら、この構成を巡る主観的体験を照合することを通して、その内的感覚や意味が明瞭になったと考えることができよう。そうであるならば、箱庭制作者自身、自分が作品に与えた解釈は箱庭制作過程では、意識化されていないが、潜在的になされた解釈によって、作品におさまりがつくという場合もあることが示された、と考えられる。

あるいは、b.説明過程で構成について丁寧に吟味することを通して、構成の自分にとっての意味が喚起され、解釈が入ったこと考えることもできよう。

このどちらの場合であっても、ある構成が先に作られた構成の感覚や意味に影響を与える内的プロセスによって、鳥居と砂箱中央部分の構成との関連について、箱庭制作過程では気づいていなかった意味にA氏が気づいたということはできる。ある構成が先に作られた構成の感覚や意味に影響を与える内的プロセスを伴う[他の領域の構成への影響]は、箱庭制作者が構成のもつ自分にとっての意味に気づき、そのような構成を行った自己への理解を深めることに寄与すると考えられる。

### 3)[ミニチュアが置かれない領域についての意図や感覚]の結果および考察

[ミニチュアが置かれない領域についての意図や感覚]は、「ミニチュアが置かれない領域についての意図や感覚などの内的プロセス」と定義された。以下にその具体例を示す。

#### ◆具体例 62：A氏第1回箱庭制作面接制作過程 17

A氏第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程 17で、A氏は以下のような行為を行った。

33分1秒～	棚から砂箱の前に戻り、砂箱を眺める。
33分7秒～	砂箱左手前隅に低く砂を盛る。
33分24秒～	砂を盛った部分を見つめる。
33分37秒～	盛った砂をならし、平らに戻す。
34分0秒～34分8秒	構成を確認し、終了を宣言する。

その箱庭制作過程について、A氏は自発的説明過程で、このへんをもうちょっと、このあたりでなんかこう、平坦のままにしておくのもなんかこう。もっと何かあるんじゃないのと思ったんだけど。でもまあ、何もない方が、今はいいな、ちょっと静かに、静かにしておきました(A氏自発, 1-17)。そして、自省報告に、以下のように記した。「静かにして」おくというのが、その時の私の心の状態をよく表現しているような気がする。掘り起こそうと思えばもっと掘れるかも知れない、きれいに飾ろうと思えば飾れるかもしれないけれど、触れなくておくことを選択した(A氏自省, 1-17, 自発・感覚)、「何もない」のではなく、今は「静かにしておいた」だけ。多分まだ何かあるのだろうけど、今は静かにしておきたかった(A氏自省, 1-17, 自発・意味)。砂箱左下隅で、砂を低く盛ったが、その後平らに戻し、何も置かずに



終えたという行為は、自分の内的感覚と照合した結果の選択であると捉えられる。その部分を掘り起こしたり、きれいに飾ろうとすれば、できなくはないが、それはその時の A 氏には、ぴったりしなかった。むしろ、今は静かにしておくことを積極的に選択した。初回である今回は、その空間を静かにしておくと同時に、自分の内面を無理に掘り起こしたり、飾ったりすることなく、多分まだ何かあるのだろうと感じられる内的プロセスが、今後自然な形で表現されるであろう、その時を待ったのだと解釈できる。その時の私の心の状態をよく表現しているような気がするとあるように、A 氏はこの構成とその語りや内省を通して、自己の内的プロセスへの理解を深めることができたと考えられる。

#### ◆具体例 63：A 氏第 10 回箱庭制作面接複数過程に亘って

A 氏は第 10 回箱庭制作面接の調査的説明過程で、以下のように語った(写真 18)。何がぴんと来るだろうと一生懸命探して探してくうん>で、こう、確認してたんですね。あの、作る世界が割りとかう、アイテムが少ないというか、さみしい印象がちょっとどうしてもあるので、スペースが一杯あって、だから、入れてあげるとしたら何が入るかなーって、ずーっと、はいるものをも、求めてたわけじゃないけど、確認してたですね、あるかなーってくなるほど>でもお、今日はどれも響かない、動物なんかも響かないし、貝殻なんかもちょっと違うし、宗教的なものも、見たんですけど、置かなくても大丈夫だったので、いいですと思って、はい、いましたね(A 氏調査, 10-複数過程に亘って)。スペースがいっぱいあり、さみしい印象があったため、砂箱に何かを入れるとしたら何が入るかを A 氏は確認した。その結果、どのミニチュアも心に響かず、これ以上置かなくても大丈夫と感じたため、置かないことを選択した、と捉えることができる。

A 氏は、第 10 回箱庭制作面接の調査的説明過程で私の中の奥まったところを作った(A 氏調査, 10-全体的感想)と語った。自分の奥まったところの構成であり、かつ最終回であったため、A 氏は丁寧な照合作業を行った、と考えることができる。その照合作業の上で、敢えてこれ以上はミニチュアを置かない選択を A 氏がしたのだと推測できる。A 氏はこの構成とその語りを通して、自己の奥まったところのあり様と箱庭制作面接を終えていく今の自分の内的状況への理解を深めることができたと考えられる。

◆具体例 62 と 63 で A 氏は自分の内的感覚と照合した結果、これ以上置かないことを積極的に選択してい



写真 18 A 氏第 10 回作品

る,と捉えられる。◆**具体例 62 と 63** では共に,砂箱に空白があるが,敢えてミニチュアを置かずに終えている。河合隼雄(1984)は,「隠すことも高次の表現」という節の中で,「完全に空白部分をつくるというのも,本当はそこになにかあるはずなんです,それを何も置かないことによって表現しているわけですよ」と述べている(河合・中村 1984,p.94)。また,河合隼雄(1982)は,昔話「見るなの座敷」の考察の中で,「何も起こらなかったとは,つまり,英語の表現 *Nothing has happened* をそのまま借りて,『無』が生じたのだと言いかえられないだろうか」と述べている(p.29)。引用した河合の二つの言及を重ねて考えたとき,箱庭制作面接において,何も置かれない領域があったとき,一つの可能性として,その領域に無が生じた,と考えてもよい場合があるのではないだろうか。

また,岡田(1993)は「箱庭療法では余韻を大切にすると述べている。そして,「筆者は余韻ということで,『このようにしか,作品ができなかったが,この作品が与える意味や解釈や印象のまだ底には,何か響いている』ことを感じる必要性を強調したい」と指摘している(p.35-36)。A氏第1回および第10回箱庭制作面接では,砂箱に空白があるが,敢えてミニチュアを置かずに,箱庭制作過程を終えている。第1回箱庭制作面接でA氏は,自分の内面を無理に掘り起こしたり,飾ったりすることなく,空間を無のままにして,余韻を残した,と捉えることができよう。そして,今は静かにしておいたものが,時がきて自然に孵化(インキュベーション)するのを待とうとした,と捉えることもできよう。(Meier,1948 秋山訳 1986,p.108,124;秋山,1986,pp.189-190)。第10回箱庭制作面接は最終回であったから,空白にミニチュアを置かない選択をして,箱庭制作面接を終了したことになる。◆**具体例 62 と 63** に示されたものは,空白という余韻を残して,箱庭制作過程を終える箱庭制作者の主観的体験と考えることができないだろうか。

◆**具体例 62 と 63** をその領域に無が生じたという観点,余韻の観点から考察してきた。本項の具体例は,構成する際,自分の内的プロセスと照合して,あえてミニチュアを置かずに,空間を残そうとする積極的な選択と考えられる。このような積極的な選択によって,箱庭制作者は自己の内的プロセスにぴったりな構成を行うことができる。◆**具体例 62 と 63** に示されたように[ミニチュアが置かれない領域についての意図や感覚]は,自己の内的プロセスと構成との照合作業を経てなされた自己の内的プロセスにぴったりな構成であり,構成やその構成についての語りや内省を通して,箱庭制作者の自己理解の促進に寄与すると考えられる。

#### 4) [構成による自己のイメージや心理的状況や特性の表現]の結果および考察

[構成による自己のイメージや心理的状況や特性の表現]は,「ある構成が,自己イメージ,自己の心理的状況や特性を表現したものとなる内的プロセス」と定義された。以下にその具体例を示す。

##### ◆**具体例 64** : A氏第5回箱庭制作面接制作過程3,12など複数過程に亘って

A氏は,第5回箱庭制作面接の箱庭制作過程3で,砂を盛り上げて,円錐状の山からなる島を作った。その後,その島に鳥居,亀(自己像),鹿,インコ,焚き火,キノコ,りんごを置いていった。島の構成について,A氏は,自発的説明過程で以下のように語った。**島のふちをわりと最後の方丁寧に整えたんですけど,〈そうだね〉それはちょっと意識してやっててくふう**

ん>あのお、ま、ここは私の島なので他の人は登って来れない、ですね。(中略)というところでちょっと境界をくっきりさせて(A氏自発,5-12)。また、島から感じる厳しさやしんどさについて、以下のような主観的体験の語りがあった。A氏は、自発的説明過程で最近、あの(間7秒)よく悩むというか、はは(笑)(中略)しんどいなあ、で、ただどだけど、そのしんどさは乗り越えなきゃいけないらしいということもわかって、逃げられたら楽なんだけど、逃げちゃいけないなというところで、<ふん>そ、それがこの島になったような気がしますね。(中略)そういう風に思ってる私全体なんでしょうけどね、これは(A氏自発,5-複数過程に亘って)と語った。

A氏は、この島を「私の島」と捉えており、様々な思いを抱えている自分全体がこの島になったと考えていた。箱庭制作面接の自己像について検討される時、自己イメージが付与されたミニチュアについて検討されることが少なくない。しかし、この具体例では、島という構成が、一つの自己イメージとして表現されている。この具体例では、「私の島」という構成に、最近の自分の悩みやしんどさ、そのしんどさは乗り越えないといけないらしい、逃げられたら楽だが逃げてはいけないという風に思っている自分全体が付与された、と理解できる。「私の島」の構成、その構成についての語りを通して、A氏は、自己の心理的状況を再確認または認識した、と理解できる。

A氏は、同回の内省報告に振り返った傾斜だけではなくて、島のあいているスペース全体が、私に問い掛けてくる。突き詰めてくる。私を試そうとしている。そんなイメージ(A氏内省,5-複数過程に亘って,調査・感覚),と記した。この島自身が意思をもっているかのような表現がなされている。A氏に問いかけ、突き詰め、試そうとしているというイメージが島から喚起された。このように、箱庭制作者と構成との交流が生じている。この内省報告は、「私の島」の特性の一端を示す記述である。また、島にはもう一つの自己像である亀が上陸していたり、神聖な生き物である鹿が置かれている。島は、A氏の様々な心理的状況や特性を表現する舞台のようにも構成されている。

このように島は、「私の島」という自己イメージや最近の自分の心理的状況が付与された構成である。また、島自身が意思をもつかのような構成であったり、A氏の様々な心理的状況や特性を表現する舞台ともなっている。A氏はこの構成やその構成についての語りや内省を通して、多様な自己のあり様に気づき、自己理解を深めることができたと考えられることができる。

#### ◆具体例 65 : A氏第4回箱庭制作面接制作過程 11

A氏は、第4回箱庭制作面接の箱庭制作過程11で、ホウキに乗った魔法使いの少年、陶器のオバケを砂箱右上隅に置いた(写真19)。その後、A氏は、複数過程に亘って、川にいる亀を渦の中央に向かって進めた。そのホウキに乗った魔法使いの少年、陶器のオバケの構成について、自発的説明過程で、A氏は以下のように語った。えーっとこの辺のは、ちょっとおっかないですよ。(中略)制御できない<ふん>こちらの意志ではなんとも制御できないようなくふーん>生き物がびゅんびゅん飛んでるような、そんなのを置きましたね(A氏自発,4-11)。調査的説明過程では、制作者と筆者とのやりとりの後、ホウキに乗った少年が置かれた領域に亀が向かっている構成について、以下のように語られた。今思うんだけど、あのあたりは私が日常生活で見せないような、あの、ちょっと奥の方の気持ちなんだろうなと

いうくふうん>気持ちがしますね。くふうん>私はそのたぶんね極普通に人間なので、例えばネガティブな感情も一杯持っていると思うんですよ。くそらそや>で、それをあの、それを、それをあんまり出してないような気がして。くなるほどね>でも確かに自分の中にある、出してなくて、ちゃんと見てあげなきゃって言う気持ちがありながら、うーん、あのちゃんと見てあげなきゃいけないんだよねーって。そういうつもりでたぶん向かって

るだろうと思いますね、亀が (A氏調査, 4-11)。右上隅の領域は、ちょっとおっ

かないところであった。ホウキに乗り飛んでいる少年は、好き勝手に飛んでいて、制作者の意思ではコントロールできない存在であることも語られた。今思うんだけどとあるように、制作者と筆者とのやりとりを通して、ホウキに乗った少年は、A氏が日常生活では見せない、奥の方にあるネガティブな気持ちであること、確かにあるそのような気持ちをちゃんと見てあげなきゃいけないというつもりで、自己像である亀は、その領域に向かっているのだろうと思うということに、A氏は調査的説明過程で初めて気づき、語った。このような構成を行い、それについて語ることを通して、A氏は、奥の方にあるネガティブな気持ちや、それを見てあげようとしている自分の態度に気づき、自己理解を深めることができた。

#### ◆具体例 66 : B氏第5回箱庭制作面接複数過程に亘って

B氏は、第5回箱庭制作面接で複数の箱庭制作過程に亘って、砂箱四隅に、針葉樹を置いた(写真20)。その構成について、調査的説明過程で以下のように語った。つまり、これはよく

これまでの制作の時に、私自身、傾向かなって思うところでもあるんですけど。この、こうやって出てきたものを、四隅までこの全面に張り巡らせるっていうほどの、私自身が、馬力がないでしょうかね。とにかく、ここら辺の世界でまあ、それ以外の、その、なんか、部分ということ。なんか、うん、四角い枠を森を作ること、丸い枠に限定して、うん、世界を作ってるかなというくなるほど。なるほど。なるほど>うん。うん。たぶん、もっ



写真19 A氏第4回作品(砂箱右奥隅に、ホウキに乗った魔法使いの少年、陶器のオバケ)



写真20 B氏第5回作品

と、その馬力があれば、この、ガシッともしっかり置く力のある人もいるのかなと思うんですけど。どうも私は、うん。四隅ぎりぎりまでものを置くっていう、その、うん、強さがないような気がします（B氏調査、5-複数過程に亘って）。

B氏は、第5回箱庭制作面接で複数の箱庭制作過程に亘って、砂箱四隅に、針葉樹を置いた。これに類似の、森によって区切りができるという構成は、第2回および第3回箱庭制作面接にも表れていた。第5回箱庭制作面接で、自分の馬力のなさを四隅に森を作ること、丸い枠に限定する構成を行い、それについて語ることを通して、B氏は、四隅ぎりぎりまでものを置く強さがないという自分自身の傾向に気づいたと理解できる。

箱庭制作面接において、砂箱全体を使わない構成は、珍しいものではない。その場合、ある領域に何も置けないという表現がなされる場合が多い。しかし、この具体例のように、実際にはミニチュアが置かれているが、それは箱庭制作において自己の表現を限定する目的となる場合もあることが、示された。B氏第6回箱庭制作面接以降は、四隅に森を作ること、丸い枠に限定するといった構成は現れない。この変化は一種の「領域の拡大」（河合隼雄、1969,p.47）、と捉えることができる。この領域の拡大という構成の変化は、B氏の内界の変化を表していると推測できる。

◆具体例 64～66には、構成による自己のイメージや心理的状況や特性の表現が見いだされた。そして、箱庭制作者はその構成を行い、それについて語ることを通して、自己への気づきをえていた。また、自己の心理的状況を表す構成の変化は、箱庭制作者の内界の変化の表現であると推測できた。このように[構成による自己のイメージや心理的状況や特性の表現]は、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与できると考えられる。

#### 5) [不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]の結果および考察

[不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]は、「不明瞭であいまい点、不正確な認知、記憶の不明瞭を伴いつつ、構成する内的プロセス」と定義された。[不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]には、(1)不明瞭であいまい点を残しつつ構成する内的プロセス、(2)箱庭制作者の不正確な認知や記憶の不明瞭に関する内的プロセスがあった。

##### (1)不明瞭であいまい点を残しつつ構成する内的プロセスの結果および考察

不明瞭であいまい点を残しつつ構成する内的プロセスと考えられた具体例を以下に示す。

#### ◆具体例 67：A氏第4回箱庭制作面接全体的感想

第4回箱庭制作面接の自発的説明過程の冒頭でA氏は、作品の説明としては、うーん、なんなのかわかんないですね自分でも作りながら（A氏自発、4-全体的感想）と語った。また、出来上がった世界は、えーっとなんだろうね、これね（笑）なんだろうね。よくわかんない。ほんとに良くわかんないですねえ（A氏自発、4-全体的感想）とも語っている。

その後、渦について以下のように語った。一番最初渦を作った時は、別にここがゴールだともそんなことは意識してなかったんですけど、まどっちかな、ゴールなのか、もうちょっと他のとこなのか、何なんだろうと思ったんですね。<ふんふん>特にベンチや家のときは、そこから出発するということもありえる形だったと思ったので、<うんうん>（A氏自発、4-4）うーんと、作っていく過程でなんか、亀はあっち向いてるし、<なるほど>うん、どうもそのゴ、ゴールというか行きたところというか、<ふんふん>そうらしいなってふうに

なってきましたね。それが今の自分に丁度いいのかどうかちょっと良くわからないんですけど、<ふん>（間 6 秒）（A 氏自発, 4-16）ふん、作ったらこんなのできちゃいましたって言う感じ。‘見守り手に顔を向けて’ なるほど了解しました> どうしたらいいんでしょうという感じですが、私。なるほどね、なるほどね> とま、自分で戸惑います、ほく戸惑ってるのね> うんうん作りながらね、あれあれあれっていう。<うんうん> ‘見守り手に向かって’ こんなに戸惑うもんなんですか（A 氏自発, 4-17）。A 氏はこの構成を意図的に作り上げたのではなく、自分の感覚やイメージに従って作っていった。そのため、自分自身でも、明確に説明するのが難しく感じ、戸惑うような作品が出来上がった、と考えられる。

しかし、調査的説明過程で A 氏と筆者がやりとりする中で、この作品がもつ A 氏にとっての意味が部分的にはあるが、明らかになっていく。◆具体例 5 に示されたように、鳥の巣から女性や子どもを意識させられる感じが喚起された(p.30 参照)。また、VII 章で後述する、概念[身体感覚・ボディーイメージ]の◆具体例 126 のように、調査的説明過程で、A 氏は渦の幅を広げている時、産道を広げてるみたいって思いくはあ> ましたね、広げてる最中ね（A 氏調査, 4-16）、と語った(pp.158-159 参照)。

このように、第 4 回箱庭制作面接の自発的説明過程では、出来上がった世界が何かよくわからないと A 氏は語っていたが、調査的説明過程での A 氏と筆者とのやりとりを通して、構成の意味が部分的に明確になった。

◆具体例 67 が示すように、箱庭制作面接では、[不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]によって、箱庭制作者の意図を超えた構成が生じ、その構成について語り、その構成を再確認することを通して、箱庭制作者が自己理解を深めることに寄与する場合があると考えられる。

それに対して、以下の具体例では、箱庭制作過程だけではなく、説明過程や内省報告においても、構成に関して、明瞭には意識化できない主観的体験が示されている。

#### ◆具体例 68：B 氏第 1 回箱庭制作面接複数過程に亘って

B 氏第 1 回箱庭制作面接の自発的説明過程で、B 氏は、一つのこの、これは一つの流れなんだと、なんとなく感じるんですけど、こういう、時計の逆周りっていうんでしょうかね。これはたぶん自分、左ききだから、こういう風にしちゃったのかなと思うんですけど。まあ、こういう動きの中で、うん、なんか、表現して（B 氏自発, 1-複数過程に亘って）と語った。中央部を作った後の制作の順番が砂箱左側から始まり、反時計周りになったことについての言及である。その言及について、内省報告に、なぜ時計回りではないのだろう（B 氏内省, 1-23, 自発・感覚）、と記された。そして、第 1 回ふりかえり面接では、[ふりかえりのときの話の、言語的な話の部分で、っていう方が。<わかりました。>はい。まあ、気づきといえば、気づきなんですね。はい]と語られ、その気づきが自発的説明過程でのものであることが明確になった。つまり、B 氏は、制作後の自発的説明過程で、制作の流れが反時計周りだったことに気づいた。そして、それは自分が左利きだからだろうと推測するものの、説明過程でも内省報告作成時でも、どうしてそうなのかわからず、不思議に思っていた、と考えられる。

◆具体例 67 と 68 では、その構成やミニチュア選択について、制作者自身にも説明困難な不明瞭な点がある。そして、そのような不明瞭な点がありつつも、構成していく過程についての主観的体験が示された。◆具体例 67 と 68 は、意味の認知は伴わないが、ぴったりだと感じるができる直観的な意識により、構成されたことについての語りであると考え

ことができる。直観的な意識によって作られた構成には、◆具体例 67 のように、後続の語りを通して、構成の意味が部分的に明確になる場合と、◆具体例 68 のように、構成に関して意識的な説明の困難さが残る場合があることが見いだされた。

(2)箱庭制作者の不正確な認知や記憶の不明瞭に関する内的プロセスの結果および考察次に示す具体例は、箱庭制作者の不正確な認知や記憶の不明瞭に関する内的プロセスについての語りや記述である。

◆具体例 69：A 氏第 1 回箱庭制作面接制作過程 15

A 氏は第 1 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 15 で以下のような行為を行った。

28 分 57 秒～	イルカを見て、イルカの向きを変更した。
29 分 6 秒～	作品を見つめた。
29 分 15 秒～	砂箱右手前あたりの砂を右手甲側指先で、なでた。
29 分 28 秒～	陸の部分、波打ち際のあたりを見つめた。
30 分 19 秒～	砂箱の左側に立ち位置を変更し、作品を見た
30 分 46 秒～31 分 29 秒	立ち位置を変更し、砂箱右手前隅から作品を見た。

このように A 氏はイルカの向きの変更後、立ち位置を変え、様々な方向から構成を確認した。その後、自発的説明過程で、A 氏と筆者との間で、以下のようなやりとりがあった。最終的にあの亀をみつけたときに、あ、どうもこう亀の方を見てる感じだな、っていう。亀を見てるんじゃないんだけど、亀が視野にちゃんと入ってるなあ、そんな感じになって、よかったなと思いましたね。＜少し、亀を置いたあと、置き換え、あの、方向変えたもんね＞あ、そうでしたっけ＜イルカも最初はもう少しこちらの方に、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ沖にいたんだけど。亀の方に（不明）で＞（A 氏自発、1-15）。自発的説明過程では、A 氏はイルカの視線に対して、亀を見てるんじゃないんだけど、亀が視野にちゃんと入ってる、と捉えていた。また、筆者の＜少し、亀を置いたあと、置き換え、あの、方向変えたもんね＞という言葉に、あ、そうでしたっけと答え、明確には覚えていない様子がうかがえた。そして、調査的説明過程の最後の頃、A 氏は立ち位置を移動し、イルカの目線を確認して、以下のように語った。それは、箱庭制作過程 15 に密接に関連していた。具体例にある（？）はそのように聞こえるが言葉が違う可能性があることを示す。もういっかいその陸（？）の方からみていいですか？＜どうぞ。どうぞ＞ふーん？＜どんな感じがする？＞いや、こっちから見るとほんとにこうイルカがあつた亀の方を向いているので、ああ、ぱっちり向いてるなあと思って。（中略）＜今はなんかあつちの方から見たくなかったのは？＞イルカの目線になりたかったのかなあ。＜はあ、イルカの目線か。亀の方見てる。ね。亀の方見てるね＞見てますね＜視界にはいっているというより、見ているというより視界に入っているって、さっきいうたけど、なんか、ぱっちり見てるよね＞ぱっちり見てますよね（A 氏調査、1 - 調査的説明過程の最後の再確認行動）。調査的説明過程で、再度、確認することで、ほんとにこうイルカがあつた亀の方を向いている、ぱっちり向いてる、ぱっちり見えていることが A 氏に認識された。この具体例では、構成に関して、箱庭制作者の認知の不正確な点や記憶の不明瞭な点が示されたと考えられる。亀はイルカにとって、導き手としての重要な意味をもっていた。そのような関係であるにも関わらず、イルカの視線に関する実際の構成と箱庭制作者の認識がく

い違うという事象が生じた。このような事象が生じたのは、イルカの向きは、直観的な意識によって構成されたことを示している、と考えることができる。その後、A氏は調査的説明過程でイルカを目線を確認することによって、ほんとにこうイルカがあの亀の方を向いていることに表されたイルカと亀の関係性について、より明瞭に把握したと理解できる。自己像であるイルカと導き手である亀との関係性をより明瞭に理解できたことは、自己の内的プロセスへの理解を深めることにつながったと考えられる。本具体例では、直観的な意識が関与した[不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]による構成を、A氏が調査的説明過程で再確認したことによって、自己理解が深まったと考えられる。

◆具体例 70：A氏第7回箱庭制作面接制作過程 3, 5, 20

A氏は第7回箱庭制作面接で、左側にけわしい崖のある半島を作った。そこに花や果物になる木を置いた。それらの箱庭制作過程について自発的説明過程で、以下のように語った。こちら、こちら側はあの崖、なんですね。‘半島の左側面を指しながら’<うんうん>こちら側が東かな‘半島の左側面を指しながら’、と、東で‘半島の左側面を指しながら’南かな‘半島の手前の側面を指しながら’というようなイメージで置いているんですけど、はい、はい、<東で南‘半島の両側面を指しながら’> (A氏自発, 7-20) 南っ側の、この、あの、日当たりのいいところには果物のなる木があるっていう。 (A氏自発, 7-5) <東で南ってありうんか?> あれ? ないでしたっけ? どうなる、あれ? 東だとお、あ、南こっちだ あ、本当だ、<そうだよな> 東だとあ、こっち北になる、あ、<だよな> そうですそうです <な> うん、ああ、怖い‘明るい調子の声で’。<(不明)だよな> そうです、ありえない。<でもなんとなくイメージとしては東で南って感じだったわけね。> そうです。わーあ、こわ。や、なんかですね、 (A氏自発, 7-20) 朝日を見る場所って思って、こちら側が朝日でこちら側が夕日と思ってたんですね。 <ふんふんふん> (A氏自発, 7-3) で、だけど花を置いた段階で北じゃなくなっただけですよ、こ<ふんふんふん>こっち側はあったかいところとおもっ、<ふんふんふん>北ですねえ。これねえくん、まあでも、うん。箱庭のイメージの方を大事にしよう>はい。まあん、でも、ん、何しろこう、崖があって、崖のきわに、 (A氏自発, 7-20) 果物と (A氏自発, 7-5) 花が咲いていると言う、うん<なるほど>で、なかなか取りに来れないので、たまあにやって来て、 (A氏自発, 7-20) 果物やら (A氏自発, 7-5) 花やらを収穫して帰る、ような場所だと思って作りました (A氏自発, 7-20)。 A氏は、半島の左側面を東、手前側面を南とイメージしていたことを説明した。しかし、半島の左側面が東ならば、手前側面は北になり、現実にはありえない方位となっていた。そのことを筆者に指摘されるまで、A氏は気づいていなかった。その後、イメージの中で、そのような方位の関係になった内的プロセスが語られた。半島の左側面は朝日を見る場所なので、東だった。その後、手前側面に花を置いたため、その場所は暖かいところになり、イメージの中では南となったことが語られた。構成中、浮かんだイメージに従ったため、実際にはありえない方位関係であることが認知されないままになった、と考えられる。

◆具体例 70 から、A氏が半島の左側面と手前側面のそれぞれのイメージを重視し、その方位上の関係については考慮していなかったことが見い出せる。A氏にとっては、それぞれの領域に付与されたイメージのみが重要であり、方位は考慮に値するものではなかったであろう。箱庭制作面接で作られる作品には、外界の影響が一定程度の強さで及ぼされる場



合もあるが、それでも箱庭制作者の内的世界の表現である。◆具体例 70 は、箱庭制作面接の作品が内界の表現であることの一例である。

A 氏は、第 7 回箱庭作品について、調査的説明過程では、表層的なものに感じられて愛着が湧かないと語った。しかし、ビデオを見直している時点では、出来上がった作品について「つまらない」という印象は薄い（A 氏内省, 7-複数過程に亘って、自発・意味）と内省報告に初めて記された。このように A 氏の第 7 回箱庭作品に対する感じや作品の意味は単純ではない。少なくとも、◆具体例 70 からわかることは、A 氏が半島の左側面と手前側面のそれぞれのイメージを重視し、方位という現実的なことを考慮していなかった内的プロセスが生じたことである。このような内的プロセスを伴う[不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]は、箱庭作品が箱庭制作者の意図を超えたものになることの一因となると考えられる。

#### ◆具体例 71: A 氏第 8 回箱庭制作面接制作過程 7

A 氏は第 8 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 7 で、人形の下を少し掘って、人形の周囲に砂を少しだけ盛った。調査的説明過程で筆者は、制作過程 7 で、箱庭制作者が人形の下を少し掘ったことについて質問した。その質問について内省報告に、砂を掘ったことは何気なくやっていたことで、忘れていた。何気なくやった事柄に光をあててくれたこと、そしてそれがきっかけになって自分の中にある守りたいという気持ちに触れていくことが出来た（A 氏内省, 8-7, 調査・意味）と記した。砂を少し掘って、人形の周囲に砂を少しだけ盛るという構成は、A 氏にとって何気なくやったことであつたために、説明過程では忘れていたことが示された。しかし、調査的説明過程での質問に答え、語られたのは、A 氏の義母に対する思いであつた。それは、少し下に置く事で、この人形を守るような、大事に（間 4 秒）保護するような、そういう感覚があつたんだろうな（中略）大地の守り、そうですね、なんでしょうね、何か器のような感じ（中略）仏像があつた、ハスの花の上に立ってますよね。（中略）ああいう感じもあるかもしれないですね（A 氏調査, 8-7）という義母を大事に思う思いの表れであることが、明確に語られた。

◆具体例 71 は、箱庭制作過程での行為について十分認識していなかったため、記憶の不明瞭さが生じた、と捉えられる。しかし、箱庭制作者の意識的な認識とは異なり、その行為が実は重要な内的プロセスをはらんでいることがある、と考えられる。また、この具体例では、筆者が質問したことによって、何気なくやった事柄に光をあててくれたこと、そしてそれがきっかけになって自分の中にある守りたいという気持ちに触れていくことが出来た。A 氏はこの構成とその構成について語ることを通して、自分の義母への気持ちをより深く理解することができた。箱庭制作面接において、見守り手が箱庭制作過程の様々な事象について、関心をもって、注意深く観たり、感じたり、味わったりしていることの重要性についても示された、と捉えられる。

◆具体例 70 と 71 には、箱庭制作者の不正確な認知や記憶の不明瞭に関する内的プロセスが見いだされた。◆具体例 70 と 71 に示された、箱庭制作者の不正確な認知や記憶の不明瞭は、箱庭制作面接における構成が箱庭制作者の明瞭な意図に基づくものばかりではないことの一例である。このように箱庭制作面接では、[不明瞭な点を残しつつ構成する内的プロセス]によって、箱庭制作者の意図を超えた構成が生じ、その構成を再確認したり、その構成

について語ることを通して,箱庭制作者が自己理解を深めることに寄与すると考えられる。

## Ⅶ章. M-GTAのコアカテゴリー④【内界と装置と構成の交流】の結果および考察

④【内界と装置と構成の交流】は、『単一回の制作過程・作品』内の『制作過程』における「内界」と「装置」と「構成」との交流に関するカテゴリーである(図6)。「内界」と「装置」と「構成」は、交流し、双方向で影響を与えあっている。これらの促進要因の交流によって、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与する、箱庭制作面接における促進機能が生じる。

①【内界と装置の交流】と②【内界と構成の交流】では、影響の方向性によって区別してカテゴリーや概念の結果および考察を記した。しかし、④【内界と装置と構成の交流】で行うと、あまりにも複雑になり、かえって理解を困難にすると考えられるため、そのような影響の方向性による区別は行わない。M-GTAによって生成されたカテゴリー・概念を以下の3概念群から詳述し、検討する。本コアカテゴリーは、「内界」と「装置」と「構成」との交流であるが、各カテゴリー・概念によって、3者の比重には偏りがあった。比重の一番大きな要因を中心に3群にわけた。

### 1)「装置」が中心となる概念群

「装置」が中心となる概念群があった。この概念群内の概念は、「装置」に一番大きな比重があり、他の2要因と交流していた。ここには、[砂や砂箱の底の色を巡る内的プロセスやその構成への影響]、[ミニチュアを巡る内的プロセスやその構成への影響]、[ミニチュアの他領域との関連]の3概念があった。

### 2)「構成」が中心となるカテゴリー・概念群

「構成」が中心となるカテゴリー・概念群があった。このカテゴリー・概念群内の概念は、「構成」に一番大きな比重があり、他の2要因と交流していた。ここには、カテゴリー<ミニチュア選択の

内的プロセス>と、その中に[構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響]、[代替としてのミニチュア選択や装置の利用]の2概念があった。また、そのカテゴリー外に、2概念[作られなかった構成]と[説明過程で、ミニチュアを置き

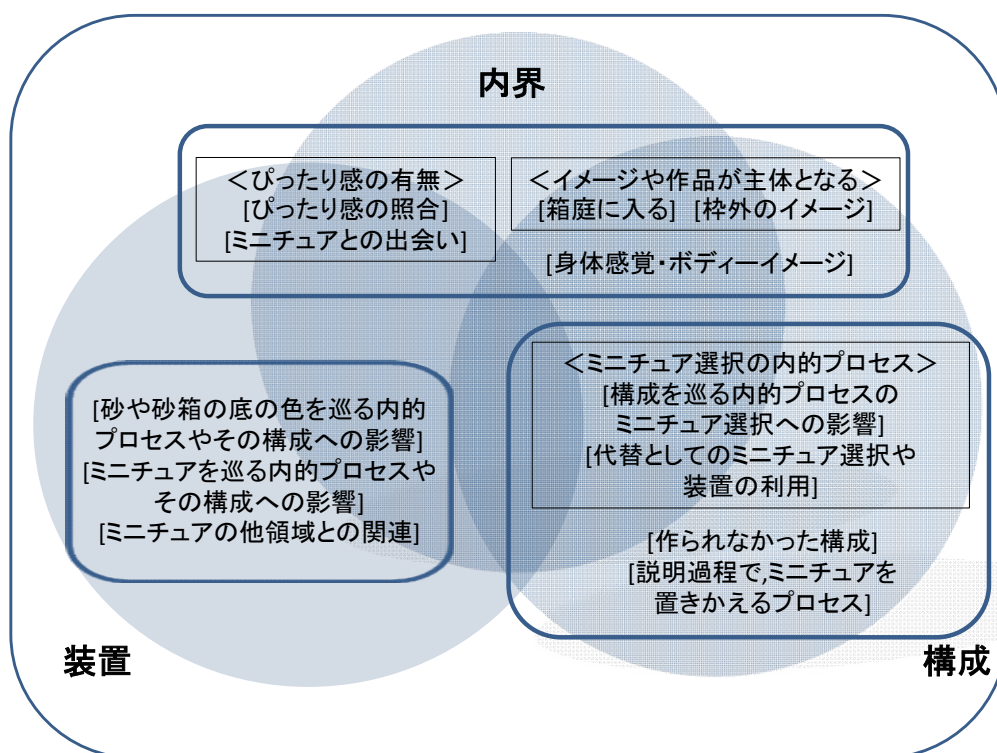


図6 ④【内界と装置と構成の交流】

かえるプロセス]があった。

### 3)「内界」が中心となるカテゴリー・概念群

「内界」が中心となるカテゴリー・概念群があった。このカテゴリー・概念群内の概念は、「内界」に一番大きな比重があり、他の2要因と交流していた。カテゴリー<ぴったり感の有無>と、その中に[ぴったり感の照合],[ミニチュアとの出会い]の2概念があった。また、カテゴリー<イメージや作品が主体となる>の中に2概念[箱庭に入る],[枠外のイメージ]があった。上記カテゴリーの外に独立して、概念[身体感覚・ボディーイメージ]があった。

以下に、カテゴリー、概念、具体例を挙げ、④【内界と装置と構成の交流】で見いだされた促進機能の結果および考察を記す。

## VII-1. 「装置」が中心となる概念群の結果および考察

「装置」が中心となる概念群内の[砂や砂箱の底の色を巡る内的プロセスやその構成への影響],[ミニチュアを巡る内的プロセスやその構成への影響],[ミニチュアの他領域との関連]の結果および考察を以下に記す。

### 1) [砂や砂箱の底の色を巡る内的プロセスやその構成への影響]の結果および考察

[砂や砂箱の底の色を巡る内的プロセスやその構成への影響]は、「砂の触感や温感やにおいや砂箱の底の色に、感覚、感情、イメージなどが喚起・付与され、それらが砂に触れることや構成に与える影響」と定義された。この概念の具体例を(1)砂によって喚起される内的プロセス、(2)砂の構成への影響、(3)箱庭制作者の気持ちや身体感覚が砂に触れることに与える影響、(4)砂箱の底の色を巡る内的プロセスや構成への影響、の4観点から考察する。

#### (1) 砂によって喚起される内的プロセスの結果および考察

砂によって喚起される内的プロセスの具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 72 : A氏第1回箱庭制作面接制作過程 2

A氏は第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程2で、砂箱に向き合い、手で砂をなでたり、そっとつまんだりしながら、砂箱を眺めていた。続いて、右手で砂をすくい、左手にかけた。その行為について、内省報告に「いざ置こうとなると、何を置いたらよいかわからなかった。自分の中から浮かんでくるものが見つけれない、つかまえられない。そんな自分自身の感覚を目覚めさせたくて砂に軽く触れた(A氏内省,1-2,制作・意図)、ひんやりとした砂が手に心地好い。さらさらとした感触で、気持ちが穏やかになっていくのを感じていた(A氏内省,1-2,制作・感覚)、砂に触れながら、箱庭の世界に入っていったのだと思う(A氏内省,1-2,制作・意味)」と記した。この具体例では、砂に触れることによって、A氏は箱庭制作する心の準備が整っていったのだと理解できる。

#### ◆具体例 73 : A氏第3回箱庭制作面接制作過程 4

A氏は第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程3で腕時計と指輪を外し、制作過程4で中央の砂をよけて、砂箱奥に海を作った。その箱庭制作過程について、内省報告に「思い切り砂に触れていこう、という気持ちになっている。「今日はいくぞ」という気分(A氏内省,3-3,制作・感覚)、ざくざくと砂をかき分けるのが楽しく小気味よい(A氏内省,3-4,制作・感覚)」と記した。この2つの内省報告を考えあわせると、A氏は、砂に触れることや箱庭制作に強く

コミットしようとする A 氏の気持ちになっており、そのような気持ちの勢いのままにざくざくと砂をかき分け、楽しさや小気味よさを感じたと捉えることができる。

砂を巡る快の感覚は多く報告・言及されている。石原(2008)では、全 40 セッション(20 名、各 2 セッション)中、14 名の箱庭制作者の 16 セッションで、快の感覚が報告され、箱庭制作者に「気持ちいい」という言葉で表現したくなるような快の感覚体験を砂が引き起こすことはかなりの普遍性をもつと言えそうである、としている(p.75)。中道(2010)では、9 名中 8 名の箱庭制作者が砂の感触を快と捉えた(p.115)。

本概念の◆具体例 72 と 73 でも、砂に触れることや、砂をかきわけ作業によって心地よさ、気持ちが穏やかになっていく感覚、楽しさなどの内的プロセスが喚起される快の体験が見いだされた。A 氏第 1 回箱庭制作面接では、砂に触れることが、箱庭の世界に徐々に入っていくことにも寄与していると考えることができた。A 氏第 3 回箱庭制作面接では、A 氏は、砂に触れることや箱庭制作に強くコミットしようとし、その勢いのままに砂をかき分け、楽しさや小気味よさを感じたと考えることができた。このように砂に触れ、箱庭の世界に入っていくと、箱庭制作に強くコミットすることによって、箱庭作品は箱庭制作者の内的表現となっていく。箱庭制作者の内界が表現され、展開することを通じて、箱庭制作者は自己理解を促進することができる。砂に触れることは、箱庭制作面接の促進機能の基礎として重要であると考えられる。

## (2) 砂の構成への影響の結果および考察

砂の構成への影響の具体例を以下に挙げる。

### ◆具体例 74：A 氏第 5 回箱庭制作面接制作過程 2

A 氏は第 5 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 2 で、水を含ませた砂を混ぜた。その箱庭制作過程について、調査的説明過程で水を入れてもらってこう、ざくざくやっている最中は、しー、単純に心地よくって、においも立ち上がってくるしくそうだね>面白いなと思っていて、で大ききなものを作ろうという気持ちになってましたね (A 氏調査, 5-2) と語った。

### ◆具体例 75：A 氏第 6 回箱庭制作面接制作過程 2～3, 全体的感想

A 氏は第 6 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 2 で、両手でざくざくと水を入れた砂をかき混ぜ、固めた。制作過程 3 で、水がほぼ均等に混ざった砂を砂箱の底にぐいぐいと押し付けた。それらの箱庭制作過程について調査的説明過程で、以下のように語った。ざくざく作るのもいい‘笑’ (中略) テンポ。<テンポ、はあああん>最初、こう砂を掻き分けてる時、<ふんふんふん>かき混ぜてる時はまさしくこうざくざくの感じで、<うんうんうん> (A 氏調査, 6-2) 手でギュッギュッて押ししたり、<うんうんうん>こう、ニギニギしたりして。それざくざくですし、 (A 氏調査, 6-3) こう物を置く時に、すごく、こう、あ、次これ次これ次これって<早かったね確かにね>はい。私の中からいるいる、それこそざくざく湧き出てくるっていう、<うんうんうん>そういう感じですかね (A 氏調査, 6-全体的感想)。砂をざくざくと勢いよくかき混ぜ、手で砂を押すというテンポが、その後の構成でイメージがざくざく湧き出て、次々にミニチュアを置くテンポに影響した、と捉えられる。

中道(2010)にも、砂が構成に影響する主観的体験が報告されている。例えば、制作者 F は、「眠りこけるような田園風景」を作ろうと決めてきていたが、砂に触れるうちにイメージが

大きく変化し、火山とカルデラ火山を作った(pp.95-96)。制作者 E は、砂をこねくり回したり、両手で握ったり、擦り合わせたりして砂の感触を味わい構成していった。砂に触れることで、自分の子ども時代や娘時代や自分の子どもと遊んでいた時代が「ドワーッと思いだされた」。その体験について、中道は砂に触れることによって箱庭制作者の内的世界が活性化され、砂は箱庭制作者がイメージに入っていくための入口の役割を果たしたと考察している(p.120)。本概念の◆具体例 74 と 75 でも、砂に触れることや砂のにおいなどがイメージを喚起させ、そのイメージが構成されていく場合があることが示された。また、砂をかきまぜたり、押ししたりするテンポも、内的プロセスに影響を与え、それが構成に影響することが確認された。

◆具体例 75 を違う観点から検討する。◆具体例 75 では、かき混ぜてる時はまさしくこうざくざくの感じで、くうんうんうん (A 氏調査, 6-2) 手でギュッギュッと押ししたり、くうんうんうん > こう、ニギニギしたりして。それざくざくです (A 氏調査, 6-3) と擬音語が使われている。A 氏の他の語りと比較すると、このように擬音語を多用することは珍しい。握るという言葉を使わず、ニギニギしたりして という子どもっぽい言い回しが現れている。この擬音語の使用は、退行の表れと理解することができるだろう。箱庭療法において砂に触れることが治療的に意味のある適度な退行を促すことは、よく指摘される(河合隼雄, 1969, p.22; 木村, 1985, p.21; 他)。A 氏は、この言葉に続けて、構成でイメージがざくざく湧き出てきたと語る。治療的に意味のある適度な退行によって、イメージが賦活され、それが構成に繋がっていった主観的体験の語りと考えられる。

◆具体例 74 と 75 のように、砂に触れることや砂のにおいなどがイメージを喚起させ、そのイメージが構成されていく場合や、砂をかきまぜたり、押ししたりするテンポもまた、内的プロセスに影響を与え、それが構成に影響することが確認された。また、砂に触れることによる治療的に意味のある適度な退行を示すと考えられる具体例もあった。砂に触れることによって箱庭制作者の内的世界が活性化され、豊かな表現やイメージの変化を生む可能性があることが示された。このようにして、砂に触れることは、箱庭制作面接の促進機能として働くことが確認された。

### (3) 箱庭制作者の気持ちや身体感覚が砂に触れることに与える影響の結果および考察

箱庭制作者の気持ちや身体感覚が砂に触れることに与える影響の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 76 : A 氏第 9 回箱庭制作面接制作過程 1

A 氏は第 9 回箱庭制作面接で、箱庭制作面接開始と同時に玩具棚に向かった。その箱庭制作過程について、内省報告に この日は北風が強い、寒い日だったが、研究室内は暖かく、入室した途端ちじこまっていた体がふっと解放されるような、楽な気分になった。そのせいか、なんとなく砂に向き合いたくない。深く沈んでいくよりも、もう少し軽やかに進めていきたかった (A 氏内省, 9-1, 制作・意図) と記した。

この具体例では、身体が解放されるような感覚や楽な気分が砂に向き合うことを避けるように働いている。この回の A 氏にとって、砂に向き合うことは、軽やかさとは反する感覚があった、と捉えられる。A 氏第 9 回箱庭制作面接では、最終的な作品として初めて街の風景が作られた。自己像である星の王子様は映画を観ようとして映画館の前に立っている。その制作過程の内省報告には、現実の世界での私の行動を映しているよう。少し楽しい気分

になりながら (A氏内省, 9-6, 制作・感覚) と記されている。また, A氏は今までの箱庭制作面接では感じたことのない身体感覚やボディーイメージを感じた。その感覚やイメージについて, 調査的説明過程で ドアを開けたらそのまま, 自分の欲求のままに現実世界で自由に行動を始めよう。足が軽くなっているというか, からだが前に出ているというか, 頭であれこれ考えないで, まず体が行動している, そんな感じ (A氏内省, 9-全体的感想, 調査・意味) と語った。この具体例では, 外に向かい, 現実世界で自由に動こうとする身体感覚やボディーイメージが示された。これらの具体例に示されているように, A氏第9回箱庭作品は, 自分の内界に深く向き合おうとするのではなく, 外に向かう自由さが主なテーマとなった。河合隼雄(1969)は, 砂にまったく手を触れないことの要因の一つとして, 無意識的なものに対する怖れを挙げている(p.50)。第9回箱庭制作面接でA氏が無意識に対する怖れを感じていたかは不明であるが, 少なくともこの日の傾向として, 無意識的なものも含めた内面に深く向き合っていこうとするものではなかった, と捉えられる。

本節(1)や(2)の◆具体例72~75で挙げたように, A氏は砂に触れることの心地よさを体感している。また, 以下の具体例のように, A氏は砂を用いた構成によって, 自己の内面に深く向き合う内的プロセスも体験している。

#### ◆具体例77: A氏第4回箱庭制作面接制作過程2~3

A氏第4回箱庭制作面接の箱庭制作過程2と3で, A氏は砂箱左上隅から砂箱中央に向けて, 反時計回りの渦の構成を砂で行った。その構成に対して, 第4回ふりかえり面接で, 以下のように語った。渦巻きは, [根源的なものというか。なんか, すべての始まりだったり, すべての終わりだったり。そのような意味があるなというは前から思って, 前から感じていて。(中略)世界のありとあらゆるものをもりこんだ図形という, そんな感覚が私にはあって。(中略)マンダラの意味と同じような何かこう, 根源的なものとか。原初のものっていう。そんな力を感じさせる図形だと]。第4回箱庭制作面接で, 自己像である亀はその渦の中心に向けて, 苦労して進んでいった。このように, A氏は砂を用いた構成によって, 自己の内面に深く向き合う体験をしている。

砂の様々な影響を体感しているA氏だからこそ, 第9回箱庭制作面接では, 身体が解放されるような感覚, 楽な気分, 軽やかに進めていきたいという思いに沿って, それを大切に, 深く沈んでいくことを避け, 砂に向き合わないことを選んだ, と理解できる。第9回箱庭制作面接の◆具体例76は, A氏が自分の身体感覚も含めた内的プロセスと砂に触れるという行為とを照合して, 砂に触れないことを選んだ主観的体験の語りだと考えられる。それは, いま・ここの自分の内的プロセスを尊重した結果だと捉えられる。内的プロセスを尊重したことで, 第9回箱庭制作面接では, 初めて街の風景が作られ, 外に向かい, 現実世界で自由に動こうとする身体感覚やボディーイメージが生じるという展開が生まれたと解釈することができる。

箱庭制作者の気持ちや身体感覚が砂に触れることに影響を与える場合があり, そのことを巡る内的プロセスを箱庭制作者が尊重することは, 箱庭制作面接の展開やその展開に伴った箱庭制作者の内的プロセスに影響を与える場合があることが確認された。これは, 箱庭制作面接の促進機能の一側面であると考えられる。

#### (4) 砂箱の底の色を巡る内的プロセスや構成への影響の結果および考察

砂箱の底の色を巡る内的プロセスや構成への影響の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 78：A氏第1回箱庭制作面接制作過程3～4

A氏は第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程3で、砂箱右手前の砂をかき分けて、底の青色を出した。制作過程4で、右手前の水の領域を広げ、右半分を海にした。それらの箱庭制作過程について、内省報告に以下のように記した。砂に触れるだけではまだ十分に自分の内側が動いてこない。底の青色(水)を見たらもっと動くものがあるだろうか(A氏内省, 1-3, 制作・意図), 水の色を見て、「悪くないな」と思った。もっと水の領域を増やしたくなった(A氏内省, 1-3, 制作・感覚), 水色がすがすがしく、今の自分の心の状態にフィットする。なんだかすっきりとした気分になり、爽快(A氏内省, 1-4, 制作・感覚)。砂に触れただけでは、自分の内側が十分に動いていないと感じたA氏は砂箱の底の青色を見たら、内側が動くだろうかと考えた。そして、砂をかき分けて、底の青色を出した。水の色を見て、「悪くない」と感じ、もっと水の領域を増やしたくなり、右半分を海にした。その構成によって、A氏は水色をすがすがしく感じ、自分の今の心の状態にフィットすること、すっきりと爽快な気分になった。A氏は底の青色(水の色)を巡る感覚や構成への影響に気づいている。このような気づきは、構成が内的プロセスにぴったりな表現になることに寄与するとともに、いま・この自己の内的プロセスへの理解を深めることにも役立つと考えることができる。

◆具体例 78 から、砂箱の底の色が箱庭制作者の内的プロセスや構成に影響を及ぼす場合があることが示された。中道(2010)に、砂箱の底の色が箱庭制作者の内的プロセスや構成に影響を及ぼす例が報告されている。制作者Fは、「全然思っていたのと違うものができた。もっとおだやかな、眠りこけるような田園風景を思っていた[中略]のだけど、この水(箱の青)が見えた途端、がらっと変わった」と語り、驚きを表現した(p.102)。

◆具体例 78 や中道の例から、砂箱の底の色が箱庭制作者の内的プロセスや構成に影響を及ぼすことが見いだされた。しかし、これらの具体例では、砂箱の底の色の影響力のメカニズムが充分明確になったとは言い難い。水の色を見て、「悪くないな」と思った。もっと水の領域を増やしたくなった(A氏内省, 1-3, 制作・感覚), 色がすがすがしく、今の自分の心の状態にフィットする(A氏内省, 1-4, 制作・感覚)とA氏が内省報告に記しているように、一つの可能性として、砂箱の底の色が箱庭制作者の内的プロセスや構成への影響には、ぴったり感が関連していると考えられる。

ぴったり感以外の要因の可能性を探るため、他の具体例も加え、検討する。

#### ◆具体例 79：B氏第1回箱庭制作面接制作過程2

B氏は第1回箱庭制作面接で、中央の砂を掘り、底の青の色を出して、泉(水源)を作った。泉はB氏にとって、核になるものであった。その核となるものは宗教性の表現であり、B氏にとって、こんこんを湧きでるような躍動感をもっていた(p.95 ◆具体例 60 参照)。その箱庭制作過程についてB氏は自発的説明過程で以下のように語った。水っていうのは、すごく生き物が生きる上でとても大切なものであろうように思うんですね。その湧きあがる水を表現したかった。つまり、もりあがる。こんこんとわきあがってくるような。それを、物を使って表現することができなかつたので、それを真ん中でこの下地の青を利用してというところで、そのしたんですけど。気持ちとしては、その、命とか生活とかいう、この中心に



その湧きあがるもの、水というものがある。また、それが大切であるということをおぼやかし  
た (B 氏自発, 1-2)。B 氏は砂箱の底の青色によって、こんこんとわき出るような躍動感 (B  
氏調査, 1-2) を表現できた。モノとしての砂箱の底は静止しているが、B 氏はイメージの中  
では、躍動感を感じているということになる。石原(2008)には、「モノをアニメイトする」と  
いうイメージ体験が報告されている。アニメイトとは、「単なるモノであるミニチュアを生  
命や意思をもつかのよう扱い、ミニチュアが動いたり、感じたり、考えたりするかのよう  
に体験することを指す」としている。石原が指摘したこのイメージ体験と類似の概念として、  
本研究では **<イメージや作品が主体となる>** を挙げた (pp.146-149 参照)。**<イメージや作  
品が主体となる>** は、「イメージや外在化されたイメージ(作品・構成・ミニチュア)があた  
かも自律性や意思をもつ主体となり、箱庭制作者はそれを受容する立場となる事象につ  
いての内的プロセス」と定義された。砂箱の底の青色に こんこんとわき出るような躍動感  
を感じるという主観的体験の語りは、石原の「モノをアニメイトする」や本研究の **<イメ  
ージや作品が主体となる>** という主観的体験と考えることができるのではないだろうか。この躍  
動感とは、石原のいう「ミニチュアが動いたり」という部分と共通性をもった動きのイメ  
ージの主観的体験である、と捉えられる。イメージに没入し、「モノをアニメイトする」や **<イ  
メージや作品が主体となる>** というようなイメージ体験が生じることによって、現物の箱  
の底の水色に こんこんとわき出るような躍動感 が生まれたと考えられる。

このような機制によって、B 氏第 1 回箱庭制作面接における躍動感についての主観的体  
験の語り、海の表現に展開するという構成への影響や中道(2010)の制作者 F の驚きという  
内的プロセスへの影響を理解できるのではないだろうか。

◆**具体例 78 と 79** から、砂箱の底の色は、箱庭制作者の内的プロセスや構成に影響を及ぼ  
すことが示された。その影響の内実として、ぴったり感、「モノをアニメイトする」(石原、  
2008)や本研究の **<イメージや作品が主体となる>** という主観的体験が関係している可能  
性が見いだされた。砂箱の底の色は、箱庭制作者の内的プロセスや構成に影響を及ぼし、箱  
庭制作者にとって重要な内的プロセスに形を与えたり、構成の展開を生む一因となる。この  
ようにして、[砂や砂箱の底の色を巡る内的プロセスやその構成への影響]は、箱庭制作者の  
自己理解を促進することができる。

## 2) [ミニチュアを巡る内的プロセスやその構成への影響]の結果および考察

[ミニチュアを巡る内的プロセスやその構成への影響]は、「ミニチュアに、感覚、感情、イ  
メージなどが喚起・付与され、それらが構成に与える影響」と定義された。その具体例を以  
下に挙げる。

### ◆**具体例 80** : A 氏第 4 回箱庭制作面接制作過程 8, 13~14

A 氏は第 4 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 8 で、亀を砂箱左奥、渦の始まりのあたりに置  
いた。制作過程 13 で、馬、牛、チーター、ゾウ等を右手前の陸地に、川で水を飲むように置いた。  
続く制作過程 14 で、A 氏は以下のような構成を行った。

- 36:11～ ワニを手にとり、砂箱左側の渦の川幅を広げた。
- 36:38～ 海ガメを、砂箱左奥隅から、左側真ん中付近まで進めた。
- 36:43～ ワニを元の場所（渦の外、左側）に、右向きに置いた。
- 36:50～ 河童を手にとり、左手にもったまま河童のいるあたり（砂箱中央手前）の川幅を広げた。河童を戻し、中央より右手の川幅も広げた。
- 37:24～ 海ガメを手に取り、砂箱左奥隅の最初にあった場所に戻した。
- 37:28～ 一度、海ガメの方に右手をのぼすが止め、再度、海ガメを手にとった。
- 37:33～ 海ガメを一旦進めたところまで、再度進めて、置いた。砂箱を見つめた。

箱庭制作過程 15 で、A 氏は亀が通り過ぎたあたりの川べりに樹木と花を植えた。制作過程 16 で、亀をもっと進めて、渦巻きの全行程の 6 割ほどの位置(砂箱右側中央部)に置いた。A 氏は調査的説明過程でだから、本当に不思議なんですけど、こう、箱庭のアイテムが増えていくと、(A 氏調査, 4-複数過程に亘って) ここまでやっと進められたというか(A 氏調査, 4-16) と語った。亀を進めることがなかなかできなかったが、渦の周りの動物などのミニチュアからの影響によって、亀の現在の位置まで進めることができた。亀以外のミニチュアを置くことが、亀を進めるという構成に影響したことが示された(p.52 ◆具体例 21 参照)。この具体例では、亀が進んでいくと A 氏が体験していること自体が、A 氏の自己成長の表れと理解することができる。

どのような内的プロセスによって、亀は進むことができたのだろうか？ 亀を進めることができたことに影響した他のミニチュアについて A 氏は明確に語っていない。他のミニチュアや構成の順序について A 氏が語ったことから推測すると、一つには、a.箱庭制作過程 13 で右手前の陸地に置かれた、馬、牛、チーター、ゾウと思われる。また、b.制作過程 14 で触れた河童やワニは、亀を「見守るような励ますような、息抜きをさせてあげるような存在」として、制作過程 8 で置かれたミニチュアであった。それらが置かれた場所の渦の川幅を広げたことを考えあわせると、これらの存在も亀に進むことに寄与していたと思われる。c.制作過程 15 での、亀が通り過ぎたあたりの川べりに樹木と花を植えるという構成について、内省報告に亀が通り過ぎたところに何がしかの成果、が欲しかった。樹木や花はその成果の意味(A 氏内省, 4-15, 制作・意図) と A 氏は記した。この成果という構成もまた亀が進むことに影響したと推測することもできる。このように、亀が進んでいくという構成に、他の様々なミニチュアや構成が関与していた、と推測できる。

箱庭療法の治療的要因の一つに、ブリコラージュ(器用仕事)が挙げられる(齋藤,2002;岡田,1993)。齋藤(2002)は、ブリコラージュについて「砂箱の中の山や海や川や砂漠などアイテムを背景に、それらが様々に重ね合わされていくと、来談者の意図も治療者の想いも越えていくような自律的なイメージ世界が降り立つことになる」と述べている。A 氏第 4 回箱庭制作面接では、だから、本当に不思議なんですけど、こう、箱庭のアイテムが増えていくと、(A 氏調査, 4-複数過程に亘って) ここまでやっと進められたというか(A 氏調査, 4-16) というように構成の展開に箱庭制作者は不思議さを感じている。ミニチュアや構成の組み合わせが、箱庭制作者の内的プロセスに影響を及ぼし、箱庭制作者の意図を越えた構成の展開が生まれる場合があることが見いだされた。

このようにミニチュアや構成の組み合わせによって、箱庭制作者の意図を越えた構成が

生まれるのはどのような機制なのだろうか？ その要因の一つとなるのは、意識の背景、あるいは前意識における心の動きにあるのかもしれない。亀が渦を進んでいくことを巡って、箱庭制作過程で明確に意識化されていたのは、箱庭制作過程 15 の **亀が通り過ぎたところに何がしかの成果、が欲しかった** (A氏内省, 4-15, 制作・意図) のみである。それ以外の制作過程 11~16 には、亀が進んでいくことができた内的プロセスに関する明確な言及はない。

以下に箱庭制作過程 11~16 に亘る A 氏の主観的体験の語りや記述を確認していく。箱庭制作過程 11 で、A 氏は砂箱右上隅に、ホウキに乗った魔法使いの少年、陶器のオバケを置いた。砂箱右上隅の構成が、ネガティブな感情も含んだ自分の奥の方の気持ちであることを A 氏は調査的説明過程で初めて気づいた。そして、自己像である亀がその気持ちをちゃんと見てあげないといけないという気持ちで向かっているのだろうと思う、と調査的説明過程で初めて語った(pp.101-102 ◆具体例 65 参照)。箱庭制作過程 12 で、A 氏は筆者に「今で何分くらい経ちましたか？」と尋ねた。その行為について、内省報告に **なんだかすごく時間が経っているように感じていて、残り時間を確認したかった** (A氏内省, 4-12, 制作・意図) と記された。箱庭制作過程 13 で右手前の陸地に馬、牛、チーター、ゾウを置くが、その構成について説明過程では直接的な言及はなかった。箱庭制作過程 13 の構成について、内省報告でようやく直接的な記述が以下のようになされた。**渦巻きの川は、単に進路というのではなくて、他の生き物達の命の支えにもなっているらしい** (A氏内省, 4-13, 制作・意味)。亀を砂箱左側真ん中付近まで進めた制作過程 14 について、内省報告に **なんとなくふっと、そうだ亀の位置を変えたらいいんだと思いつく。そして少し進めると、ちょっとほっとする。ああ、ここまで進んでいるんだという** (A氏内省, 4-14, 制作・感覚) と記した。制作過程 16 で、A 氏はさらに先まで亀を進めた。**一度亀の位置を進めているので、どんどん、自分にぴったりする位置まで進めればいいんだと思う** (A氏内省, 4-16, 制作・意図) と内省報告に記された。この制作過程 16 で初めて、意図的に亀を進めた。

このように、箱庭制作過程 14 で、なんとなく亀の位置を変えたらいいんだと思いつくが、その思いつきの源は意識化されていない。制作過程 11 と 13 での構成による亀を進めることへの影響は、前意識的で、意識の背景で起こっていた、と理解できよう。その後、制作過程 15 で、意図的に進んだことの成果を構成し、続く 16 で初めて意図的に亀を進めた。A 氏第 4 回箱庭制作面接における本項で検討した箱庭制作過程の場合、亀の位置を変えることにつながる構成に関する内的プロセスが意識の背景で、連動することによって、亀を動かすという思いつきが生まれ、そこから意図的な構成がなされた、と考えることができるだろう。

弘中(1995)は、Gendlin の体験過程理論の前概念的な意識水準、Freud の前意識を参照しつつ、箱庭療法などの非言語的・イメージ的表現が治癒的な要因として働く機序について、独自の考察を行っている。クライアントに内的な変化を引き起こすためには、意識的・言語的水準における explicit な洞察は必ずしも必要ない。implicit な(前意識的・前概念的)水準においてすでに、その水準に止まったままでも、クライアントの内的な変化は生じ得て、こちらの方が変化の過程としては本質的な部分であると考えることができる。表現を行うことは、クライアントに今ここでの体験を引き起こし、それは新奇な生々しい体験であるので、前意識的・前概念的な性質をもつ。その前意識的体験は非言語的性質を維持したまま、前意識的洞察(「!」)となり得て、それだけで人は内的な変化を引き起こされる(p.59)。箱庭などの非言語的・イメージ的表現の場合、「(!)」が随伴的に生じるが、これらの表現自体が原体験

(前意識的体験)を纏め、方向づける核となる象徴としての要素を濃厚に具備している。非言語的・イメージ的表現においては、表現することと、前意識的体験が生じることと、表現自体が象徴として機能することとは、ほとんど一つの現象の諸側面といてよいほどに不可分に結びついて相互的に関連した心理的過程を作り出している(pp.63-64)。弘中(1995)の考えを参照すると、箱庭制作過程 11 と 13 での構成による亀を進めることへの影響は、意識の背景で起こっていた前意識的体験と捉えることが可能である。そのような前意識的体験が連動して、箱庭制作過程 14 で、なんとなく亀の位置を変えたらいいんだとの思いつきが生まれた。その思いつきを基にして、制作過程 15 と制作過程 16 で、意図的な構成がなされた、と理解できる。箱庭制作過程 11～16 までの A 氏の主観的体験は、前意識的体験と意識的体験との相互作用だと捉えることができる。

[ミニチュアを巡る内的プロセスやその構成への影響]における、このような前意識的体験と意識的体験との相互作用は、箱庭制作者の意図を越えた構成の展開を生み、箱庭制作者の自己理解・自己成長を促進する機能の一つであると考えられる。

#### ◆具体例 81：B 氏第 5 回箱庭制作面接制作過程 1，全体的感想

B 氏は第 5 回箱庭制作面接の調査的説明過程で、箱庭制作面接の開始時の気持ちと、それが変化していった主観的体験を以下のように語った。今日、ここにきて、実際作り始めるまでは、今日は、また、何を作ろうとか、そういったものもなく、作れるんだらうかって、いう気持ちがありました。<ああ。そうなんですか>実際最初、この砂のところを見た時にでも、いやー、もしかした人形とかいろんなものを置けずに、砂を、こうやって、なでるだけになっちゃったら、どうしようかっていうぐらい、なんか、なかったんですね。(B 氏調査、5-1) でも、実際、まあ、その、人形とか、こういうやつに向き合う中で、結構、目についたっていうでしょうかね。人形の表情だとか、動作とか。そういった中で、結構ポンポンとくそ良かったですよね>はい。あの、進んでることができた。そういう意味では、わりあい、いっぱいいっぱいの中で、できちゃったかな、とかいう感じですね (B 氏調査、5-全体的感想)。

いっぱいいっぱいの中で、できちゃったかな、とかいう感じですねという言葉は、当初の危惧、予測を越えて「できちゃった」という意外さを示していると捉えられる。B 氏は第 5 回ふりかえり面接で[作り始めて、まあ、割合に、勢いよく、何を取ろうとかかっていうのが出てきて。そういう意味では、集中してたというか、凝縮してたということ]と語った。人形の表情や動作に B 氏の内的プロセスが触発され、ミニチュア選択が勢いよく行われ、制作に集中できたことが、B 氏が最初に危惧したこととは全く異なる構成の展開が生じた要因だと捉えることができる。B 氏第 5 回箱庭制作面接の構成は、日常生活での苦しい状況が色濃く反映されたものであった。B 氏は第 5 回箱庭制作面接で、砂箱奥に小人、なげき悲しむ人、かたつむりなどを、砂箱中央に星の王子様とルーペを置いた。ミニチュアを置けず、砂をなでるだけになるのではないかと思うほど精神的にいっぱいだった B 氏だったが、今の自分の心理的状况にぴったりなミニチュアを発見することによって、イメージが次々に喚起されたため、テンポよく構成することができた、と理解できる。

そして、構成による自己表現を通じて、当初感じていたこととは異なる感覚に B 氏は気づいた。わりあい冷静でいるというか。ひどく落ち込むとか、怒り狂って、投げ出してやるっていう風ではなくて。まあ、あの、うん、あのいろいろあるけど、うん、しょうがないなという

部分と、まあ、ちゃんと時間かけられれば、まあ、できないことないわっていうような、そういうような感覚とか、ということであって、わりあい冷静でいるっていうか (B氏調査, 5-全体的感想)。この気づきは、ミニチュアが箱庭制作者の内的プロセスや構成に影響を及ぼし、B氏が最初に危惧したことは全く異なる構成の展開が生じたからこそ生じた気づきである、と考えられる。[ミニチュアを巡る内的プロセスやその構成への影響]によって、箱庭制作者に意外な展開が生じ、それを通して、自己理解の深化に寄与することが見いだされた。

### 3) [ミニチュアの他領域との関連]の結果および考察

[ミニチュアの他領域との関連]は、「ミニチュアやその要素が、他領域がもつ意味やイメージと深く関係している内的プロセス」と定義された。本概念の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 82 : B氏第2回箱庭制作面接制作過程 5, 18~19, 32~35

B氏は第2回箱庭制作面接の箱庭制作過程5で、かごを2つ、仕切りの左側に配置した。制作過程18で、仕切り右側の中央にバオバブの木を置いた。制作過程19で、仕切り左側に亀とイグアナを置いた。制作過程32で、チェーンソーと斧をもった人形を迷いながら選び、続く制作過程33で、その2体の人形をイグアナの近くに配置した。制作過程34で、十字架を選び、続く制作過程35で、十字架像を、自己像である亀の背中に乗せるように配置した。これらの箱庭制作過程についてB氏は調査的説明過程で見守り手の質問に答えて以下のように語った。<最後に、十字架を亀の上に置かれた。このあたりで、また、何か、感覚的な、あるいは変化、あるいは、思い。>うーん。それはたぶん、この一連の壁とか、籠とか、トカゲとかの出来事というのがまさに、(現実の場での)出来事であるがゆえに、あの、うんと、より、うんと、意識化されたところの、その、神像かみぞうというんでしょうか。今回なんかっていうのは、この十字架のイエス。キリストとか、というところの部分は、とても、表現するのには的確で、的をいてる。という感じがしたんです (B氏調査, 2-複数過程に亘って)。第2回ふりかえり面接で、以下のように語った。[かごと葉をつけないバオバブの木のようなものだとか、攻撃的なものということの部分のやりとりがあったと思うんですけども、(中略)そういう話のやりとりの中で、頭の中では具体的な人物の顔なんか思い浮かんだりっていうことで、ああ疲れるなーという意味での「心労」っていうものを改めて感じた]。イグアナ(トカゲ)やチェーンソー、斧をもった人物は現実の攻撃的な人々のイメージであった。かごやバオバブの木はその攻撃に曝されているB氏の空虚さや心労を象徴していた。B氏が被っている攻撃やその心労は明確にイメージできる現実の場での出来事であった。十字架もまた意識化された神像かみぞう(神のイメージ)であった。B氏は、このような現実的な構成の中で、十字架は意識化された神像としての的を射ていると感じた。十字架の表現が的を射ているという内的プロセスは、他領域(イグアナやチェーンソー・斧をもった人物、かごやバオバブの木)の表現との関連の中で感じられたものであった。[ミニチュアの他領域との関連]で的を射た表現ができることを通して、第2回箱庭制作面接の箱庭作品はB氏の内界を反映したものとなったと捉えることができる。その構成や構成について語りを通して、B氏は自己への理解が深まったと考えることができる。

◆具体例 83 : A 氏第 2 回箱庭制作面接制作過程 5, 11

A 氏は第 2 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 5 で、埴輪と土偶をもってきて、砂箱の中に仮に置いていた。制作過程 11 で、白い石を砂箱左奥の陸地、川岸に置いた。左下隅の山の砂を左奥に移し、その山のふもとに埴輪や土偶を置いた。その箱庭制作過程について、自発的説明過程で「ちょっと奥の方の山の上の方だったら、ああいう石を置けるなと思って、石を置いてくうんうんうん>そうした時に、この人たちも、山の奥のほうだったらいてもらってもいいなくはあー>この辺の手前のほうにはちょっと置けない<置けない>うん手前のほうにいる生き物とはちょっと違う生き物のような気がして置けなかったですね (A 氏自発, 2-11)」と語った。そして、内省報告には、石に、生命感は薄くて、動き出すことがないもの、はっきりとした形をまだ持たない、抽象的なものなど多様な意味が付与されていたことが記された(pp.36-37 ◆具体例 8 参照)。A 氏は大きな石を山の奥の方に置き、山を砂箱左奥隅に移動した。そのような構成の変化によって、埴輪や土偶も山の奥であれば、いてもいいと思った。しかし、それらは、半分のちではないものになっているため、動物や人とは違う生き物であり、動物や人の世界には入ってきてはいけないと感じた、と捉えられる(p.42 ◆具体例 12, pp.44-45 ◆具体例 14 参照)。この具体例では、埴輪・土偶は、石や山との関連性・類似性をもつと同時に、動物や人とは異質性をもつことが、構成に影響したことが示された。類似性や異質性が十分に照合され、埴輪・土偶は山のふもとに置かれたと理解できる。[ミニチュアの他領域との関連]に関する内的プロセスが十分に照合され、構成されることにより、A 氏はこれらのミニチュアがもつ自分にとっての意味について理解を深めるとともに、そのような構成を行った自分への理解をも深めることができたと解釈できる。

[ミニチュアを巡る内的プロセスやその構成への影響]で検討した A 氏第 4 回箱庭制作面接の、他のアイテムが増えることによって、亀が進むことができたという主観的体験の語り(pp.115-116 ◆具体例 80 参照)は、本概念の具体例でもある。

◆具体例 82, 83 と、◆具体例 80 は共通点と相違点をもっている。ミニチュアや構成の組み合わせによって、構成が決定、展開していくという点では共通している。しかし、◆具体例 80 では、意識の背景における連動が大きく影響していたのに対して、◆具体例 82 と 83 では他領域からの影響が箱庭制作者に明瞭に意識化されているという点において異なっている。本概念には、[ミニチュアの他領域との関連]が明瞭に意識化されている場合とそうではない場合の両方があることが示された。

[ミニチュアの他領域との関連]は、複数の領域が関連性をもったり、ストーリーが生まれることに寄与すると考えることができる。このような関連性やストーリーによって、箱庭作品は、あるまとまりをもった箱庭制作者の内的プロセス、心的状況の表現になる、と考えることができる。反対にそのような関連性が生まれえない場合、各ミニチュアや領域がまとまりをもたない羅列的表現(木村,1985,p.45)になる、とも考えられる。そして、箱庭作品のまとまりやストーリーが生まれることによって、箱庭制作面接は、箱庭制作者のこころを十分に表現できる媒体となる。また、他領域との関連性は明瞭に意識化されていない場合もあり、箱庭作品が箱庭制作者の意図を越えたものとなる一因ともなりうる。このように、[ミニチュアの他領域との関連]は、箱庭作品のまとまりやストーリーを生んだり、箱庭制作者の意

図を越えたものとなる一因となる概念であり、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与すると考えられる。

## VII-2. 「構成」が中心となるカテゴリー・概念群の結果および考察

「構成」が中心となるカテゴリー・概念群には、カテゴリー<ミニチュア選択の内的プロセス>と、その中に[構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響],[代替としてのミニチュア選択や装置の利用]の2概念があった。また、そのカテゴリー外に、2概念[作られなかった構成]と[説明過程で、ミニチュアを置きかえるプロセス]があった。本研究において、ミニチュア選択という用語は、棚におかれたミニチュアを箱庭制作者が選ぶ行為だけでなく、それに加えて砂箱内で、箱庭制作者があるミニチュアを置いてみたり、複数のミニチュアを置き比べたりしてその構成と内的プロセスを照合した後に、ミニチュアを選択する、あるいは、選択しないという場合も含めて使用する。

### VII-2-1. <ミニチュア選択の内的プロセス>と[構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響],[代替としてのミニチュア選択や装置の利用]の結果および考察

カテゴリー<ミニチュア選択の内的プロセス>と、その中の2概念[構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響],[代替としてのミニチュア選択や装置の利用]の結果および考察を以下に記す。

#### 1) <ミニチュア選択の内的プロセス>の結果および考察

<ミニチュア選択の内的プロセス>は、「ミニチュアを選択する際の意図,感覚,感情,イメージ,意味などの内的プロセス」と定義された。本カテゴリーの具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 84 : B氏第2回箱庭制作面接制作過程 32

B氏は第2回箱庭制作面接で、チェーンソーと斧をもつ人を迷いながら選んだ。その箱庭制作過程について調査的説明過程で以下のように語った。人形を選ぶときに、銃をもった人を選ぶか、迷ったんです。で、その、それが、まあ、その、チェーンソーとかオノを持っている人の方が、その、なんていうんでしょう。攻撃性、人の攻撃性みたいなものを、その、なんかよく出しているかなと。そのつまり、銃をもったりとか、戦争をやっている人の感じというのは、明らかに、その、しようと思って、なんか、この、それに取り組んでみたいな。でも、そうじゃなくて、どちらかという、意識せずとも御しきれない、その暴力性みたいな部分だとか、っていうところの部分をなんか、あの、まあ、却って銃をもっている人とかは、表わしてないような気がしたんですね。むしろ、なんか、これは働く人の人形だと思ったんですけど、こっちの方がしっくりくるかな。その攻撃性、暴力性みたいなものがむしろ (B氏調査, 2-32)。この具体例では、銃をもつ人を選ぶか迷ったが、兵士は意図的に攻撃に取り組んでいるため、御しきれない人間の暴力性を表すには、チェーンソーと斧をもつ人の方がしっくりくるため、選んだことが示された。この選択は、B氏が迷いつつも、自分の感覚と照合して、意図的になされたことが示された。この具体例から、比較的明確なイメージをもってミニチュアを探しに行き、複数の候補の中から感覚と照合し、意図的にミニチュア選択がなされる場合があることが示された。複数の候補の中から感覚と照合してなされたミニチュア選択は、ぴったりの箱庭表現を可能にする。B氏は本具体例に示された<ミニチュア選択の内的プロセス>に

よって、自分の内的プロセスにぴったりの表現を行うとともに、この表現を巡る自分の内的プロセスへの理解を深めることができたと思える。

#### ◆具体例 85：B氏第3回箱庭制作面接制作過程 18～19

B氏は第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程18で人を選び、続く制作過程19で祈る人の位置を微調整しつつ、砂箱中央右寄りに2体、左斜め上の向きに置いた(写真21)。その箱庭制作過程について、自発的説明過程で以下のように語った。気持ち的には、祈り心なしには、その、つながっていけない。その、あんまりやっぱりしっかりと、あの、基盤とか、そういったものが見通しの中で、その、うん、あの、誰も保証されてはいないだろうけども、厚みとかいったら、何が起こるかわかんない。なにか一つ大きなことがあれば、あの、とん挫しちゃうよな。そういった、なんというんでしょう。(中略)じっくり慎重にことを構えてという意味での、祈り心で(B氏自発、3-18)。人形が2体ある点について、調査的説明過程で筆者とB氏の間で、以下のようなやりとりがあった。この人形を祈り心とおっしゃられたんですけど、この2体であるのってというのは何か？ああ。そうですね。そう言われてみると、特に2人ということよりも、厚みみたいな。この、祈っているというところの、その、思い入れみたいなところが、うん、というところで、たぶんそんなところのところを感じて、2体もってきたんだろうと感じております(B氏調査、3-18)。祈る人は、道のりの不安定さと祈り心(B氏内省、3-18, 自発・感覚)という感覚やイメージが付与されていた。

祈る人のミニチュアに関して、B氏は、何が起こるかわからず、大きなことがあれば頓挫してしまうような人生において、祈り心は基盤であり、慎重にことを構えることが必要だと考えていた、と捉えることができる。このように祈る人はB氏の人生観を表す重要なミニチュアである。この重要なミニチュア選択を行い、その内的プロセスを意識化することは、B氏の自己理解の深化に寄与したと考えられる。

ところが、祈る人が2体である点についての、筆者の質問は、B氏には意外なものだったようである。祈りの思い入れ、厚みだろうと答えているが、「そう言われてみると」「だろう」とあいまいな点がある。祈る人を選ぶこと自体の意味は明確であるが、2体であることの意味は不明確な部分があった、と捉えられる。◆具体例85では、ミニチュアの象徴的意味は明瞭であるが、ミニチュアの数に関して、数に意味がないわけではないにも関わらず、その数の意味については不明瞭であるように、部分的に意図が不明瞭な場合があることが示された。

#### ◆具体例 86：A氏第6回箱庭制作面接制作過程 10

A氏は第6回箱庭制作面接で、ペンギンの近くに巻貝を2個置いた。その箱庭制作過程について、自発的説明過程でこの貝は、二つはエー、貝殻を漁っていたら思いがけなくきれいな貝が出てきたので、ちよっ



写真 21 B氏第3回作品(写真中央右に2体の祈る人)



とうれしくなつてくはあ>何かこう、大事な物というかご褒美のような、なんかそんなつもりで、浜に打ち上げられている物としてそこに置きました（A氏自発,6-10）と語った。貝殻の発見は偶然であったが、見つけた時の内的プロセスに従って、特別なものとして選択した、と捉えられる。このように偶然が関係したミニチュア選択のパターンがあることが示された。偶然が関係したミニチュア選択は、箱庭制作面接で非意図的な構成が生じる一因となると考えることができる。

◆具体例 84～86 から、ミニチュア選択には、明瞭な意図に従ってなされる場合や部分的には意図が不明瞭な場合や偶然が関与する場合のように、様々なパターンがあることが見いだされた。明瞭な意図をもってミニチュア選択がなされ、そのミニチュアを用いて構成した場合、箱庭制作者が納得できる構成がなされるだろう。その上で、部分的な不明瞭性や偶然が関与したミニチュア選択も加わることによって、箱庭作品の構成は箱庭制作者の意図・意識を越えた構成になりうる、ということができる。河合隼雄(1991)は、箱庭療法を外在化されたイメージから考察する中で、できる限り自由な表現活動によって、「作っているうちに自分でも思いがけない表現が生じてきたり、作ったイメージに刺戟されて、おもいがけぬ発展や変更が生じたり」する場合があるとしている(p.26)。部分的な不明瞭性や偶然が関与したミニチュア選択は、おもいがけぬ発展や変更が生じる一因と考えられる。本項の◆具体例 84～86 と河合の考えを考え合わせると、意図・非意図的な両要因を含むくミニチュア選択の内的プロセス>は、箱庭制作者の自己理解や自己成長の促進に寄与する。

## 2) [構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響]の結果および考察

<ミニチュア選択の内的プロセス>内の[構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響]の結果および考察を記す。[構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響]は、「構成に、感覚、感情、イメージ、意味などが喚起・付与され、それらがミニチュア選択に与える影響」と定義された。以下の2具体例(◆具体例 87 と 88)は、VI-3-4.の[他の領域の構成への影響]と類似点がある。しかし、本項の◆具体例 87 と 88 は、構成に至る前にミニチュアを置き比べるなどの照合作業を伴ったミニチュア選択に、より比重のある具体例である。それに対して、[他の領域の構成への影響]は、形づくるという過程やその結果により比重のある具体例によって生成された概念である。

### ◆具体例 87 : A氏第1回箱庭制作面接制作過程9～11

A氏は第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程11で、砂箱左上隅で金色のベルとマリア像を森に置き比べ、マリア像を選び、置いた。その箱庭制作過程について内省報告に守りになるものが置きたかった。その場所に命を吹き込み、命を見守るものが欲しくて（A氏内省,1-11,制作・意図）と記した。A氏は制作過程9や10で、砂箱左上隅に花や家を置いた。その構成を受けて、そこに命を吹き込み、命を見守るものが欲しくなった。そして、金色のベルとマリア像を棚から選び、その領域で置き比べ、マリア像を選択した、と捉えられる。この具体例は、a.前になされた構成が内的プロセスを喚起して、次のミニチュア選択や構成がなされるという連動性を示すものであると考えられる。A氏はこのミニチュア選択と構成を通して、この構成に命を吹き込み、命を見守るものを必要としている自己の内的プロセスへの気づきをえたと考えられる。

◆具体例 88：A 氏第 10 回箱庭制作面接制作過程 10, 全体的感想

A 氏は第 10 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 10 で、2 匹の犬とインパラを女の子の人形の周囲で置き比べ、インパラを選んだ(写真 22)。その箱庭制作過程について調査的説明過程で以下のように語った。何がいけなかったんでしょうね、犬では。よくわからないんですね。犬はインパラの代わり、あの、現実世界でインパラをつれて散歩するなんてのはちょっとないで、笑、<まあね>はい、あの、犬の方がいいのかしらと思って犬を持ってきたんですけど、やっぱりインパラじゃなきゃこの世界ではだめなんだ。あの、映画館の時には、でも、犬でもよかったらと思うんですけど、この世界インパラしかだめだと思っちゃいましたね (A 氏調査, 10-10)。前回の第 9 回箱庭制作面接で構成されたのは、現実的な世界だった。それに対して、第 10 回は私の中の奥まったところを作った (A 氏調査, 10-全体的感想)。現実的な世界では犬でもよかったらと思うけど、今回の私の中の奥まった世界では、インパラでないとだめだ、と A 氏は感じ、インパラを選択したと捉えられる。この具体例は、b.ある領域ではなく、作品全体の象徴的意味が内的プロセスやミニチュア選択に影響を及ぼす場合があることを示すものであると考えられる。ただ、よくわからないんですね。という発言があることを考えれば、この世界インパラしかだめだと思っちゃいましたねは、調査的説明過程における A 氏のミニチュア選択に対する意味づけと判断することもできる。しかし、この具体例全体の文脈や語り口調を踏まえると、箱庭制作過程でのミニチュア選択に関する内的プロセスから大きく異なる語りではなく、語りを通して、ミニチュア選択に関する内的プロセスがより明瞭に A 氏に捉えられたのだ、と理解できる。A 氏はこの構成や構成についての語りを通して、私の中の奥まったところで自分に同伴するのにふさわしい存在はインパラである、という内的プロセスに気づいたと考えられる。

a と b のような、全体と部分、ある領域における関連性・連動性によって、あるミニチュアが選択される場合がある、と考えることができる。そして、そのようにして選択されたミニチュアを用いた構成に関連性が生まれたり、ストーリーが生まれる。ミニチュア選択や構成の関連性や生まれたストーリーによって、箱庭作品は、あるまとまりをもった箱庭制作者の内的プロセス、心的状況の表現になる、と理解できる。この構成の関連性は、[他の領域の構成への影響], VII-1. の [ミニチュアその他領域との関連] とともに、箱庭作品のまとまりやストーリーを生む重要な要因の一つと考えることができる。箱庭作品のまとまりやストーリーが生まれることによって、箱庭制作面接は、各ミニチュアや領域がまとまりをもたない羅列的表現(木村, 1985, p.45)ではなく、箱庭制作者の内的プロセスを十分に表現できる媒体になると同時に、箱庭制作者はその構成や構成についての語りを通して、自己への気づきを与えることができる。箱庭作品のまとまりやストーリーを生む[構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響]は、箱庭制作者の自



写真 22 A 氏第 10 回作品(写真中央の右岸にインパラ, 女の子, 青い鳥。川は写真手前から奥の方向に流れている。)

己理解を促進すると考えることができる。

次に、一義的でない内的プロセスがミニチュア選択に影響した具体例を挙げる。

#### ◆具体例 89：A氏第5回箱庭制作面接制作過程 16～17

A氏は第5回箱庭制作面接の箱庭制作過程16で、インコを島の右奥、山頂のやや下に置いた。続く制作過程17で、焚き火とキノコを島の左手前に置いた。その後、りんごを置き足した。右側のミニチュアが置かれていない空間について、A氏は一義的でない主観的体験の語りや記述を報告した。それらを以下に記す。a.これから起きることのために残された空間か？、b.動物同士または人間同士が争っているような空気がかすかにあり、厳しさを感じ、怖かった、c.そのような感じがあったので、幸せを連想するインコ、暖まることのできる焚き火、食べ物(キノコ、りんご)を置いた d.何かを置きたいが置けないアンビバレントな気持ちが残ったが、これが精一杯だった(p.90 ◆具体例 55 参照)。このような一義的でない内的プロセスを感じつつ、それを受けてミニチュアを選択し、構成を続けたが、不十分な感覚を残しつつ構成を終えた主観的体験の語りや記述だ、と捉えられる。

◆具体例 89 に示された[構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響]は一義的でなく、その内的プロセスをA氏が十分に理解しえたとは言いがたい。また、十分に納得できる形で制作を終えたわけではない。このような場合、継続した箱庭制作面接では、それが箱庭制作者の今後の課題となっており、その後の箱庭制作面接において理解が進んだり、その課題を乗り越えるということが起こる場合がある。A氏第5回箱庭制作面接のテーマが攻撃性や異質な他者との関係性に関するものであるとするならば、A氏第6回箱庭制作面接や第10回箱庭制作面接にこれらのテーマに関する表現とその課題の乗り越えがあった、と捉えることもできる。第6回箱庭制作面接で、自己像であるペンギンは、恐ろしいサメがいる海で、漁をする強さを身につけた。第10回箱庭制作面接でA氏は、様々な視点から他者を見て、他者の多様性を知った上で、他者が自分の心の中に入ってくることを許し、違和感を抱えつつ共に生きようとする関係性の変化が生まれた、と理解できた。多義的な[構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響]は、それが何を意味するのか理解することが簡単ではない場合がある。しかし、箱庭制作者が多義的な内的プロセスに目をそむけず、自己の課題に面と向かうことを通して、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与できる、と考えることができる。

### 3) [代替としてのミニチュア選択や装置の利用]の結果および考察

[代替としてのミニチュア選択や装置の利用]は、「他のミニチュアの代りという意味を含んだミニチュア選択や装置利用に関する内的プロセス」と定義された。本概念の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 90：A氏第1回箱庭制作面接制作過程 1, 12

A氏は第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程1で、棚に置かれた鳥の巣を手にとり、12秒ほどじっと見るが、それを選ばず、棚に戻した。その後、砂箱右側に海を作った。制作過程12で、サンゴと貝殻を、砂箱右下隅の海中と砂箱中央下の海岸線に置いた。それらの箱庭制作過程について調査的説明過程で、以下のように語った。棚をみててね、あ、これ置きたくなる

かも、と思ったおもちゃがあるけど、あれは、今回、ぴったりこなくてねえくどれ？>このひな鳥が巣に入っているような、<うんうんうん>これ、なんか、心ひかれたんですね。<ああ、なるほど>今回、<かなり最初の頃だよな>そう、最初のときから、観たときから目にはいってて。うん、あの、ひょっとしたら使いたくなって思ってたんだけど。(A氏調査,1-1)海ができて、持ってきた段階で、ああこれはまだ、まだというか今、今日は違うな。なんか、その代わりに貝、という感じなんです(A氏調査,1-12)。この語りについて、守る・はぐくむという女性的な面を私は自分のものになっている。5・6年前、女性性を受け入れられていなかった頃の自分との違いを感じる(A氏内省,1-12,調査・意味)と、内省報告で初めて、鳥の巣や貝を自分の女性性と明示的に関連づけて報告された。

この具体例では、象徴的意味の類似性と全体的な構成がミニチュア選択に影響した、と捉えられる。A氏第1回箱庭制作面接は、海の構成が主要なテーマの一つであった。鳥の巣は置きたいミニチュアであったが、そのような構成の中で、ぴったりこないとA氏は感じ、女性性という象徴的意味において類似の貝を選び、置いた、と理解できる。A氏第1回箱庭制作面接の全体的な構成の中で、貝は鳥の巣よりもぴったりのミニチュアであった。そのようなぴったり感のある[代替としてのミニチュア選択や装置の利用]ができたからこそ、A氏は守る・はぐくむという女性的な面を私は自分のものになっているという自己への気づきをえることができたと考えることができる。

#### ◆具体例 91: B氏第6回箱庭制作面接複数過程に亘って

B氏は第6回箱庭制作面接で、島の中央部に樹木を横に倒して置いた。それらの箱庭制作過程について、調査的説明過程で以下のように語った。私の印象では、なんか、例えばですね。どでかい、その、小高い、この木がどーんと1本あるっていうようなイメージはなくて。とにかく、低い、背が低くて、広がっている。その、でも緑が深くあるっていうような。だからちょっと、ほんとは、広葉樹をもっとぐあーとしきつめたような感じとか。あと、漠然としたような感じで、その、緑を、その出したかったんですけど。どうも、あの、そういう形ではなかったの、どうも、そういう感じでは、<そうですねー難しいですね>なかったの、とりあえず、代用品として、あの、これを寝かせて、まぶすっていう感じで、ちょっと表現(B氏調査,6-複数過程に亘って)。B氏のイメージは、背の低い木が深く、広がっているというイメージであり、広葉樹がもっとたくさんあれば、それを敷き詰めたい感じだった。しかし、その表現が現在あるミニチュアでは困難だったので、その代りに木を寝かせて、まぶすような感じで構成した。横に寝かせておかれた木々は上に挙げたようなイメージの代替的表現であった。この具体例は、実際に構成する際、イメージにぴったりのミニチュアがない場合の代替的表現についての主観的体験が語られた。石原(2008)は、「イメージを現物のモノによって具体化することとモノをイメージ化して体験することが、同時に絡み合っている状態をモノとイメージの交錯と呼び、調査研究の一つの категорияとして見出した(p.34)。そのcategoryの中に、「モノ<イメージ」の体験を挙げ、それを「現物のモノそのものが前景に出てくるよりも、イメージが体験の前景に出ていると考えられる一群の体験」としている(p.93)。本具体例の主観的体験の語りは、石原の「モノ<イメージ」の体験と考えることができる。B氏は背の低い木が深く、広がっているというイメージ、広葉樹がもっとたくさんあれば、それを敷き詰めたい感じを、木を寝かせて、まぶすような感じで構成した。客

観的に見ると現物の木が倒れているという状況なのだが、B氏のイメージの中では、現物の木と緑が深く広がっているというイメージが交錯しているため、違和感を感じなかった、と理解できる。このようにして、B氏はイメージの幅を広げ、代替的表現を用いて柔軟に構成することができた、と捉えられる。

島の中央部に樹木を横に倒して置くという構成は、再生していくという印象、気持ち（B氏自発、6-複数過程に亘って）が表現されたものであり、B氏第6回箱庭制作面接の重要なテーマの表現であった。B氏がイメージの幅を広げ、代替的表現を用いて柔軟に構成することができたからこそ、再生していくという印象、気持ちの表現が可能となった。B氏はこの構成を通して、今の自分の心理的状况を表現し、その表現を通して、自己への理解を深めることができたと考えられる。

次の具体例は、砂箱の底の色を利用した装置による代替的表現の例である。

#### ◆具体例 92：B氏第1回箱庭制作面接制作過程 2

B氏は第1回箱庭制作面接で、砂箱中央に泉を作った。その泉は生命の源（B氏内省、1-2、制作・意図）、神、生命（B氏内省、1-2、制作・連想）という多様なイメージや意味をもった構成であった。その箱庭制作過程について自発的説明過程で以下のように語った。水ってというのは、すごく生き物が生きる上でとても大切なものであろうように思うんですね。その湧きあがる水を表現したかった。つまり、もりあがる。こんこんとわきあがってくるような。それを物を使って表現することができなかつたので、それを真ん中でこの下地の青を利用してというところで、そのしたんですけど（B氏自発、1-2）。B氏は生命の源、神というような多様なイメージをもった湧き上がる水を表現したかった。しかし、それをミニチュアで表現することは困難であった。そのために、砂箱底の青色を利用して、泉を作ることで表現した。この構成がミニチュアの代替的要素もあったことが示された。

◆具体例 92 について、調査的説明過程では、さらに詳細な報告がなされた。B氏は、宗教的なミニチュアは大切なものという意識があり、水として表したものは、そういうものにつながっているようなところがあると思う。しかし、それを表すのに、十字架やマリア像を置くことには抵抗があった。十字架やマリア像は、人為的な形、シンボルであり、自分が感じているものを表現しつくせない、と語った（p.34 ◆具体例 6 参照）。それに続いて、それを置くとかえって、その、自分が感じているとか、思っている、その、こんこんとわき出るような躍動感とかいう意味でなんか、表わすにはちょっとみすぼらしすぎるというか。うん、でまあ、それは逆に選ぶ気になれなかつた（B氏調査、1-2）と語った。◆具体例 92 では、内的イメージをある種のミニチュアで表現することに抵抗感を感じ、それらのミニチュアでは表現しつくせないことが明確に把握されている。そして、その内的イメージを表現するために、ミニチュアを使用することはせず、意図的・積極的に、砂箱の底の色という装置を利用した構成によって自分の内的プロセスによりぴったりの表現を行った、と捉えることができる。B氏第1回箱庭制作面接の泉の構成は、ミニチュアの代替的要素もあったが、生命の源（B氏内省、1-2、制作・意図）、神、生命（B氏内省、1-2、制作・連想）というイメージやこんこんとわき出るような躍動感という感覚の表現として、より本質的な表現になったと考えることができる。B氏はこの構成を通して、自己の内的プロセスをより本質的に表現することやその構成について語ることを通して、この構成の自分にとっての意味や、そのような表

現を行う自分自身への理解を深めることができた、と考えられる。

本項の◆具体例 90～具体例 92 には、ミニチュア選択や装置の利用における代替的表現が見いだされた。箱庭制作面接室に準備されているミニチュアには数、種類に一定の限度があり、自分のイメージそのままのミニチュアがない場合がある。そのような場合に、現物のモノを使ってイメージを表現するには、ミニチュアに自分のイメージを重ねる幅広さや柔軟性が必要になる(東山,1994,p.31)。ミニチュア選択や装置の利用における代替的表現は、装置に自分のイメージを重ねる幅広さや柔軟性という心の特性に支えられているとすることができる。イメージを重ねる幅広さや柔軟性の一つの要因として、「モノ<イメージ」の体験(石原 2008)を生む心の特性があることが、◆具体例 91 から見いだされた。これらの心の特性によって、現物のモノを用いる箱庭制作面接が、「<こころのこと>として機能をもつようになっていく」(藤原, 2002,p.128)と考えることができる。箱庭制作面接が<こころのこと>となり、箱庭制作者の内的プロセスが代替的表現を用いて柔軟に、ぴったりな形で表現されることによって、箱庭制作面接の促進機能が働くと考えられる。

#### VII-2-2. <ミニチュア選択の内的プロセス>に含まれない[作られなかった構成]と[説明過程で、ミニチュアを置きかえるプロセス]の結果および考察

サブカテゴリー<ミニチュア選択の内的プロセス>に含まれない 2 概念[作られなかった構成]と[説明過程で、ミニチュアを置きかえるプロセス]の結果および考察を以下に記す。

##### 1) [作られなかった構成]の結果および考察

[作られなかった構成]は、「実際には作られなかった構成や行われなかったミニチュア選択に関する内的プロセス」と定義された。本概念の具体例には、箱庭制作者が(1)納得して、積極的にその構成をなさない、ミニチュア選択を行わない場合と、(2)消極的な選択として、その構成をなさない、そのミニチュア選択を行わない場合とがあった。

##### (1)納得して、積極的にその構成をなさない、ミニチュア選択を行わない場合の結果および考察

まず、納得して、積極的にその構成をなさない場合の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 93 : A 氏第 3 回箱庭制作面接制作過程 10

A 氏は第 3 回箱庭制作面接で、砂箱右上隅でタコの半身が貝殻で隠れるように構成した。その箱庭制作過程について自発的説明過程で以下のように語った。あんまり、タコも全部見るとなんなので、少し隠れるようにして<ああなるほど、なるほど>してはみたんですけどね。(中略)全部出てきてもいいんだけど、とっとうという感じかもしれないですね。(中略)全部出るのもうちょっとあとでっていう。そんな感じかもしれないですね (A 氏自発, 3-10)。このように構成した理由にはやや曖昧さも残るが、タコの半身を隠し、全身を出さない構成自体には、迷いなく、積極的にそれを選んでいることが示された。この箱庭制作過程について内省報告に以下のように記された。タコは、私にとって、人目にさらしたくない私自身のある側面なのかもしれない。できれば本当は自分でも気がつかずにいたい。でも、確かにあると認めざるを得ない自分の中の欲求や傾向。そんなものが自分の中に確かにあると気がついていながら、しかも、時に半身さらすような状態でいながら、あえて見ないようにしている。それが何なのか、その全体像を私自身把握できていないから、言葉になら

ないのかもしれない（A氏内省, 3-10, 自発・意味）。タコを自分の心理的側面と関連させた言及は、説明過程でなく、内省報告で初めて記述された。そのため、この気づきは、内省報告を作成する中で生まれたものと推測できる。そのことを踏まえると、この構成は、直観的な意識によってなされたため、構成の意味は箱庭制作面接時には箱庭制作者も把握していなかったが、内省することを通して、その意味に気づくこと、あるいは意味づけることができたと解釈できる。そして、この気づきあるいは意味づけによって、A氏は自己への理解を深めることができたと考えられる。

次に、納得して、積極的にそのミニチュア選択を行わない場合の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 94：A氏第1回箱庭制作面接制作過程 14

A氏は第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程 14で、棚に亀を見つけ、砂箱右上隅に置いた。その箱庭制作過程について自発的説明過程で、以下のように語った。亀のところにねー、なんか、もうちょっとこうわたしにとって嫌なもの（ほおー）を置こうと思って。嫌なものっていうか、ねえ。形のない、なんかこう、ものを置こうかと。（中略）探しにいったら亀と目があつたんでなるほど>あ、これはいいかもと思って、それはちょっと嬉しかったです。（中略）あの爬虫類の棚あるじゃないですかあるねえ>あの、爬虫類とか、そのワニとか恐竜とかくああ。ああ>あの辺にあるのかなと思って行ったら、亀がいたのでなるほど>こっちの方がいい。で亀を置きました。（中略）亀と形のない嫌なものはイコールじゃないですね。<そうだよ>イコールじゃない、ぜんぜん別なもの。<あ、ぜんぜん別なもの。>た、多分ぜんぜん別なもの。なんか、こ、この亀の先に嫌なものはまだある。イメージとしてはねくあ、そんな感じなわけね>そんな感じですね。嫌なものがあるのかもしれない。わたしにとっては、まだちょっと、置かないよ、っていう（A氏自発, 1-14）。そして、内省報告にイルカの行く手に、得体の知れない何か、このまま進んで大丈夫かな、というようなものを置こうと思っていたが、ふと亀が目にとまり、得体の知れない何かのことが一瞬で頭から消えた（中略）イルカより知恵がありそうでイルカより腹が据わっているようだ。亀を見つけ、亀を箱庭に置いたことで、なんだかほっとする。安心して進んだらいいんだという気持ちになる（A氏内省, 1-14, 制作・感覚）と記した。

この具体例では、最初探しに行こうとした時にもっていたイメージとは、異なるミニチュアと出会ったことで、初めのイメージが一瞬にして消え、納得してミニチュアを選択し、構成したA氏の主観的体験が報告された。この具体例は、[ミニチュアとの出会い]の具体例でもある（p.143参照）。亀を見つけたことは、嫌なもののことが一瞬で頭から消えるほどの大きな影響をA氏に及ぼしたことが示された。亀を選んだことで、A氏にはイルカより知恵がありそうでイルカより腹が据わっているようだ。（中略）安心して進んだらいいんだという内的プロセスが生じた。自己像であるイルカの先を進む亀は知恵があり、腹が据わっている存在である。そのような存在の導きがあることで、A氏は安心して進んだらいいと思えた。この回が初回であることを考えあわせると、安心して進んだらいいんだという言葉は、箱庭制作面接におけるA氏の歩みに対する思いでもあると解釈できる。このようにA氏は初回における自分の内的プロセスに気づくことができた。そして、A氏が感じた安心感は今後A氏が箱庭制作面接に臨むにあたって、安心感を基盤に自由に自分の内界を展開させていくことに寄与したと推測できる。

棚には、多数のミニチュアが並べられている。箱庭制作者はその中から、自分が使用するミニチュアを選択しなければならない。また、砂や砂箱の底やミニチュアをという装置を用いた構成も無数のパターンがありうる。箱庭制作者は、構成においても無数のパターンの中から選択を行っていくことになる。箱庭制作面接において、箱庭制作者が納得して、積極的にその構成をなさない、ミニチュア選択を行わないという行為は、構成が箱庭制作者の内的プロセスの表現としてよりぴったりのものとなるために、重要である。◆具体例 93 と 94 に示されたように、箱庭制作者が納得して、積極的にその構成をなさない、ミニチュア選択を行わないという行為によってなされた構成によって、箱庭制作者は自己への理解を深めることができている。[作られなかった構成]の箱庭制作者が納得して、積極的にその構成をなさない、ミニチュア選択を行わないという行為は、箱庭制作面接の促進機能として働くと考えられる。

## (2) 消極的な選択として、その構成をなさない、そのミニチュア選択を行わない場合の結果および考察

まず、消極的な選択として、その構成をなさない場合の具体例を以下に挙げる。

### ◆具体例 95：A 氏第 9 回箱庭制作面接制作過程 5

A 氏は第 9 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 5 で、洋館を川向こうの土地に 1 軒、川の手前に 3 軒置いた。陶器の家を数軒置き、砂箱手前が円形のロータリーのような広場になるようにした。その箱庭制作過程について調査的説明過程で、以下のように語った。置く時に、なんだかですね、こう、碁盤の目のようなそういう町にはすごく置きづら、いんですよ、なんか。すごくた、建物にしても、こう、こちら側が正面だとこちら側が後ろとか、映画館をこの辺にこう置いちゃうと、前と後ろが出て、なんか置きにくいなと思ったんですよ。うん、そいで丸くしたんですよ。(間 19 秒) 少し迷ったんですよ、どういう風に配置しようかなっていうのはね。だけど、置けなかったですね。(中略)だから、こう、碁盤の目の、何か 1 ブロック、1 ブロックって作ると、表と裏が出来てしまって、それが何か私には扱いきれない感じが、あるん、です、そういうのを作ると。(中略)具体的にはほんとに、作りづらい感じがしちゃうんです (A 氏調査, 9-5)。この具体例での、消極的な選択を行わざるを得なかった要因は私には扱いきれない感じが、あるという内的プロセスと関連している。この具体例に関連するデータを加え、検討する。第 10 回箱庭制作面接で A 氏は第 9 回箱庭制作面接での主観的体験に関連して碁盤の目のように置けない、って言ってた私がいるんですけど、それはもう怖くなくなってる (A 氏調査, 10-全体的感想) と語った。碁盤の目のような配置は、表と裏ができてしまう。第 10 回箱庭制作面接時点からふりかえると、その構成に対して第 9 回箱庭制作面接では、怖い感じがあって、扱いきれないと感じていたことがわかる。そのような第 9 回箱庭制作面接時点での A 氏の内的プロセスが影響し、消極的な選択として、碁盤の目のような構成がなされなかった、と捉えられる。

### ◆具体例 96：A 氏第 6 回箱庭制作面接制作過程 18

A 氏は第 6 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 18 で、メノウの板を手に取り、山とメノウとを見比べた。その箱庭制作過程について自発的説明過程で、以下のように語った。山を、もうちょっと触りたかったんですけど、どう触って、いいのかわからなくて、手を付けられなか



ったですね。最後、メノウの板がきれいで、あの、山の中にうずめようかなとくはあー、うん>ちょっと思ったんです。何か手放すには惜しいくらいきれいで、きれいだなと思っていて、でも山の中に入れちゃうのも、何かこう、埋めちゃうのももったいないしそうかといっけ出しておくとひどく異質な感じもするし、くはあー>もう今回は置くの止めようと思ってくうんうん>はい、やめましたね (A氏自発, 6-18)。この箱庭制作過程に関してA氏は調査的説明過程で以下のように語った。箱庭の目に見えるところに置くにはちょっとなんか、異質な感じがくあああ>あるので置けなかったです(中略)だから、今回の箱庭はこういう風だから、外側に出すと異質だったけど、ひょっとしたらこれまでの箱庭だったら、置いても違和感がなかったのかもしれない。くふうーん>ちょっとわからないくあ、そっか、ふん>こないだのあの、神社とくうんうんうん>白蛇代わりの動物のあたりとかね (A氏調査, 6-18)。メノウの異質な感じは、今回の箱庭作品の構成やテーマと関連していた。第5回箱庭作品の神聖な場所であれば、置いても違和感がなかったかもしれないが、今回の箱庭作品では置く場所がなかった。A氏の箱庭作品には、宗教性と関連する領域やテーマの表現がよく見られたが、第6回箱庭作品では、そのような表現はなされなかった。そのため、A氏はメノウに対して今回の構成の中では異質な感じがあり、メノウを置くことができなかった、と考えられる。

◆具体例 95 と 96 から、消極的な選択を行わざるを得なかった要因として、箱庭制作者の心理的状況や箱庭作品の構成やテーマが関連することが示された。このような箱庭制作者の主観的体験の語りをどのように理解することができるだろうか。◆具体例 95 と 96 は、消極的な選択であるため、この選択に対して満足感や納得感は得られにくいだろう。石原(2008)は、「思い通りにならない砂」という体験に関して、箱庭制作者が「思い通りにならない砂」に取り組みながら、豊かなイメージを思い描いたとしても、物理的制約をもった砂によって表現可能な範囲内で表現することを受け入れざるをえないという現実を実感しているのではないかと記している(p.80)。本項の◆具体例 95 と 96 は、箱庭制作における物理的制約によって消極的な選択を行わざるを得なかったわけではないため、その点においては石原の言及とは異なる点がある。しかし、箱庭制作面接において、「思い通りにならない」という主観的体験が起こりうるという点においては、共通の要素をもっている。第6回箱庭制作面接でA氏がもう今回は置くの止めようと思ってくうんうん>はい、やめましたねと語っているように、置くことを諦めつつも、そこには耐えがたいほどの残念な感じがないことも示された。◆具体例 95 と 96 は「思い通りにならない」ことに対して、箱庭制作者が折り合いをつけていく主観的体験と理解することができるのではないだろうか。東山(1994)は、ミニチュアに関して、現物のモノを使ってイメージを表現するには、ミニチュアに自分のイメージを重ねる幅広さや柔軟性が必要になることを指摘している(p.31)。箱庭制作には、心の柔軟性が必要になる。そのような心の柔軟性をもってしても、箱庭制作過程の構成が「思い通りにならない」時、箱庭制作者は「思い通りにならない」ことに折り合いをつけることができなければ、箱庭制作者にとって「おさまりの悪い」作品になる。◆具体例 95 と 96 は、一定程度のおさまりの悪さがありつつも、それを抱え、折り合いをつけた主観的体験の語りと理解できるだろう。A氏は第9回箱庭制作面接では、碁盤の目のような構成を行えなかったが、第10回箱庭制作面接では碁盤の目のように置くことが怖くなくなり、直線的な構成を行うことができた。河合隼雄(1991)が、おさまりの悪さが次への発展の契機ともなると

しているように(p.131),一定程度の自我の強さが箱庭制作者にある場合,箱庭制作面接における「思い通りにならない」という主観的体験は,単に否定的な体験に止まらず,箱庭制作者にとって意味ある体験となる可能性をもっていると考えられる。「思い通りにならない」状況における消極的な選択としての[作られなかった構成]は,箱庭制作面接の促進機能と働く可能性があると考えられることもできるだろう。

次に,消極的な選択として,そのミニチュア選択を行わない場合の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 97 : B 氏第 7 回箱庭制作面接複数過程に亘って

B 氏は第 7 回箱庭制作面接で,四季の構成を行った。他の季節には人のミニチュアを置いたのだが,砂箱左上隅の春の区画には人のミニチュアを置くことができなかったことについて,調査的説明過程で以下のように語った。私自身,よく,あの,うまく,あの,できなかったことが一つあって,ここに人が置けなかったんですよ。<ああ。なるほど。言われてみれば。ああ。そうですね>うん。で,どういう人を置いたらいいのかっていうのが,最後まで,つかめなくて。まあ,ないままでいいやというこで。で,それがよくわかんないです。<どういふことで置けなかったのか,というのがよくわからない>ぴったりするような,うん。で,その人を眺めてる中で出てきそうかと思ったんだけど,どうも,あの,出ず。なんか,ぴったりさせることもできず。自分自身もイメージが湧かず。で,まあ,これがいいかってことで(B 氏調査,7-複数過程に亘って)。B 氏は春の区画に人を置けなかったことについて,うまくできなかったことと感じていた。どういふ人を置いたらいいのか,最後までつかめず,イメージも湧かなかった。人のミニチュアを探すため,人が置かれた棚を眺めたが,ぴったりするものも見つからなかった。この箱庭制作過程について,内省報告にもわからない(B 氏内省,7-複数過程に亘って,調査・感覚),不明(B 氏内省,7-複数過程に亘って,調査・連想)と記し,その要因は不明のままである。

うまくできなかったという感じが残るものの,それでも B 氏はまあ,ないままでいいやというこで,まあ,これがいいかってこで,と構成を受動的に,受容している。このように,理由や意味はわからないが,そのようにする他ないという点にこそ,箱庭制作面接において意図・意識以外のものが働いていることの証左の一つと捉えることもできるだろう。

◆具体例 97 も先に言及した「思い通りにならない」構成に対して,箱庭制作者が折り合いをつけていく主観的体験の語りと理解することができるのではないだろうか。

#### 2) [説明過程で,ミニチュアを置きかえるプロセス]の結果および考察

次に<ミニチュア選択の内的プロセス>に含まれない,[説明過程で,ミニチュアを置きかえるプロセス]の結果および考察を記す。[説明過程で,ミニチュアを置きかえるプロセス]は,「箱庭制作終了後,説明過程において,ミニチュアを置き比べる,置きかえる,取り除く内的プロセス」と定義された。

まずは,箱庭制作者が説明過程で,自発的にミニチュアを置きかえた場合の具体例を挙げる。

#### ◆具体例 98 : A 氏第 7 回箱庭制作面接調査的説明過程での置きかえ

A氏は第7回箱庭制作面接の調査的説明過程で、今回の構成に対して、この島と半島と灯台だけでよかったのかもしれないですね。〈ふん〉それと他のものはもう本当に、なんていうんでしょうね(間34秒)表層的なものに感じられて、他のものが。愛着が湧かないです。〈あ、ふーん〉 ああ、でもそれを言うのがすごく悲しい。自分が作っておきながら愛着が湧かないなんて。すごく悲しいですね (A氏調査, 7-複数過程に亘って) と語った。

また、半島に置かれた男女の人形について、具体的な人形があどけないのが気に入らないと語った(p.88 ◆具体例 54 参照)。その後、棚の前に行き、ミニチュアを探し始めた。兵士のミニチュアが入ったバケツのミニチュアを物色した後、働く人が入った箱でミニチュアを物色し始めた。そして、以下のような言動ややりとりがあった。あ、こういう人もいますね、むしろこういう人の方が何か、‘物色中’ ちょっと待って ‘箱からプラスチックの人形2体、赤と黄を取り出して砂箱に移動’ ちょっと置きかえていいですかうん、どうぞどうぞこれ色がすごいですけど色がね> ‘何かつぶやきながら、かわいい人形をプラスチックの人形に置きかえ、元の人形に戻す。声が小さくて聞き取れない’ <どうお、置きかえてみて?> や、やっぱり色が、(中略) ‘再び男の子の人形をプラスチックの人形に置きかえている。玩具棚に戻って人形を物色して置きかえる。茶色の埴輪に置きかえる’ まだこの方が ‘笑いながら’ っていうかんじでしょうか。(中略)一般化抽象化普遍化って言う感じですね。(中略)普遍的な人間っていう感じで置いて、<うんうん>何か、私も含めた人間っていうのに、<ふーん>ものになるかな(中略)<全体的な人って感じがする。どちらかと言えばこっちの方が、今置いてみるとぴったりくる>うん、あ、でもくでも>あーくでも>うー。生き生きした感じは、うーんと、なくなるので、<あーそうだね>うん。難しい、私、け、難しいですね。〈ふん、難しいね〉はい(間6秒)困っちゃう私、うーん、私だってこういう面持っているんだらう、でも、はい。な、なん何かやっぱり今日ほうまいこと作れない感じがくするね>はい (A氏調査, 7-12)。A氏は赤色と黄色の働く人に男女のミニチュアを自ら置きかえてみたが、色が気に入らなかった。そして、再び棚に戻り、埴輪をもってきて、それに置きかえてみた。一度は、「まだこの方が」と言うが、そのイメージは自分も含めた一般的普遍的な人間というものであり、生き生きした感じがなくなるミニチュアであった。そして「難しい」「今日ほうまく作れない感じ」と述べた。ぴったりしないミニチュアを説明過程で置きかえ、置き比べてみたが、やはりぴったりとした構成を行うことができなかった。

関連する他のデータも加えて、検討していく。この置きかえに関する内省報告には、男女の人形の要因に加えて、他の要因も記された。内省報告には、女の子の人形が、人形遊びでの単なる人形のように、自分を表したように思えないことが挙げられている。また、愛着が湧かないというような否定的な感情が生まれるような制作過程になった要因として、a.好きなミニチュアが限られていること、b.箱庭の世界の中で、自分が想像をふくらませて自由に生き生きと、生きることができないこと、c.出来上がったストーリーにミニチュアを当てはめて作ったかのように自分のオリジナリティが感じられないこと、d.自分の気持ちをスキャンして作ったのではないように感じられることが挙げられている。そのため、この作品に愛着が湧かない部分があったことが示されている(b以降 p.88 ◆具体例 54 参照)。このような内的プロセスが自発的にミニチュアを置きかえようとした要因であることが見いだされた。また、表層的なものに感じられて、他のものが。愛着が湧かないです。〈あ、ふー

ん> ああ、でもそれを言うのがすごく悲しい。自分が作っておきながら愛着が湧かないなんて。すごく悲しいですね (A氏調査, 7-複数過程に亘って) と語られたように、作品に愛着が湧かないことは、すごく悲しいという強い気持ちを伴うものであった。

◆具体例 98 の自発的な置きかえが生じた背景として、上のような要因や内的プロセスが関与している。◆具体例 98 の自発的な置きかえは、作品に愛着が湧かなくて、すごく悲しいと感じられる構成を改善しようとする A 氏の模索であると考えられる。それは、A 氏が箱庭制作面接に真摯に向き合っている姿勢の現れと考えることができる。

次に、筆者の提案を受けて、箱庭制作者がミニチュアを取り除く、置きかえる具体例を挙げる。

#### ◆具体例 99 : A 氏第 7 回箱庭制作面接調査的説明過程での置きかえ

上述の第 7 回箱庭制作面接における自発的な置きかえの後、今、残しておいてよいと思えるミニチュアについてのやりとりがあった。箱庭制作者の残念な思いが伝わってきたため、愛着が湧く作品に修正できないかと考え、筆者は以下のように再構成を提案した。<じゃあ、一度さ>はいくもしあればやったら>ふん<試しにね>はいくその自分が残しておい、残しておきたいなという思う>ふん<ものだけを残してみて、一度、それ以外のものを、二人で片付けてみる?>え。え。賛成<ほんで、様子見てみようか>賛成です。‘A 氏は、筆者の提案の途中から、花を片付け始める。’ <これ、これ (海藻) いい?>いいです。‘二人で砂箱内のミニチュアを取り去り始める’ (A 氏調査, 7-調査的説明過程最後の再構成)。すると、A 氏はその提案に賛成し、提案の途中からミニチュアを片付け始めた。筆者は、どのミニチュアを片付けてもよいのか、A 氏に確認後片付けた。A 氏は独り言を言ったり、筆者に語りつつ、片付けた。

その後、A 氏はつまらない感じについて、自分に問いかけるように話したり、筆者に問いかけたりした。そして、半島、針葉樹、野生動物 2 頭、亀、貝、イルカ 2 頭、灯台 (西洋風の塔のついた城) が残った段階で、だいぶホッとする感じがします (A 氏調査, 7-調査過程最後の再構成) と述べ、片付けを終えた。調査的説明過程のこの時点では、比較的ぴったりする構成に再修正することができた、と捉えられる。

さらに、A 氏は灯台を、幼子イエスを抱いたヨハネ像や亀と置き比べた。亀の方向を何度も確かめ、亀を置いて、置きかえを終了した。

しかし、この過程について、内省報告には以下のように記された。今見ると、具象的な人形もいいのに。土偶にすると、普通の世界に古代の遺跡からの発掘物が入り込んだような違和感がある、今見ると、空いているスペースがずいぶん多くなって、これからこのスペースに何か作るとしたら、ずいぶん大変だろうなという気持ちになる。元気がないと出来ない、これだけアイテムが少なくとも満足な様子で、やっぱりこのときの私は疲れていたのかと思う (A 氏内省, 7-調査過程最後の再構成, 調査・意味), 肉体的な疲労。それと、緊張感が抜けきっていない感じ。覚醒した意識が off になっていないのだと思う (A 氏内省, 7-全体的感想, 調査・意味)。DVD 視聴し、内省報告を記している時には、最初に置かれた男女の人形もいのように A 氏は感じられた。再構成後の構成は、スペースが多く、そのスペースに何かを作るとしたら、ずいぶん大変で、元気がないとできない。箱庭制作面接の時の自分は疲れていたのだろうと感じた。内省報告には、箱庭制作過程の構成にも満足できる部分もあり、

箱庭制作面接で満足感を感じられなかったのは、疲れや箱庭制作面接前の仕事の緊張感が抜けていないことなどが影響したのだろうと捉えていたことが、報告された。

このように箱庭制作過程、説明過程における再構成時、内省報告作成時には、異なる主観的体験が報告された。内省報告時には、再構成前の男女の人形もいと報告され、それは箱庭制作過程でも説明過程の再構成時でも生じなかった主観的体験の報告であった。この一部矛盾する主観的体験の語りや記述は、第7回箱庭制作面接が面接の過渡期であったために生じた、と解釈することができる。第6回箱庭制作面接は柵に囲まれた家畜がいる人間世界に近い世界だった。第7回箱庭制作面接に自己像に人のミニチュアが選ばれ、初めて人の世界を作ろうとしたが、表層的で愛着が湧かない作品となった。調査的説明過程の再構成後、残ったミニチュアはほとんどが今までに使われたものである。そして、今までの回のように人が登場しない世界となった。再構成前後の2作品は多面鏡で見る自己像のように、制作者の意識の基盤と今後の展開を表現したものと理解することができよう。再構成前の作品も再構成後の作品も、A氏の異なる意識状況、意識次元の表現であると考えることができる。この具体例によって、箱庭制作者による説明過程における再構成の意味の一端が示された、と考えられる。

厳密な意味では、ミニチュアの置きかえではないが、それに類する行為について以下に具体例を挙げる。

#### ◆具体例 100：A氏第8回箱庭制作面接調査的説明過程

A氏は第8回箱庭制作面接で、砂箱手前に鳥居を置いた。その構成について調査的説明過程で、A氏は、鳥居を手で隠したり、隠すのを止めたりしつつ、長い間を挟みながら、**箱庭としてこれがないとこう、この世界に、命っていう意味をあげられない感じがして**と語った(pp.96-97 ◆具体例 61 参照)。

この行為は、鳥居の有無によって、箱庭の構成から受ける印象やそれによって起こる内的プロセスの変化を照合していた、と捉えられる。そのような行為によって、鳥居がないと、この箱庭の世界に命という意味をあげられないような感じがすることが、箱庭制作過程よりもさらに明瞭になった。千葉(2013)は、箱庭制作後の語りによるイメージ変容体験を4体験型に分類する中で、その中の一つのグループとして、「箱庭を言葉にすることで、制作時から感じられていたイメージがより『鮮明に』、『具体的に』、『整理されて』感じられるようになり、制作直後よりもイメージを深く味わうことができた」と語る作り手のグループ」を鮮明型として報告している(p.21)。この具体例は、語りではなく、説明過程における再照合によるものであるが、鮮明型のように、イメージを深く味わうことができた主観的体験の語り、と捉えることができる。この行為は、説明過程において、ミニチュアの有無によって、構成や内的プロセスの変化を照合するものであり、置きかえに類する行為である。このような行為によって、箱庭作品の構成の意味がA氏にとって、より明瞭になり、このような構成を行った自己の内的プロセスへの理解も深まったと考えることができる。

◆具体例 98～10 のデータを検討すると、[説明過程で、ミニチュアを置きかえるプロセス]は、基本的には、構成や内的プロセスの変化を照合し、ネガティブな感情を喚起させたり、満足感のえられない構成を改善しようとする箱庭制作者の模索であると考えられる。そのような模索を伴った[説明過程で、ミニチュアを置きかえるプロセス]は、箱庭制作者の自己

理解を深めることに寄与すると考えることができる。

しかし、[説明過程で、ミニチュアを置きかえるプロセス]は、置きかえを行えば、よりぴったりにした構成に修正でき、箱庭制作者は満足感を得られるというような一義的な事態ではない。A氏第7回箱庭制作面接の場合、自発的な置きかえは、何かやっぱり今日はうまいことと作れない感じがくするね>はいという言葉で終わっている。その後、筆者の提案を受け行った置きかえでは、だいぶホッとする感じがしますと述べ、片付けを終えた。ところが、内省報告には、箱庭制作過程の構成にも満足できる部分もあり、箱庭制作面接で満足感を感じられなかったのは、疲れや箱庭制作面接前の仕事の緊張感が抜けていないことなどが影響したのだらうと捉えていたことが、報告された。

A氏第7回箱庭制作面接では、箱庭制作開始45分～45分51秒にかけて、以下のようなA氏と見守り手との会話があり、箱庭制作を終了した。「」内はA氏の言葉、<>内は見守り手の言葉である。（）内はA氏の行動である。

44:28～ 砂箱を見つめる。

44:38～ 右の海の砂を右手の指先で掃き寄せる。

44:46～ 砂箱を見つめる。（何かつぶやくが聞きとれず）

45:00～45:51 「もう、うん。もう、（顔を一瞬天井向け）もう、こういう風だなと思うんですけど」<うん>（見守り手の方を向いて）「途中から作っていて、やんなっちゃって（笑）」（砂箱の縁に両手を置き、上体を砂箱の上に倒して）<ああほんと>（上体を戻して）「ははは。なんでこうなっちゃったんだろう。うーん。これは、これは、作っというてなんなんですけど、（間）でも、そういうのも、かわいそうだな。作っというて、なん、なんですけど、なんで、つまらない」<うん。じゃあ、一旦一区切りして、そのあたりのことも含めて、聞かせてもらおうか>「うん。そうですね」「ふふーん。なんでーんんでなんだろう。（見守り手に向いて）うん。はい。はい。はい」

A氏は、「こういう風だなと思うんですけど」と言いつつも、続けて「途中から作っていて、やんなっちゃって（笑）」、「つまらない」と語っている。途中から箱庭作品に対して、いやになった、つまらなく思ったものの、こういう風にしか作れなかったという思いが語られていると捉えられる。これらのA氏の語りにもあるように、たとえつまらないという思いがあったとしても、箱庭制作終了時点での作品は、その回の最終的な構成なのである。

やはり説明過程での置きかえは、箱庭制作過程における置きかえとは異なる意味があるのだらう。箱庭制作を一旦終了した後の置きかえと、箱庭制作中の置きかえとは、同じではないと考えるべきなのだらう。説明過程での置きかえは、それが生じるくらいの強い動機付けが必要であると同時に、箱庭制作過程において作品に満足できていないという、置きかえが生じる背景が存在する。

第7回箱庭制作面接の内省報告にA氏は、肉体的な疲労。それと、緊張感が抜けきっていない感じ。覚醒した意識がoffになっていないのだと思う（A氏内省、7-全体的感想、調査・意味）と記した。箱庭制作面接の前にあった仕事の影響として、この言葉が記された。そのような外的な要因が関与した心身の状態による箱庭制作過程への影響が、作品に満足できない背景にある一因であったとしても、それは簡単に変えられるものではないし、そのよう

な心身の状態がいま・ここでの箱庭制作者の姿である。

あるいは、先に考察したように、第7回箱庭制作面接がA氏の箱庭制作面接の過渡期であったという解釈が妥当であるならば、そのような面接の過渡期にあるという状態は、箱庭制作者が意識化し、意識的にコントロールできるような事態ではない。面接の過渡期というのは、箱庭制作者の意識を超えた事態であり、それは事後的にふりかえってわかる事態である。面接の過渡期という状況が、A氏第7回箱庭制作面接で満足感が得られないことの一因であったとすれば、箱庭制作過程において作品に満足できないことの原因を意識化したり、その状況を修正することはより困難になる。A氏第7回箱庭制作面接での説明過程における置きかえの結果に関して、一方ではだいぶホッとする感じがしますという内的プロセスが生まれ、もう一方では箱庭制作過程の構成にも満足できる部分もあると内省報告に記されるという、一義的ではない内的プロセスは、面接の過渡期における多面性を伴った[説明過程で、ミニチュアを置きかえるプロセス]として、ぴったりなものだと解釈できるだろう。

### Ⅶ-3. 「内界」が中心となるカテゴリー・概念群の結果および考察

「内界」が中心となるカテゴリー・概念群には、<ぴったり感の有無>と、その中に[ぴったり感の照合],[ミニチュアとの出会い]の2概念があった。また、<イメージや作品が主体となる>と、その中に2概念[箱庭に入る],[枠外のイメージ]があった。上記カテゴリーの外に独立して、概念[身体感覚・ボディーイメージ]があった。

#### Ⅶ-3-1. <ぴったり感の有無>と[ぴったり感の照合],[ミニチュアとの出会い]の結果および考察

<ぴったり感の有無>と、その中の2概念[ぴったり感の照合],[ミニチュアとの出会い]の結果および考察を記述する。

##### 1) <ぴったり感の有無>の結果および考察

<ぴったり感の有無>は、「ミニチュア,ミニチュア的位置や方向,砂の造形,底の水色などにぴったり感を感じる,あるいは感じない内的プロセス」と定義された。本カテゴリーの具体例を以下に挙げる。

まずは、箱庭制作者がぴったり感を感じた具体例を挙げる。

##### ◆具体例 101 : B氏第2回箱庭制作面接複数過程に亘って

B氏は第2回箱庭制作面接で、自己像である亀の背に十字架を載せた。その構成について、自己像である亀の苦難は現実の場での出来事であり、この構成における神像(神のイメージ)は、意識化されたものであるため、十字架上のイエスというミニチュアを亀の背に載せたことが、今回の表現には的確だと感じたことが調査的説明過程で語られた(p.119 ◆具体例 82 参照)。この具体例は、それまでの構成から喚起された内的プロセスを照合し、ぴったり感に基づいて、構成が展開されていった場合の主観的体験であった、と捉えられる。

その言葉に続けて、この構成についてB氏は以下のように語った。以下の語りは、ぴったり感についての直接的な語りではないが、ぴったり感を確かめる過程における、もしくはぴったり感のある構成についてのB氏の感覚や考えが示されている。結局、それは、うーん  
と、例えば、自分をキリストと同一視するということではなくて、むしろ思いを(中略)黙想す

るというか、共感するというか、こういうことなのかなとかいうことをふりかえる、ふりかえっているというか。＜その場合の思いというのは＞えっと。苦勞とか、まあ、人のなんか、難しさとか、ある意味、陰湿な面とか含めて、そういうところで、うんと、苦勞するというか。＜イエス様もそういう道を歩まれたわけですよ＞（中略）そういうことで、（中略）こういう苦勞をされたんだらうな一と、まあ、自分も思い浮かべるといふか（B氏調査、2-複数過程に亘って）。この構成を通して、B氏には、イエスが体験した苦勞を思い浮かべ、共感するという内的プロセスが生じている。それは、今、自分が抱えている苦勞をイエスの体験と関連付け、見直し、意味づける内的プロセスであった、と解釈できる。

次に、箱庭制作者がぴったり感を感じられなかった具体例を挙げる。

#### ◆具体例 102：A氏第2回箱庭制作面接制作過程 3

A氏は第2回箱庭制作面接で、川を作った。その構成によって、土地が2つにわかれた。その箱庭制作過程について調査的説明過程で少しだけ、橋をかけようかどうしよう。ほんの一瞬思ったんですねくうんうんうんうん＜だけど、橋は（間）違ったですね。＜ふんふん＞見ても、何、響かないし、心に＜そうねえ＞橋は違うんだなって（A氏調査、2-3）と語った。この具体例では、A氏は内的プロセスと照合し、確認した上で、橋をかけないことを選んだ、と捉えられる。

箱庭制作面接では制作にあたって、ぴったり感が重要だとされている（三木,1977,pp.141-142;東山,1994,pp.5-11;光元,2001,pp.23-25;他）。東山(1994)は、「箱庭療法が治癒力をもつのは、自分のイメージをぴったりとした形で表現でき、それが自分に目の当たりにフィードバックされる点である」(p.9)と指摘している。◆具体例 101 と 102 で、ある構成を行う場合においても、行わない場合においても、箱庭制作者は構成と内的プロセスを照合し、構成に関する箱庭制作者の選択がなされている。箱庭制作者は、構成やその語りを通して、＜ぴったり感の有無＞に関する照合作業を行い、自分の内的プロセスへの気づきを深めることができたと考えることができる。

ぴったり感に基づいて、ミニチュア選択や構成がなされたが、その構成の意味について、箱庭制作者が明瞭には意識化していない具体例を挙げる。

#### ◆具体例 103：A氏第1回箱庭制作面接制作過程 13

A氏は、第1回箱庭制作面接で、ガラス瓶(壺)を選び、それを砂箱中央上に置いた。その蓋や中味について、調査的説明過程で以下のように語った。あの、感じとしてはくうん＜しばらく前からそこくうん>にあった。で、その瓶の中身がまだはいってるかくうん>出てるのかくうん>、よくわからない（中略）なんか、こう、何か大事なものがはいつていたか、はいつている。そんなようなのがあの海岸には打ち上げられてたねー、っていうのを、そんな感じでくははあー大事なものがはいつている。そういうものが打ち上げられてた。それをまあ、気づいてる（んんん）（不明）>うん、そうですね。＜打ち上げられてたねー、って言ったもんね。>気づいてますね、気づいてて、その、あの、なんていうかな、まだ瓶をふたを開けて確認してない、っていうか、わざと閉めたままにしてある、っていうか、まあとっておいてある。（笑）くうんうん>感じなのかなあ（A氏調査、1-13）。その制作過程についての内省報告では、壺(ガラス瓶)について、中に入っているのか入っていないのか、ふたが開い



ているのか開いていないのかよくわからない、そんな壺がよかった。(A氏内省, 1-13, 制作・感覚)と記している。調査的説明過程で語られているようにA氏はガラス瓶(壺)の中身・大事なものがまだ入っているか出ているのかわからない感じのものというぴったり感に基づいて、ガラス瓶を選択した、と捉えられる。そして、海岸に打ち上げられて、しばらく前からそこにあったという感じに基づいて、ガラス瓶を砂浜に置いた、と考えられる。しかし、筆者の介入後には、蓋をわざと閉めたままにしてあるという感じかなと言っている。それに対して、内省報告では、蓋が開いているのか開いていないのかよくわからない壺がよかったと記しており、蓋の状態のあいまいさを意識して、意図的に選んだような記述となっている。この箱庭制作過程に関して、A氏は内省報告に以下のように記した。製作終了後の話し合いで、th から「そういう物があるって気づいてるんだ」と言われ、「そう、気づいていて、そのままにしてあるんだ」と思った(A氏内省, 1-13, 制作・意味)\*<sup>1</sup>。意識してはいなかったけれど、私は気がついていて、そしてそれをちゃんと拾い上げていないんだということ(A氏内省, 1-13, 調査・意味)。この記述から、調査的説明過程で筆者の応答があるまでは、ガラス瓶を拾い上げていないという構成やその意味について、明瞭には意識化していなかったことが示された。

このように、ガラス瓶は中身や蓋の状態があいまいなままで、放置され続けられたものとして構成されている。つまり、制作に関わる意識は、大事なものがあることを箱庭に表現しつつ、それをそのままにしていることと、ちゃんと拾い上げていないことの「意味」に気づいていない制作者の内的状態をも、非常に巧みに、ぴったりな形で表現している。◆**具体例 103**は、直観的な意識によって、ガラス瓶を選び、構成したものの、構成の意味についてA氏が明瞭には意識化していなかった主観的体験の語りや記述だと理解できる。直観的な意識は、箱庭制作を通して、A氏の意識と無意識あるいは意識の図と背景を、非常に巧みに、ぴったりな形で表現した、と考えられる。◆**具体例 103**では、ぴったり感に基づいて、ミニチュア選択や構成がなされたが、その構成の意味について、A氏が明瞭には意識化しておらず、直観的な意識によって成された構成と理解できた。◆**具体例 103**の場合、A氏は調査的説明過程で筆者とやりとりする中で、構成をめぐる自分の内的プロセスを再吟味し、その再吟味を通して、自分の内的プロセスへの気づきをえたと考えることができる。このようにしてくぴったり感の有無は箱庭制作者の自己理解の深化に寄与すると考えられる。

## 2) [ぴったり感の照合]の結果および考察

[ぴったり感の照合]は、「ミニチュアの選択や構成において、現物や構成の特徴(位置や方向など)と内的感覚、イメージとを照らしあわせ、ぴったり感の確認をする内的プロセス」と定義された。

本概念の具体例を以下に挙げる。

### ◆具体例 104 : A氏第1回箱庭制作面接制作過程 10~11

A氏は第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程10で、砂箱左奥隅で、家を置き比べた。続く11で、砂箱左奥隅で、金色のベルとマリア像を置き比べた。それらの箱庭制作過程の詳細を以下に記す。

箱庭制作過程 10

- 20分23秒～ 青い屋根の家を左手で空中にもって、見つめる。
- 20分32秒～ 緑の家をのけ、青い屋根の家を置き、見つめる。
- 20分39秒～ 再度、緑の家を置くが、そちらは見ずに、青い屋根の家を見ている。
- 20分47秒～ 両方の家をのける。
- 20分50秒～ 教会を置く。
- 20分57秒～ 教会を置いたまま、その横に青い屋根の家を置き、見つめる。
- 21分05秒～ 置き比べていたすべてのミニチュアを別のところにのける。

箱庭制作過程 11

- 21分10秒～ 棚に行き、他のミニチュアを探す。
- 21分25秒～ ベルを手にもつ。そのままベル左手でもっている。
- 21分38秒～ マリア像を見つめ、右手で取る。
- 22分02秒～ 砂箱前に移動し、マリア像を砂箱左奥隅に置く。
- 22分10秒～ マリア像の横に青い屋根の家を置く。
- 22分15秒～ 緑の家も青い屋根の横に置く。
- 22分20秒～ ベルを右手で空中にもち、マリア像と見比べる。
- 22分38秒～ ベルを左手に持ち替える。マリア像を右手でとり、左手に持ち替える。右手でベルを置く。
- 22分50秒～ ベルをのけ、マリア像を置く。
- 22分56秒～ 緑の家をのける。
- 22分58秒～ 砂箱左奥の領域を見つめる。
- 23分15秒～23分28秒 教会、緑の家、ベルを片付ける。

これらの箱庭制作過程について調査的説明過程で、A氏は大事なものなので。あまりこう(間)まあ、おごそかな雰囲気っていう言いすぎかもしれないけれど。うん、そういう感じ(間)がよかったんですね。簡単には触れていけない、な。うん。(間)だからそれが、わたしの中に何かもってるものがちゃんとあってるかなあってちゃんと確認してましたね(A氏調査、1-複数過程に亘って)と語った。また、内省報告に今の私のベースを表現する時、どんな私なの？と自分にたずねていた。自分自身の内側とのマッチングを丁寧にしていたので、どんな玩具を置くか決めるのにずい分時間がかかったと思う(A氏内省、1-複数過程に亘って、調査・感覚)と記した。これらの箱庭制作過程では、とても丁寧にミニチュアを見比べ、内的感覚と照合している、と捉えられる。語りや内省報告によると、その領域に置きたいミニチュアは、おごそかな雰囲気をもった、簡単に触れてはいけない大事なものだった。だから、自分の中にもっているものとミニチュアとがちゃんと合っているか、丁寧に確認・マッチングしていたことが示された。今の私のベースを表現する時、どんな私なの？と自分にたずねていたという言葉に示されているように、[ぴったり感の照合]は、いま・ここで箱庭

を制作している私はどのような私なのかと問う行為・内的プロセスだということができる。そのような問いを自分に対して行い、その問いに応えようとするを通して、A氏は自己への理解を深めていくことができたと解釈することができる。

#### ◆具体例 105：A氏第10回箱庭制作面接制作過程 10, 13

A氏は第10回箱庭制作面接の箱庭制作過程10で、犬・インパラを女の子の人形の周囲で置き比べ、インパラを置いた。制作過程13で、一度、青い鳥を砂箱右奥(砂箱左側から砂箱を縦位置に使った立ち位置から左奥)に置いた。その後、青い鳥を女の子の人形の後ろに置きなおした。それらの箱庭制作過程について、A氏は自発的説明過程ででも、位置はすごい迷いました、けどね、どこの位置にしようかな、(A氏自発, 10-複数過程に亘って) インパラは私の前なのか後ろなのかとか、(A氏自発, 10-10) 青い鳥は、これから行く方にあるのか、私は会えるのかしらと思ってたんですけど、実は一緒に、あ、私の頭の上を飛んでる、ともいえるなあと思って、<なるほど>はい、置いていきましたね(A氏自発, 10-13)、と語った。インパラの位置が自己像である女性の人形の前なのか後ろなのか迷った。また、青い鳥は最初、これから行く方向にあるのかと思っていたが、実は自分の頭の上を飛んでいると思い、近くに置いたことが示された。ミニチュアの位置について、内的感覚と照合している主観的体験の語りだと捉えられる。

第10回箱庭制作面接は、A氏の箱庭制作面接の最終回である。インパラに関して、A氏は第6回箱庭制作面接で思いをそのまま聞いてくれる、相棒って言う感じかな(中略)願いはみんなかなえてくれます、(中略)危ないところへも一緒に多分行けるといふか、危ないなと思ったら、この子は何か多分いってくれるだろうし(A氏調査, 6-12)と語った。インパラは、A氏にとって、自分の思いをそのまま聞いてくれ、危ないところにも一緒に行って、危ないことを教えてくれる相棒のような存在であった。また、青い鳥は第2回と第5回箱庭制作面接に置かれた幸せを連想させる鳥であった。このように、インパラと青い鳥はA氏にとって重要な存在である。その重要な存在と自己像である女の子との位置関係や距離感は、箱庭制作面接が終わった後も続くA氏の人生の、内的な同伴者と自分との関係性の表れとして、A氏には大切なことだったのだと推測できる。◆具体例 105は、A氏にとってこれからの人生の歩みを確かめる大切な[ぴったり感の照合]だったと解釈できる。

◆具体例 104と105に示されたように[ぴったり感の照合]は、箱庭制作者が自分の内的プロセスと構成とを照らし合わせ、それらがぴったりかを確認する内的プロセスである。その照合作業自体が自己の内的プロセスへの気づきを生む可能性がある。さらに、ぴったりな構成を行うこと、その構成について語ることを通して、箱庭制作者は自己理解を深めていくことができると考えられる。

次に、ぴったり感の照合がうまくいかない場合の具体例を挙げる。この具体例も含めて、以下にぴったり感の照合に関する、いくつかの過程・要素について検討する。

#### ◆具体例 106：A氏第7回箱庭制作面接制作過程 6

A氏は第7回箱庭制作面接で、愛着の湧く作品を作ることができなかった。その要因の一つに、ぴったり感の照合が難しかったことを挙げ、内省報告に以下のように記した。自分の

作りたい形,表現したいものをつかまえて,それをそのように表現するのが,この日はとても難しい。自分の奥の方で感じていることをなかなかキャッチできない。自分の感じていることと表現されたものがぴったりしているのかどうかという照合が,この日は難しく,いつもより時間がかかる。ぴったりしているかどうかをちゃんと照合できていないうちに,表面的に湧きあがってくるアイデアだけで動いているような感じ (A氏内省,7-6,制作・意味)。この具体例では,ぴったり感の照合が難しかった要因が複数示された。a.自分の作りたい形,表現したいもの,奥の方で感じていることをキャッチできない,b.自分の感じていることと表現されたものがぴったりしているかの照合が難しい c.照合がきちんとできていないうちに,表面的に湧きあがってくるアイディアだけで動いている感じ,があった。内的プロセスを感じ取ること,内的プロセスと構成との照合,照合がきちんとできないままでの構成の3要因が示された,と捉えられる。

◆具体例 104~106 は,ぴったり感の照合に関する箱庭制作者の主観的体験である。ぴったり感の照合には,いくつかの過程・要素があることが示された。それらの過程・要素に沿って,考察する。

a.ミニチュアの選択や構成の前に,自分に問いかけるという過程・要素があった。これは,A氏第1回箱庭制作面接の今の私のベースを表現する時,どんな私なの?と自分にたずねていた (A氏内省,1-複数過程に亘って,調査・感覚)という具体例に示された。これは,ミニチュアを選択したり,構成する際に,自分の心に向けて,どのようなイメージがあるのか,ぴったりなのか呼びかけ・問いかけ・尋ねるといった過程・要素だと捉えられる。

b.構成やミニチュアに関する浮かんできた内的プロセスをキャッチする過程があった。これは,A氏第7回箱庭制作面接の自分の作りたい形,表現したいものをつかまえて (A氏内省,7-6,制作・意味)という具体例や自分の奥の方で感じていることをなかなかキャッチできない (A氏内省,7-6,制作・意味)という具体例に示された。心の奥にある,あるいは湧き上がってくる内的プロセスを箱庭制作者の意識がキャッチするという過程・要素と考えられる。

c.キャッチした単独,あるいは複数のイメージや感覚を確認・吟味する過程・要素があった。これは,A氏第1回箱庭制作面接の大事なものなので。(中略)おごそかな雰囲気っていうと言いきりかもしれないけれど。うん,そういう感じ(間)がよかったんですね。簡単には触れていけない (A氏調査,1-複数過程に亘って)という具体例に示された。

d.内的プロセスと構成がぴったりしているかの確認・マッチングという過程・要素があった。これは,A氏第1回箱庭制作面接のそれが,わたしの中に何かもってるものがちゃんとあってるかなあってちゃんと確認してましたね (A氏調査,1-複数過程に亘って)という具体例や自分自身の内側とのマッチングを丁寧にしていたので,どんな玩具を置くか決めるのにずいぶん時間がかかったと思う (A氏内省,1-複数過程に亘って,調査・感覚)という具体例や,A氏第10回箱庭制作面接のでも,位置はすごい迷いました,けどね,どこの位置にしようかな, (A氏自発,10-複数過程に亘って) インパラは私の前なのか後ろなのかか, (A氏自発,10-10)の具体例に示された。これらの具体例は,現物のモノであるミニチュアや構成と自分の内的プロセスとの確認・マッチングであり,現物のモノがこころのこと,心の表現となる上で,重要な過程・要素である,と理解できる。

そして、A氏第7回箱庭制作面接の自分の感じていることと表現されたものがぴったりしているのかどうかという照合が、この日は難しく、いつもより時間がかかる（A氏内省、7-6、制作・意味）という具体例に示されたように、内的プロセスと表現がぴったりしているかの確認・マッチングがうまく機能しない場合があり、そのような時、箱庭制作者には、表面的に沸きあがってくるアイデアだけで動いているような感じ（A氏内省、7-6、制作・意味）というような内的プロセスが生じることも示された。

a～dは本研究のデータから導き出されたものであるため、[ぴったり感の照合]の過程・要素を網羅できてはいないかもしれない。しかし、少なくともa～dは、ぴったり感に基づいた構成を行うことができるための過程・要素の一部である。本項に示されたように、[ぴったり感の照合]は複数の過程・要素に亘る内的な作業であり、このような照合作業自体が、自己の内的プロセスに丁寧に向き合う主観的な体験であると考えられることができるだろう。

### 3) [ミニチュアとの出会い]の結果および考察

<ぴったり感の有無>内の[ミニチュアとの出会い]の結果および考察を記す。[ミニチュアとの出会い]は、「ミニチュア選択時における、ぴったり感の一様態。『出会えた、見つけた』という感覚や感情を伴ったり、内界に大きな影響を与えるミニチュア選択」と定義された。本概念の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 107：A氏第1回箱庭制作面接制作過程 7, 14

A氏は第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程7で、「何か白いもの、動きのさせるものを見つけたくて、玩具を物色していた」（「内」は、A氏が内省報告において当該箱庭制作過程の内容として記した言葉である）。そして、イルカを見つけた。その箱庭制作過程についてA氏は、内省報告にイルカを見つけて「あ」と思う。「これだ」という感じ。探していた白い帆船とは違っているのに、「出会えた、見つけた」という気持ちになる（A氏内省、1-7、制作・感覚）と記した。A氏はイルカを見つけて、「あ、これだ」「出会えた、見つけた」と感じた。その感覚がイルカを選択する大きな要因となった、と考えられる。

同回の箱庭制作過程14で、A氏は棚に亀を見つけ、砂箱右上隅に置いた。その箱庭制作過程についてA氏は、内省報告に以下のように記した。青い壺を棚に戻しながら、玩具を物色しようとしていたら、亀が視野に入った。「あ、これを置こう」と思った（A氏内省、1-14、制作・意図）。A氏第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程14で、A氏は、イルカの行く先にある得体の知れない何かを探していた。しかし、亀が目にとまった時、得体の知れない何かのことが一瞬で頭から消え、亀を置こうと思ったことが示された。抱いていたイメージが一瞬にして消えるほどの影響が亀との出会いにあった、と捉えられる。そして、それを置くことで、安心して進んだらいいんだと感ずることができ、得体のしれないものを置こうとしていた時の気持ちから大きく変化したことが示された(p.129 ◆具体例 94 参照)。実際に作られた構成では、得体の知れない嫌なもののイメージは枠外に追いやられた。実際に作られた構成と、嫌なものが枠内にある実際には作られなかった構成とでは、箱庭制作者にとって作品の意味が随分異なるものになったであろうと推測できる。

#### ◆具体例 108：A氏第2回箱庭制作面接制作過程 12

A氏は第2回箱庭制作面接の箱庭制作過程12で、青い鳥を見つけて、砂箱左上隅の白い石の上に置いた。青い鳥を見つけるまで、A氏は苦しさを感じていた。ところが青い鳥がたまたま目に入った時、「ああ、これだ」と感じた。そして、それを置くことで、苦しさがなくなった(p.51 ◆具体例20参照)。また、自省報告に以下のように記された。青い鳥は意図しないところからやってきた、意図を超えているという感じかもしれない。これを見つけた途端、わたしがそれまで作っていた箱庭の調子・トーンが変わった。箱庭ではなくて、変わったのは私の心の調子かもしれない(A氏自省, 2-12, 制作・意味)。青い鳥は、意図を超えているような感じもあり、自分の「心の調子」を変えるほどの大きな影響を及ぼしたことが示された。

また、Ⅷ章で、コアカテゴリー⑥【制作過程と外界・日常生活の交流】の概念[面接外の出来事や生き方と制作中の内的プロセスの連動]の具体例として後述する、A氏第8回箱庭制作面接で砂箱中央に置かれた白い女性の人形に関する◆具体例142(p.175参照)は、本概念の具体例でもある。

木村(1985)は、以下のような例を挙げている。美しいカラフルな公園を作ろうと考えていた女子大生がなぜか急に2頭のサイが目につき、どうしてもそれを使わねばならないという気持ちになり、動物と怪獣の世界を作った。そして、その世界に箱庭制作者自身が少なからずショックを受け、そうした気持ちを言語化していくなかで、自分についての気づきを深めていった(p.23)。本項の◆具体例107,108や木村の記述から、[ミニチュアとの出会い]は、箱庭制作者の心や構成に大きな影響を及ぼすことが確認できた。

[ミニチュアとの出会い]のこのような箱庭制作者や構成への影響は、箱庭作品が箱庭制作者の意図を越えたものとなる意味でも、そして、そのような作品から箱庭制作者が意識化していなかった内的プロセスに気づき、それを取り込んだ自己成長の促進に寄与するという意味でも、重要な事象である、と考えられる。上に見たように、[ミニチュアとの出会い]は、非意図的なミニチュア選択である。それに加えて、A氏第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程14での亀との出会いや木村(1985)の例のように、抱いていたイメージとは異なる象徴的意味をもったミニチュアとの出会いの場合は、より意外な要素が箱庭制作に組み入れられることになる。このような意外で、非意図的なミニチュア選択による構成が、箱庭制作者の自己理解や自己成長に寄与することは、木村の記述からも確認できる。

B氏の具体例を挙げる。このB氏の具体例では、上に挙げたA氏の具体例ほど、『出会えた、見つけた』というような鮮烈な感覚や感情を伴っているわけではない。しかし、ミニチュア選択において、そのミニチュアが気になる理由はわからないが、そのミニチュアが気になることやそのミニチュアによって自分自身が動いていたという語りがあるため、「内界に大きな影響を与えるミニチュア選択」という定義に照らして、本概念の具体例であると考えた。

#### ◆具体例109：B氏第4回箱庭制作面接制作過程4～5

B氏は第4回箱庭制作面接制作過程1で今日はほんとに、テーマというものが思いつかずに。で、それで、ここに置いてあるものという中から、なんか気持ちが動かないかなというようなところから始まりました(B氏自発, 4-1)と語った。制作過程4で、赤い橋を選び、制作過程5で砂箱中央に橋を置いた。B氏はその制作過程について自発的説明過程でその

なぜかよくわからないんだけど、橋っていうところのものに、気になって。それで、でも、なんで気になるのかよくわからなかったですけども、とりあず持ってこようということ。あの橋をもってきたんです (B 氏, 4-4, 自発) と語った。調査的説明過程で最初、橋もってきた時に、この赤の、この橋っていうのが、その、気になったというか。印象に残って。(中略)大きさ的にも、まあ、この大きさがしっくり来てて。でも、この赤の色のこのやつに実際自分自身が動いてたっていうのは確かなんです (B 氏, 4-4, 調査) と語った。

B 氏第 4 回箱庭制作面接では、この箱庭制作過程の後に、以下のような構成が行われた。B 氏は、橋の上に牛を置いた。河や海を作り、その砂を陸に寄せた。その砂を寄せた部分が偶然小高くなった。このように構成された風景から、B 氏は「確かこんな風景あったぞ」と、かつて行ったことのある土地やそこにいた人々のことを思い出した。制作過程 15 以後、B 氏は意図的に、かつて行ったことのある土地やそこにいた人々に関する構成を行った。制作過程 4 で選ばれた赤い橋は「確かこんな風景あったぞ」と B 氏が感じた構成の一部だった。

先にも記したように、本具体例は、A 氏的具体例ほど、『出会えた、見つけた』というような鮮烈な感覚や感情を伴っているわけではない。また、制作過程 15 前後の構成方法の大きな変化に赤い橋の選択がどのように影響したのかの詳細は不明である。そのような限定・限界はあるものの、赤い橋を選ぶ際の B 氏の「この橋っていうのが、その、気になったというか。印象に残って、この赤の色のこのやつに実際自分自身が動いてたっていうのは確かなんです」という内的プロセスは、制作過程 15 前後の構成方法の大きな変化になんらかの影響を与えた可能性があるかと推測することができるのではないだろうか。本具体例を[ミニチュアとの出会い]の一種と考えることに論理的整合性があるならば、[ミニチュアとの出会い]は通奏低音のように、表面には顕れなくても一貫して箱庭制作者や箱庭制作過程に影響を及ぼす要因として働き、箱庭制作過程に箱庭制作者が意図しない構成の変化を生む一因となると解釈できるのかもしれない。

[ミニチュアとの出会い]を異なる観点から考察する。

#### ◆具体例 110 : A 氏第 2 回箱庭制作面接制作過程 12

先に記したように、A 氏は第 2 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 12 で青い鳥を見つけ、置くまで、A 氏は苦しさを感じていた。ところが青い鳥を置くことで、苦しさがなくなった(p.51 ◆具体例 20 参照)。A 氏は、第 2 回箱庭制作面接の自発的説明過程で「青い鳥を置いた段階でほとんどもうこれでいいかな、完成にしてもいいかな、と思った」(A 氏自発, 2-12) と語った。この語りは、青い鳥を置くことによって、それまでの苦しかった自分の心の調子が変わり、自分の心や箱庭作品を「おさめる」こと、「おさまりをつける」こと(河合隼雄, 1991, pp.130-133)ができた主観的体験の語りである、と解釈することができる。A 氏にとって、苦しさにおさまりをつけることができた体験は、作品におさまりがつくという意味においても、自分の苦しみが意図を超えたものによっておさまるという体験においても意義深いものであった、と推測できる。このように[ミニチュアとの出会い]という形で選択したミニチュアを使い、構成することによって、箱庭制作者は自己の気持ちが自分の意思によらず、非意図的な要因によって、おさまりをつけることができるという体験をもちうることができる。[ミニチュアとの出会い]は、このような体験を箱庭制作者にもたらし、自己成長を促すという機能をもっていると捉えられる。

## VII-3-2. <イメージや作品が主体となる>と[箱庭に入る],[枠外のイメージ]の結果および考察

<イメージや作品が主体となる>が、本節に挙げる概念・カテゴリーの中で一番包括的であり、他の概念はその中に包含されると考えた。例えば、[箱庭に入る]の主観的体験は、イメージの中で砂箱があたかもイメージが展開する舞台となり、箱庭制作者はその舞台上で繰り広げられるドラマの一登場人物になる事態と捉えることができる。その場合、砂箱で展開されるイメージが主体であり、箱庭制作者はそれに従うことになる主観的体験と捉えることができる考えた。

### 1) <イメージや作品が主体となる>の結果および考察

<イメージや作品が主体となる>は、「イメージや外在化されたイメージ(作品・構成・ミニチュア)があたかも自律性や意思をもつ主体となり、箱庭制作者はそれを受容する立場となる内的プロセス」と定義された。本概念の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 111 : A 氏第 3 回箱庭制作面接制作過程 13

A 氏は第 3 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 13 で、回遊しているシャチ、イルカ、亀を見つめ、亀の頭の方向を陸側から海の沖合いの方向に変えた。その亀について、調査的説明過程でもう亀は、そういう意味では亀は好き勝手に行きます。<あ、好き勝手に行くのね。なるほどなるほど>はい‘笑’そういうことですよ、亀は好き勝手に行きますね (A 氏調査, 3-13) , ふんへえ (笑) へへ<なに?>へえ、自分で面白いなど。へえ、あ、そうなのと思って。へえ、あ、そうなの、亀さん早く行きたいわけ、へええ 知らなかったあと思いましたね (A 氏調査, 3-13) と語った。亀は意思をもつ主体となって、自分の意思に従って沖の方に向かうという感覚を A 氏がもったこと、そして、亀が早く沖に行きたがっていることを A 氏は面白い、知らなかったと思ったことが語られた。

#### ◆具体例 112 : A 氏第 4 回箱庭制作面接制作過程 1~2

A 氏は第 4 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 1 で、棚の玩具を眺めてから、砂箱を見つめた。続く制作過程 2 で、左奥から、反時計周りに渦を描いた。A 氏は、砂を見ていたら、渦巻きのイメージが浮かんできてどうしても消えないかったため、作ってみようとした主観的体験が報告された(pp.70-71 ◆具体例 37 参照)。イメージが自然に浮かんできて、それが消えないので箱庭制作者がそれを受容し、それに従って構成する主観的体験の語り、と捉えることができる。

#### ◆具体例 113 : A 氏第 5 回箱庭制作面接制作過程 3

A 氏は第 5 回箱庭制作面接で、高くそびえる山からなる島を作った。A 氏はその島に厳しさを感じた。その箱庭制作過程について A 氏は内省報告に 振り返った傾斜だけではなくて、島のあいているスペース全体が、私に問い掛けてくる。突き詰めてくる。私を試そうとしている。そんなイメージ (A 氏内省, 5-3, 調査・感覚) と記した。島の傾斜や空いているスペースがあたかも主体となって、A 氏に問いかけ、突き詰め、試そうとするイメージを A 氏が感じたことが示された。



#### ◆具体例 114 : B 氏 第 1 回箱庭制作面接制作過程 23～26

B 氏は第 1 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 23 で、「右側の空間に空白を感じ何か補充したい」と感じ、棚でミニチュアを探した。制作過程 24 で、砂箱右下隅に針葉樹を 3 本置いた。制作過程 25 で、「生活感の感じられる人物を求め」て、棚でミニチュアを探した。制作過程 26 で、「行き交い、挨拶を交わす人、果実などを採る人」という男性のミニチュアを水源の右斜め上に、女性のミニチュアを右中央と中央奥に置いた。これらの箱庭制作過程について、第 1 回ふりかえり面接で、以下のように語った。[右側の空間の、さびしさというか、空白っていうものが気になったわけですね。それで、右側の空間に、何かを補充したいというところの中で、そこで、何を表現したいんだろうかと。このあたりは、ちょっと、まあ、アイディアっていうか、自分では思いつかなかったです。その、でも、まあ、結果的に、その、テーマをなんか導きだしてくれたのは、木。その広がり(中略)で、そこで、あの、次に、なんかは、取り掛かれるようになってきました。で、そこで、生活感の感じられる人物を求めるっていうこととかにくるんですけど]。箱庭制作過程 23 以前の過程では、砂箱中央と砂箱左側の構成がなされていた。制作過程 23 になって、砂箱の右側が空白で、さびしいと感じた。しかし、何を補充し、何を表現したいのか、アイディアが思いつかなかった。制作過程 24 で、木を選び、砂箱右下隅に置かれた木がテーマを導きだしてくれ、続けて、砂箱右側に「行き交い、挨拶を交わす人、果実などを採る人」を置くことができた、と捉えられる。箱庭制作者が自分の意思や意図で構成を行うのではなく、木というミニチュアやその構成が続く構成のアイディアを導き出すという主観的体験が示された。

◆具体例 111～114 は、箱庭制作者が自分の意思や意図で構成を行うのではなく、構成・ミニチュアがあたかも自律性や意思をもつ主体となり、箱庭制作者はそれを受容する立場となる主観的体験であった。岡田(1999)は、箱庭療法と能動的想像との関連を述べる中で、「箱庭の玩具が、それぞれ意志をもって、話したり、動いたりする」。「出来あがった箱庭作品は、固定したものではなく、人物や動物などは、それぞれに動いており、会話しているのである」としている(pp.140-141)。<イメージや作品が主体となる>は、岡田が指摘するように、ミニチュアが自律性や意思をもつ主体となるイメージ体験についての主観的体験と考えられる。

石原(2008)は、「モノをアニメイトする」というイメージ体験を報告している。アニメイトとは、「単なるモノであるミニチュアを生命や意思をもつかのように扱い、ミニチュアが動いたり、感じたり、考えたりするかのように体験することを指す」としている。石原(2008)の「モノをアニメイトする」というイメージ体験は、本カテゴリーと同様の主観的体験である、と考えられる。石原(2008)には、a.動物(人間を含む)のミニチュアを用いる場合、b.動物以外の(植物を含む)のミニチュアを用いる場合、c.b の中でも無生物のミニチュアを用いる場合の具体例が報告され、考察されている。そして、b の具体例として、木のミニチュアを用いた場合について、以下のように考察している。「ミニチュアの『木』をアニミズム的に体験するには、二重のイメージ化が必要である点で、よりイメージの柔軟性を必要とする。つまり、たとえばモノであるミニチュアが何かを『見る』というイメージについて考えてみると、動物のミニチュアの場合、それを生きた動物としてイメージ化することと、『見る』主体に仕立てることとは同時に起きる。それに対して、『木』の場合には、単なるモノに過ぎない

『木』のミニチュアを,生きた『木』としてイメージ化したうえで,さらにその『木』をアニメズミックに『見る』主体に仕立てなければならないのである。このような二重のイメージ化をすんなりやってのけるには,かなりイメージ体験に親和性をもっていることが必要になるだろう」としている(pp.112-113)。B氏第1回箱庭制作面接で,木というミニチュアやその構成が続く構成のアイディアを導き出すというB氏の主観的体験やA氏第5回箱庭制作面接の,島の傾斜や空いているスペースという構成があたかも主体となって,A氏に問いかけ,突き詰め,試そうとするイメージにおいても,同様に二重のイメージ化が生じていると考えられる。このように箱庭制作者のイメージ化の力によって,＜イメージや作品が主体となる＞という主観的体験が成立すると考えられる。

◆具体例 111～114について伊藤(2005)を参照して,イメージと意識との関係性から検討する。伊藤(2005)は,箱庭制作過程におけるイメージと意識との関係性に焦点を合わせた調査研究を行っている。その中で伊藤自身が先行研究において見出した箱庭制作過程の4類型に基づいて(秦,1998),類型化した調査事例を検討している。その類型の一つとして,「イメージが自律的に働く状態で非日常的感觉を伴って制作に没頭し,満足を得た制作」について検討している。この類型の事例では,イメージと意識の関係性において,以下のような特性が見いだされた。a.イメージと意識の主従関係において,箱庭に展開されるイメージに没入し,イメージ自体の展開に意識がしたがっていた。b.イメージに対する意識の方向性において,出てきたイメージに積極的に意識を向け対話するように関わることによりさらなるイメージの展開があった。c.イメージと意識との交流性において,イメージが自然に浮かんで来やすい状態が生じていた(pp.54-63)。伊藤(2005)を参照して,本項の具体例をイメージと意識との関係性から検討すると,以下のように考えることができる。a.A氏第3回箱庭制作面接で,亀はあたかも意思をもつ主体となって,自分の意思に従って自律的に沖の方に向かおうとした。調査的説明過程におけるこの語りの後,A氏は以下のように語った。これはこれであの,私の箱庭ですけど,もう一個できそうとかね,亀が<ふん>沖へ進んでいくところが,(中略)違ったところですね景色として<ふんふん>(8秒)ふんへえ‘笑’へへくなに?>へえ,自分で面白いなと,へえ,あ,そうなのと思って(A氏調査,3-最後の全体的説明)。この語りは,A氏はイメージに没入し,亀が自律的に進むというイメージの展開に意識が従っている状態であり,自律的に進むというイメージの展開を面白いというように満足を与えている状態だと考えることができる。また,砂を見ていたら,渦巻きのイメージが浮かんできてどうしても消えなかったため,作ってみようとした◆具体例 112も,イメージの展開に意識が従っている主観的体験の語り,と捉えることができる。b.◆具体例 113の,島の傾斜や空いているスペースがあたかも主体となって,A氏に問いかけ,突き詰め,試そうとするイメージや,◆具体例 114の,木というミニチュアやその構成が続く構成のアイディアを導き出すという主観的体験では,出てきたイメージに積極的に意識を向け対話するように関わることによりさらなるイメージの展開があった,と捉えられる。c.◆具体例 111のへえ,あ,そうなのと思って。へえ,あ,そうなの,亀さん早く行きたいわけ,へええ 知らなかったあとと思いましたねという語りでは,亀が沖に早く行きたがっていることをA氏は知らなかったと述べていることからわかるように,亀が沖に進もうとすることはA氏が意図したことではなく,イメージと意識との交流性においてイメージが自然に浮かんで来やすい状態が生じていたと理解することができる。本項の具体例と伊藤(2005)の指摘を総合

すると、＜イメージや作品が主体となる＞は、箱庭制作者がイメージに没入し、イメージが自然に浮かんできやすい意識状態において、出てきたイメージに箱庭制作者が積極的に意識を向け対話するように関わることによって、さらなるイメージの展開が生じる内的プロセスであると考えられる。そのような内的プロセスであるため、イメージや作品があたかも意思をもつ主体となり、箱庭制作者はそれを受容する立場となると考えることができる。

＜イメージや作品が主体となる＞という主観的体験は、箱庭制作面接が促進機能を発揮するうえで、重要な機能の一つであると考えられる。河合俊雄（2002）は箱庭療法における主体の観点を取り上げている。箱庭作品には主体のあり方が表されるが、主体であるということは自分を何かに委ねてしまい、コントロールを失うことであるとする。箱庭を作っていると自分を越えた思いもかけないものが生じてくる。箱庭の方が主体のようになって、自分ではできていく作品の持つ必然性に従っているようになってくる、と述べている。そして、このような意味での主体性ゆえに、箱庭療法における自己治癒が可能になる、とする（pp.112-114）。◆具体例 113 の 振り返った傾斜だけではなく、島のあいているスペース全体が、私に問い掛けてくる。突き詰めてくる。私を試そうとしている。そんなイメージ という A 氏の主観的体験の記述によると、島が 私に問い掛けてくる。突き詰めてくる。私を試そうとしている という事態は、A 氏に厳しさを感じさせるものであった。しかし、A 氏は、厳しさから逃げることはせず、島の問い掛け、突き詰め、試しを受け入れ、それに従っていると捉えられる。本項の具体例と河合俊雄（2002）の指摘を総合すると、＜イメージや作品が主体となる＞は、箱庭制作面接において、イメージと意識の関係性に大きな変換が生じることによって、箱庭制作面接は箱庭制作者の自己理解や自己成長の促進に寄与することができると考えられる。

## 2) [箱庭に入る]の結果および考察

[箱庭に入る]は、「箱庭制作者がミニチュア選択や構成の際に、あたかもミニチュアとして感じたかのような内的プロセス、または砂箱の世界の中に居るような感覚」と定義された。

本概念の具体例を以下に挙げる。まず、ミニチュア選択の際の具体例を挙げる。

### ◆具体例 115：A 氏第 6 回箱庭制作面接制作過程 9

A 氏は第 6 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 9 で、海の生き物としてサメを選択した。その行為について調査的説明過程で、A 氏は以下のように語った。サメやなんかを、選んでる段階で、こういうのとでき、出くわすこともあるのかもしれないわ、おっかないけど、でもがんばろうとかそんなことを（笑）思ってたような、そんな気がしますね（中略）ハンマーシャークみたいな、あの一番凶暴なサメいるんです。これはだめ絶対だめと思って（中略）あれは、あの、私、あの、食べられちゃうと思って（A 氏調査、6-9）と語った。そして、内省報告に この魚達は、ほぼ私のえさ。おっかないのもいるけど、とって食べちゃうつもりになっている（A 氏内省、6-9、制作・意図）と記した。

次に、砂箱で箱庭作品を構成している際の具体例を挙げる。

#### ◆具体例 116 : A 氏第 6 回箱庭制作面接制作過程 12

A 氏は、第 6 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 12 で、インパラを焚き火の脇に置いた。その箱庭制作過程について、調査的説明過程で以下のように語った。思いをそのまま聞いてくれる、相棒って言う感じがなく相棒、思いをそのままきいてくれる>うん、願いはみんなかなえてくれます、(中略)この子に乗って移動すると私はとても楽なんです、このペンギンは、とても楽。<ふんふんふん>で(間)、とても楽、危ないところへも一緒に多分行けるというか、危ないなと思ったら、この子は何か多分いつてくれるだろうし、そんな感じがな(A 氏調査, 6-12)。この具体例も、A 氏は自己像のペンギンであるかのように語っている。一度、主語が「ペンギン」となり、自分とペンギンとの間に心理的距離があるような語りになるが、すぐさま、また、ペンギンになったかのような語りに戻っている。

#### ◆具体例 117 : B 氏第 2 回箱庭制作面接制作過程 19

B 氏は、第 2 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 19 で、仕切りの左側に、亀を右向きに置いた。続いて、イグアナを左中央に置くが、砂箱の奥、中央よりやや左側に置き直した。首をかしげ、再度、左中央に、亀の方を向いた方向にして置きなおした。亀を少しだけ、イグアナに近づけた(資料 4 B 氏第 2 回作品の写真を参照)。その箱庭制作過程について、調査的説明過程では、以下のように語った。進むのを引っ張られているっていうか。進んでいくのをくこちらか>こういう風に進んでいこうとするのを、その、まあ、足かせになっているっていうでしょうか (B 氏調査, 2-19)。内省報告に追われるばかりだけではなく、何かにひっばられている感じ(B 氏内省, 2-19, 自発・感覚)と記した。亀はイグアナなどに追われている感覚があったが、同時に、ひっばられているという身体感覚もあったことが示された。

これらの具体例では、箱庭制作者はあたかも自分がペンギン(◆具体例 116)や亀(◆具体例 117)になり、感じ、考えたような主観的体験が語られている。これはミニチュアに同一化している状況の主観的体験についての語りと考えられる。箱庭制作者はミニチュアと同一化するまでに、イメージに没入し、箱庭の世界を体験している。A 氏は、第 6 回箱庭制作面接で、箱庭世界の海でサメに出くわすことがあるかもしれない。おっかないが、がんばろうと思ったり、他の魚は自分のえさで、獲って食べてしまおうと考えた(◆具体例 115)。また、A 氏は、思いをそのまま聞いてくれて相棒であるインパラに乗って、この世界を探検しているというか、開発して(A 氏調査, 6-12)いた。このように A 氏は、あたかも自分が箱庭の世界に入って体験をしているかのように語っている。B 氏は第 2 回箱庭制作面接で、あたかも自分が亀になり、イグアナなどに追われている感覚やひっばられているという身体感覚について語り、記述している(◆具体例 117)。

箱庭療法を能動的想像(アクティブイマジネーション)と捉える考え方がある(河合隼雄, 1994, p.33; 岡田, 1999, pp.140-141; 齋藤, 2002, p.123)。齋藤(2002)は、箱庭療法では、箱庭制作者が箱庭というイメージ世界を歩き回り、あらゆる感覚を伴ってその風景を感じ、その風景を生きる指摘している(p.123)。本項の◆具体例 115~117 のデータと齋藤らの先行研究の指摘を総合して考えると、[箱庭に入る]とは、箱庭制作者がイメージに没入し、箱庭作品に顕れた自己の内的世界をあたかもその世界にいるかのごとく生き、箱庭の世界やその世界の中で生じる自己の内的プロセスを体験し、深く味わうことだと考えることができる。[箱庭に入る]という主観的体験は、箱庭制作者が自己の内的世界を深く理解することに寄与す

ると考えられる。

次の具体例は、上に挙げた具体例とは異なり、箱庭の中に入ることに難しかった場合の主観的体験についての語りである。

#### ◆具体例 118：A氏第7回箱庭制作面接複数過程に亘って

A氏は第7回箱庭制作面接で、作った作品に愛着を感じることができなかった。その箱庭制作過程での主観的体験として内省報告に「私自身がこの箱庭の世界の中で、生き生きとしてられない。想像をふくらませて自由に生きることが(飛び回ることが)出来ない」(A氏内省, 7-複数過程に関連, 調査・意味)と記した。この内省報告は、作品に愛着を感じることができない一要因として記された。箱庭の世界の中で生き生きとしてられない、想像をふくらませて自由に生きることができないという言葉は、箱庭の中に入ることができなかったA氏の主観的体験を示している、と捉えられる。

第7回箱庭制作面接のA氏の主観的体験から、[箱庭に入る]には、想像をふくらませて、その世界を飛び回り、生き生きと自由に生きることが必要であることが示された。これは[箱庭に入る]ための一要件だと考えられる。ここで、[箱庭に入る]ことができるための要件について、A氏第7回箱庭制作面接の同一箱庭制作過程に関する、他概念の具体例も参考にして考えたい。②【内界と構成の交流】内の概念[作品に対して、否定的な感情や感覚をもつプロセス]で取り上げたA氏第7回箱庭制作面接の具体例を参照する(p.88 ◆具体例 54 参照)。A氏は第7回箱庭制作面接の調査的説明過程で、「この島と半島と灯台だけでよかったのかもしれないですね。<ふん>それと他のものはもう本当に、なんていうんでしょうね(間 34 秒)表層的なものに感じられて、他のものが。愛着が湧かないです」(A氏調査, 7-複数過程に亘って)と語った。そして、このような構成になった要因の一つとして、内省報告に以下のように記された。「成り行きに任せて作ったことに少し後悔のような、残念なような気持ちがある。出来上がった作品を見ても喜べない。どこか白々しい感じを抱いている」(A氏内省, 7-複数過程に亘って, 自発・感覚)。成り行きに任せて作ったことに対する残念な気持ち、作品に対する白々しい感じについて記された。さらに、以下のような要因もあった。「陸地の形状が出来たあたりで、こんな世界を作ろうというアイデアが浮かんできて、それに従って、途中で変更することもなく作り上げてしまった。あらかじめ出来上がったストーリーに玩具を当てはめて置いていったかのようで、そこには私のオリジナリティが感じられない。自分自身の気持ちを常にスキャンしながら作ったのではないような感じ。自分で作っておきながら愛着が湧かない部分がある」(A氏内省, 7-複数過程に亘って, 調査・意味)。

これらの具体例を[箱庭に入る]ことができるための要件の観点から整理する。否定的な感情が生まれるような制作過程になった要因として以下の3点が示された。a.箱庭の世界の中で、自分が想像をふくらませて自由に生きることができないこと、b.自分の気持ちをスキャンして作ったのではないように感じられること、c.成り行きに任せて、出来上がったストーリーにミニチュアを当てはめて作ったかのようで自分のオリジナリティが感じられないこと、の3点に整理できる。このような要因によって、[箱庭に入る]ことができず、表層的で愛着の湧かない作品になったのだと推測できる。この整理に基づくと、[箱庭に入る]ことができるための要件は、a'.イメージが自然に湧いてくるための心理的準備が整っており、箱庭制作に没入でき、イメージの中で自由に生きることができ、b'.箱庭制

作過程中に、箱庭制作者が自分の内的プロセスの照合が的確にできること、c´. 構成と内的プロセスとの照合を繰り返し、自分のイメージやストーリーなどとぴったりする構成を行っていくこと、と考えることができる。

[箱庭に入る]ことができるための要件は、前項に挙げた伊藤(2005)のイメージと意識の関係性における特性と共通点をもっている。本項の具体例と伊藤(2005)の指摘を考えあわせると、箱庭制作者が[箱庭に入る]ことができた時、箱庭制作過程において、イメージは自然に湧きあがってくる。箱庭制作者は箱庭制作に没入し、自分の内的プロセスと構成との照合を的確に繰り返し、自分のイメージやストーリーなどとぴったりする構成を行っていく。このような心的状態における構成を通して、箱庭制作者は自己理解を深化させることができる。また、箱庭制作者が、想像をふくらませて、箱庭の世界を飛び回り、生き生きと自由に生きて、自分のオリジナリティを感じる箱庭作品を作りあげることが、その箱庭制作者が自身の内的ストーリーを十分に展開させることになり、自己成長を促進することに寄与すると考えることができる。

### 3) [枠外のイメージ]の結果および考察

[枠外のイメージ]は、「実際にミニチュアが置かれていないが、砂箱の枠外にイメージが存在していたり、砂箱内の構成が枠の外まで続いているとイメージされる内的プロセス」、と定義された。(1)イメージによる制限の超越の観点からみた枠外のイメージ、(2)図と地、「おさめる」ことの観点からみた枠外のイメージ、(3)図と地、より広範な内的世界の意識化の観点からみた枠外のイメージの観点から、結果および考察を記す。

#### (1) イメージによる制限の超越の観点からみた枠外のイメージ

##### ◆具体例 119 : B氏第4回箱庭制作面接制作過程 42

B氏は第4回箱庭制作面接の箱庭制作過程42で、砂箱左上隅のロッキングチェアに星の王子様を置いた。星の王子様は、実際の構成では砂箱内に置かれているが、B氏のイメージでは砂箱の外、砂箱の枠上にあり、そこから砂箱内の風景を鳥瞰していることが示された(p.62 ◆具体例 29 参照)。このように実際の構成とは異なり、枠外、枠上にイメージが存在する場合があることが見いだされた。また、枠外のイメージが付与されたミニチュアが実際の構成では枠内に置かれる場合もあることが見いだされた。現物のモノを使用する箱庭制作面接では、星の王子様が砂箱左上中央、左上、左上隅の砂箱の枠の3か所に存在するように構成することは難しい。この具体例の語りや記述は、a.砂箱の枠という制限を超えることであり、b.実際に構成することが難しい同一のミニチュアが複数箇所が存在するというミニチュアの現物性という制限をイメージによって超えていったB氏の主観的体験の語りや記述であると考えられる。[枠外のイメージ]による制限の超越によって、B氏の中で、自分の内的プロセスによりぴったりな構成を思い浮かべることができ、自己像が砂箱内の風景を鳥瞰しているという今の自分のあり様を理解することができたと考えられる。

##### ◆具体例 120 : B氏第2回箱庭制作面接複数過程に亘って

B氏は第2回箱庭制作面接で、砂箱四隅に針葉樹を置いた。その構成について自発的説明

過程で、B氏は以下のように語った。この木を四方に置いたというのは特に、なんて言うんでしょうか。(中略)確かに今、自分自身、意識の、このもっているものは、こういう風な壁とか籠とかいったところの部分があったにせよ、うん、でも、まあ、うん、その、それだけじゃない部分っていう意味で、森っていうんでしょうかね。その先に何か別のものもあってっていうところで。あのあの、それが今、表現したいとか、表現しようとかいう風では思わないんだけれども、そういうものが広がりとして、一応、感じているんだ(B氏自発、2-複数過程に亘って)。四隅に置かれた森は、砂箱内の壁や籠とは異なるイメージであり、この回で表現したい、表現しようと思わないけれども感じているイメージであった。そして、イメージの中では、その森は砂箱の外にまで広がりをもつものであった。

#### ◆具体例 121：B氏第5回箱庭制作面接制作過程 6

これと類似の具体例が、B氏第5回箱庭制作面接にあった。

B氏は、針葉樹を砂箱四隅に置いた。B氏は、内面から出てきたイメージを砂箱の四隅全面にまで、張り巡らせて制作する馬力がないと感じた。それを、四隅に森を作ることで、丸い枠に限定するといった構成に付与した、と捉えられる。そして、それは、今までの箱庭制作面接でも見られた自分自身の傾向であると考えていたことが調査的説明過程で語られた(pp.102-103 ◆具体例 66 参照)。その構成について内省報告に無意識の領域(B氏内省、5-6、制作・意図)、今は脇に追いやられている諸々の心の部分(B氏内省、5-6、制作・感覚)と記された。森の内側は、今回の箱庭制作面接で表現できるイメージであり、枠内の森、そして枠外にも広がる森は、今は脇に追いやられている諸々の心の部分であり、無意識の領域であるとB氏は捉えていた。河合隼雄(1969)は、箱庭表現をイメージであり、イメージは意識と無意識の交錯するところに生じたものであるとする(p.17)。B氏第2回および第5回箱庭制作面接の森は、意識化・顕在化していないため、その内容が明示的にならない部分の表現であった、と考えられる。この具体例は、河合隼雄(1969)の以下の言及と類似の主観的体験であると考えられる。作品を砂箱内に作りあげて、その後外にもミニチュアを置くとき、砂箱の外に置かれたものは、その存在をうすうす感じながらも、自分によって容認し難い心的内容を表している場合が多い(河合隼雄、1969、p.37)。B氏第2回および第5回箱庭制作面接では、実際にミニチュアが砂箱枠外に置かれたわけではないが、存在をうすうす感じながらも、自分によって容認し難いあるいは明確に意識化し難いという点において、共通性をもっていると考えられる。B氏は森の構成やその構成への語りを通して、第2回や第5回箱庭制作面接で意識化・顕在化していない内的プロセスが自分の内界にあることについて、理解を深めることができたと考えられる。

◆具体例 119～121 に共通しているのは、イメージが砂箱の枠という制限を超越する働きをしている点である。B氏第1回箱庭制作面接の星の王子様は、実際の構成では砂箱内に置かれているが、B氏のイメージでは砂箱の外、砂箱の枠上にあり、そこから砂箱内の風景を鳥瞰していることが示された。B氏第2回箱庭制作面接と第5回箱庭制作面接の四隅に置かれた森は、イメージの中では、その森は砂箱の外にまで広がりをもつものであった。これらの具体例では、実際の構成では、ミニチュアは砂箱の内に置かれており、砂箱の外には置かれていないが、イメージの中では、砂箱の外にも存在していたり、外にもつながっていた。このように、上記3具体例では、砂箱の枠外には、ミニチュアが置かれていない。それは、砂箱の

枠内に構成するという制限を B 氏が受け入れ、守っているということの証であろう。そして、制限を受け入れつつ、砂箱の外にも存在したり、続いているイメージを無視することなく保持している。

石原(2008)は、砂箱の空間が、砂箱の枠で区切られた空間の内部に留まらず、砂箱の枠がないかのようにずっと外まで広がっていくような箱庭制作者(F5)の体験を報告している(pp.129-130)。また、砂箱の枠外に実際にミニチュアを置いた臨床事例 A と箱庭制作者(F5)の体験とを比較・検討している。砂箱の枠を砂箱に表現する際に、砂箱の枠が体験の前景に出るのか、表現の舞台、表現の背景になるのかという観点から検討している。臨床事例 A のクライアントは、現物として砂箱が過剰に意識されてしまい、「制限されながら、あたかも制限されていないかのような体験」ができていない。それに対して、心理的に健康な調査参加者の場合は、砂箱は表現の舞台、表現の背景となるため「制限」されていることにさえ気づかない、としている(pp.219-226)。

◆具体例 119～121 と石原(2008)の具体例と考察を考えあわせると、[枠外のイメージ]は、砂箱の枠という現物の制限を受け入れつつ、イメージによって制限を超越する心の機能である。それは、現物の砂箱を意識や表現の背景にするという心の機能によってなしうる事象であると考えることができる。[枠外のイメージ]という制限の受容と超越は、砂箱の外にも存在したり、砂箱の外にまで続いているイメージを箱庭制作者が気づき、そのイメージを巡る内的プロセスを尊重することを可能にする。◆具体例 119 で、B 氏は、自己像が砂箱内の風景を鳥瞰しているという今の自分のあり様を理解することができた。◆具体例 120 と 121 で、B 氏は、森の構成やその構成への語りを通して、第 2 回や第 5 回箱庭制作面接で意識化・顕在化していない内的プロセスが自分の内界にあることについて、理解を深めることができた。[枠外のイメージ]への気づきと尊重は箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与すると考えることができる。

## (2) 図と地、「おさめる」ことの観点からみた枠外のイメージ

### ◆具体例 122 : A 氏第 1 回箱庭制作面接制作過程 14

A 氏は第 1 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 14 で、棚の前に行き、ミニチュアを探した。そして、棚に亀を見つけ、砂箱の右上隅に置いた。その箱庭制作過程について自発的説明過程で、A 氏は以下のような主観的体験を語った。形のない嫌なものを置こうと思い、A 氏は棚でミニチュアを探した。すると、亀と目があい、これはいいと思った A 氏は亀を選び、砂箱に置いた。そのような構成になったことで、嫌なものは、亀の先の砂箱の外にイメージとして存在することになった(p.129 ◆具体例 94 参照)。内省報告には以下のように記された。私にとって(イルカにとって?)亀がとても頼もしく感じる。嫌なものを私からさえぎってくれる、導いてくれる感じ(A 氏内省, 1-14, 自発・感覚)。亀は、私と嫌なものの間に入って来て、私を守ってくれている、嫌なものに取り巻かれないようにしてくれるものなのだと思う(A 氏内省, 1-14, 自発・意味)。この具体例でも、枠外にイメージが存在していた。そして、そのイメージは単に存在するのではなく、枠内に置かれたミニチュアや箱庭制作者自身にも影響を及ぼしていた。イルカは嫌なものから影響を受け、取り巻かれる危険があった。しかし、亀の守りのおかげで、そのようなことにならず、亀に頼もしさを感じたことが示された。



A氏第1回箱庭制作面接の構成についての箱庭制作者の主観的体験は、箱庭制作面接における内界（イメージ）と外界（現物）との関係性を示している。現物の枠によって切り取られた外には、現物のミニチュアは置かれていない。しかし、内的イメージでは、現物の枠を越えたところに、イメージが確実に存在し、それが内的プロセスに影響を与えている。現物の枠の内にあるミニチュア（亀）は重要な役割（守り手、導き手としての内的意味）を担い枠内に存在し、内的プロセスに影響を与えている。そして、このミニチュア（亀）は、もう一つの存在（嫌なもの）を枠外に追いやった原因となっている。

◆**具体例 122**に表れている砂箱の枠の内と外との関連をどのように考えることができるだろうか。箱庭制作面接では、ある回に、全体の構図の一部分だけが制作される場合がある（東山, 1994, p.19, p.89）。そのような場合、作られなかった他の部分は存在しないのではなく、その回で取り扱われている領域のみが砂箱内に表現されている、または、ある部分に焦点が合わされているが、他の部分は意識の背景に沈んでいると考えることができる。この具体例も同様に、枠内＝意識の図、枠外＝意識の背景(地)と捉えることは可能だろうか。嫌なものは、内省報告にあるように、意識されている。だから、完全に意識の背景となっており、容易に図地反転しないということではない。しかし、嫌なものがあるのかもしれない。わたしにとっては、まだちょっと置かないよ、っていう（A氏自発, 1-14）と語られているように、嫌なものはやはり、現在のところ枠内には置かない、置けないものなのである。内省報告のデータも、強調点、焦点は亀にあり、亀の役割、意味の説明のために、嫌なものが語られていると見ることもできなくはない。このような点から、嫌なものは、確かに意識内に存在するが、今回は中心的な存在として焦点を合わせられておらず、亀とイルカとの関係性の中で意識されている、図地反転可能な背景という特性をもっている、と見ることはできないか。

このイメージの図と地という事象を「おさめる」こと、「おさまりをつける」ことの観点から検討する。「箱庭の特徴のひとつは、イメージを箱庭のなかに作品としておさめねばならないことである」（河合隼雄, 1991, p.130）。[枠外のイメージ]は、イメージは砂箱の枠内におさまっていないのであるが、現物の箱庭作品の構成としては、枠内におさまっている事象と捉えることができる。このようなパラドックスを[枠外のイメージ]はもっている。A氏第1回箱庭制作面接の亀とイルカと枠外にある嫌なものについての◆**具体例 122**は、箱庭制作面接における「おさめる」という特性とも関連していると見ることができる。石原(2008)は、主観的体験と砂箱の枠に関して考察する中で、砂箱が物理的な制限でありながら同時にまるで制限がないかのように自由に広がっていくようにも体験されるという点、そのように体験することを可能とする制作者の心の働きが、砂箱を「自由であると同時に保護された空間」にしているとする(p.227)。石原の研究・考察を参照し、このデータを見た時、上記の主観的体験は箱庭制作面接の治療機序の一つとして挙げられる「おさめる」と関連しているように思われる。亀がイルカの導き手、守り手として枠内に存在すると同時に、嫌なものは内的イメージとして枠外にあってこそ、制作者はぴったり感をもつことができている。そのように構成することができたからこそ、砂箱は「自由であると同時に保護された空間」となり、砂箱内の構成は、砂箱内におさまるものとなったと考えることができる。箱庭制作における構成、ぴったり感、意識の図と背景との関連で考えると、箱庭療法において「おさめる」ためには、箱庭制作者が意識の図に当たるテーマを砂箱の中に表現すると同時に、図から外れたものに対して、実際の表現を与えず、かつ、内的イメージとして保持するこ

とが必要とされる,と言えるのではないか。そのようにできることで,構成全体にびったり感が生まれ,「おさめる」ことが可能となる。

砂箱の枠が表現の背景となり,現物のミニチュアを枠外に置かなくてもイメージ化できる能力によって,[**枠外のイメージ**]は生じる。枠外に生き生きとイメージ化ができるからこそ,箱庭制作者は枠外にミニチュアを置かなくても,びったり感を得ることができる,と考えられる。そのため,現物の箱庭が,自分のイメージの一部のみの表現であっても,イメージで補うことができるため,箱庭制作者は現物の箱庭に納得でき,箱庭作品や箱庭制作者の心におさまりがつくのだと考えられる。

無意識や意識の背景という概念があるように,心には図となっておらず,意識されていない内的プロセスが存在していると考えられている。箱庭制作者が箱庭作品を構成する時に,ある内的プロセスに焦点を合わせ,意識の図に当たるテーマを砂箱の中に表現できるからこそ,箱庭作品はまとまりをもった作品に収斂し,「おさまる」ことができる。[**枠外のイメージ**]は,意識の図に当たるテーマを砂箱の中に表現すると同時に,今回の箱庭制作では図から外れているが,別の回では図地変転し図となる可能性もった内的プロセスに対して,実際の表現を与えず,かつ,内的イメージとして保持することによって,箱庭作品をよりびったりなものにすることに寄与していると考えられる。◆**具体例 122**では,**嫌なもの**が[**枠外のイメージ**]となったおかげで,現物の枠の内にある亀はイルカにとって,守り手,導き手という重要な役割があることに焦点化でき,A氏は自己像であるイルカと亀との関係性についての理解を深めることができたと思える。

### (3) 図と地,より広範な内的世界の意識化の観点からみた枠外のイメージ

#### ◆**具体例 123**: A氏第10回箱庭制作面接全体的感想

A氏は第10回箱庭制作面接の調査的説明過程で,今回の箱庭作品と前回の箱庭作品との関連について,以下のように語った。**出来上がった世界はこないだよりもう少し,奥まったところ**というか(中略)私の中の奥まったところを作ったなっていう感じがありますね。**くあ,ほんと。(間) そうやね>** (A氏調査,10-全体的感想) **もしその,学校や,映画館があるんだとしたら,この箱庭はすごく大きくって‘箱庭よりもひと回り大きな辺りを両手で区切りながら’その箱庭のうーんと遠くの方にくもつとね>ありそうな,はい。感じなんですね**(A氏調査,10-前回の作品との関連)。前回作品の学校や映画館があるとしたら,砂箱はとても大きく,今回の作品からとても遠くにあるというイメージになることが語られた。現物の砂箱の枠外の,現物の砂箱よりも大きな砂箱のイメージの枠内に,前回作品があるというイメージが,この具体例で示された。この具体例では,心の奥まったところが箱庭制作過程では図になっていた。しかし,調査的説明過程において実際の砂箱よりももっと広い砂箱をイメージすることによって図地反転し,現実的な世界の表現であった前回作品が,図となった,と捉えることができよう。**私の中の奥まったところ**という表現は,自発的説明過程では出てこず,調査的説明過程で初めて言及された。図地反転し,現実的な世界の表現であった前回作品が,図となったことで,今回の箱庭作品が,心の奥まったところであることに気づくことができた,と理解できる。また,図地反転によって,A氏は現実的な世界と心の奥まったところという異なる性質をもつ二つの内的世界のつながりに気づくとともに,箱庭制作過程での気づきに比べ,より広範な心の領域を俯瞰し,意識化することができた,

と解釈できる。◆具体例 123 では、図地反転によって、[枠外のイメージ] が意識化され、A 氏はより広範な心の領域を意識化でき、自己の内的世界の理解を深めることができたと考えられる。

### VIII-3-3. 上記カテゴリー外の概念の結果および考察

「内界」が中心となるカテゴリー・概念群には、今まで考察してきたカテゴリーに包含されず、それらから独立した概念があった。その独立した概念として[身体感覚・ボディーイメージ]があった。

#### 1) [身体感覚・ボディーイメージ]の結果および考察

[身体感覚・ボディーイメージ]は、「箱庭制作中に喚起・付与された身体感覚やボディーイメージ、箱庭制作面接中の身体表現に関する内的プロセス」と定義された。本概念の身体感覚やボディーイメージには、装置や構成により喚起・付与された主観的体験の語りや記述が含まれていた。本概念の具体例の内、砂に触れる行為や砂の造形以外の具体例を以下に挙げる。砂に触れる行為や砂の造形を巡る身体感覚の具体例は、[砂や砂箱の底の色を巡る内的プロセスやその構成への影響]の具体例と重複するため、ここでは割愛する。(1)触感、温感など皮膚感覚のイメージ、(2)複数の異なる身体感覚、ボディーイメージの相補性、(3)身体感覚と構成の相互作用、(4)利き手と身体表現の結果および考察を記す。

#### (1) 触感、温感など皮膚感覚のイメージの結果および考察

以下に具体例を挙げる。

#### ◆具体例 124 : A 氏第 8 回箱庭制作面接制作過程 7

A 氏は第 8 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 7 で、砂を少し掘って、義母を表す白い人形を置き、人形の周囲に砂を少し盛るという構成を行った。その箱庭制作過程について調査的説明過程で、以下のように語った。少し下に置く事で、この人形を守るような、大事に（間 4 秒）保護するような、そういう感覚があったんだろうな（間 8 秒）この、この、この砂のレベル、と同じに置くとしたらば、例えば、あの、あの、綿か、なんかの、ふわふわとした巣のような、<ふんふんふん>そんなような物の中に置きたいというイメージがありました（A 氏調査、8-7）。実際の構成では、綿の巣は置かれていない。しかし、綿のふわふわとした巣というイメージは、義母である人形を守り、大事に保護するという A 氏の感覚を表している。本具体例は、A 氏の義母を守り、保護したいという思いが、ふわふわとしたという触感のイメージに基づいて構成される可能性があったことを示す語りである。

#### ◆具体例 125 : A 氏第 5 回箱庭制作面接制作過程 17

A 氏は第 5 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 17 で、島の左手前に焚き火とキノコを置いた。その箱庭制作過程について自発的説明過程で少しなにかあったかい場所と食べる物と置いてあげて、あの、こういう幸せそうな鳥も置いてあげて、こう（間 7 秒）ご褒美があるって言うか、希望があるって言うかくなるほど>そういう感じを作りたくなっただんですね（A 氏自発、5-複数過程に亘って）と語った。内省報告に焚き火には赤い火が起きていて、暖かい。疲れたらここに来て休めばいいのだと思う（A 氏内省、5-17、制作・感覚）と記した。内省報告の記述は、A 氏が自己像である亀として火の暖かさを感じたかのような記述にな

っている。

上記 2 具体例では、触感、温感のイメージが示された。◆具体例 124 では、ふわふわとしたという触感のイメージは、義母を守り、保護するというイメージに関連するものであった。◆具体例 125 では、焚き火の暖かさは、自己像である亀のご褒美や希望を示すものであった。内省報告の記述では、A 氏が自己像である亀として火の暖かさを感じたかのような記述であり、その暖かさのおかげで、亀は疲れた時に休むことができるありがたさが生き生きと伝わってくるような記述となっている。このような重要な内的プロセス表現することに暖かさという温感のイメージが関係している。このように触感や温感のイメージは箱庭制作者の内的なプロセスを表現する際の重要な要因になる場合があることが確認された。

このような触感、温感など皮膚感覚のイメージに関する内的プロセスをどのように理解すれば、よいのだろうか？箱庭制作過程でミニチュアや砂に触れ、作品が構成される時、箱庭制作者は装置の触感や温感を感じる。しかし、本項の具体例は、構成する際に生じた現実の皮膚感覚とは、異なる内的プロセスと考えるべきであろう。◆具体例 124 の、ふわふわとしたという言葉は、実際に綿に触れて生じたものではない。◆具体例 125 の、焚き火の暖かさも、実際に砂箱内で焚き火を起こして生じた温感ではない。A 氏が、綿や焚き火をイメージした時に、そのイメージに伴って生じた触感や温感のイメージである。これらの触感や温感のイメージは、実際の皮膚感覚ではないからといって、箱庭制作面接において価値のない内的プロセスではない。ふわふわとしたという触感のイメージは、義母を守り、保護したいという A 氏の気持ちをぴったりに形で表現できる可能性があった。◆具体例 125 の焚き火には赤い火がおこっていて、暖かい。疲れたらここに来て休めばいいのだと思うという記述から、自己像であるペンギンが焚き火のそばで暖かさを感じつつ、疲れた身体を休めている光景が、A 氏に生き生きとイメージされていたことが感じ取れる。これらの具体例に示されているように、箱庭制作面接においてミニチュアや構成から喚起される皮膚感覚のイメージは、箱庭制作面接が生き生きとしたイメージ表現となるための重要な要素の一つであると考えることができる。このように、触感、温感など皮膚感覚のイメージは、箱庭制作面接が箱庭制作者にとって、生き生きとしたイメージ表現になることや、箱庭の世界に箱庭制作者が入り、その世界を体感するかのようなイメージ体験となることに寄与すると解釈できよう。

## (2) 複数の異なる身体感覚、ボディーイメージの相補性の結果および考察

複数の異なる身体感覚、ボディーイメージの相補性について考察する。

### ◆具体例 126：A 氏第 4 回箱庭制作面接制作過程 4～6, 16

A 氏は第 4 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 6 で、砂箱中央に、鳥の巣を置いた。その箱庭制作過程について自発的説明過程で、箱庭制作過程 4 や 5 で、鳥の巣は目に入っていたが、鳥の巣は子どもをかえすものであるため、子どもをもたない A 氏は素直に手を伸ばすことができなかった、と語った(pp.29-30 ◆具体例 4 参照)。その後、箱庭制作過程 16 で、A 氏は砂箱右側の渦の幅を 3 度広げた。その行為について、調査的説明過程で以下のように語った。私、そうそう、この辺、亀を最初ここにおいて途中、ま、ここと、ここに置き直してましたけど、この幅を広げてましたよね。<広げたね>なんかね あ、ふふ‘笑’産道を広げてるみたいって思いくはあ>ましたね、広げてる最中ね (A 氏調査, 4-16)。A 氏は渦の

幅を広げている時、産道を広げているようなイメージをもった、と捉えられる。この具体例は、A氏が箱庭制作過程で実際の陣痛を体験しているわけではないため、産道を広げてるみたいという主観的体験の語りは、構成行為から喚起されたボディーイメージであると考えられる。

A氏第4回箱庭制作面接は女性性・母性が中心的なテーマとなった。鳥の巣は子どもをかえすものであるため、子どもをもたないA氏は素直に手を伸ばすことができなかった。女性性・母性を感じさせるミニチュアに手が伸ばせないという身体感覚を伴った行為の心理的意味にA氏は気がつくと同時に、辛さや切なさを感じた。しかし、一方で、◆具体例126にあるようにA氏は、亀を鳥の巣がある場所に新しい自己として産みおとすために、産道を広げ、亀を進める行為を何度も行っている。女性性・母性を感じさせるミニチュアに手が伸ばせない辛さや切なさを感じたA氏が、同じ箱庭制作面接で、産道を広げるというボディーイメージを体験できたことは、A氏が自身の女性性・母性をどう捉えるのか、また、A氏の女性性・母性がどう育まれていくのかという点において、とても重要な事象だったと解釈できる。

#### ◆具体例127：B氏第5回箱庭制作面接複数過程に亘って

B氏は第5回箱庭制作面接で、砂箱奥に小人、なげき悲しむ人、かたつむりなどを、砂箱中央に星の王子様とルーペを置いた(p.211参照)。これらの構成について、自発的説明過程で以下のように語られた。砂箱奥の小人、なげき悲しむ人、かたつむりなどの構成は、ちょっと怒っている自分とか、悲しいなという自分や、ぽかしちゃったところだとか、ちょっとなんかのんびりしたい(B氏自発,5-複数過程に亘って)というB氏の気持ちを表していた。ルーペで覗きこむ星の王子様は、B氏の気持ちを観察するという自分(B氏自発,5-複数過程に亘って)という内的プロセスの表現であった。

B氏は自発的説明過程で、箱庭制作過程5から8に亘る森の構成について語った後、こういう気持ちの背後に何があるんだろうか(B氏自発,5-9)と語った。森の構成が終わった後に、砂箱中央奥に構成されたB氏の気持ちの背後にあるものに思いを向けた、と理解できる。

その後、星の王子様の背後に、建物、橋、大砲などを置いていき、箱庭制作過程17と18で、棚からタキシードを着た人形とベッドを選び、砂箱中央下でベッドにタキシードを着た人形を寝かせた。それらの箱庭制作過程について、自省報告に体調不良(B氏自省,5-17,制作・感覚)、鈍痛(B氏自省,5-17,制作・連想)、内臓疾患(B氏自省,5-17,制作・意味)と記した。そして第5回ふりかえり面接で、[連想っていうか、その時感じていたのですけども、鈍痛があったっていうことで]と語った。この箱庭制作時B氏は内臓疾患を抱えており、体調不良であった。箱庭制作中にも鈍痛を感じていた。このような実際の身体感覚や身体状況は、砂箱中央奥に構成されたB氏の気持ちの背後にある現実問題(B氏調査,5-複数過程に亘って)、自分の背後にある念慮していること(B氏自省,5-複数過程に亘って,制作・意図)の一部であった。この体調不良の一因は、B氏が被っている攻撃性などの仕事上の困難や緊張感に由来していた。

砂箱中央奥に構成されたB氏の気持ち、それをルーペで覗きこむ星の王子様、砂箱中央奥に構成されたB氏の気持ちの背後にある現実問題の関連について、B氏は調査的説明過程の終盤に以下のように初めて明確に語った。わりあい冷静でいるというか。ひどく落ち込

むとか、怒り狂って、投げ出してやるっていう風ではなくて。(中略)いろいろあるけど、うん、しょうがないなという部分と、まあ、ちゃんと時間かけられれば、まあ、できないことないわってというような、そういうような感覚とか、ということであって、わりあい冷静でいるってうか(B氏調査,5-複数過程に亘って)。B氏は箱庭作品を構成し、それについて語る中で、体調不良や困難な状況に対して冷静に向き合っている自分により明確に気づくことができた、と解釈できる。

上記の両氏の箱庭制作面接では、それぞれに複数の異なる身体感覚やボディーイメージが箱庭制作者の内的プロセスの重要な表現として現れている。

A氏第4回箱庭制作面接では、女性性・母性を感じさせるミニチュアに手が伸ばせないという身体感覚と、産道を広げるというボディーイメージが喚起されている。そして、その両者は、A氏が自身の女性性・母性をどう捉えるのか、また、A氏の女性性・母性がどう育まれていくのかという点において、相補的な役割を果たす重要な内的プロセスであると考えられる。

B氏第5回箱庭制作面接では、内臓疾患による鈍痛という内臓感覚と、ルーペを覗きこむという視覚イメージが表現されている。制作の順番は、砂箱中央奥に構成されたB氏の気持ち→それをルーペで覗きこむ星の王子様→B氏の気持ちの背後にある現実問題である。このようになった理由は、箱庭制作過程9で砂箱中央奥に構成されたB氏の気持ちの背後にあるものに思いを向けるという内的プロセスが生まれたためである、と推測できる。ルーペを覗きこむという視覚イメージの表現が先に構成されているものの、観察するという自分というB氏のあり様は、体調不良などの現在の状況に対して、ひどく落ち込むとか、投げ出すとかという姿勢に陥らずにすんだ要因であると考えられる。砂箱中央奥に構成されたB氏の気持ち、それをルーペで覗きこむ星の王子様、砂箱中央奥に構成されたB氏の気持ちの背後にある現実問題の関連・全体像を、B氏は調査的説明過程で語る中で、より明確に気づいた、と理解できた。すると、最初から意図的に構成されたわけではないが、ルーペを覗きこむという視覚イメージによって、B氏は、鈍痛という内臓感覚が関係する現実問題に対して、わりあい冷静でいるというように一定の距離をとっている自分を結果的に表現できたと考えられる。ルーペを覗きこむという視覚イメージと鈍痛という内臓感覚とは、第5回箱庭制作面接におけるB氏の心身を巡る内的プロセスを異なる角度・種類から表現し、その両方があるからこそ現在の心身を巡る内的プロセスの全体像が表現されるといった相補的な役割を果たす構成となっている、と解釈できる。

このように箱庭制作面接における複数の異なる、相補的なボディーイメージが構成され、その構成を語ったり、内省することを通して、箱庭制作者は自己理解を深めることができると考えられる。

### (3) 身体感覚・ボディーイメージと構成の相互作用

身体感覚あるいはボディーイメージと構成の相互作用について、考察する。

#### ◆具体例128：A氏第9回箱庭制作面接全体的感想

A氏は第9回箱庭制作面接で面接開始と同時に玩具棚に向かった。その箱庭制作過程について、内省報告に、この日は寒い日だったが、研究室内は暖かく、入室した途端ちじこまっていた体がふっと解放されるような楽な気分になったこと、そのせいか砂に向き合いたく

なかったこと、深く沈んでいくよりも、もう少し軽やかに進めていきかけたことを記している(p.112 ◆具体例 76 参照)。これは、身体感覚や気持ちなど、自分のいま・ここの内的プロセスを尊重する A 氏の態度だと捉えられる。

同回でその後、A 氏は自己像である星の王子様が街に出てきているという構成を行った。その箱庭制作過程で生じた身体感覚やボディーイメージについて、調査的説明過程で「ドアを開けたらそのまま、自分の欲求のままに現実世界で自由に行動を始めそう。足が軽くなっているというか、からだの前に出ているというか、頭であれこれ考えないで、まず体が行動している、そんな感じ」(A 氏内省, 9-全体的感想, 調査・意味)と語った。この具体例の足が軽く、身体が前に出ていると語られた部分が、実際の身体的な固有覚なのか、そのイメージなのか判断が難しい。しかし、この軽さや外に向かおうとしているかのような身体感覚・イメージを A 氏が箱庭制作過程で感じていたことは確かである。この身体感覚やボディーイメージは、今までの箱庭制作面接では A 氏から報告されたことのない身体感覚やボディーイメージであった。

今回の箱庭は、「明け渡して作ったと言った時があったですよ(第 8 回作品)、あの、あの、雰囲気をちょっと思い出して、あの、あんまり考えずに作ろう」(A 氏調査, 9-5)とした作品であったことが調査的説明過程で語られた。

箱庭制作面接冒頭での身体感覚を含めた自分の内的プロセスの尊重と、明け渡して作るという感覚を伴った構成が、外に向かい、現実世界で自由に動こうとする身体感覚やボディーイメージを生んだと解釈することができる。A 氏が第 9 回箱庭制作面接で初めて、外に向かい、現実世界で自由に動こうとする身体感覚やボディーイメージを体験できたことは、箱庭制作面接が継続する中で生まれた A 氏の自己成長の表れであると考えることができる。

#### ◆具体例 129 : B 氏第 2 回箱庭制作複数過程に亘って

B 氏は、第 2 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 2 で「心苦しい思いを表現する仕切りを見つけ」た。「」内は、B 氏が内省報告の箱庭制作過程の内容として記した言葉である。制作過程 3 で、仕切りを砂箱中央に置いた。それらの箱庭制作過程について、内省報告に B 氏は「何か重いものを感じて蓋がされた感じ」(B 氏内省, 2-1, 制作・感覚)と記した。第 2 回ふりかえり面接で、この箱庭制作過程について、以下のように説明した。「蓋っていうと、上からかぶせるってイメージがあるんですけど。この重圧を受けて重たいというよりも、その先へなんか進めないような、空気の壁っていうか。その、まあ、今の季節で言えば、見えないんだけど、湿度みたいなもので、なんか、重さを感じるみたいな」。B 氏は、重いものを感じて蓋がされた感じがしており、その感覚から連想されるものは壁であった。そして、その感覚に合った仕切りを見つけ、それを砂箱中央に置いた。この感覚は、重圧を受けて重たいというのではなく、湿度の高い空気の壁による重たさというような感覚であった、と捉えることができる。この具体例では、心苦しいという心理的な主観的体験と同時に、空気の壁の重さというような身体感覚、あるいはそのイメージの主観的体験の記述や語りが示された。

同回の箱庭制作過程 19 で、B 氏は仕切りの左側に、亀を右向きに置いた。続いて、イグアナを左中央に置くが、上に置き直した。首をかしげ、再度、左中央に、亀の方を向いた方向にして置きなおした。亀を少しだけ、イグアナに近づけた。その箱庭制作過程について、B 氏は調査的説明過程で、以下のように語った。「進むのを引っ張られているっていうか。進んで

いくのをくこちらか>こういう風に進んでいこうとするのを、その、まあ、足かせになって  
いるっていうのでしょうか。そういうような感じもするんです。片っ方では、圧迫を受けてる  
っていう。(中略)現実面を含めて、その引っ張られるというのでしょうかね。足を。まあ、こ  
れはまあ、内面的には、プレッシャーをかけられているみたいな風にも言えるし、現実面  
においては、進む距離を、その、足かせになって、思うように、この亀っていうか、うさぎのよう  
にはぴょんぴょん行かせてくれないような、そんなような (B氏調査, 2-19)。B氏は内省報  
告に追われるばかりだけではなく、何かにひっぱられている感じ (B氏内省, 2-19, 自発・感  
覚) と記した。亀はイグアナなどに追われている感覚があった。同時に、足をひっぱられて  
いるという感覚あるいはボディーイメージもあったことが示された。

◆具体例 129 に示されているように、B氏第 2 回箱庭制作面接では、まず、日常生活の中  
での攻撃的な人々に苦しんでいる自分の心情や身体感覚、あるいはそのイメージが表現され  
た。しかし、箱庭制作過程の途中で、転機が訪れた。箱庭制作過程 22 と制作過程 23 のかご  
の中に置いたルーペについて、B氏は自発的説明過程で全く空の籠かというところじゃな  
くて、思い出とか、いろいろ、残っているものもある (B氏自発, 2-22) と語り、内省報告に生  
きる関心が絶えていないのに気づく (B氏内省, 2-22, 制作・意図)、まだ足を残している (B  
氏内省, 2-23, 制作・感覚)、土俵際 (B氏内省, 2-23, 制作・感覚) と記した。箱庭制作過程  
22 と制作過程 23 における内的プロセスの転換には、土俵際でまだ足を残しているという身  
体感覚あるいはそのイメージが関係していた。

B氏第 2 回箱庭制作面接で、B氏は様々な身体感覚、ボディーイメージを体験している。  
面接の冒頭には、空気の壁の重さというような身体感覚、あるいはそのイメージが喚起され  
ている。続いて、ひっぱられるという身体感覚あるいはボディーイメージを体験している。  
そして、土俵際でまだ足を残しているという身体感覚あるいはボディーイメージが面接の  
展開に関係している。このように身体感覚あるいはボディーイメージが構成の変化や内的  
プロセスの展開に深く関わっている。これらの[身体感覚・ボディーイメージ]の構成やそ  
の語りや内省を通して、B氏は自己理解を深めることができたと考えられる。

上記の A氏第 9 回箱庭制作面接、B氏第 2 回箱庭制作面接では、共に身体感覚あるいはボ  
ディーイメージが構成の変化や内的プロセスの展開に深く関わっている。石原(2008)は、  
自らの調査結果に基づいて、「箱庭は、触覚だけでなく、あらゆる感覚と身体との間に本来的  
にある結びつきを、制作者が主観的に『体験』できるレベルで取り戻すことを可能にするの  
であろう」としている。そして、「箱庭における身体性は、触覚的な要素を持つことによるの  
ではなく、感覚やイメージを大切にすることの中にすでに内包されていると考えることが  
できるだろう」と述べている(pp.232-237)。◆具体例 128 と 129 は、感覚やイメージを箱庭  
制作者が尊重する態度に支えられ、身体感覚やボディーイメージと構成が密接に相互に作  
用しあうことを通して、あらゆる感覚と身体との間にある結びつきを、箱庭制作者が主観的  
に体験した事象と捉えることができるかもしれない。本項の具体例と石原(2008)の指摘を  
総合して考えると、箱庭制作面接における身体感覚やボディーイメージと構成の相互作用  
は、箱庭制作者の自己理解を深めたり、自己成長の表れとなると考えることができよう。

#### (4) 利き手と身体表現の結果および考察

構成における利き手の要因と、その構成を説明する過程における身体表現についての具  
体例を以下に挙げる。



#### ◆具体例 130 : B 氏第 1 回箱庭制作面接全体的感想

B 氏は第 1 回箱庭制作面接で、箱庭制作における構成が砂箱左側から始まり、その後右側に移っていき、構成の流れが反時計回りになったことについて、自分が左ききだからだろうと考えていた(p.104 ◆具体例 68 参照)。そして、その箱庭制作過程について自発的説明過程で「自分でも途中で感じはじめたのは、たぶん私自身が左ききというところもあって、こういう‘左周りの円を空中に描きつつ’流れになってってしまう」(B 氏自発, 1-複数の過程に亘って)と語りつつ、左周りの円を空中に描くように手を動かした。調査的説明過程の最後の頃に「こういう世界が自分の営みの中に回っている‘左周りに空中に円を描きながら’」(中略)もしくは、移り変わっていく」(B 氏調査, 1-全体的感想)と説明する際、左周りの円を空中に描くように手を動かした。構成が砂箱左側から右側へという流れになったという動きの感覚を B 氏は利き手と関連させて意味づけた。そして、その感覚を表現するために、空中に円を描くという身体表現を行った。この行為を行いつつ、こういう世界が自分の営みの中に、回っている、もしくは移り変わっていくという作品理解を初めて語った。

◆具体例 130 において、構成の流れに利き手の影響があるのか、それが客観的事実であるかを本研究のデータに基づいて証明することはできない。しかし、少なくとも B 氏の主観的な体験としてそのように意味づけられたことは事実である。また、左周りに空中で円を描くという身体表現は、世界が自分の営みの中に回っているという感覚を、B 氏が感覚上・イメージ上でまさにこのように体験したことを示す行為である、と考えられる。現物のモノとしての構成は固定されていて、動かないが、感覚やイメージの中では、腕によって表現されたような巡りを箱庭制作者が体験していたのだと捉えられる。石原(2008)には、「モノをアニメイトする」というイメージ体験が報告されている。アニメイトとは、「単なるモノであるミニチュアを生命や意思をもつかのよう扱い、ミニチュアが動いたり、感じたり、考えたりするかのように体験することを指す」としている。B 氏の世界が自分の営みの中に回っているという感覚は、現物のものでもある箱庭作品がアニメイトされることによって、生じたと理解できる。

また、石原(2008)は、ミニチュアを置く位置に関する主観的体験に関して、箱庭制作者の身体との位置関係が関連する場合について報告・検討している。ミニチュアを置く位置とミニチュアをもっていた手とを関連させて報告した例が挙げられている(pp.158-159, pp.183-184)。そして、「ミニチュアの位置が、ミニチュア同士の位置関係だけでなく、制作者の身体との相対的な位置関係で決められることを浮き彫りにしたと言えないだろうか。右も左も、奥も手前も、砂箱の中での絶対的な位置ではなく、すべて制作者の身体との関係で相対的に決まるものなのである」としている(p.209)。そして、「感覚やイメージという心理現象が、単に身体と『関連している』というだけでなく、むしろそもそも身体的現象であると言ってもよいほどに身体と一体となった現象であるという事実」との指摘を行っている。

石原(2008)を参照すると、◆具体例 130 は、箱庭作品がアニメイトされ、その感覚やイメージが身体と一体となったような心理的体験の非意図的で自然な現れとして、B 氏は空中に円を描くという身体表現を行った、と解釈できる。また、円を描くという行為を行いつつ、なされた語りの内容は、B 氏の作品理解・自己理解の深化を表している、と捉えられる。箱庭作品がアニメイトされるほどのイメージへの没入によって、感覚やイメージが身体と一体

となったような[身体感覚・ボディーイメージ]を反映した構成やその構成について語ることは、箱庭制作者の自己理解を促進すると考えることができる。

## Ⅷ章. M-GTA のコアカテゴリー⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】および⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】の結果および考察

⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】と⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】は、共に箱庭制作面接の継続性・連続性についての促進機能に関するコアカテゴリーである。⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】と⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】は、密接に関係しているため、一括して作品の連続性、作品・心・生き方の変化についての結果および考察を記す。これらのコアカテゴリーに関連する促進要因は交流し、双方向で影響を与えあい、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与する。

⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】には、作品についての連続性や変化に関する 3 概念[以前の作品との関連],[作品の変化],[連続性とイメージ特性との関連]があった。

⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】には、心や生き方の変化・成長に関する 3 概念[自分の心や生き方への気づき],[心や生き方の変化や成長],[面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]があった。

以下に、⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】と⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】で見いだされた促進機能について、結果および考察を記す。

### 1) ⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】の[以前の作品との関連],[作品の変化]の結果および考察

本項では、⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】の[以前の作品との関連]と[作品の変化]の結果と考察を記す。[以前の作品との関連]は、「今回の構成、作品と以前の回の構成、作品との関連」と定義された。[作品の変化]は、「作品の内容の変化」と定義された。

まず、[以前の作品との関連]の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 131 : B 氏第 2 回箱庭制作面接制作過程 24~25, 30~31

B 氏は第 2 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 24 で、亀を右手で空中にもったまま、左手で、中央下の砂を払いのけ、左右に走る水の道を作った。制作過程 25 で、水の道の左端に亀を置きなおした。また、制作過程 30 と制作過程 31 で、天使を選び、テーブルとイスの手前に 2 体の天使を置いた。調査的説明過程で、筆者は、水の構成を行うことで、感覚的な変化があったか、質問した。その質問に対して、B 氏は以下のように語った。実、言うところ、ここに天使(不明)置いてっていうところも、繋がるような気がするんですけども。(B 氏調査, 2-31) その、そうであっても、まあ、まあ、生かされてるっていうんでしょうかね。その水というところの、あの、前回は出てきたことなんですけど、そういった中で自分自身も、その、その、道のりというところでは、砂漠を歩いているわけじゃなくて、そういう中で、うん、その、たどってるといって、たどりきったっていう、そういったことじゃなんだけど、(不明)、そういう実感

も確かにある。あるなーと。そんな感じをしたんですよね。(B氏調査, 2-25) <なるほどね。水や天使のあたりから。> (B氏調査, 2-複数過程に亘って)。

箱庭制作過程 24 の水の道の構成について B 氏は内省報告に乾きと寄るべき者 (B 氏内省, 2-24, 制作・意図), 神, 仲間 (B 氏内省, 2-24, 制作・連想) と記した。そして, 第 2 回ふりかえり面接で, その制作過程について以下のように説明した。[寄るべきものとか, (中略) どうにか, 支えられてきたんだよなーと。そういったことを思い起こしました。で, まあ, それを例えば, その, 神様っていう言い方もできるし, 信仰という言い方もできるし]。

◆具体例 131 で B 氏は生かされてるっていうんでしょうかね。その水というところの, あ, 前回も出てきたことなんですけどと語っている。この語りは, B 氏第 1 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 1 で, 砂箱中央の砂を掘り, 底の青の色を出して, 泉(水源)を作ったことを指している。この泉について, B 氏は内省報告に生命の源 (B 氏内省, 1-2, 制作・意図), 深部からこんこんと湧きでる, つきない泉 (B 氏内省, 1-2, 制作・感覚), 神, 生命 (B 氏内省, 1-2, 制作・連想) と記した。また, B 氏第 1 回箱庭制作面接の制作過程 65 で B 氏はあやめを水源の上に, 花束を水源の左に置いた。その制作過程について, 世界は神様の守りにあることを再認識する (B 氏内省, 1-65, 制作・感覚) と記した。

B 氏第 1 回箱庭制作面接の泉と B 氏第 2 回箱庭制作面接の水の道は, B 氏にとってともに神を表すという点で関連していた。そして, B 氏第 2 回箱庭制作面接の生かされてるっていうという語りや寄るべき者という記述やどうにか, 支えられてきたんだよなーという語りと, B 氏第 1 回箱庭制作面接の世界は神様の守りにあるという記述はともに, 自分は神に守られ, 支えられて, 生かされているという B 氏の思いを表した言葉と理解できる。

#### ◆具体例 132 : A 氏第 6 回箱庭制作面接制作過程 13

A 氏は, 第 6 回箱庭制作面接の作品について, 調査的説明過程でこれまでは, <うん> そうですね, 私が, 何かするっていうよりも, こういう世界にいる, っていうような感じを, 作った気がしますね。(中略) 今日のはそういう意味では私がこうするっていう世界, ですね (A 氏調査, 6-13) と語った。以前の作品との比較を通して, A 氏は, 作品内の自己の存在様式とその変化に気づいたと捉えられる。

上記 2 具体例には, [以前の作品との関連] についての箱庭制作者の主観的体験の語りや記述が示された。B 氏第 2 回箱庭制作面接の◆具体例 131 では, B 氏第 1 回箱庭制作面接との関連の中で, B 氏は自分の神への思いを再認識・再確認できたと解釈することができよう。また, [以前の作品との関連] によって, 継続する箱庭制作面接において, 一連のテーマが生じる一要因となると考えることもできるだろう。A 氏第 6 回箱庭制作面接の◆具体例 132 には, 以前の作品との比較による, 作品内の自己の存在様式とその変化についての気づきが述べられた, と捉えられる。このように [以前の作品との関連] は, 箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与すると考えられる。

[作品の変化]の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 133 : A 氏第 3 回箱庭制作面接制作過程 13

A氏は第3回箱庭制作面接で、砂箱中央奥に沖に向かうように亀(自己像)を置いた。第1回箱庭制作面接では、自己像はイルカであった。それに対して、今回は自己像が亀に変化し、その方が等身大の感じがして、ぴったりすることが語られた(p.46 ◆具体例16参照)。

#### ◆具体例134：A氏第6回箱庭制作面接制作過程12

A氏は第6回箱庭制作面接で、山の中央手前にインパラを置いた。調査的説明過程でインパラについて、箱庭制作者と筆者との間で以下のような会話があった。相棒。あ、子分、<子分>子分って言ったかもしれない。うんでもやっぱり、えーっと、思いをそのまま聞いてくれる、相棒って言う感じがなく相棒、思いをそのままきいてくれる>うん、願いはみんなかなえてくれます。<うん。そういう、まあ、仲間とでも、仲間と言うわけでもないし、でも、単なる道具でもないし、>うん<うん、存在っていうのも、こういう形で出てくるのも珍しいよね、何か見てくれる仲間みたいな>あー、今までそうでしたよね。(中略)へえ。へ。<へえ、へ、意外?>ふふ‘笑’う、あの‘笑’あの、そう言えばそうなのですね。(中略)ほんとうですね、私のために何かしてくれる人、なんて初登場。<初登場だよ>は、は、は‘笑’いい気分ですね。<いい気分やね。>ほほほ‘笑’(A氏調査,6-12)。A氏は、筆者との会話を通して、それまでは明確には気づいていなかったが、自分のために何かしてくれる人が初めて登場したことに気づき、それを意外に思うと同時に、いい気分を感じた、と捉えられる。

◆具体例133と134には、[作品の変化]についての箱庭制作者の主観的体験の語りや記述が示された。

A氏第3回箱庭制作面接の◆具体例133は、自己像の変化についてのA氏の気づきであった。自己を表すミニチュアの変化は、自己イメージの変化が関与していると考えられる。A氏は、継続する箱庭制作面接の中で自己イメージが変化したことに気づいたと捉えることができる。

A氏第6回箱庭制作面接について検討する。◆具体例132で、これまでの箱庭制作面接では自分がこういう世界にいるという作品であったが、今回は私がこうする世界だ、とA氏は語った([以前の作品との関連])。自己像であるペンギンは海で漁をし、家畜を飼い、相棒であるインパラと島を探検した。このように自己像が世界により強く関与し、世界を管理している。また、知恵をもち、協働できる相棒といえる存在が初めて現れ、他者との関係性の変容も生まれ始めた、と理解できる([作品の変化])。このように作品内の自己の存在様式に変化が見られた。この変化をA氏は私がこうするっていう世界ですねという言葉で表現したのだと、推察できる。箱庭作品に表される自己の内的世界に対して、自己像の関与がより積極的になったことによる作品の変化にA氏は気づいたと理解できる。このように[作品の変化]は、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与すると考えられる。

#### 2)⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】の[連続性とイメージ特性との関連]の結果および考察

[連続性とイメージ特性との関連]は、「箱庭制作の連続性とイメージ特性(自律性,集約性,象徴性など)との関連」と定義された。

#### ◆具体例 135 : A 氏第 8 回箱庭制作面接制作過程 10

A 氏は第 8 回箱庭制作面接で、砂箱中央に白い女性の人形を置いた。その後、その周りに、今までの箱庭制作面接で使用した動物を置いた。A 氏は、女性のミニチュアを意識的には義母と捉えており、イメージの自律性や集約性が体験されていなかった。しかし、以前使ったなじみの動物を置くこと(連続性)により、自律性や集約性を体験できた(p.75 ◆具体例 40 参照)。そして、私にも母にも共通する何かがあるなっていう(中略)女性っていう命が持っている何か、意味のようなものを感じるというかね(A 氏調査, 8-10)と語った。この構成を通して、自分と母に共通する女性という命がもっている意味を感じることができた、と捉えられる。

#### ◆具体例 136 : A 氏第 10 回箱庭制作面接全体的感想

A 氏第 10 回箱庭制作面接の調査的説明過程で、筆者は、第 9 回箱庭制作面接にも川の構成があったことについて質問した。それに対して A 氏は第 10 回箱庭制作面接の作品について、調査的説明過程で、第 9 回箱庭制作面接の作品と比較して以下のように語った。前回にすごく、映画館があったりね、学校があったり、うん、すごい現実的なエピソードに満ちてたんですけど、(A 氏調査, 10-前回について) 今度のは、そういうのではない川ですよ、(A 氏調査, 10-4) 現実的、現実的‘首をかしげながら’(A 氏調査, 10-全体的感想) 川はおんなじ様な意味があるのかもしれないけど、(間 12 秒) もうすこし、その、<うん>(間 3 秒) 川はおんなじ川かもしれないけれども、(A 氏調査, 10-4) 出来上がった世界はこないだよりももう少し、奥まったところというか(中略)私の中の奥まったところのを作ったなっていう感じがありますね(A 氏調査, 10-全体的感想)。その言葉に続けて、もし前回の作品が砂箱の中にあるとしたら、砂箱はとても大きく、今回の作品からとても遠くにあるというイメージになることが語られた(p.156 ◆具体例 123 参照)。調査的説明過程で、A 氏が前回作品との比較を行ったことによって、自分の奥まったところを作ったという今回の作品の意味について、箱庭制作中よりもさらに明確になった、と捉えることができる。

◆具体例 135 と 136 から、箱庭制作面接が継続して実施されることによる連続性は、箱庭制作者のイメージ特性の体験に影響を与える可能性が示された。イメージは本来的に自律性・集約性・象徴性などの特性をもつと考えられている(河合,1991,p.27-34)。◆具体例 135 と 136 から、箱庭制作面接の連続性が、自律性・集約性・象徴性などのイメージ特性を生起させ、箱庭制作者のイメージ体験を促進する場合があることが見いだされた。箱庭制作面接の連続性は、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与すると考えることができる。

#### 3)⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】の[自分の心や生き方への気づき], [心や生き方の変化や成長]の結果および考察

本項では、⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】の[自分の心や生き方への気づき]と[心や生き方の変化や成長]の結果と考察を記す。

[自分の心や生き方への気づき]は、「箱庭制作時の『いま・ここ』の内的プロセスや構成

から、自分の心や生き方へ気づきが広がるプロセス」と定義された。[心や生き方の変化や成長]は、「箱庭制作者の心や生き方における変化や成長」と定義された。

まず、[自分の心や生き方への気づき]の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 137：A氏第1回箱庭制作面接制作過程 10

A氏は、第1回箱庭制作面接で、砂箱左上に置いてあった緑色の家を白とあわい青色の家に交換した。その制作過程について、内省報告に「白と青の家は落ち着いた、ややさびしい印象。私の内側、ベースはどちらかというひっそりと静かなものなのだと思う。自分自身にぎやかで活動的とは言えないと思う」（A氏内省、1-10、制作・意味）と記した。第1回箱庭制作面接時点では、A氏は自分のベースはひっそりと静かなもので、活動的ではないと感じていた。

[心や生き方の変化や成長]の具体例を以下に挙げる。

#### ◆具体例 138：A氏第3回箱庭制作面接制作過程 11

A氏は第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程 11で、金色の二枚貝の置き場所を何度も吟味した。そして、最終的に、金色の貝殻を海藻の後ろに隠すように置いた。A氏はその箱庭制作過程について、内省報告に以下のように記した。「最近の私は以前と比べて、いろいろな場面で、いろいろな自己開示をするようになってきている。「すごおく大事」なものは隠しておいたらいと思うが、拓いてもいい部分は拓いていっていいと感じている。隠すことが、なんだかもったいぶっているように感じ始めているのかもしれない。金色は、「自分はそんなにきらびやかで、素晴らしいわけではない」という気がして、抵抗があった。こう語る私自身は、これまではひょっとしたら随分尊大な自己イメージを持っていたのかもしれない。それが、尊大さは薄れ、ただの、ある意味でとても平凡な一人の人間としていられるようになったのかもしれない」（A氏内省、3-11、調査・意味）。A氏は、この箱庭制作過程やそれについての語りを通して、自分の心や生き方の変化に気づいた、と捉えられる。

第1回箱庭制作面接時点で、自分のベースはひっそりと静かなもので、活動的ではない、とA氏は感じていた（[自分の心や生き方への気づき]）。しかし、A氏は第3回箱庭制作面接で、自分が最近、以前に比べて自己開示をするようになったことに気づいた。他者に対して隠すことはもったいぶった態度であるように感じはじめているのかもしれないと思った（[心や生き方の変化や成長]）。このようにA氏は対人関係における自己のあり様の変化に気づいた、と理解できる。そして、その対人関係上の変化は、以前は尊大な自己イメージをもっていたのかもしれないが、最近はその尊大さが薄れ、平凡な一人の人間としていられるようになったのかもしれないという自己イメージの変化であるのかもしれないとの気づきをえた（[心や生き方の変化や成長]）。◆具体例 137, 138のように、継続した箱庭制作面接では、箱庭制作者のあるテーマが連続して表される場合がある。そのテーマを巡る表現の変化から箱庭制作者が自己理解を深めることができる。また、その変化は箱庭制作者の自己成長の表れであると考えることができる。

#### ◆139 : A 氏第 9 回箱庭制作面接全体的感想

A 氏第 9 回箱庭制作面接における[心や生き方の変化や成長]の具体例を挙げる。A 氏は、最終回は幸せな箱庭で終わるイメージ、現場に帰るような感じで終わるというイメージもっていた。第 9 回箱庭制作面接の箱庭制作過程で、A 氏は、最終回のような気持ちよさを感じた。それは、今までの箱庭制作面接では報告されたことのない身体感覚であった([心や生き方の変化や成長])。足が軽くなっているというか、からだの前に出ているというか、頭であれこれ考えないで、まず体が行動している (A 氏内省, 9-全体的感想, 調査・意味) というように、身体が外の現実世界に向かい、自由に身体が行動しているというような身体感覚をこの回で初めて感じた、と捉えられる(pp.160-161 ◆具体例 128 参照)。

A 氏第 9 回箱庭制作面接で、最終的な作品として、初めて街の風景が構成された。Kalff(1966 大原他訳 1972)は、箱庭療法における遊びの本質として、内から外への変化を指摘した(p.v)。A 氏第 9 回箱庭制作面接では、内から外への変化は、まずは内界が表現された街の風景の構成に顕れた。そして、さらに構成を超えて面接外の外界にまで広がっていくような身体感覚が生まれた、と考えられよう。

A 氏は第 8 回ふりかえり面接で、第 8 回箱庭制作面接では[自分自身をね。あけはなすというか。(中略)あけはなす。手放す。そんな感じで作っていたような気がします]と語っていた。そして、A 氏は第 9 回箱庭制作面接の調査的説明過程で、今回の箱庭制作過程について以下のように語った。作るときに(中略)明け渡して作ったと言った時があったですよ。ね。あの、あの、雰囲気をちょっと思い出して、あの、あんまり考えずに作ろう (A 氏調査, 9-全体的感想)。このように A 氏は第 9 回箱庭制作面接で、第 8 回箱庭制作面接での制作態度を思い出し、そのような態度に従って箱庭作品を構成していった。このような制作態度の連続性は、身体が外の現実世界に向かい、自由に身体が行動しているというような身体感覚が生じる要因の一つであったと解釈できる。また、この面接室外まで広がっていくような身体感覚の変化は、[面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]の具体例に示す、第 10 回箱庭制作面接で報告された外界と自分の心のシンクロを生む基礎となった、と推測することができる(p.171 ◆具体例 140 参照)。

以上考察してきたように、[自分の心や生き方への気づき][心や生き方の変化や成長]の具体例に示された、箱庭制作者の自分の心や生き方への気づきやその変化や成長は、箱庭制作面接の重要な促進機能の一つである。継続的な箱庭制作面接は、その連続性によって、箱庭制作者の心や生き方の変化や成長を促進することが見いだされた。単一回の作品は、それ以前の作品・構成や心・生き方の変化・成長と交流し、それまでの変化を基盤として、さらなる変化・成長を反映したものとなる、と捉えられる。そして、それが次回以降の作品や箱庭制作者の心・生き方に影響を与える、と考えられる。

#### 4)⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】の[面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]の結果および考察

[面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]は、「面接内外で、自己についての気づきや課題などの内的プロセスに、箱庭制作者が主体的に取り組み、その体験を深化しようとする態



度」と定義された。[面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]の具体例を以下に挙げる。

◆具体例 140 : A 氏第 10 回箱庭制作面接全体的感想

A 氏は、第 10 回箱庭制作面接の調査的説明過程で、第 9 回での気づき、第 9 回と第 10 回との間の現実生活での試み、第 10 回の構成の変化について、以下のように語った。<今日はこっちに立って、うん、川上から川下の方を、見てつくることも多かったよね>そうです、<そのあたりは>前回は私も確か丸いような世界を作ったんですね。あの、町の並びをね、円形にして、<そうだね>それで、箱庭の中で私はずっとその、丸いモチーフを作るなど、ちょっとそれが、お互いに、こう、すくみあってるみたいで嫌だなんていうのがあったんですけど、<うんうんうん> (A 氏調査, 10-前回について) それが 1 週間頭の中であってなんか、違う位置から見たい、っていう気持ちを、すごく 1 週間意識してたんです、実は、で、あの、カーナビの、わたしカーナビ使い始めて 6 ヶ月ぐらい経つんですけど、いつも自分の進行方向が上になるように設定してあったんですね。<うんうん> だけど、あれ、北を上に設定も出来ますよね<出来る出来る> それに変わったんです、最近<へえ、そうなんや>うん、どんなもんかな。私、いつもおんなじ様なルートしか運転しないから、あの、道に迷うことないからちょっと、ちょっと冒険だけ、でも北を上を固定してみよと思えば、<うん> すご、おもしろいんですね、カーナビ見るたびに、すごいおもしろい、私今こんな方角に進んでたんだとか<あー> そういうのがすごくその新鮮と言うか 小気味いいというか、何か、私の心の中の世界とそういうことってシンクロしてるような気持ちがちょっとあって<うん> (A 氏調査, 10-前回と今回との間のこと) 作るときに、あの、今回は丸にしたいな、て、とまでは思わないんですけど、<うん> (間 9 秒) 碁盤の目のように置けない、って言った私がいるんですけど、それはもう怖くなくなってる。碁盤の目のようにできそうだな、っていうのを感じながら、こういう配置にはしましたね。<はあ> (A 氏調査, 10-全体的感想) わりとこう、パキーンって‘手を左から右に川をなぞるように直線的に動かしながら’で分かれてますよね。<そうだね> こう、行になってるから。でもそれが小気味いいし (A 氏調査, 10-4)。

[面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]の具体例において、着目すべき重要な特徴は、箱庭制作者自身が外界と内界、日常生活と箱庭制作面接との間の一致、シンクロに気づき、報告し、意味を見出していることである。A 氏第 10 回箱庭制作面接での構成と報告を表 3 に整理する。A 氏は、第 9 回箱庭制作面接の円形の構成について、お互いにすくみあっているようで嫌だと感じた。それを日常でも意識し、違う位置から見たいと感じていた。そして、カーナビの設定を変更した。自分の進行方向を指し示す方法の変化とそれによって生じた感情から、外的に起こっていることと自分の心の世界とがシンクロしていると、A 氏自身が気づいた。その気づきを基にして、第 10 回箱庭制作面接で A 氏には、今までとは違う場所から、今までとは違う構成を行うという行動レベルでの変化が生まれた。A 氏は第 9 回箱庭制作面接では、碁盤の目のように置けないと思っていたが、第 10 回箱庭制作面接では、それはもう怖くなくなっていて、今回の構成にも小気味よさを感じた。

表 3 A 氏の箱庭制作面接内外での客観的事実と主観的体験

時間経過 場,客観・主観		第 9 回箱庭制作面接	両面接間の日常生活	第 10 回箱庭制作面接
箱庭制作面接	客観的事実	円形の街の構成		今までと違う位置から違う構成の実施
	主観的体験	すくみあっているよ うで嫌だ		碁盤の目のようにおけ そうだ,小気味いい
日常生活	客観的事実		カーナビの,自分の進行方向を指し示す方法の変更	
	主観的体験		違う位置から見たい,おも しろい,小気味いい,心の世 界とシンクロしているよう	

◆具体例 141 : B 氏第 8 回箱庭制作面接全体的感想

B 氏第 8 回(最終回)箱庭制作面接の調査的説明過程で,B 氏は今回の箱庭制作を含む,直近複数回の箱庭制作に関する全体的な感想として,以下のように語った。日常生活での変化として,第 7 回箱庭制作面接と第 8 回箱庭制作面接との間に,B 氏に思いがけない転任の打診があった。それは喜びであるとともに,あまりにも予想を超えた打診であったため,戸惑いをも感じさせるものであった。あの,結構,その,箱庭の,その,制作をしていて。で,何回くらい前かな,2回くらい,2回くらい確実にあったと思うんですけども,その,言うとしんどい思いを,そのしつつ,という中で箱庭を作り始めて。また,新しい年度の,そういう歩みがまたやってくるっていうような,そういう,あの,気持ちの上での変化とか。まあ,自己修復の兆しみたいなものが出てきてて,その中で,こういう話が出てきて。あの,うん,まあ,その,導かれるままに,その,出ていくかっていうところに辿り着いてったというところでは,まあ,あの,不思議さを感じるとともに,あの,一つの,あの,うん,区切りっていうのが,なったのかなという感じるんですけど。<なるほど。なるほど>それがまあ,具体的な,その,●(転任先地名)に行くということでの区切りなのか。それはほんとに今月末にならないと。ただ,なんか,そういうことでは,その,傾向からいったら,いろいろあったけど,また,新しい年度から,また,気持ち新たにして歩むかみたいなの,取り組むかみたいなのには,行き着いたのかなっていう感覚はあります (B 氏調査,8-全体的感想)。その語りについて,内省報告に,不思議 (B 氏内省,8-全体的感想,調査・連想),と記した。

表 4 B 氏の箱庭制作面接内外での客観的事実と主観的体験

時間経過 場,客観・主観		第 6 回箱庭 制作面接	第 7 回箱庭制作 面接	両面接間の 日常生活	第 8 回箱庭制作 面接	第 8 回ふりか えり面接
箱庭 制作 面接	客観的 事実	自然の再生 の構成,人の 生活の痕跡	4 つの区画と中 央の十字形の構 成		船出,天使に導 かれる人	
	主観的 体験	再生のイメ ージ,人の歩 みの歴史	4 つの区画:四季, 巡るイメージ。 十字形:根底にあ る内的・外的な核 のイメージ		不思議な導き, 信仰,数回前か らの自己修復 の兆し,内的・外 的区切り	
日常 生活	客観的 事実			予想しない 転任の打診		
	主観的 体験			歎びと戸惑 い		

B 氏の第 8 回箱庭制作面接および第 8 回ふりかえり面接における語りもまた,外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開について,B 氏自身が感じ,気づいたことである。そして,その気づきに対して,意味を付与している。それを表 4 に整理する。第 6 回箱庭制作面接から,箱庭制作に自然や自分が修復されていくテーマが,意図せず顕れ始めた。第 7 回箱庭制作面接では,4 つの区画を作るとともに中央に十字形の構成がなされた。十字形は,巡るという客観的な時空間の核であり,それらを見る自分の内的な核でもあるという多義的な表現であった。巡るという時間の流れは,B 氏が今まで箱庭制作面接を重ねる中で,日常生活でも様々なことがあったその過去と,新しい年度を迎えようとする今,心を新たにしようという思いが反映したものである,と捉えられた。そのような流れの中で,再出発の打診が現実生活でもあった。このような外的・内的状況の中で,今回の箱庭制作面接で,天使に導かれるままに,新たな場所に出ていくという構成が生まれた。実際に新しい土地にいくという点においても,気持ちの上でも,一つの区切りかと感じた。外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開に,B 氏は不思議を感じた,と捉えることができる。

第 8 回ふりかえり面接でその内省報告について,B 氏は以下のように説明した。外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開について,再度語られていた。該当部分に下線を記す。

「もしテーマとしていうならば,箱庭の,実際その再出発というところの部分をなんとか醸し出してて,今回そうなってる。実際そうなってるっていう。そういう,まあ,精神的な面もそうだし,現実的な面もその,そういう,状況が重なってるかなっていう。」

そういうことは、言えるかと。ですね。<(中略)あの、こういう話が出てる話、ある前から、Bさんの箱庭は再生だったり、再出発だったりという(はい)ものが、もう、整えられていて、備えられていった。そこに、この現実の話が起こってということは、なんていうかな、きちんと確認しておきたい感じが>そうですね。その順序です。(中略)箱庭でやってたプロセスっていうのは、しんどいとか、いろんな傷つきとか、落胆とか。そういったところの部分との向き合い(?)だったような気がするんです。<なるほど>それと、その過程の後に、いわゆるまた、春が来るかもみたいな、そういうようなところに移っていく中で、あの、この話っていうか、移動の話が出て、っていうことで。まあ、なんか、そういう意味では、実言うと、制作を始める、その、この始めた段階から、実はなにかしらの、なんか、準備期間だったのかなとかという風にも思える、と。あんまり、それを言うと、宗教かってなるんですけど‘笑’。でも、実際、そういうプロセスを歩んできたんだよなーっていうのは、思うんですよね。(中略)そういうところで言えば、結局、なんていうんでしょう。よく連想とか意味のところで、不思議。不思議としか言いようがないところがあって、まあ、でも、まあ実際、うん、その、いわゆる、その、理論で、どう説明しろと言われても困るんですけど、内的な、そういう、探究とか、いわゆる、その、まあ、癒しっていうか修復のプロセスだけじゃなくて、外的な、そういったところ含めて、なんか、あの、現実には動いていっているんだな。でも、外的な要因のことにに関して、それが、どういう風に、どうしてそんな風に、言えるのかっていうことは説明しがたいっていうか。というところがあって、なんか、まあ、そこがいいところでもあるんだけど、わかんない人にはわかんないだろうなっていう世界だろうなっていう‘笑’。そういう風に思うんですけど】。

第8回ふりかえり面接では、内的・外的状況の一致に関する不思議さを再度語った。第8回ふりかえり面接で初めて語られたのは以下の部分である。箱庭制作面接開始時点から、なんらかの準備期間であったようにも思える。そのような言い方をすると、宗教かという風になるかもしれないが、実際にそういうプロセスを歩んできたと思う。内的な探究や癒し・修復のプロセスだけではなく、外的なところも含めて、現実には動いていっているんだなと思う。外的な要因に関してはどうしてそのように言えるのかは説明しがたい。

このように、箱庭制作面接の中で、箱庭制作者の意図を越えたところでイメージが自律的に動きだしたこと、それが一つの流れ・テーマとして、箱庭制作面接が展開していったこと、それは単に内的なプロセスにとどまらず、外的現実としても実現されていったことに対して、B氏は説明しがたい不思議を感じた、と捉えられる。コンステレーション(河合隼雄, 1991, p.94)という用語を使用したいような不思議な外界と内界の一致がB氏の箱庭制作面接で生じた。

◆**具体例 140** と **141** に示されたように、本概念には a.外的状況と内的状況の一致、面接内外の内的プロセスの交流、b.継続した箱庭制作面接と日常生活とを含めた時間の連続性という2つの要素があり、それが統合された事象に関する概念であると考えることができる。

まず、a.外的状況と内的状況の一致、面接内外の内的プロセスの交流について考察する。

◆**具体例 140** と **141** に示されたように、外的状況と内的状況の一致に気づき、その意味を付

与しているのは、箱庭制作者自身である。

A氏は、第9回箱庭制作面接での内的プロセスについて意識していた。そして、第9回箱庭制作面接と第10回箱庭制作面接との間の日常生活において、カーナビの設定を変更した。自分の進行方向を指し示す方法の変化とそれによって生じた感情から、外的に起こっていることと自分の心の世界とがシンクロしていると、A氏自身が気づいた。

B氏第8回ふりかえり面接で、第6回箱庭制作面接以降、自分の意図を越えたところでイメージが自律的に動きだしたこと、それが一つの流れ・テーマとして、箱庭制作面接が展開していったこと、それは単に内的なプロセスにとどまらず、外的現実としても実現されていたことに対して、B氏は説明しがたい不思議を感じたことについての気づきを語った。

◆具体例140と141では、以下の3点が密接に関係することによって、気づきが生まれたと理解できる。1.両調査参加者は、日常生活における自分の内的プロセスと、箱庭制作面接における自分の内的プロセスとの両方に主体的に目を向け、気づきをえている。2.両調査参加者は、自分の内的プロセスだけでなく、箱庭制作面接内外の客観的事実をも視野に入れ、何が起きているかに気づいている。3.両調査参加者は、箱庭制作面接内外の客観的事実と主観的体験とを総合的に理解し、自分自身の外的状況と内的状況が一致することに気づいた、と捉えることができる。そのような気づきを基盤として、箱庭制作者が面接内外で、自己についての気づきや課題などの内的プロセスに主体的に取り組み、その体験を深化しようとする態度によって、箱庭制作者自身が外的状況と内的状況の一致に意味を与えることができるようになった、と考えることができよう。

⑥【制作過程と外界・日常生活の交流】内に[面接外の出来事や生き方と制作中の内的プロセスの連動]という概念がある。この概念は、面接外の要因と箱庭制作過程における内的プロセスとが連動し、構成されるプロセスやそれによる制作者の気づき、と定義された。この概念は、本項で検討している a.外的状況と内的状況の一致、面接内外の内的プロセスの交流と関連が深いと考えられるため、具体例を一つ以下に示す。

#### ◆具体例142：A氏第8回箱庭制作面接4～5

この具体例は、A氏第8回箱庭制作面接で砂箱中央に置かれた白い女性の人形に関するものである。義母は1週間前に手術をし、この時点でも入院中であった。A氏も付き添いを行っていた。義母は入院中、震度9の地震にあう夢を見て、ベッドから落ちてけがをした。現実と夢の世界が、自分にはわからなくなってしまったと言って、義母はひどく悲しんだ。そのような義母のことがA氏はとても気がかりだった。第8回箱庭制作面接の自発的説明過程で、A氏は以下のように語った。今日、何を作ろうかなと思ったときにその、母親のことがば一っと浮かんできて、（A氏自発、8-5）というか、何を作ったらいいかぜんぜんわからなかったので、玩具を見に行ったら、（A氏自発、8-4）この白い人形があって、これを見てこれを見て母のことをパーっと、浮かんできたんですね（A氏自発、8-5）。ミニチュアによって喚起された義母を巡る記憶や思いが勢いをもってA氏に迫ってきた、と捉えられる。この具体例から、日常生活での出来事やそれについての自分の思いと、箱庭制作過程での内的プロセスが密接に関連する場合があることが示された。この後の箱庭制作過程で、A氏は義母

の周りに、自分も含む義母の親族、看護師など義母を取り巻く人々を表すミニチュアを置いた。そのような構成を通して、義母と自分に共通する女性という命がもつ意味を実感した。

このように外的状況と内的状況が密接に交流・連動し、箱庭制作者が自分の心や生き方やそれに関連する他者への気づきが生まれることがある。外的状況と内的状況が密接に交流・連動することによって、外的状況やそれについての自分の思いが箱庭制作面接に持ち込まれ、表現されることを通して、箱庭制作者が自己や取り巻く外的世界に関する自己の内的プロセスに気づいている。このような自己理解の深化に、継続した箱庭制作面接は寄与した可能性があると考えられることができる。

次に、b.継続した箱庭制作面接と日常生活とを含めた時間の連続性の観点について考察する。本章では、箱庭制作面接の継続性に関する概念を考察してきた。[以前の作品との関連]によって、継続する箱庭制作面接において、一連のテーマが生じる一要因となると考えることができた。[作品の変化]の具体例には、自己像の変化についての箱庭制作者の気づきが示された。自己を表すミニチュアの変化は、自己イメージの変化が関与していると考え、箱庭制作者は、継続する箱庭制作面接の中で自己イメージが変化したこと気づいたと捉えることができた。[連続性とイメージ特性との関連]では、箱庭制作面接が継続して実施されることによって、連続性が箱庭制作者のイメージ特性(自律性・集約性・象徴性など)の体験に影響を与え、体験されていなかったイメージ特性が、連続性によって体験される変化が見いだされた。[自分の心や生き方への気づき][心や生き方の変化や成長]の具体例から、継続的な箱庭制作面接は、その連続性によって、箱庭制作者の心や生き方の変化や成長を促進することが見いだされた。単一回の作品は、それ以前の作品・構成や心・生き方の変化・成長と交流し、それまでの変化を基盤として、さらなる変化・成長を反映したものとなる、と捉えられた。そして、それが次回以降の作品や箱庭制作者の心・生き方に影響を与える、と考えられた。本章の上記概念から、継続した箱庭制作面接という時間の連続性が、箱庭制作者の自己理解・自己成長を促進に寄与することが見いだされた。

また、Ⅵ章の[作品の今後のイメージが湧いてくる]では、イメージの自律性やイメージの展望機能によって、実際に作られた作品よりも先のイメージが生じる場合があることを示していると考えられることができた(p.80 参照)。

[面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]は、上記概念の促進機能と密接に関連し、それらが総合されたものと理解することができるのではないか。上記概念には、箱庭制作面接の連続性に関する促進機能が見いだされた。◆具体例 140 と 141 に示されたように本概念においても、箱庭制作面接が継続することによる自己理解の深化や、それに基づく箱庭制作者の心の成長が見いだされた。表 3 に整理したように、A 氏は第 9 回箱庭制作面接、第 10 回箱庭制作面接、両面接間の日常生活において、自分の課題に気づき、主体的に課題に向き合っていた。表 4 に整理したように、B 氏は第 6 回箱庭制作面接以降の内的プロセスが外的現実としても実現されていったことに、気づき、説明しがたい不思議を感じた。継続した箱庭制作面接の中で、面接内外のプロセスが交流し、連動することによって、箱庭制作面接の連続性は、箱庭制作面接の促進機能として働くと解釈できよう。

ここまで考察してきたように、[面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]は、a.外的状況と内的状況の一致、面接内外の内的プロセスの交流、b.継続した箱庭制作面接と日常生活とを含めた時間の連続性という2つの要素が統合された事象に関する概念であると考えられることができる。継続した箱庭制作面接と日常生活とを含めた時間の連続性の中で、面接内外のプロセスが交流し、連動することによって、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与していることが確認できた。これは、箱庭制作面接の内外で、自己についての気づきや課題などの内的プロセスに、箱庭制作者が主体的に取り組み、その体験を深化しようとする態度によって生起する箱庭制作面接の促進機能と考えられる。

継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験のデータを基に、面接の連続性に関する促進機能について検討することを目的として、⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】と⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】内の概念を考察した。この考察から、箱庭制作面接の連続性は、箱庭制作面接としての促進機能をもち、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与することが確認できた、と考える。

## 第 2 研究 質的研究による系列的理解

### Ⅹ章. 問題および目的

第 2 研究は、p.1 で挙げた目的 b. 継続的な箱庭制作面接における、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討すること、を目的とする。目的 b を達成するために、第 1 研究と同一人物である 2 名の箱庭制作者の継続的な箱庭制作面接における主観的体験の語りや記述のデータに対して、質的研究による系列的理解を実施する。

#### Ⅹ-1. 質的研究による系列的理解

本研究の目的 b を達成するためには、M-GTA とは異なる研究方法が必要となる。M-GTA とは異なる研究方法が必要な理由は、a.M-GTA による分析では、調査参加者個人のまとまりが保持されないこと、b. 本研究の多元的な方法で収集された詳細なデータに適した分析方法が必要なこと、の 2 点である。

a.M-GTA と事例研究との関係に関して、木下(2003)は、以下のように述べている。「グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析をまとめた論文を完成させた後で、もうひとつのまとめ方としてインタビューのなかにとくに豊富なデータを提供してくれた人がいればその人についての事例分析も可能である。[中略]詳しいデータを提供してくれる人はグラウンデッド・セオリー・アプローチにおいても分析上貴重な存在なのであるが、[中略]この方法では被面接者個人のまとまりは保持されないので、事例としてまとめる方法も可能である」としている（木下,2003,p.104）。同様の見解は、木下(2009)でも、述べられている（p.18,p.29）。両調査参加者の主観的体験の語りや記述のデータは、個人ごとに分析されるのではなく、合わせて M-GTA の概念生成のために利用される。M-GTA では、調査参加者個人のまとまりは保持されないため、各個人の事例の継時的な変化を追うことができない。そのため、目的 b を達成するためには、事例研究法による分析が必要となる。

b.しかし、本研究で収集されたデータは、多元的な方法で収集された詳細なデータである。一般的な事例研究法では、詳細で多元的なデータを十分に活かすことができないことが危惧される。詳細で多元的なデータを精緻に比較・検討するとともに、それらの検討を通して、データを総合的に把握する手続きが必要になる。そのため、第 2 研究では、第 1 研究で作成した基礎資料をデータとして用いることによって、多元的なデータを精緻に比較することにした(p.23 参照)。そして、その基礎資料を用いて、1.データの箱庭制作過程毎の分析、2.箱庭制作面接毎に、箱庭制作者の主観的体験の変容や関連性に関する分析、3.各調査参加者の全面接の分析、を実施することが目的 b を達成するために適切であると考えた。この分析は、箱庭制作過程に関するデータをミクロな視点から精緻に分析する方法論(伊藤,2005;石原,2008;他)と、事例研究法による継続した面接過程である箱庭療法過程に関して系列的理解を行う方法論を統合した方法と考えることができる。このような方法の採用は、目的 b に適うと同時に、詳細で多元的なデータを活かす研究法となりうると考える。



## X章. 方法

### X-1. 分析方法

第2研究では,第1研究で作成した基礎資料をデータとして用いた(p.23 参照)。一覧表化(表2,p.24,資料1 参照)により,多元的に収集された箱庭制作過程・説明過程における箱庭制作者の主観的体験の比較が可能となり,次の分析を行った。1.箱庭制作過程毎に,制作行為,制作内容,箱庭制作者と筆者との対話等に関する,箱庭制作者の多様な主観的体験について,その内容や関連性を把握・分析した。2.各箱庭制作面接での,制作の経過による箱庭制作者の主観的体験の変容や関連性を把握・分析した。3.すべての面接の主観的体験を比較し,テーマの系列的理解や面接の展開,その個人的意味について,多層的・総合的に把握・分析した。

分析は筆者単独で行った。論文をまとめる段階で,指導者に指導を受けた。調査参加者に論文の内容の確認を依頼し,承諾をえた。

### X-2. 質的研究による系列的理解における具体例等の表記について

主観的体験の具体例とその前後の箱庭制作者の言葉を網掛け,ゴシック体で示した。箱庭制作者の行動や様子を‘ ’内に記述した。具体例内の筆者の言葉を< >内に示した。質的研究による系列的理解で検討する部分に\_\_\_\_\_を付した。具体例の最後の()内にデータの出処を記した。例えば,(A氏調査,1-12)は,「A氏」の「調査的説明過程」における言葉であり,それは「第1回面接」の「12番目の箱庭制作過程」における言動に関する主観的体験である。(B氏内省,2-4,制作・意図)は,「B氏」の「内省報告」に記された主観的体験であり,「第2回面接」の「4番目の箱庭制作過程」における「箱庭制作過程」における言動に関する「意図」である。

必要に応じて,ふりかえり面接のデータを補足的に記した。ふりかえり面接における語りは,[ ]内に明朝体で示した。具体例に関連する当該箇所\_\_\_\_\_を付した。

## XI章. 箱庭制作面接の質的研究による系列的理解 —箱庭制作者 A 氏—

A 氏の主観的体験のデータを質的研究による系列的理解によって、詳述・考察する。まず、主な箱庭制作過程と主観的体験について詳述する。その後、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を、1) 主なテーマと自己像の変遷、2) 宗教性(命、守り、神聖な場所・生き物)、3) 女性性、母性、4) 自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容、5) 受動性と能動性、面接内外での深い関与の 5 観点から考察する。

### XI-1. A 氏の主な箱庭制作過程と主観的体験の詳細

#### 1) 第 1 回箱庭制作面接 (写真 23)

主な箱庭制作過程を示す。A 氏は、第 1 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 1 で、棚のミニチュアを眺め、卵が入った鳥の巣の玩具を手にとった。鳥の巣から卵が落ちた。A 氏は卵を拾って、巣に戻し、12 秒間鳥の巣を見つめていたが、棚に戻した。制作過程 4 で、砂箱右半分を海にした。制作過程 7 で、イルカを見つけ、制作過程 8 でイルカを置き、位置や頭の向きを慎重に決めた。制作過程 9 で、砂箱左奥に緑色の陶器の家を置くが、制作過程 10 で、それを白とあわい青色の家に交換した。制作過程 11 では、砂箱左奥で、金色のベルとマリア像を森で置き比べ、マリア像を置いた。制作過程 12 で、サンゴと貝殻を右手前隅(海中)と、海岸線の手前に置いた。制作過程 14 で、棚に亀を見つけ、砂箱右奥隅に置いた。制作過程 15 で、イルカの頭を亀の方に置きなおした。制作過程 17 で、砂箱左手前に少し砂を盛ったが、砂を戻して平らにならして、制作を終了した。

A 氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。A 氏は、海の構成を巡って内省報告に 今回の箱庭のテーマは「船出」なのだと思う (A 氏内省, 1-5, 調査・意味) と記した。

緑色の家を白とあわい青色の家に交換した箱庭制作過程について、内省報告に 白と青の家は落ち着いた、やさびしい印象。私の内側、ベースはどちらかというといっそりと静かなものなのだと思う。自分自身にぎやかで活動的とは言えないと思う (A 氏内省, 1-10, 制作・意味) と記された。家の色について、自分のベースはひっそりと静かなもので、活動的ではないというように自分の性格と関連付けた報告は、説明過程ではなされず、内省報告で初めてなされた。

マリア像について内省報告に以下のように記された。 守りになるものが置きたかった。その場所に命を吹き込み、命を見守るものが欲し



写真 23 A 氏第 1 回作品

くて（A氏内省, 1-11, 制作・意図）, 私の中には意外に宗教性が根付いているのかもしれない（A氏内省, 1-11, 調査・意味）。この制作過程が守りの表現であることは, 調査的説明過程で語られていたが, マリア像が命や宗教性と関連することは, 内省報告で初めて報告された。

A氏は, 鳥の巣や貝について, 調査的説明過程で以下のように語った。棚をみててね, あ, これ置きたくなるかも, と思ったおもちゃがあるけど, あれは今回ぴったりこなくてねえくどれ? >この, ひな鳥が巣に入っているような, <うんうんうん>これ, なんか, 心ひかれたんですね。（中略）ひよっとしたら使いたいなって思ってたんだけど。海ができて, 持ってきた段階で, ああこれはまだ, まだというか今, 今日は違うな。なんか, その代わりにの貝, という感じなんです（A氏調査, 1-複数過程に亘って）。この語りについて, 守る・はぐくむという女性的な面を私は自分のものになっている。5・6年前, 女性性を受け入れられていなかった頃の自分との違いを感じる（A氏内省, 1-12, 調査・意味）と, 内省報告で初めて, 鳥の巣や貝と, 自分の女性性や母性とを明示的に関連づけて報告した。

イルカや亀について内省報告に亀は私にとっての th なのか。それとも, 私の中にある, ある部分なのかと思う（A氏内省, 1-14, 制作・意味）と記された\*1。また, 内省報告に亀は, 私といやなものの中に入って来て, 私を守ってくれている, いやなものに取り巻かれないようにしてくれるものなのだと思う（A氏内省, 1-14, 自発・意味）, 自分の前を進む亀に, 今はついていこうと思っているようだ。何より, 広い海原で亀を見失ってしまったら, 自分の進む方向を見失いそうだ（A氏内省, 1-15, 制作・意味）と記された。亀は, 自己像であるイルカといやなものとの間に入って守ってくれる存在であり, イルカは亀について行こうと思っていることが記された。亀のこのような内的意味については, 内省報告で初めて記された。

作品全体に対して, 以下のような語りや記述がなされた。A氏は, 調査的説明過程でこんな世界があたしの中にあっただ, いいもの見つけた, っていうような感じかな。（中略）作り始めたら, あの, どんどんこうしたいっていうのが出てきて<うん>わたしの中から, こんな世界が, あの, 出てきてくれたんだなあ, って。自分でこういう世界を, わたしの目に見えるように, 作ってあげられて, 嬉しい（A氏調査, 1-全体的感想）と語った。内省報告に短時間でも集中して, 没頭して作り上げた作品は, いわば私の子ども, 私の分身。作ったのは紛れもない私だけれど, 作らせてもらったような, ありがたいような気持ち（A氏内省, 1-全体的感想, 調査・感覚）と記された。

## 2) 第2回箱庭制作面接（写真24）

主な箱庭制作過程を示す。A氏は, 第2回箱庭制作面接の箱庭制作過程2で, 砂箱左奥から右手前にむけて, 蛇行した川を作り, 川によって二つに分けられた土地ができた。制作過程3で, 約2分40秒に亘って, 川によって二つに分けられた土地を見つめつつ, 砂をならしたりしていた。制作過程9で, ライオンを「陸地の右手前に, 茂みの陰から草食獣をねらうような位置に」置いた。（「」内は, A氏が箱庭制作過程の内容として, 内省報告に記した言葉）。制作過程11で, 白い石を砂箱左の陸地の奥, 川岸に置いた。砂箱左手前の山を奥に移し, 山の

ふもとに土偶と埴輪を置いた。制作過程 12 で、棚に青い鳥を見つけて、白い石の上にのせた。制作過程 14 で、シマウマを右の陸地の右奥の木のかげに置き、制作を終了した。

A 氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。A 氏は川によって二つに分けられた土地について、内省報告に大地もいまだ生命がなく、乾燥していて、荒涼としたイメージが私に迫ってきた。「こんなに広い川を作ってしまったでしょう」



写真 24 A 氏第 2 回作品

「生命のない大地がおそろしい」と感じていた (A 氏内省, 2-3, 制作・感覚) と記した。

ライオンについて内省報告にライオンや恐竜といった力強いもの、時に凶暴なものに憧れのような、親近感のような感覚を抱く。自分が生きていくためには、時に相手を喰らうことも必要 (A 氏内省, 2-9, 制作・意味) と記された。ライオンについてのこのような感覚や考えは、内省報告で初めて記された。攻撃性の積極的意味に気づいたと理解できる。

土偶や埴輪について、以下のような主観的体験の語りや記述があった。調査的説明過程でいのちなんだけど、いのちを持って人として持ってきたんですけどねくふんふんうん> 半分いのちじゃないものだっていっていか(中略)人間ではないいのちになってるといかくふんーん> そういう感じがして (A 氏調査, 2-11)。また、内省報告に、土偶もいのちの表現だと思っていたが、ふもとに置いたことで、いのちとしての人間の代わりのものであるし、山の番人のような気もしてきた (A 氏内省, 2-11, 制作・感覚) と記された。第 2 回ふりかえり面接では、[土偶はだいぶ神様の方に近い]、と語った。また、山に関して第 2 回ふりかえり面接で、[信仰の対象になるようなお山のイメージがありましたね。そうすると、お山のふもとに土偶達はいかにもふさわしい。ちょうど山と平地とのちょうど境目辺りに居てくれると、ちょうどころあいがいい]、と語った。A 氏は、土偶や埴輪が半分いのちではないもの、人間じゃないいのちになっており、神様の方に近い存在であると感じていた。信仰の対象になるお山のふもとの番人であるとも感じていた。

石について、以下のような主観的体験の語りや記述があった。A 氏は自発的説明過程で、そういうちょっと意味の分からないものが置きたかった (A 氏自発, 2-11) と語った。内省報告に生命感は薄くて、動き出すことがないもの。私が左側に置きたかったいのちとは、そのようなものだったのではないか。はっきりとした形をまだ持たない、抽象的なものがよかったのだと思う (A 氏内省, 2-11, 制作・意味) と記された。石の意味は内省報告時に明示的になった、と捉えられる。

青い鳥について自発的説明過程で、実はずっと作ってる最中なんか、こう、どうしていい

んだろうとかねくうん>すごい苦しいんですよね。<ふうん>で、あの青い鳥を見つけて、置いた時にああよかったと思いましたね。<ふうん苦しさは>なくなりましたねなくなつた>はいほっとしました (A氏自発, 2-12) と語った。また内省報告に青い鳥は意図しないところからやってきた、意図を超えているという感じかもしれない (A氏内省, 2-12, 制作・意味) と記された。

### 3) 第3回箱庭制作面接(写真 25)

主な箱庭制作過程を示す。A氏は、第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程4で、砂箱奥に海を作った。制作過程11で、亀を砂箱中央のやや奥の位置に頭を陸側に向けて置いた。シャチやイルカをその周囲に置いた。金色の二枚貝の物入れを、砂箱左奥の海藻の前に置いたり、夫婦岩と置きかえたりするが、最終的に金色の二枚貝の物入れをオレンジの海藻の後に、隠れるように置いた。制作過程13で、回遊しているシャチ、イルカ、亀を見つめ、亀の頭の方を陸側から海の沖合の方向に変えた。制作過程15で、「小さな、頭をもたげて何かを見つめるしぐさをした亀を砂浜に、沖に向かう亀を見ている形で」置き、制作を終了した。

A氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。金色の二枚貝について、内省報告に最近の私は以前と比べて、いろいろな場面で、いろいろな自己開示をするようになっていく。(中略)尊大さは薄れ、ただの、ある意味でとても平凡な一人の人間としていられるようになったのかもしれない (A氏内省, 3-11, 調査・意味) と記された。この制作過程を自己開示や自己の平凡さと関連づける報告は、内省報告で初めてなされた。箱庭制作面接とその内省報告作成を通して、自己開示ができていくことを認識し、ありのままの自己の受け入れが進んだと推測できる。

海の亀について、以下のような主観的体験の語りや記述があった。1回目のイルカが亀になったなっていう感じ (中略)そっちの方が、イルカ、ま、イルカは、ま、私だったんですけどね、前も。これも亀は私だろうなと思いますけど、このほうが等身大の感じがして、はあ、ぴったりきます (A氏調査, 3-13)。第1回箱庭制作面接ではイルカであった自己像が、今回は亀で表された。また、亀の頭を沖の方に変えたことについて、以下のような主観的体験があった。自発的説明過程で、いろいろ試そうと思って、ふっと亀の置き方を変えたらばくうん>あー、急になんか違う感じになって、がらりと。あのああ、沖へ出て行くのも気分がいいなと思ってくうん



写真 25 A氏第3回作品

うん>沖へ出て行く風に決めましたね (A氏自発, 3-13) と語った。また, 内省報告には, それまでの, 亀・イルカ・シャチが頭をつき合わせながら回遊する形は, なんだかぬるま湯に  
かっているような, ぬくぬくして幸せだけれど, でもあえて言えば居心地が悪い, 落ち着か  
ない形だった。いつまでも回遊して, 3頭は親しそうだけれども先に進めない, 発展しない,  
自分たちの領域から広い場所へ出て行けないような感じ。凡庸さに埋没させようとするよ  
うな, お互いがお互いの動きを規制しているような, 輪からはずれて独自の道に進み出すの  
を牽制しているかのような不自由さを感じた。その輪からはずれて, 自分の道を進みたいと  
思っている, 独自性を発揮したいと思っている, それが今の私なのだろうか (A氏内省, 3-13,  
制作・意味) と記された。

砂浜の亀について内省報告に 砂浜の亀は, 沖に向かう亀を見送っている。(中略) 沖に向か  
う亀を信頼しているようだ (A氏内省, 3-15, 制作・連想) と記された。

#### 4) 第4回箱庭制作面接 (写真26)

主な箱庭制作過程を示す。A氏は, 第4回箱庭制作面接の箱庭制作過程2と3で, 砂箱左奥から, 反時計周りに砂を掘り, 渦を作った。制作過程6で, 棚に向かい, まっすぐに, 卵の入った鳥の巣を手に取り, 一旦, 卵を2個棚に戻すが, 再度卵を巣に戻した。鳥の巣をもって, 砂箱に移動した。渦の中心に置かれたイスを卵の入った鳥の巣に置きかえた。巣の卵を出し入れしたり, 貝殻に置きかえたり, ベンチに置きかえたりした。制作過程8で, 亀を砂箱左奥, 渦の始まりのあたりに置いた。制作過程14では, A氏は, 亀がいるあたりの川幅を広げて, 亀を砂箱左側真ん中付近まで進めた。制作過程16で, A氏は砂箱右側の渦の幅を3度広げた。そして, 亀をもっと進めて, 「渦巻きの全行程の6割ほどの位置(右側中央部)」に置いた。

A氏の主な主観的体験の語りを記す。A氏は作品全体について, 自発的説明過程で 出来上  
がった世界は, えーっとなんででしょうね, これね‘笑’なんででしょうね。よくわかんない。  
ほんとに良くわかんないですねえ

(A氏自発, 4-全体の感想) と語った。

渦について自発的説明過程で A氏は以下のように語った。 博物館  
で, あの曼荼羅の展示会をやって  
いたので<はああ>観て来たんで  
すよね<ああ, なるほど>そいで  
あの丸い図形とか, おもしろいな  
と思って, ま, でも, ね, そんなのを  
作りたいと思っているわけでもな  
く。でも砂を見ていたら, う, 渦巻  
きだというふうに思ったので, す  
ー‘息を吸う音’ ちょっとどうな



写真26 A氏第4回作品

るかわからなかったんだけど、渦巻きが浮かんできてどうも消えないから、うんじゃあ作ってみてみようと思ったのが、今日の‘砂箱に向けていた顔を筆者に向けて’作品なんですね (A氏自発, 4-2)。

鳥の巣について、調査的説明過程で以下のように語った。もうベンチや貝殻を見ているときから、<ふん、ふん>鳥の巣は目に入っていたんです‘筆者の顔を見ながら’。<ふん、うん、うん>で、でも、なんだろうこう素直に手が伸ばせなくて<ふうん>ベンチやら貝殻にしていたんですけど、<ふうん>やっぱり鳥の巣を置いてみようと思って。で持って来て、あの、そいで、卵もなくてもいいかも知れないと思ってどけたら、やっぱりすごくさみしくなって、‘砂箱に向けていた顔を筆者に向けて’<ふん、なるほどね>これは卵はいるんだと思って、置きましたね。<素直に、手が伸ばせないって言うのは、もう少し言うとどんな感覚>うーん、なんとなくね、こう(間 8 秒)なんでしょうね、素直に手が伸ばせない(間 7 秒)これ、あの、貝殻もそうでしたけど<うん>貝殻も、この、巣も、<うん>卵を抱えた巣もそうなんですけど、<うん>すごくその女性のことを<うん>意識させる感じが<うん>私にはあるんですよ。<うん、うん、うん>特にこれは‘巣を指差しながら’こう子どもをかえすっていうね。<そうだね>うん私は<ふん>子どもがいないというところ<ふん>何か引っかかっている様な気も<うん>しますね(中略)たぶん持たずに<うん>一生生きて行くだらうなっていうのは(中略)(間 28 秒)‘小さな声で’それで手が伸ばせなかったんでしょうね。(中略)ふふふ‘笑’ね。卵が、巣だと思うと。<ふん>ね全然意味が、置いている最中はちょっとそういう<うん>感覚では見ていなかったの<うん>ちょっとなんだかつらいような切ないような気分になりますね‘声が震えて’<そうだねそうだね>‘箱庭制作者は箱庭を見つめながら、黙って、時折ハンカチで涙をぬぐっている’(A氏調査, 4-6)。

渦の幅を広げた行為について、調査的説明過程で以下のように語った。この幅を広げてましたよね。<広げたね>なんかね あ、ふふ‘笑’産道を広げてるみたいって思いくはあ>ましたね、広げてる最中ね (A氏調査, 4-16)。A氏は渦の幅を広げている時、産道を広げるというボディイメージが構成行為から喚起されたと捉えられる。

亀が渦の中央に向かう構成について、第4回ふりかえり面接でA氏は以下のように語った。渦の中心に[向かってあの亀は生まれようとしているんだなっていうね。 (中略)亀は生まれようとしているし、私は産みおとしてあげようとしている。<なるほど>産みおとしたい。(中略)新しい自分がそこにはいる]。渦の中心は多義的なイメージをもった領域であった。その一つのイメージとして、自己像である亀が渦の中心に向かい、その中心に新しい自分がいるというイメージが付与されていた、と捉えられる。

#### 5) 第5回箱庭制作面接 (写真 27)

主な箱庭制作過程を示す。A氏は、第5回箱庭制作面接の箱庭制作過程3で、砂を盛り上げて、円錐状の山からなる島を作った。制作過程4で、島(山)の左奥に鳥居を置いた。制作過程9で、亀を島の右手前の浜辺に置いた。制作過程10で、鹿を神社の脇に置いた。制作過程12で、海に残っていた砂を島にかき寄せた。制作過程16で、インコを島の右奥、山の頂上付

近に置いた。制作過程 17 で、焚き火とキノコを島の左手前に置き、りんごを置き足した。制作過程 17 で、島の亀の方を向いていた海にいる大きな亀の頭の向きを、「島の亀にほぼお尻を向ける位置」に変えた。

A 氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。島について、以下のような主観的体験の語りがあった。自発的説明過程で島のふちをわりと最後の方丁寧に整えたんですけど、<そうだね>それはちょっと意識してやってて<ふうん>あの



写真 27 A 氏第 5 回作品

お、ま、ここは私の島なので他の人は登って来れない、ですね。(中略)というところでちょっと境界をくっきりさせて (A 氏自発, 5-12) と語った。この島は、自分の島なので他の人は登って来れないこと、また、それを意識して、意識的に境界をくっきりさせたことが語られた。他者とのくっきりとした境界線をもつ自己の島に、海を旅してきたもう一つの自己像である亀が浜辺から上陸した(制作過程 9)、と捉えることができる。

島から感じる厳しさやしんどさについて、以下のような主観的体験の語りや記述があった。自発的説明過程で最近、あの、(間 7 秒)よく悩むというか、はは‘笑’(中略)しんどいなあ、で、だけどだけど、そのしんどさは乗り越えなきゃいけないらしいということもわかって、逃げられたら楽なんだけど、逃げちゃいけないなというところで、<ふん>そ、それがこの島になったような気がしますね。(中略)そういう風に思ってる私全体なんでしょうけどね、これは (A 氏自発, 5-複数過程に亘って) と語った。内省報告に振り返った傾斜だけではなくて、島のあいているスペース全体が、私に問い掛けてくる。突き詰めてくる。私を試そうとしている。そんなイメージ (A 氏内省, 5-複数過程に亘って, 調査・感覚), と記された。

鳥居について、内省報告に以下のように記された。何かお守りがほしい、と思って鳥居を置いた (A 氏内省, 5-4, 制作・意図), 鳥居を置いたことで、島に命が芽生えたような安心感が湧いた (A 氏内省, 5-4, 制作・意図)。鳥居を巡るお守りや命の芽生えという主観的体験は、内省報告で初めて明示的に記された。また、鹿について、内省報告に、鹿は神聖な場所に住む、神聖な生き物 (A 氏内省, 5-10, 制作・感覚) と記された。

#### 6) 第 6 回箱庭制作面接 (写真 28)

主な箱庭制作過程を示す。A 氏は、第 6 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 5 で、砂箱中央にできた山を、砂箱右奥隅に、移動させた。制作過程 9 で、茶色いサメ、タコ、金魚、ひらめ、鯉など魚をたくさん海に置いた。制作過程 12 で、インパラを焚き火の脇に置き、牛と豚を左の浜に



置いた。制作過程 13 で、牛と豚のエリアを柵で区切った。制作過程 16 で、ペンギンを焚き火の脇、洞窟の前に置いた。制作過程 18 で、メノウを手に取り、山とメノウとを見比べたが、メノウを置かずに、制作を終了した。

A 氏の主な主観的体験の語りを記す。海のエリアや家畜について、自発的説明過程で以下のように語られた。海にこういういろいろいる生き物たちは、(中略)サンゴの手前は、ペンギンの食べ物です。(中略)食べ物というか漁をする、ペンギン



写真 28 A 氏第 6 回作品

ンが漁をするエリア<なるほど>というふうに思って作りました。<なるほど>うんで、こういうサメやらいろんな、ちょっとおっかなそうなものもいる海で、あの、餌を、とってるんだな—ということですよね (A 氏自発, 6-9)。島の方、うーんとこの山のふもとにも、こう、家畜動物がいて、これもペンギンの餌‘笑’ (A 氏自発, 6-12)。自己像であるペンギンは海で漁をし、家畜動物を飼育していた。

ペンギンやインパラについて、以下のような主観的体験の語りがあった。調査的説明過程でインパラは思いをそのまま聞いてくれる、相棒って言う感じかな(中略)願いはみんなかなえてくれます、(中略)この子に乗って移動すると私はとても楽なんです、このペンギンは、とても楽。<ふんふんふん>で(間)、とても楽、危ないところへも一緒に多分行けるというか、危ないなと思ったら、この子は何か多分いつてくれるだろうし(A 氏調査, 6-12)と語った。また、インパラについて、調査的説明過程で私のために何かしてくれる人なんて初登場。<初登場だよ>ははは‘笑’いい気分ですね (A 氏調査, 6-12)と語った。この語りは、作品に初めて自分のために何かをしてくれる、危ないことを教えてくれる相棒のようなミニチュアが現れ、喜びを実感したと理解できる。

作品全体について、調査的説明過程でこれまでは、<うん>そういう、私が、何かするっていうよりも、こういう世界にいる、っていうような感じを、作った気がしますね。(中略)今日のはそういう意味では私がこうするっていう世界、ですね (A 氏調査, 6-13)と語った。これまでの箱庭制作面接では、自分がこういう世界にいるという作品であったが、今回は、私がこうする世界だと語っている。以前の作品との比較によって、作品内の自己の存在様式とその変化についての気づきが述べられている、と捉えられる。

#### 7) 第 7 回箱庭制作面接 (写真 29)

主な箱庭制作過程を示す。A 氏は、第 7 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 3 で、左側にけわしい崖のある半島を作った。制作過程 5 で、砂箱中央奥に針葉樹、広葉樹を置いた。実のな

る木を、断崖の下の陸地に置いた。制作過程 6 で、右側の砂浜をきれいに整え、突き出した先端に幼子を抱くヨセフ像と灯台(西洋風の塔のついた城)を置き比べ、灯台を置いた。制作過程 8 で、船を取り去り、イルカを 2 頭、海に置いた。制作過程 11 で、砂箱奥の森林に、インパラと鹿を置いた。制作過程 12 で、そこまでに出来上がった箱庭作品をじっと見つめた。女の子は家の前を歩いている位置に、男の子は森に向かう位置に置いた。制作過程 13 で、女の子を取り去り、海



写真 29 A 氏第 7 回作品

に仮置きした。砂箱奥に花をたくさん埋めた。制作過程 14 で、豚を半島手前の位置に置いた。女の子を元の位置に戻した。囲いを作った。制作過程 15 と 17 で、砂箱をじっと見つめた。制作過程 18 で、貝殻を左手前の海の中に丁寧に置いた。制作過程 19 で、海藻、亀を砂箱左奥に置き、右手前の海にネコザメを置いた。制作過程 20 で、海岸線手前の崖に花をたくさん咲かせた。「途中から作っていて、やんなっちゃって‘笑’」と言い、制作を終了した。調査的説明過程で、A 氏は、作品に愛着が湧かないと語った。A 氏の残念な思いが筆者に伝わってきたため、筆者は、その思いを共感的に理解すると共に、愛着が湧く作品に修正できないかと思ひ、A 氏が残したいミニチュアを残し、他は片付ける再構成の提案をした。A 氏はそれに合意した(写真 30)。

A 氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。自発的説明過程で、A 氏は途中で本当に何か嫌になってしまって、これ作るのが、作り続けるのが(A 氏自発, 7-全体的感想)と語った。この理由について A 氏は大別して以下の 4 要因を挙げた。a.自分の内面との照合がうまくいかず、想像を膨らませて箱庭の世界の中で自由に生きることができなかった、b.面接前の仕事での緊張と疲れ、c.第 7 回制作のため、内面を深く掘り下げたものを作りたいという欲求、d.自己像である女性のミニチュアが気に入らなかったこと(A 氏調査, 7-12),



写真 30 A 氏第 7 回再構成後の作品

である。

a について以下のような主観的体験の語りや記述があった。調査的説明過程で、この島と半島と灯台だけでよかったのかもしれないですね。<ふん>それと他のものはもう本当に、なんていうんでしょうね（間 34 秒）表層的なものに感じられて、他のものが。愛着が湧かないです。<あ、ふーん> ああ、でもそれを言うのがすごく悲しい。自分が作っておきながら愛着が湧かないなんて。すごく悲しいですね（A 氏調査, 7-複数過程に亘って）と語った。内省報告に自分の作りたい形, 表現したいものをつかまえて, それをそのように表現するのが, この日はとても難しい。自分の奥の方で感じていることをなかなかキャッチできない。自分の感じていることと表現されたものがぴったりしているのかどうかという照合が, この日は難しく, いつもより時間がかかる。ぴったりしているかどうかをちゃんと照合できていないうちに, 表面的に沸きあがってくるアイデアだけで動いているような感じ（A 氏内省, 7-6, 制作・意味）と記された。また, 私自身がこの箱庭の世界の中で, 生き生きとしてられない。想像をふくらませて自由に生きることが（飛び回ることが）出来ない。陸地の形状が出来たあたりで, こんな世界を作ろうというアイデアが浮かんできて, それに従って, 途中で変更することもなく作り上げてしまった。あらかじめ出来上がったストーリーに玩具を当てはめて置いていったかのようで, そこには私のオリジナリティが感じられない。自分自身の気持ちを常にスキャンしながら作ったのではないような感じ。自分で作っておきながら愛着が湧かない部分がある（A 氏内省, 7-複数過程に亘って, 調査・意味）とも記された。

b について内省報告に以下のように記された。午後中かかった仕事のことを少しずつ振り切るような感じ（A 氏内省, 7-1, 制作・意図）。肉体的な疲労。それと, 緊張感が抜けきっていない感じ。覚醒した意識が off になっていないのだと思う（A 氏内省, 7-全体的感想, 調査・意味）。A 氏は今回の箱庭制作面接の前に仕事があった。その仕事のため, 肉体的な疲労が残っていた。また, 仕事での緊張感が抜け切らず, 覚醒した意識が続いていた。そのようなことを少しずつ振り切ろうとしたが, うまくいかなかった, と捉えられる。

c について内省報告に心のどこかで, 7 回目の制作だし何か内面を深く掘り下げたようなものができるのではないかと, 作りたい, という欲求があったのだと思う（A 氏内省, 7-複数過程に関連, 自発・意味）と記された。

d について調査的説明過程で具象的というか, 具体的な人物像がいかにこうあどけない女の子というか, そういうのが, あの, バンと出てしまうので, それが気に入らないというものもあるんですね（A 氏調査, 7-12）と語った。自己像として置かれた女性像があどけない女の子であることが強調され, それが気に入らないと感じていた, と捉えられる。

しかし, 異なる主観的体験の記述もあった。ビデオを見直している時点では, 出来上がった作品について「つまらない」という印象は薄い（A 氏内省, 7-複数過程に亘って, 自発・意味）と内省報告に初めて記された。

置いておいてもよいミニチュアについて, 調査的説明過程で以下のように語った。あえてその, 作った中で, あの, これはここの世界に置いといてもいいなと思うのは, ここの半島と灯台と, この針葉樹とこの, あの, なんて言うのかね, 二匹<二匹>二頭。ぐらいで

すかね。(中略)後はほんとお飾り。(中略)(中略)それから、もう少し言うとしたらば、海の、(間2秒)亀と貝はちょっと愛着がありますね。イルカと、なんででしょう、ネコザメ?、ぐらいですかね(A氏調査,7-複数過程に亘って)。

野生動物や森について、調査的説明過程で私って何かこう命に対してはすごく、あの、神秘的なものとか神聖なものとか、そういうのをイメージもってるのかもしれないですね。(中略)針葉樹のこのエリアな、は神聖な場所のように思ってもいい(A氏調査,7-11)と語った。

#### 8) 第8回箱庭制作面接 (写真31)

主な箱庭制作過程を示す。A氏は、第8回箱庭制作面接の箱庭制作過程7で、白い女性の人形を砂箱中央付近にゆっくりと置いた。その人形の下を少し掘って、人形の周囲に砂を少しだけ盛るようにした。制作過程9で、アライグマの家族を白い女性の人形の右側に、自分たちのペアを白い女性の人形の左側に、白い女性の人形の左後ろにもう一ペアを置いた。制作過程10で、白い女性の人形の周囲にペンギン(大・小)、インパラ、羊、牛、豚、亀など置いた。制作過程13で、白い女性の人形の正面、砂箱手前中央に赤い鳥居を置き、箱庭制作を終了した。

A氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。白い女性の人形について、調査的説明過程で以下のように語った。少し下に置く事で、この人形を守るような、大事に(間4秒)保護するような、そういう感覚があったんだろうな(A氏調査,8-7)。また、すごく不思議なんですけど、これ作っている最中、この辺の動物を、なじみの動物を置く時に、なんかこれが母ではなくなって私になっていくなってしまうような感覚が少しあって、<あ、なるほど>うん、あれあれあれと思いつながら<そのあれあれあれっていうのは>あの、私にも母にも共通する何かがあるなって言う、あの、女性という、うん、(間3秒)女性っていう命が持っている何か、意味のようなものを感じるというかね(A氏調査,8-10)。そして、内省報告には、義母の周囲にこれまでに使った動物達を置くことで、白い人形は自分でもあるのだろうかという気分になった(A氏内省,8-10,調査・意味)と記された。白い女性の人形は、義母でもあり、自分でもあるという多義的なミニチュアであることが示された。また、中央の白い人形が自分であつたら少しうれしいような気もする。それは周囲にいろんな

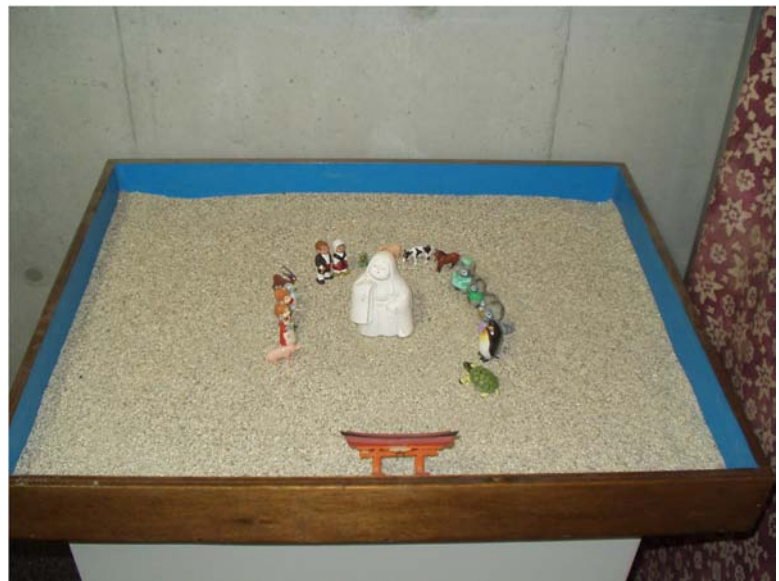


写真31 A氏第8回作品

守りがあると言うこと、それと自分の中の何か、こんなにも大きくてどっしりとしている  
ということだから（A氏内省, 8-10, 調査・意味）とも記された。以前使ったなじみの動物  
を置くこと(連続性)によって、義母として置いたミニチュアが自分に変化した。これはイメ  
ージの自律性や集約性に関する体験と考えられる。そして、その体験によって、自分と母に  
共通する女性という命がもっている意味、周囲の守り、自分の何かが大きくてどっしりして  
いるという感覚を感じることができた、と捉えられる。

鳥居について、調査的説明過程で A 氏は これがあると、（A 氏調査, 8-13）ここに置いた  
人形たちに、命が入る感じがするんですね（A 氏調査, 8-複数過程に亘って）と語った。

第 8 回ふりかえり面接で、第 8 回の箱庭制作について [自分自身をね。あけ放すという  
か。(中略)あけ放す。手放す。そんな感じで作っていたような気がします。(中略)鉤括弧の  
ついた私っていうのはひとまずお預けっていうような感じで作っているのかなー]と A  
氏は初めて語った。

### 9) 第 9 回箱庭制作面接（写真 32）

主な箱庭制作過程を示す。A 氏は、第 9 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 3 で、5 個の洋館  
を棚からも持ってきて、洋館を手にとったまま砂をじっと眺めた。数個の洋館を何度も見比  
べた。制作過程 4 で、砂箱中央よりやや奥のあたりに、砂箱左側から右側へ川を作り、橋を二  
本かけた。制作過程 5 で、洋館を川向こうの土地に 1 軒、川の手前の砂地に 3 軒置いた。陶  
器の家を数軒置き、手前の砂地が円形のロータリーのような広場になるようにした。制作過  
程 6 で、砂箱右手前隅に男女のペア、左奥の川向こうに女性、左手前隅に男性、右に男性の  
人形を置いた。星の王子様を左の洋館の近くに置いた。砂箱右奥隅と左奥隅に針葉樹を置  
いた。その後、自動車、自転車、ベンチ、ネコなどを広場に置いていった。川には栈橋付きの  
船や水鳥の親子を置いた。砂箱右奥、左奥、川向こうを何度も交互に確認し、箱庭制作を終了  
した。

A 氏の主な主観的体験の語りや  
記述を記す。A 氏は調査的説明過  
程で、今回の箱庭は、明け渡して作  
ったと言った時があったですよ  
ね(第 8 回作品)、あの、あの、雰  
囲気をちょっと思い出して、あの、  
あんまり考えずに作ろう（A 氏調  
査, 9-5）と語っていた、と語った。

広場や街について、A 氏は、調査  
的説明過程で以下のように語った。  
碁盤の目のようなそういう町には  
すごく置きづら、いんですよね、  
なんか。すごくた、建物にしても、  
こう、こちら側が正面だとこちら



写真 32 A 氏第 9 回作品

側が後ろとか、(中略)前と後ろが出て、なんか置きにくいなと思ったんですよね。うん、  
そいで丸くしたんですよね。(中略)でも、今、今思うと、何かこう、私って丸い、モチーフ  
のようなものを作るのが多いなと思うんですけどね。丸だとどうしてもここで閉じてしま  
って他に広がっていかないっていうか、なんかお互いにこう、見合って、三すくみじゃな  
いですけど、‘笑’見合うばっかで他に広がっていかないなんていうことを、今、今思い  
ましたね(中略)だから、こう、碁盤の目の、何か1ブロック、1ブロックって作ると、表  
と裏が出来てしまって、それが何か私には扱いきれない感じが、あるん、です (A氏調  
査, 9-5)。

気持ちよさや実際に動いてみたい感じについて、調査的説明過程でドアを開けたらすぐ  
私はなんか映画館に行っちゃいそうなの、そんな感じがあって、作ってる最中に (A氏調  
査, 9-全体的感想) と語った。内省報告には、第9回箱庭制作面接の実施前に、A氏は、最近、  
実際に動いてみたい、感じてみたい。その経験から自分が豊かになれるようなそんな希望  
(期待)がある (A氏内省, 9-3, 調査・意味) と思っていたことが記された。また、ドアを開  
けたらそのまま、自分の欲求のままに現実世界で自由に行動を始めよう。足が軽くなってい  
るというか、体が前に出ているというか、頭であれこれ考えないで、まず体が行動している、  
そんな感じ (A氏内省, 9-全体的感想, 調査・意味) と外に向かって動こうとする身体感覚  
を感じたことが記された。

教会について、調査的説明過程で以下のように語った。これ‘右端の建物を指差しながら’  
が教会という事にして、あえて置かなくていいや今日は、と思って終わりましたね。(中略)  
あ、そうだ、教会の建物にしてしまって、この中にそういう神社の鳥居だとか、あのマリ  
ア像だとか、キリスト像に当たるものがこの中にあるんだということで私は、納得して、  
あの、これまでのマリア様や神社とは違う性格の教会ですね、これは<そうだね>もっと、  
もっとちゃんと現実の世界に降りてきてるもの(中略) ちょっとうれしいですね、何か。<  
ふーん、うれしい>うん。なんか私の内側にそういうものが根付いたようなそんな感じが  
します (A氏調査, 9-6)。また、内省報告に表に出なくていい、表に出さなくていい、そんな  
感じ。大事なものだから、自分の中であって、それを自分がわかっていたらいいんだ (A氏  
内省, 9-6, 調査・意味) と記された。A氏の宗教性に関するイメージや考えがこのような構  
成に反映された、と捉えられる。

#### 10) 第10回箱庭制作面接 (写真 33)

主な箱庭制作過程を示す。A氏は、第10回箱庭制作面接で初めて、砂箱左側から砂箱を縦  
位置に使うって、作品を構成した。A氏は、第10回箱庭制作面接の箱庭制作過程4で、砂箱を  
縦に使う位置に立ち、陸地を左右に分けるように中央の砂をかき分け、水路を作った。制作  
過程8で、女の子を縦位置で右側の岸边に置いた。制作過程10で、犬・インパラを女の  
子の人形の周囲に置き比べて、インパラを置いた。制作過程13で、左手奥に置いていた青  
い鳥を、縦位置で右手前の女の子の人形の後ろに置いた。柵にもたれるおじさんの人形を様  
々な位置に置き比べたが、制作過程14で、柵にもたれるおじさんの人形を柵に戻した。制  
作過程16で、男女の人形を左側に置き、じっと眺めた。制作過程17で、柵にもたれるおじ

んの人形を、もう一度持ってきて、置いてみるが、棚に戻し、箱庭制作を終了した。

A氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。今回の作品について調査的説明過程で私の中の奥まったところを作った（A氏調査, 10-全体的感想）と語った。

川によって分かれた直線的な構成について、以下のような主観的体験の語りがあった。A氏は、第10回箱庭制作面接で、第9回箱庭制作面接での気づき、第9



写真 33 A氏第10回作品

回と第10回の間の実生活での試み、第10回の構成の変化について、調査的説明過程で次のように語った。箱庭の中で私はずっとその、丸いモチーフを作るなど、ちょっとそれが、お互いに、こうすくみあってるみたいで嫌だなんていうのがあったんですけど、（A氏調査, 10-前回について）それが1週間頭の中にあって。なんか、違う位置から見たいっていう気持ちで、すごく1週間意識してたんです、実は。（中略）カーナビは）北を上を設定も出来ますよね。それに変えたんです、最近。（中略）カーナビ見る度に、すごいおもしろい、私今こんな方角に進んでたんだとか。そういうのがすごくその新鮮というか小気味いいというか、何か、私の心の中の世界とそういうことってシンクロしてるような気持ちがちょっとあって（A氏調査, 10-前回と今回との間のこと）（中略）（前は）碁盤の目のように置けない、って言った私がいるんですけど、それはもう怖くなくなってる。碁盤の目のようにできそうだな、ってゆうのを感じながら、こういう配置にはしてみましたね<はあ>（A氏調査, 10-全体的感想）わりとこう、パキーンって‘手を左から右に川をなぞるように直線的に動かしながら’て分かれてますよね。<そうだね>こう、行になってるから。でもそれが小気味いいし（A氏調査, 10-4）。A氏は、第9回箱庭制作面接での気づきを踏まえ、現実で自分の進行方向を指し示す方法を変え、それが自分の心の中の世界とシンクロするような感覚をもった。その変化もあり、第10回で今までと違う位置（砂箱の左側）から、違う構成を試みることができた。この構成にもA氏は小気味よさを感じた。このように、違う立ち位置からの構成は、A氏の心の中の世界とも箱庭制作面接外の行動ともシンクロしたものであった、と推測できる。

自己像である女性がインパラと青い鳥とともに歩いている構成について、A氏は調査的説明過程で海の方なんですけどね、こっちに歩いて行ってる、ところです。（中略）まだまだ海まで遠い（A氏調査, 10-8）（中略）ずっと歩いて行くのねっていう（A氏, 10-全体的感想, 調査）と語った。青い鳥について、遠くにあるんじゃないかっていう

（A氏調査, 10-13）とA氏は語り、自分の頭の上、自分の近くを飛んでいる思ったことが示された。面接終了後も、制作者が、同伴者とともに、自らの心の中の世界を歩いていく実感をつか

んだ最終回であった,と捉えられる。

砂箱奥の男女の人形や柵にもたれるおじさんの人形について,以下のような主観的体験の語りや記述があった。砂箱奥の男女の人形について,A氏は調査的説明過程で心の奥まった世界の中にも,まあ,人がいてくれたほうが,あの,まったくないよりは,さみしくないというかね(A氏調査,10-16)と語った。内省報告に自分ひとりでは生きられないというあたりまえのことを自覚しながらも,私の心の中に他人が入ってくることをこれまでは許していなかったし,それでいいと思っていたような気がする。多少の違和感があるけれども,それでもその違和感を抱えながら,その人たちと生きていこうと,今の私は思うようになったのか。(中略)一緒に生きても楽しいだけじゃなくていやなこともありそうだけれど,一緒に生きてみようと思っているようだ(A氏内省,10-16,制作・意味)と記された。また,柵にもたれるおじさんの人形について,A氏は調査的説明過程でいろんな方向からその相手が見えるというか(中略)今は。この人がいて,そ,その人を正面からも見るし,後ろからも見るし,横からも上からも見る,そんなことを,し始めているなど思ってるんです。<なるほどね>それはとつてもその,私の中ではおっきな変化だと思ってますね(A氏調査,10-17)と語った。様々な視点から他者を見て,他者の多様性を知った上で,他者が自分の心の中に入ってくることを許し,違和感を抱えつつ共に生きようとする関係性の変化が生まれた,と理解できる。

## XI-2. A氏の主観的体験の変容と面接の展開に関する考察

A氏の第1回箱庭制作面接から第10回箱庭制作面接に亘って,箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開,その個人的意味を,1)主なテーマと自己像の変遷,2)宗教性(命,守り,神聖な場所・生き物),3)女性性,母性,4)自己の多様性と能動性の獲得,他者との関係性の変容,5)受動性と能動性,面接内外での深い関与,の観点から考察する。

### 1) 主なテーマと自己像の変遷

第1回箱庭制作面接の主なテーマは導き手を伴った船出,と捉えられる。亀(見守り手(=筆者)あるいは自分の中のある部分)は,砂箱枠外にイメージされた嫌なものとの間に入り,イルカ(自己像)を守ってくれる,知恵のある存在である。イルカは亀に今はついて行こうと思ひ,亀と共に広い海原に旅立とうとした。この旅はこれから展開する箱庭制作面接での,箱庭制作者の心の旅と考えられる。

第2回箱庭制作面接の主なテーマは命であると捉えられる。第2回には様々な様相の命が構成された。

第3回箱庭制作面接の主なテーマは一人での旅立ちと捉えられる。第1回箱庭制作面接では導き手(亀)が必要であったが,今回は亀が自己像となり,一人で外海へ泳ぎだそうとした。この自己像の変化は,箱庭制作者が導き手の知恵や守りの力を自己に取入れることができたためと考えることもできよう。そして,お互いの動きを規制している輪からはずれて独自の道を歩み始めた。

第4回箱庭制作面接の主なテーマは新たな自己の誕生への道程と捉えられる。渦の入り口の亀を見て,筆者は外海を旅した亀がここにたどり着いたように感じた。その理解はふり



かえり面接で箱庭制作者に支持された。A氏は渦をすべての始まりと終わり、世界のあらゆるものを盛り込んだ根源的なものと捉えていた。その渦の中心は亀が新たな自己として生まれる場所であり、制作者の心の内奥であると考えられる。本作品は展覧会で見たマンダラに触発され作られたが、制作者には作品の意味が捉え難いものであったことから、本作品は意図を超えた要因の強い作品だと考えられる。

第5回箱庭制作面接の主なテーマは私の島への上陸と捉えられる。この島は他人が登れない私の島である。大きな亀は陸の亀に任せ、待っている。第4回で新たな自己の誕生を体験した亀が、他者との明確な境界をもつ自分の世界を得たと考えられる。次回以降、自己像が変化することを考えると、自己像である亀の旅のゴールと捉えることができる。戦いのイメージがある、空いているスペース全体が自分に問い掛け、突き詰めて、試そうとしている、とA氏は感じた。この厳しさの一因は日常と関連しており、第4回の内奥の世界に比べると、少し日常に近づいた世界だと筆者には感じられた。厳しさを和らげるために、希望としての青い鳥や暖かい場所や食べ物を置いた。

第6回箱庭制作面接の主なテーマは私がこうする世界であると捉えられる。これまではこういう世界にいるという作品だったが、本作品は私がこうする世界だと、箱庭制作者は変化について語った。自己像が亀からペンギンに変化した。ペンギンは相棒のインパラと島を開発し、ちょっとおっかなそうなサメがいる海で漁をする。私が食べるものたちを意識していたとあるように、生きる上で必要な攻撃性をペンギンが獲得したとみることができる。この攻撃性は、第2回のライオン(「自分が生きていくためには、時には相手を喰らうことも必要」)からの発展と考えられるが、今回、その攻撃性が自己像の特性となったことが第2回からの変化であると考えられる。

インパラは導き手の亀(第1回)、待っている亀(第3回、第5回)と、共通点と相違点をもつ存在だと、筆者は感じた。自己像となる存在を信頼するとともに、危険を教えてくれる知恵をもつ点が共通性であり、ペンギンを乗せて同伴し、ペンギンの指揮を受ける相棒であることが違いと感じた。自己像が主体性を保持しつつ、他者との協働性を獲得したと考えることができる。また、家畜動物は柵で囲まれ、筆者は第5回よりさらに人間の世界に近づいたと感じた。

第7回箱庭制作面接の主なテーマは表層的で愛着が湧かないという感覚であると捉えられる。A氏はこの感覚の原因に、4要因を挙げた。a.自分の内面との照合がうまくいかず、想像を膨らませて箱庭の世界の中で自由に生きることができなかった、b.面接前の仕事での緊張と疲れ、c.第7回制作のため、内面を深く掘り下げたものを作りたいという欲求、d.自己像である女性のミニチュアが気に入らなかったこと、である。

別の捉え方も可能であろう。今回は面接の過渡期だったのではないか。第6回箱庭制作面接は柵に囲まれた家畜がいる人間世界に近い世界だった。今回初めて自己像に人のミニチュアが選ばれ、初めて人の世界を作ろうとしたが、表層的で愛着が湧かない作品となった。制作者の残念な思いが筆者に伝わってきたため、愛着が湧く作品に修正できないかと、再構成を提案した。制作者はその発言が終わるのを待たずに、ぴったりこないミニチュアを片付け始めた。調査的説明過程の再構成後、残ったミニチュアはほとんどが今までに使わ

れたものである。そして、今までの回のように人が登場しない世界となった(写真 8)。また、ビデオ視聴時には「作品について『つまらない』という印象は薄い」との内省報告からも表層的で愛着が湧かないという感覚は、変化しうるということがわかる。この 2 作品は、多面鏡で見る自己像のように、制作者の意識の基盤と今後の展開を表現したものと見ることもできよう。今回は人の世界をも取り込んだテーマに変化するための過渡期であったと考えられる。

第 8 回箱庭制作面接では人のミニチュアが置かれ、人の世界が作られた。箱庭制作者は現実世界での生き様と内的な世界を統合した人の世界を、この作品で初めて制作できたと捉えることができる。この作品を作ることで、制作者は女性という命に関する深い気づきを得た。

第 9 回箱庭制作面接の主なテーマは現実的な世界であると捉えられる。作品は、星の王子様(自己像)が映画を見ようと町に出てきた時の風景である。この作品は自分を明け渡しのかのような感覚で考えずに作ったものであったが、この回が始まる前から感じていた思い(想像するだけでなく、街に出て、実際に動いて、感じてみたい。その経験から豊かになれるような希望がある)が表現されたものとなった。制作中、ドアを開けたらすぐに映画館に行ってしまうような気持ちよさを箱庭制作者は感じた。この外に向かう身体感覚は、第 10 回で語られる、第 9 回と第 10 回との間での現実世界での試みを生む一因と考えられる。

第 10 回箱庭制作面接の主なテーマは私の中の奥まったところであると捉えられる。今回は第 9 回(現実的な世界)よりも、自分の中の奥まったところを作った、と A 氏は語った。

第 10 回には、第 9 回での気づき、第 9 回と第 10 回の間での現実世界での試み、第 10 回での構成の変化について、以下のような主観的体験があった。箱庭制作者は第 9 回での気づきを踏まえ、現実世界で、カーナビの自分の進行方向を指し示す方法を変え、それが自分の心の世界と シンクロしている感覚をもった。その変化もあり、第 10 回で今までと違う砂箱左側の位置から、川でパキーンと分かれた違う構成を試みることができた。制作者は、箱庭制作面接内だけでなく、外界でも主体的に自己の課題に取り組み、気づきを得て、心や生き方の変容が生まれている。この箱庭制作面接内外での真摯な取り組みや深い関与は制作者の心の変容に大きな影響を与えたと考えられる。

自己像である女性はインパラと青い鳥と共に歩いている。インパラが先に歩くことで A 氏は安心できた。青い鳥は遠くにあるのではなく、もうここにあると A 氏は感じた。その同伴者とともに、私は ずっと歩いて行くのねっていうと A 氏は感じた。面接終了後も、制作者が、同伴者とともに、自らの心の世界を歩いていく実感をつかんだ最終回であったと捉えられる。

他者との関係性でも制作者は変化を感じている。以前と違い、いろんな方向から相手が見える、相手を見るという見方ができるようになり、それを大きな変化だと感じた。また、今までは、自分一人で生きられないことを自覚しながらも、心の中に他人が入ってくることを許していなかった。しかし、今は違和感を抱えながらも、他人と一緒に生きていこうと思うようになった。他者の多様性を知った上で、他者が自分の心の中に入ってくることを許し、共に生きようとする関係性の変化がみられる\*<sup>2</sup>。

## 2) 宗教性(命, 守り, 神聖な場所・生き物)

第1回箱庭制作面接のマリア様は守りであり, その場所に命を吹き込み, 命を見守るものと箱庭制作者は感じた。そして, 私の中には意外に宗教性が根付いているのかもしれないとの気づきを得た。

第2回箱庭制作面接の主なテーマは命であると捉えられる。第2回には様々な様相の命が構成される。命を感じられない大地がおそろしい, とA氏は感じる。A氏はこの土地に命を必要としていると考えられる。青い鳥は命を感じられない苦しさを消し去る, 意図しないところからやってきた存在である。青い鳥によって, 箱庭と制作者の心の調子に変化し, もう少し命を感じたいと思った制作者は, 鴨を見つけ置くことができた。

異質な命も登場する。石は生命感が薄く, はっきりとした形をまだ持たない, 抽象的なものである。土偶と埴輪は, 半分人間ではない命になっている, 神様に近い存在である。信仰対象のお山のふもとにいる山の番人でもある。第2回には, まだ形をもたない抽象的な命, 生命感を感じさせる命, 半分命ではない神様に近い命というように, 命の多様な様相が表現されている。

第4回箱庭制作面接は第1回, 第3回の旅の一つの到着点であり, 第2回で示された命というテーマの展開でもあると捉えられよう。旅をしてきた亀という命が新たな自分として生まれ変わろうとしていると理解することができる。

第5回箱庭制作面接の鳥居がある場所は神聖な場所で, 神聖な鹿が住む。鳥居は守りであり, 鳥居を置くことにより, 島に命が芽生えたような安心感が湧く。第7回箱庭制作面接にも神聖な場所が作られた。制作者は命に対して神秘的で神聖なイメージをもっていることに気づいた。第8回箱庭制作面接では, 鳥居を置いたことで, 義母や周りを取り囲む親族, 自分等の人形に命が入る感覚をもった。

第9回箱庭制作面接に変化がみられた。A氏は, 今までマリア様や十字架のようなものがない箱庭を作ったことがないような気がして, どうしようかと思った。だが, 右端の建物を教会の建物と考えて, その中に宗教的なものがあると納得した。この教会は今までと性格が異なり, 現実の世界にちゃんと降りてきているものである, との主観的体験が語られた。このように, 宗教的なミニチュアの表現と意味の変化が生まれた。この箱庭制作過程に関する内省報告に, 表に出なくていい, 表に出さなくていい, そんな感じ。大事なものだから, 自分の中であって, それを自分がわかっていたらいいんだとあり, 変化の内的意味が自覚されている。ちょっとうれしいですね, (中略) 私の内側にそういうものが根付いたようなそんな感じがしますとあり, 宗教性が自己の内側に根付いた喜びを, 箱庭制作者は実感できたと捉えられる。

## 3) 女性性, 母性

女性性は面接申込時に感じていたA氏の自己の課題の一つであった。第1回箱庭制作面接で, 鳥の巣は使いたいミニチュアだが, 海ができたため, 代わりに貝を置いた。貝を通して, 守る・はぐくむという女性的な面を私は自分のものにしていく。5・6年前, 女性性を受け

入れられていなかった頃の自分との違いを感じることができた。箱庭制作者のこの主観的体験を尊重しつつも、同時に筆者は別の印象も抱いている。制作者は鳥の巣を手にとった際、卵を落とし、使わず棚に戻した。卵の落下は偶然の出来事とも捉えうるが、卵を使うにはまだ制作者の内的準備が整っていない現れのようにも、筆者は感じた。

第4回箱庭制作面接には卵を抱えた鳥の巣が重要な意味をもった。鳥の巣は子どもをかえすものであるため、子どもをもたない制作者は手を伸ばすことができなかつた。女性性・母性を感じさせるミニチュアに手が伸ばせないことの心理的意味に気がつくと同時に、辛さや切なさを感じた。しかし、この回に、A氏は、亀を鳥の巣がある場所に新しい自己として産みおとすために、産道を広げ、亀を進める行為を何度も行っている。この辛さや切なさ、亀を産むために産道を広げ、亀を進める行為は共に、箱庭制作者の女性性・母性を巡る心の事実であり、心の多層性の現れと考えられよう。

第8回箱庭制作面接の主なテーマは女性という命であると捉えられる。人形の白い肌が入院中の義母をイメージさせ、大切に扱わねばという気持ちが高まった。A氏は、義母をガードしなければと感じ、砂を掘り少し低い位置に置き、人形の周りに土手のように砂を盛り上げた。このように箱庭制作者は義母の人形を大切に守ろうとした。その後、白い人形の周囲にこれまでに使ったなじみの動物を置くことで、白い人形が義母ではなく、自分になっていく感覚が生まれた。このイメージ体験により、制作者にも義母にも共通する女性という命がもっている意味、周囲の守り、自分の中の何かが大きくてどっしりしていると感じることができた。制作者は自らの女性性を実感・確認できたと捉えられる。

#### 4) 自己の多様性と能動性の獲得, 他者との関係性の変容

第1回箱庭制作面接時点では、A氏は自分のベースはひっそりと静かなもので、活動的ではないと感じていた。この認識が箱庭制作面接開始時点でのA氏の自己認識であった。だが、以後、異なる面を発見していく。

第2回箱庭制作面接でA氏は、砂箱右下隅にライオンを置いた。その箱庭制作過程について内省報告に、力強いもの、凶暴なものに憧れのような、親近感のような感覚を抱く。自分が生きていくためには、時に相手を喰らうことも必要、と記された。これは、攻撃性の積極的意味に気づいたと理解でき、第1回箱庭制作面接における自己認識に変化が生まれ、多様性の獲得が始まった、と捉えられる。

第3回箱庭制作面接でA氏は、自己開示ができていることを認識し、ありのままの自己の受け入れが進んだと思われた。また、回遊しているシャチ、イルカ、亀を見つめ、亀の頭の方を陸側から海の沖合の方向に変えた。この構成で、箱庭制作者は独自の道を歩もうとしている自分を確認した、と捉えられた。第1回箱庭制作面接ではイルカは自己像であり、亀は導き手だった。この回で、自己像が亀に変化し、一人で外海へ泳ぎだそうとした。この自己像の変化は、制作者が導き手の知恵や守りの力を自己に取り入れることができたため、と考えることもできた。自己受容が進むと同時に、独自の道を歩むという能動性を発揮し始めた、と理解できる。陸の亀は、沖に向かう亀を信頼して、見送った。このように信頼して、待っていてくれる存在が生まれた。

第4回箱庭制作面接で、A氏は渦巻き状の水路を作り、亀が渦の中央に向かう構成を行った。渦の中心は、女性性・母性に関わるイメージやゴールなど多義的なイメージをもった領域であった。その一つとして、渦の中心に新しい自分がいるという箱庭制作者の主観的体験があった。自己像である亀は、新たな誕生を体験した、と捉えられる。

第5回箱庭制作面接では、高くそびえる山からなる島に、亀(自己像)が上陸した。この島は、自分の島なので他の人は登って来れないこと、また、それを意識して、意識的に境界をくっきりさせたことが語られた。自己と他者との間の境界である自我境界や自己イメージが明確になった、と理解できる。そのような島に、海を旅し、渦の中心で新たな誕生を体験した亀が到着し、上陸しつつあるように、筆者には感じられた。

第6回箱庭制作面接で自己像であるペンギンは海で漁をし、家畜を飼い、相棒であるインパラと島を探検した。家畜を飼い、相棒と探検するというように、自己像が世界により強く関与し、世界を管理していた。作品内の自己の存在様式に変化が見られた。前回では自己イメージが明確になったと捉えられたが、今回はさらに自我機能が強化され、周りの環境をコントロールしていく能動性が自己像に生まれた、と捉えることができよう。また、知恵をもち、協働できる相棒といえる存在が初めて現れ、他者との関係性の変容も生まれ始めた、と理解できる。

第7回箱庭制作面接は、人の世界をも取り込んだテーマに変化するための過渡期であった、と考えられる。第8回箱庭制作面接で、A氏は現実世界での生き様と内的な世界を統合した人の世界を、この作品で初めて制作できたと捉えることができる。

第9回箱庭制作面接で、最終的な作品として初めて街の風景が構成された。箱庭制作過程でA氏は、最終回のイメージのような気持ちよさを感じた。それは、今までの箱庭制作面接では報告されたことのない身体感覚であり、身体が外の現実世界に向かい、自由に身体が行動しているというような能動的な身体感覚をこの回で初めて感じた、と捉えられた。Kalff(1966 大原他訳 1972)は、箱庭療法における遊びの本質として、内から外への変化を指摘した(p.v)。A氏第9回箱庭制作面接では、その内から外への変化は、まずは内界が表現された街の風景の構成に顕れ、さらに構成を超えて面接外の外界にまで広がっていくような身体感覚が生まれた、と考えられた。これは、自己と他者を含めた外的世界との関係性が変容する萌芽となる身体感覚だ、と捉えることができる。そして、この変化は、第10回箱庭制作面接で報告された外界と自分の心のシンクロを生む基礎となった、と推測することができる。

A氏は、第10回箱庭制作面接で、現実でカーナビの自分の進行方向を指し示す方法を変え、それが自分の心の世界とシンクロするような体験を通して、日常生活と箱庭制作面接の両方の場において、行動レベルでの変化と内的な変化が生じた。面接終了後も、箱庭制作者が同伴者とともに、自らの心の世界を歩いていく実感をつかんだ、と捉えられた。他者の多様性を知った上で、他者が自分の心の中に入ってくることを許し、共に生きようとする、他者との関係性の変容が生まれた、と理解できた。

## 5) 受動性と能動性、面接内外での深い関与

第1回箱庭制作面接でA氏は作品に対して、わたしの中から、こんな世界が、あの、出てきてくれたんだなあ、って。自分でこういう世界を、わたしの目に見えるように、作ってあげられて、嬉しいと語り、内省報告に、短時間でも集中して、没頭して作り上げた作品は、いわば私の子ども、私の分身。作ったのは紛れもない私だけけど、作らせてもらったような、ありがたいような気持ちと記した。a.子ども、分身と感ずるほど制作に強く深く関与できたこと、b.自分の中から出てくるものを受けとめる受動性とそれに従って目に見えるように作品を作り上げていく能動性との協働が、創造的な面接過程を生起させた重要な要因の一つだと考えられる。

また、箱庭制作者にとっては、命や女性性もまた、与えられるとともに自らが守るものである。例えば、マリア様や鳥居によって命を吹き込まれ、見守られるという受動性を体験した。亀を産みおとすために産道を広げる能動的行為を制作者は行った。亀は新たな自己として産み落とされるために進むという受動・能動両方の行為を体験した。大事に守ろうとした義母の周りに、なじみの動物が置かれることで人形が自分に変わり、女性という命の意味と周りの支えを実感することができた。箱庭制作と命、特に女性という命に共通する、受動性と能動性の協働と、箱庭制作への関与の強さ・深さが、制作者の心の変容と面接の展開を促進した重要な要因の一つであると考えられる。

さらに、第8回と第9回箱庭制作面接では、自分をあけ放す、手放す、明け渡すという受動的な態度で、箱庭制作に臨んだ。この受動性は、「主体であるということは、むしろ自分を何かに委ねてしまい、いわばコントロールを失うことである。[中略]できていく箱庭に主体を委ね、主体をいわば逆に捨てることなのである」(河合俊雄, 2002)という主体のあり様と考えることができる。

第9回箱庭制作面接での気づき、第9回と第10回との間の現実世界での試み、第10回での構成の変化に現されたように、制作者は箱庭制作面接内外で主体的に自己の課題に取り組んでいる。この真摯な取り組み、深い関与も制作者の心の変容の大きな要因の一つと考えられる。

以上、A氏の第1回箱庭制作面接から第10回箱庭制作面接に亘って、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を、考察してきた。その考察を通して、箱庭制作面接が継続する中で、多様な変化や成長が、連鎖的に生じていったことが確認された。

## Ⅻ章. 箱庭制作面接の質的研究による系列的理解 —箱庭制作者 B 氏—

B 氏の主観的体験のデータを質的研究による系列的理解によって,詳述し,考察する。まず,主な箱庭制作過程と主観的体験について詳述する。その後,以下の2観点から検討する。B 氏はクリスチャンである。B 氏の箱庭制作面接では,宗教性・信仰が主要なテーマとなった。そのため,1)宗教性を中心とした心や生き方の変容の観点から考察する。次に,2)心の多層性の観点から考察する。この考察を通して,箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開,その個人的意味を確認していく。

### Ⅻ-1. B 氏の主な箱庭制作過程と主観的体験の詳細

#### 1) 第1回箱庭制作面接 (写真 34)

主な箱庭制作過程を示す。B 氏は第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程1で,砂箱中央の砂を掘り,底の青の色を出して,泉(水源)を作った。制作過程4で,水辺の魚,水を飲む牛を置いた。制作過程6で,B 氏は,「水の恵みを受けて育つ木々を探し,水源周り」に置いた(「」内は,内省報告に記された,当制作過程の内容を示した B 氏自身の記述)。制作過程7で,「木が足りないと感じられたので追加」した。

B 氏は,人々の生活(箱庭制作過程8~26,38~41)を構成していった。例えば,木々を追加した次の箱庭制作過程8で,B 氏は「生活感のあるものがほしいと思う」。制作過程12と制作過程13の馬車に乗る人を砂箱左中央の家の横に,往來を歩く人を砂箱左手前と砂箱左手前のやや中央よりに,選び,置いた。制作過程14と制作過程15で,B 氏は「家畜や家の周り」にいる生き物などがほしい」と思い,棚でミニチュアを探し,水鳥,鳩を選び,水鳥を水源に,鳩2羽を家の前に置いた。制作過程25と制作過程26で,B 氏は「生活感の感じられる人物を求め」,「行き交い,挨拶を交わす人,果実などを採る人」を置いた。

箱庭制作過程32と制作過程33で,船を見つけ,砂箱右奥隅に海を作り,船を置いた。制作過程36と制作過程37で,ルーペを見つけ,船が浮かぶ海辺にルーペを置いた。

箱庭制作過程43で,祈る人を見つけ,制作過程44で,「旅の安全を祈る人として海辺に」置いた。世の不幸と幸せ(制作過程45~52)などを構成していった。例えば,制作過程45から48に亘って,「世界には不幸もあることを思い起こし,「銃を持つ人を見つける,悲しむ人,被災者を現すイメージのもの」を探し,砂箱右手前隅の木の裏手に銃を持つ人,悲しむ人を置いた。制作



写真 34 B 氏第1回作品

過程 51 と制作過程 52 で、合唱する人たちを選び、砂箱左奥隅に合唱する人たちを置いた。遊ぶ子どもを置いた(制作過程 58～62)。

箱庭制作過程 64 であやめや花束を選び、制作過程 65 であやめを水源の上に、花束を水源の左に置いた。制作過程 66 で、民家の位置を整え、箱庭制作を終了した。

B 氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。中央の泉の構成について、B 氏は調査的説明過程で中心に、この、まあ、水を置いたんですけども、やっぱり、なんか、人にはなんか核になるような、その、いろんな意味での、その、発想だとか、意欲だとか、いろんな意味で核になる、その中心の部分というのが、うん、やっぱり感じてしかたがないと。で、まあ、そういったものを、自分はそこを中心にして、いろいろ据えていくんじゃないかな (B 氏調査, 1-2) と語った。また、その構成について、調査的説明過程で以下のようにも語った。宗教的な建物とか、仏像だとか、マリア像だとかあるわけですよ。まあ、私自身、(中略)そういったもので表わされる大切なものとか、意識として、やっぱりあるわけですよ。で、たぶん、私の中にはその、水といったところで表したものが、そういうものにつながっているようなところがあるんだけど、うん、その実際にそれを表わすのに、十字架を置くとか、マリア像を置くかという、それには、抵抗があったわけです。<なるほど>で、つまり、それが、あの、いかに、その、表現しつくせない。人為的な、その、形っていうんでしょうか。シンボルっていうか、うん、で、それを置くとかえって、その、自分が感じているとか、思っている、その、こんこんとわき出るような躍動感とかいう意味でなんか、表わすにはちょっとみすぼらしすぎるというか。うん、でまあ、それは逆に選ぶ気になれなかった (B 氏調査, 1-2)。内省報告には以下のように記された。生命の源 (B 氏内省, 1-2, 制作・意図)、深部からこんこんと湧きでる、つきない泉 (B 氏内省, 1-2, 制作・感覚)、神、生命 (B 氏内省, 1-2, 制作・連想)。泉は B 氏にとって、核になるものであり、それが砂箱中央に構成された。その核を中心にして、様々なものが構成されていった。その核となるものは神の表現でもあり、B 氏にとって、こんこんと湧きでるような躍動感をもつ命の源でもあった。それを表現するには、十字架やマリア像では表現しつくせない感じがして選ばなかった、と B 氏は語った。

制作過程 4 の水辺の魚、水を飲む牛、箱庭制作過程 6 の水の恵みを受けて育つ木々を水源周りに置くという構成、制作過程 7 の木を追加するという構成、制作過程 15 の水源に水鳥を置くという構成について、B 氏は自発的説明過程でその場所が豊かであるとか、安心できる場であるっていうのを、自然の魚が泳いでいて、鳥がいて、動物が水を飲みにくる。(中略)それはとても必要で、大事で、中心にくるもので、かつ、豊かな、安心な空間で、ということがあるんだというものを置いて、それを表わしたいと思いました。(中略)自然のいうところで、水があって、土があって、空気があるというところで、草木がある (B 氏自発, 1-複数過程に亘って) と語った。B 氏は内省報告に、水の恵みを受けて育つ木々を水源周りに置くという構成、木を追加するという構成に関して泉の生命が周辺に広がる (B 氏内省, 1-6, 制作・意図)、育み (B 氏内省, 1-6, 制作・意味)、家の周りにはいる鳩について生活が営めることの喜びや感謝 (B 氏内省, 1-14, 制作・感覚) と記した。これらの箱庭制作過程は、泉の生命が生まれ、周辺に広がり及ぶというものであった。これらの箱庭制作過程に関する B 氏にとっての意味は、説明過程でも語られているが、内省報告でより明示的になった。



箱庭制作過程 8～10 の家の構成,12 と 13 の馬車に乗る人と往來を歩く人の構成,制作過程 25 と 26 の「行き交い,挨拶を交わす人,果実などを採る人」,制作過程 58 と 59,61 と 62 の遊ぶ子どもの構成について, B 氏は調査的説明過程で 自分自身の,その,生きてる感覚というのは,どんな,あの,感覚なんだろうとかといたら,え,町歩く人がいて,そういう中で,この通りをいきめぐってって,子どもたちが遊んでる,そういう空間を。そういう日常の中の自分ということ。(中略)人がいて,自分が生きる場というか。そういう生活の空間に,その,人が生きてる,その社会的なものっていうところでの家っていうものを,なんか,置いたりしました(B 氏調査,1-複数過程に亘って)と語った。また,これらの構成について,内省報告に生きていることの実感(B 氏内省,1-12,制作・意図),安心感,暖かさ(B 氏内省,1-15,制作・感覚),愛おしさ(B 氏内省,1-25,制作・連想),子どもが遊びを考える創造力の豊かさ(B 氏内省,1-61,制作・感覚)と記した。

箱庭制作過程 32 と 33 の船の構成について, B 氏は調査的説明過程で自分の意識している世界が,その世界のすべてじゃないっていうか。やっぱり,あの,他の人がいて,その人にも一つの世界があって,で,まあ,自分も行ったことのない世界があって,そこでも,違った人の営みが,あの,あって(B 氏調査,1-複数過程に亘って)と語った。内省報告にこの世界は豊か(B 氏内省,1-32,制作・意図),自分の小ささ(B 氏内省,1-32,制作・連想),船出の場,泉と外海の繋がり(B 氏内省,1-33,制作・意図),怖いけど魅力がある(B 氏内省,1-33,制作・感覚),探求,冒険(B 氏内省,1-33,制作・意図)と記した。また,ルーペの構成について,自分を広げるには覗くよりほかない(B 氏内省,1-37,制作・意図)と記した。

箱庭制作過程 43 と 44 の祈る人の構成について, B 氏は自発的説明過程で世界というのは,(中略)未知であるがゆえに,何が起こるかかわかんないってところで,いろんな意味で,祈る心みたいな,安全を祈るような,そういったところのものも,なんか,なければ,そういうものは見ることができないとか,っていうのを思いました(B 氏自発,1-43)と語った。内省報告に神様を祈る人で表現したい(B 氏内省,1-43,制作・意図),見守り,神の存在(B 氏内省,1-43,制作・意図),人と世界が守られるようにと感じられた(B 氏内省,1-43,制作・感覚),世界を包む神(B 氏内省,1-43,制作・連想),人が生きることは探求の旅である(B 氏内省,1-44,制作・意図)思い返せば,ずっと旅してきたように感じられた(B 氏内省,1-44,制作・感覚),未来への祈願(B 氏内省,1-44,制作・意味)と記した。

箱庭制作過程 45～48 の銃を持つ人,悲しむ人の構成について,いろんな災難があるんだけど,ま,この銃を持っている人とかということで,あの表現したかったんですけど。そういうものもあたりとか,悲しんでいる,そういう人も,実をいうと,確かに現実としてあるんだと。現実としてあるんだ,っていうものを思って。それで,それがやっぱり自分の空間の中にも,やっぱり離れずにあるんだよな,っていうのを,思いました(B 氏調査,1-複数過程に亘って)と語った。しかし,B 氏にはそれとは異なる思いも湧いてきた。「何か言い足りない」と感じた制作過程 49 と,制作過程 51 と 52 の合唱する人たちの構成について, B 氏は自発的説明過程で自分にとっての世界というのは,どの世界だろうかというところで,次になんか気持ちが動いたんですけど。それは実いうと,こういう悲しみとか不幸な出来事とかというのは,人にとって,(中略)幸せなみたいなものも出来事として,ひょっこり,あの,起

こりうるんだ、と。(中略)どちらかという、と、ささやかな、あの、人とのつながりの中でも、  
なんか、幸せな出来事というのが、ありうるんだ、というところで、まあ、結果として、まあ、  
この対極のところ、これを置くことになりました (B氏調査, 1-複数過程に亘って) と語  
った。それらの箱庭制作過程について内省報告に信じるに足る違った良いこともある実感  
(B氏内省, 1-49, 制作・意図), 愛, 友人, 家族 (B氏内省, 1-51, 制作・感覚), 感謝, 喜び (B  
氏内省, 1-51, 制作・感覚) と記した。

箱庭制作過程 64 であやめや花束を選び、制作過程 65 であやめを水源の上に、花束を水源  
の左に置くという制作過程について内省報告に泉の生命力に花を添えたい (B氏内省, 1-64,  
制作・意図), 世界の豊かさを改めて思い起こす (B氏内省, 1-64, 制作・感覚), 世界は神  
様の守りにあることを再認識する (B氏内省, 1-65, 制作・感覚), 感謝 (B氏内省, 1-65, 制  
作・意味) と記した。その内省報告について、第 1 回ふりかえり面接で以下のように語った。  
[最終的に、その、水際に生える草を置くとか、ま、水源のところに戻っていったんですね。そ  
れはなんとなく、そういった自分で作り上げたものを、あの、そこの部分に、帰したかった。帰  
するとか、ささげるといふか、うん。そんなような感じで]。B 氏は箱庭制作過程のほぼ  
最後に、世界の豊かさを思い起こし、それは神様の守りのおかげであることを再認識し、感  
謝の念をもって、泉の生命力に花をささげた、と捉えられる。

## 2) 第 2 回箱庭制作面接 (写真 35)

主な箱庭制作過程を示す。B 氏は第 2 回箱庭制作面接の箱庭制作過程 2 で、「心苦しい思  
いを表現する仕切りを見つけ」た。制作過程 3 で、仕切りを砂箱中央に置いた。制作過程 4  
と 5 で、小さなかごを見つけ、かごを 2 つ、仕切りの左側に置いた。制作過程 17 で、中央やや  
左寄りに葉のついていないバオバブの木を置いた。制作過程 18 と制作過程 19 で、葉のつ  
いていないバオバブの木の左に亀とイグアナを置いた。箱庭制作過程 22 と制作過程 23 で、  
ルーペを選び、追加した 3 つめのかごの中にルーペを入れるように置いた。制作過程 24 で、  
亀を右手で空中にもったまま、  
左手で、中央下の砂を払いの  
け、左右に走る水の道を作っ  
た。制作過程 25 で、水の道の  
左端に亀を置きなおした。制  
作過程 26 と制作過程 27 で、  
花を選び、仕切り右側の上部  
に花を置いた。制作過程 28  
と制作過程 29 で、ガラス瓶を  
選び、最初に置いたかご 2 つ  
の中にガラス瓶を入れるよう  
に置いた。制作過程 30 と制  
作過程 31 で、天使を選び、テー  
ブルとイスの手前に 2 体の天



写真 35 B 氏第 2 回作品

使を置いた。

箱庭制作過程 32 と制作過程 33 で、チェーンソーと斧をもった人形を選び、イグアナの近くに置いた。制作過程 35 で、B 氏は、十字架を亀の背に載せた。制作過程 37 で、先に置いていた針葉樹の近くに小さな針葉樹を置き加え、箱庭制作を終了した。

B 氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。まず、B 氏の重い感じや空虚感や疲れなどの主観的体験の語りや記述を記す。仕切りについて、B 氏は自発的説明過程で壁を感じているなということ。で、この壁というところを最初に思いました (B 氏自発, 2-1), 自分自身の今日の、今の気持ちの中核になるような感じもしたことがあって、真ん中に置くというのがしっくり、あの、しました (B 氏自発, 2-3) と語った。内省報告に何か重いものを感じて蓋がされた感じ (B 氏内省, 2-1, 制作・感覚) と記した。この回の最初の箱庭制作過程で、B 氏は、重いものを感じて蓋がされた感じがしており、その感覚から連想されるものは壁であった。そして、その感覚に合った仕切りを見つけ、それを砂箱中央に置いた。この構成は、重さや壁という感覚やイメージ、心苦しいという思いが今の気持ちの中央にあるという主観的体験が反映したものであったことが示された。

箱庭制作過程 4 と 5 のかごについて、取り組んでるところが、それこそ、その、何か、やったことというのが抜け落ちてってしまうような、そういう殺伐感というのがあって (B 氏自発, 2-4) と語った。制作過程 16 と 17 のバオバブの木について自発的説明過程で、このバオバブの木のところは (中略)今の状態って、自分自身も枯れているよな、疲れているよな、とかいう部分があって (B 氏自発, 2-16) と語った。制作過程 18 と制作過程 19 の亀とイグアナ(とかげ)について亀というのは、自分の歩みが遅々として進まないっていうのと、まあ、何かに引っ張られてゆっくりとしか進めないっていうものを、亀というところのものが、その、表現しているような気がしました。それで、まあ、その部分に、まあ、攻撃的なという意味での、その追いつめるようなものっていうのも感じてて。まあ、その部分は結局、その、まあ、ぐわーとかみつきそうな感じのとかげではあるんだけど、それははっきりと、その人といったところの関わりの中で、それを意識してて、(中略)遅々とした歩みとか、ちょっと殺伐としたその感じとか、っていうものを意識してるんだと (B 氏自発, 2-18) と語った。内省報告に、侵襲者に迫れている (B 氏内省, 2-18, 制作・意図), 重苦しい、しんどさ (B 氏内省, 2-18, 制作・感覚) と記した。制作過程 32 と制作過程 33 のチェーンソーと斧をもった人形について B 氏は調査的説明過程で人形を選ぶときに、銃をもった人を選ぶか、迷ったんです。(中略)チェーンソーとかオノを持っている人の方が、(中略)人の攻撃性みたいなものを、その、なんかよく出しているかなと。(中略)どちらかという、意識せずとも御しきれない、その暴力性みたいな部分だとか、(中略)銃をもっている人とかは、表わしてないような気がしたんですね。(中略)これは働く人の人形だと思ったんですけど、こっちの方がしっくりくるかな。その攻撃性、暴力性みたいなものがむしろ。このトカゲみたいな、がーとくいつくような、そういったもんで、その、イメージとしてあった。このセットにして表したかった (B 氏調査, 2-32) と語った。内省報告に憎しみと怒り (B 氏内省, 2-32, 制作・意味) と記した。これら一連の主観的体験には、B 氏が、日常生活において激しい攻撃性に曝され、心身ともに疲弊し、空虚感や憎しみや怒りなどを感じていたことが示された。

箱庭制作過程の途中で、転機が訪れる。箱庭制作過程 22 と制作過程 23 のかごの中に置いたルーペについて、B 氏は自発的説明過程で全く空の籠かというところが、思い出とか、いろいろ、残っているものもある (B 氏自発, 2-22) と語り、内省報告に生きる関心が絶えていないのに気づく (B 氏内省, 2-22, 制作・意図), まだ足を残している (B 氏内省, 2-23, 制作・感覚), 土俵際 (B 氏内省, 2-23, 制作・感覚) と記した。第 2 回ふりかえり面接で、その制作過程について以下のように説明した。[土俵際って、結構アップアップしているところでは、そういう土俵際でなんか、立っているような感じを、受けるんだけど、そういうしんどさを感じつつ、まあ、なんかやってるわみたいな感じも、(不明)思いました。(中略)しんどさを感じつつも、その、やっぱり取り組んでいる自分があるということは否定しようがなく。こういう自分があるんだと。そういうところを、ルーペを選んだところから、その、まあ、気づくというか]。

箱庭制作過程 24 の水の道の構成について、B 氏は調査的説明過程で生かされてるっていうんでしょうかね。その水というところの(中略)そういった中で自分自身も、その、その、道のりというところでは、砂漠を歩いているわけじゃなくて、そういう中で、うん、その、たどってるっていうか、たどりきったっていう、(中略)そういう実感も確かにある (B 氏調査, 2-32) と語った。内省報告に乾きと寄るべき者、道筋の存在に気づく (B 氏内省, 2-24, 制作・意図), 神、仲間 (B 氏内省, 2-24, 制作・連想), 他力 (B 氏内省, 2-24, 制作・意味) と記した。そして、第 2 回ふりかえり面接で、その制作過程について以下のように説明した。[道筋みたいなものを作り始めました。これは乾いてるな一っていう乾き、あと、その、寄るべきものとか、たどっていくようなそういった道筋の、そういった存在ってところのものを思えて、どうにか、支えられてきたんだよな一と。そういったことを思い起こしました。で、まあ、それを例えば、その、神様っていう言い方もできるし、信仰という言い方もできるし、まあ、とき、その時、その時で、その、まあ、一緒にやってきた仲間たちっていうものもいたし。いろんなところで助けられてきたな一っていうことを思ってた。その結果、今、やってけるんだよな一って。そういう意味では、他力本願っていうわけではないんだけど、自分のがんばりだけでは続けてこれなかったものは、どうしてだろうかというようなどこで、他からの助けだとか、いろんなものがあつた、と。それが水の道っていうところで、その、表現したかったというか。しようとして、掘ってたということですね]。

箱庭制作過程 26 と制作過程 27 の花の構成について、B 氏は自発的説明過程でその先に、(中略)ややほっとした空間だとか、実ることもあれば、という感じの、(中略)緑というか、花っていうか。そういったものを思いました (B 氏自発, 2-26) と語った。内省報告に将来への期待 (B 氏内省, 2-26, 制作・意図) と記した。制作過程 28 と制作過程 29 のガラス瓶の構成について、B 氏は調査的説明過程で良い、例えば、友人関係だったりとか、経験だったりとか、そういったものは確かに、その、現状はどうであれ、侵されないものとして残っている (B 氏自発, 2-29) と語った。内省報告に良い思い出、記憶、人々との繋がり (B 氏内省, 2-29, 制作・感覚) と記した。制作過程 30 と制作過程 31 の天使の構成について、B 氏は自発的説明過程でほっとできるようなところに行きつければ、まあ、幸いかな (B 氏自発, 2-31) と語った。内省報告に将来の祝福 (B 氏内省, 2-30, 制作・意図), 安らぎや平安に迎え入れて

ほしい (B氏内省, 2-30, 制作・感覚), 不安 (B氏内省, 2-31, 制作・連想) と記した。これら一連の主観的体験には, B氏が一方で不安を覚えつつも, 将来への期待, 将来の祝福や平安を望む思いが芽生え始めたこと, また, 過去における人々との繋がりや経験は侵されないものとして残っていることへの気づきが示された, と捉えられる。

箱庭制作過程 35 の十字架を亀の背に載せた制作過程について自発的説明過程で シンボリックな意味で, こういう苦労っていうところの部分は, 自分自身クリスチャンというところで言えば, イエスが歩まれた, そういったところの道に通じるかなとかいうところで (B氏自発, 2-35) と語った。内省報告には, 自分に救済の力はないが, 共感が深まる (B氏内省, 2-33, 制作・感覚) と記された。B氏は, 今自分がしている苦労はイエスが歩んだ道に通じるものと感じ, イエスへの共感が深まったことが示された。

B氏は, 第2回箱庭制作面接の前半では, 日常生活における様々な苦しい出来事やそれに対する自分の心情を巡る構成を行った。しかし, 途中から神やイエス, 仲間たちの支えを思い起こし, 箱庭制作過程のほぼ最終段階では, イエスへの共感をさらに深めることができた, と捉えられる。

### 3) 第3回箱庭制作面接 (写真 36)

B氏第3回箱庭制作面接では, 砂箱右奥隅に置かれた自己像である星の王子様が, 身近なところから将来に向けて鳥瞰したり, 思い出を思い返すというテーマの構成がなされた。山あり谷あり, 障壁もありという生き様であったことが第3回ふりかえり面接で語られた。

主な箱庭制作過程を示す。B氏は第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程3で, 砂箱右奥隅に星の王子様の人形を置いた。砂箱左奥と右手前に針葉樹を置いていった(制作過程11~17)。制作過程18と制作過程19で, 砂箱中央に時計と祈る人を選び, 置いた。制作過程20と制作過程21で, 橋を選び, 中央の水たまりの上に橋を架けた。制作過程24と制作過程25で, かたつむり, トンボ, 舵きりをするミッキーマウスを選び, とんぼを箱左手前角に, かたつむりと舵きりをするミッキーマウスを王子様の前に, 置いた。

郵便ポストを置く(箱庭制作過程27), ミニカーを選び, 置く(制作過程31~32), 真珠粒をまばらに置き, 木の上にガラス細工の粒を置く(制作過程35)という構成を行った。制作過程37と制作過程38で, 十字架と石を選び, 十字架を砂箱左手前に, 石を右奥に置いた。砂箱全体に砂の波をつくった。真珠粒をまばらに置いた(制作過程45)。



写真 36 B氏第3回作品

制作過程 46 で、祈る人とその近くの針葉樹の位置を微修正し、箱庭制作を終了した。

B 氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。星の王子様について B 氏は自発的説明過程で遠い位置から、その、鳥瞰するっていうのでしょうか。そういったところで作りたいなという気持ちが湧きました。それでまあ、ここに置くっていうところで、この見てる、まあ、自分がどういう、どこの視野を、見て、眺めてるんだらうなーとか、何を思い返しているんだらうなとか、ということ、この広がりっていう中で、見ようとしました (B 氏自発, 3-3), と語った。

箱庭制作過程 11~17 の砂箱左奥と右手前の針葉樹について B 氏は自発的説明過程で境界線みたいなものを作りたいと思って、やりました (B 氏自発, 3-11) と語り、内省報告に隔てをつくるための材料 (B 氏内省, 3-11, 制作・意図) と記した。

2 体の祈る人形や橋や十字架は、祈りや信仰と関連していた。祈る人形には、自己の生き様に関する以下のような思いが反映されていた。気持ち的には、祈り心なしには、その、つながっていけない。その、あんまりやっぱりしっかりとした、あの、基盤とか、そういったものが見通しの中で、その、うん、あの、誰も保証されてはいないだらうけども、厚みとかいったら、何が起こるかかわかんない。なにか一つ大きなことがあれば、あの、とん挫しちゃうよな。そういった、なんというんでしょう。(中略)じっくり慎重にことを構えてという意味での、祈り心で (B 氏自発, 3-18)。内省報告には道のりの不安定さと祈り心 (B 氏内省, 3-18, 自発・感覚) と記された。

橋について、B 氏は自発的説明過程で橋を渡るというところでの決断だとか (B 氏自発, 3-20) と語り、内省報告に危険や停滞を乗り越えてきたという思い (B 氏内省, 3-20, 制作・感覚), 守られていた (B 氏内省, 3-20, 制作・意味) と記した。

第 3 回ふりかえり面接では、これらの箱庭制作過程について以下のように語った。[低空飛行でも、なんとかかんとか、ここまでやってきた。そういうような、あの、印象があるので。ですから、守られていたとか、守られてきたって、別にこれは神様をもちだしてもいいんだけども。理由はわからないんだけども、とにかく今、いるんだっていうことを思えば、そういうことなだらうと]。[慎重にならざるをえなかって、(中略)祈り心なくしては、なんか、物騒でみたいな]。

十字架について、B 氏は自発的説明過程で自分自身、大きなものの一つの中で、まあ、信仰とかそういったところのものというのは、(中略)自分にとって重たくさせるようなものがなくなるとか、そういうことじゃなくて、そういった全般の、そのバランスみたいなものが、あの、よりよくなっていくと、うれしいなというところですね (B 氏自発, 3-37) と語った。

内省報告に、信仰の実感 (B 氏内省, 3-37, 制作・意味), 信仰が支えになってきたという感慨 (B 氏内省, 3-37, 制作・感覚) と記された。この箱庭制作過程に関して、第 3 回ふりかえり面接で、以下のように語られた。[むしろより自分の意思って、いうんでしょうかね。そういった部分を感じてて、耐えてきたなーっていう部分を思い出していました]。[実際の思い悩みとかいろんな障害とかがある中で、それにどう関わっていくのかという意味での、実際的な意味での力になっているんだなーっていうことで。改めて、箱庭制作する中で、意識化されてるところです]。B 氏は、何が起こるかかわからず、大きなことがあれば頓挫してしまう

ような人生において、祈り心は基盤であり、慎重にことを構えることが必要だと考えていた、と捉えることができる。そして、信仰が支えになったという実感や、現実の障害や思い悩みに対して信仰が実際的な力になり、自分の意思で耐えてきたことを箱庭制作過程で改めて意識化し、祈る人形や十字架が選ばれ、置かれた、と理解できる。

かたつむりについて、B氏は自発的説明過程で遅々とした、遅い歩みだな(B氏自発, 3-24)と語り、内省報告にじれったい(B氏内省, 3-24, 自発・連想)と記した。トンボについて、自発的説明過程でふんわり飛んでいけるような(中略)過ごし方ができたらいい。ほんとにいいな一と。これは、その、例えば、生活とか、仕事の重さが楽になるというよりも、(中略)充実感とか、そういったところを含めてなんか気持ちが生きてと軽くなるような、ふんわりとした(B氏自発, 3-24)と語り、内省報告に軽やかさ、気軽さ、あこがれ(B氏内省, 3-24, 自発・感覚)と記した。舵きりをするミッキーマウスについて自発的説明過程で舵きりの難しさっていうところだとか。(中略)舵きりをするミッキーマウス(中略)で表わしたと思った(B氏自発, 3-24)と語り、内省報告に今も危険や停滞は避けられないでいる(B氏内省, 3-24, 制作・意図)と記した。これらの構成には、危険や停滞を避けることができているための緊張と自分の遅々とした歩み、ふんわりとした軽やかさへのあこがれが示された。

ポストについてB氏は自発的説明過程で他からも思わぬ便りも来るとか。(中略)自分だけでこり固まっていること、そういう出来事とか、世界だけじゃなくて、ひょっこり思わぬところから、なんか、何かが伝わってくるとか、流れてくるとか(B氏自発, 3-26)と語った。

ミニカーについてB氏は自発的説明過程で自分を(中略)気晴らしさせるとか、楽しませるとか、そういったところのものも大事だよな。(中略)どこかに行くとか、そういった意味での車とか(B氏自発, 3-31)と語った。内省報告に生活に娯楽のなさ(B氏内省, 3-31, 制作・意図)、どこか面白みのない生き方かな?(B氏内省, 3-31, 制作・感覚)と記した。

ガラスの粒について、B氏は内省報告にうるおい(B氏内省, 3-33, 制作・意図)、思わぬところでよいこともあったことを思い出す(B氏内省, 3-33, 制作・感覚)と記した。

真珠についてB氏は自発的説明過程でポツポツとでも、まあ、いいこともある。まあ、あったと思うし、ないわけじゃなかろうっていうことで、真珠を置いたりしました(B氏自発, 3-35)と語った。

調査的説明過程で、筆者はB氏に作ってみて意外なものはあったか質問した。それに答えてB氏は以下のように述べた。真珠とか、ポストとか、雨の降ってるという状態のと、木っていうところで。まあ、この真珠で埋め尽くされるようなことはあの全然思ってもみないんだけど。ぽつりぽつりと、いいこともあるかなとか。まあ、なんか、思わぬ、その、悪い出来事じゃない意味でぽつぽつと自分自身になんか知らせてくれるような、なんかニュースなりとかも起こるかとか。まあ、雨降ってというところでの、なんか、みずみずしさとか、うるおいとかも含めて。そういうことも、それこそ自然っていうか。そういう中で、起こってくることもあるんだよな。だから、このあたりのこと、むしろ、ある意味、生きてれば、うん、誰にとっても起こりうる、そういう、なんか、自然の理っていうか。そういうところの中のものも、うん、なんか、改めて思い起こすことができたというか。そんな感じですね。あ。もう一つ。遊びを入れなきゃいかんということを(笑)(B氏調査, 3-全体的感想)。この語りでは、箱庭

制作によって、意外な構成から自分の心や生き方への気づきがあったことが示された。それは、ポストや真珠や雨(ガラスの粒)やミニカーを用いた構成に関する主観的体験であった。これらの主観的体験の語りや記述は、山あり、谷あり、障壁もありという生き様を補償するようなものであり、今後の課題である、と捉えられる。

#### 4) 第4回箱庭制作面接 (写真 37)

B氏は第4回箱庭制作面接で、砂箱左奥隅のロッキングチェアに立つ自己像である星の王子様が、思い出の土地やそこに住む人々を眺めているという構成を行った。主な箱庭制作過程を示す。箱庭制作過程2と制作過程3で、ロッキングチェアを選び、砂箱の左奥隅に置いた。その後、赤い橋を砂箱中央に置く(制作過程5)、橋の上に牛を置く(制作過程8)、河、海を作り、その砂を陸に寄せる(制作過程9)、海にイルカ、陸の右側にトンボ、海に水鳥を置く(制作過程13)などの構成を行った。

B氏は、制作を続ける中で構成された風景から、「確かこんな風景あったぞ」と、かつて行ったことのある土地やそこにいた人々のことを思い出した。その後、以下に記すように、意図的に、その土地やそこにいる人々に関連する構成を行っていった。箱庭制作過程14と制作過程15で、怒っている人や寝ている人などの人形を4体選び、砂箱右側の陸に人形を置いた。その後、右側の陸に樹木(制作過程17)、右側の陸に建物(制作過程19)、右側海岸沿いに船(制作過程27)、右側陸の人形の近くにミッキーマウス(制作過程30)、左側陸にバスを置いた(制作過程31)。牛をバスの近くに移動した(制作過程38)。制作過程41と制作過程42で、星の王子様を選び、ロッキングチェアに星の王子様を置いた。制作過程44で、右側陸の人形の近くに下駄箱を置き、箱庭制作を終了した。

B氏の主な主観的体験の語りを記す。ロッキングチェアについて、自発的説明過程で私自身の気分がまあ、ゆったりとしていられるような、そういった気分があったんだと思います。それで、こういうロッキングチェアーみたいな、その、あの、座った時にはゆらゆらしてくつろいでいられるようなものを置きました(B氏自発, 4-2)と語った。

例えば、第2回箱庭制作面接では、日常生活における困難に関する苦しさが一つのテーマとなった。しかし、今回はそれとは異なり、ゆったりとしていられるような気分であったことが、構成に影響していた。

箱庭制作過程14以降に構成された、かつて行ったことのある土地やそこにいた人々が自分に与えた影響について、自発的説明過程で、以下のように語った。例えば、



写真 37 B氏第4回作品



人と人のつながりであったりとか。まあ、その、自然っていうのでしょうか。そういう風景だとか、というところで。ああいう世界とか、その、人との関係とってというのが、自分にとって、あの、まあ、心地よいていうか、そういう世界なんだなっていうのを、この、連想っていうか (B氏自発, 4-複数過程に亘って)。その土地やそこでの人々とのつながりの中で、自分が心地よく、くつろいでいた感覚を思い起した。第4回箱庭制作面接では、信仰や宗教性を巡る言及は直接的にはなかった。しかし、B氏が心地よいと感じ、くつろぐことができた人々は、キリスト教精神を一つの重要な基盤としてもつ施設の人々であった。

#### 5) 第5回箱庭制作面接 (写真 38)

B氏第5回箱庭制作面接の箱庭作品は、日常生活での苦しい状況が色濃く反映されたものとなった。主な箱庭制作過程を示す。箱庭制作過程1と制作過程2で、星の王子様、小人、なげき悲しむ人を選び、砂箱中央と砂箱中央奥に置いた。制作過程3と制作過程4で、ルーペを選び、ルーペを星の王子様の前に置いた。

箱庭制作過程5から制作過程8に亘って、針葉樹を砂箱の四隅に置いた。

砂箱手前の、星の王子様の背後には、教会(制作過程10)、橋と大砲(制作過程12)、ワニと小瓶(制作過程16)、ベッドに横たわるタキシードを着た人形(制作過程18)、子どもの人形(制作過程20)などを置いた。

箱庭制作過程22で、針葉樹を砂箱四隅に追加して、箱庭制作を終了した。

B氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。砂箱の奥の構成と星の王子様とルーペに関して、自発的説明過程でちょっと怒っている自分とか、悲しいなという自分や、ぼかしちゃったところだとか、ちょっとなんかのんびりしたいっていうところだとか、あの、えいやーとかいう感じとか。そういう気持ちが入り混じっているようなところを(中略)そうを感じているような自分を覗き込むような、そういう姿があって (B氏自発, 5-複数過程に亘って)と語った。星の王子様とルーペについて内省報告に、抑圧的で観察的な感情感覚 (B氏内省, 5-4, 調査・感覚)と記した。

砂箱奥に、ネガティブな要素も含んだ自分に渦巻く情緒が構成され、中央の星の王子様がそれを抑圧的に観察していた。

星の王子様の背後に置かれた教会、橋、大砲、ワニ、小瓶、ベッドに横たわるタキシードを着た人形、子どもの人形の構成に関して、B氏は自発的説明過程でいろいろとあって、(中略)渡っていかなきゃいけないというところの橋もあるし、まあ、あの、気を緩められないということ。



写真 38 B氏第5回作品

こういったいつ、あの、しんどい立場に、攻撃をされないといけないような緊張感もあるし。体調の悪さというところもあるし。時間に追われるとか、(中略)いっぱい抱えてて。で、まあ、もろもろのことがあって、今、こういう気持ちで、まあ、なんか、あるんだな一とかっていうのを、なんか、表現したかなって感じですよ (B氏自発, 5-複数過程に亘って) と語った。砂箱中央手前に置かれたワニは、B氏が被っている攻撃性が表現されていた。この結構口が目について。あれより、もう少し、今日なんか見た感じが、その、ガブッと、というような‘笑’。その、印象を受けて (B氏調査, 5-15) と語った。第2回箱庭制作面接で置いたイグアナよりも、今回のワニの方が「ガブツ」と噛みつく印象がより強いことが語られた。これらの箱庭制作過程について内省報告に自分の背後にある念慮していること (B氏内省, 5-複数過程に亘って, 制作・意図) と記された。B氏は自身の体調がすぐれず、仕事上の困難を抱えていた。

しかし、そのような困難な状況の中でも、それに向き合おうとするB氏の思いが調査的説明過程で、以下のように語られた。結構仕事とか(中略)いろいろある中で、体調もすぐれなくて、今も、い、痛みがあるんですけど。(中略)攻撃性の強い方だとか、そういったところで、随分、消耗していて。(中略)背負っているものもいろいろある中で、っていう中で。うん。いるんだなって。なんか、作って自分でも。わりあい冷静でいるというか。ひどく落ち込むとか、怒り狂って、投げ出してやるっていう風ではなくて。まあ、あの、うん、あのいろいろあるけど、うん、しょうがないなという部分と、まあ、ちゃんと時間かけられれば、まあ、できんことはないわっていうような、そういうような感覚とか、ということであって、わりあい冷静でいるっていうか (B氏調査, 5-全体的感想)。仕事上のことで背負っているものがたくさんあり、体調も悪く、B氏はさらに別の乗り越えるべき課題をも抱えていた。しかし、それらに対して、ひどく落ち込むとか、投げ出すとかという姿勢ではなく、わりと冷静に事態に向き合っていることが示された。筆者には、B氏が現状や自分自身に真摯に向き合い、関わっているように感じられた。

第5回箱庭制作面接では、B氏の上を示したことは違う側面についての気づきも現れた。B氏は、針葉樹を砂箱四隅に置いた。その構成について、調査的説明過程で以下のように語った。これまでの制作の時に、私自身、傾向かなって思うところでもあるんですけど。この、こうやって出てきたものを、四隅までこの全面に張り巡らせるっていうほどの、私自身が、馬力がないでしょうかね。(中略)四角い枠を森をすることで、丸い枠に限定して、うん、世界を作ってるかなという。(中略)たぶん、もっと、その馬力があれば、この、ガシッともっと置く力のある人もいるのかなと思うんですけど。どうも私は、うん。四隅ぎりぎりまでのものを置くっていう、その、うん、強さがないような気がします (B氏調査, 5-複数過程に亘って)。その構成について内省報告に無意識の領域 (B氏内省, 5-6, 制作・意図) , 今は脇に迫りやられている諸々の心の部分 (B氏内省, 5-6, 制作・感覚) と記された。B氏は、この構成に関して、四隅ぎりぎりまで構成する強さ・馬力が自分にはないという自分の特性だ、と語った。これに類似の、森によって区切りができるという構成は、第2回および第3回箱庭制作面接にも表れていた。しかし、第6回箱庭制作面接以降は、四隅に森をすることで、丸い枠に限定するといった構成は現れなかった。

## 6) 第 6 回箱庭制作面接 (写真 39)

B 氏第 6 回箱庭制作面接の箱庭作品は、今までの作品とは構成が大きく異なっていた。作品のテーマは、再生であった。主な箱庭制作過程を示す。箱庭制作過程 5 でイルカを左奥隅の海に置いた。制作過程 7 で島の中央やや上のあたりから中央に樹木を横に倒して置いた。制作過程 9 で海草を島の下方の浜辺に置き、針葉樹を島に点在させた。制作過程 11 で鳥の巣を島の中央の林の横に置いた。制作過程 13 で島の左側に石仏を埋めた。制作過程 20 で埴輪を島中央の上の部分に埋もれさせた。制作過程 22 で、埴輪の右横にガラス片、真珠の一部が埋まるように置いた。制作過程 24 で亀、魚を右側の海に置いた。

B 氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。今回の箱庭制作過程について、B 氏は自発的説明過程で以下のように語った。気持ち的には、再生していく、という印象、気持ちがあつて。だから、そういうようなところでは、そういう木々が生えてきて、草が、実の(?)、生えてきて、多少なりとも、実のなるものをこうやってついているような状況の中で、鳥もやってきて、巣を作ったりとかというものを、その、この中心に置きたかったと。(中略)再生ということをいったんですけど、そういう意味では、昔、いろいろ、人が住んだり、なんかやってたという。そういう痕跡みたいなものが。その、そうですね。この遺跡に近いような。遠い昔にそういう風にあつたけれども、なんらかの理由でうち捨てられて。でも、しばらく経って、まあ、あの、自然みたいなもの、環境も落ち着いて、草木が萌え出て、鳥もやってきて。その周りでは、この陸地のことや状況と関係なく、まあ、その、海に生きるものは、それまで通り、ずーとその、生活をしてる。そういう営みがあつてっていう。そういう、状況を作りましたね (B 氏自発、6-複数過程に亘って)。島の中央の木々、周辺部の木々、鳥は、再生というイメージが付与された、と捉えることができる。再生が中心部から周辺へ広がっていった。そして、海の生き物は、石仏や埴輪に表された人の営みの遺跡や陸地の状況とは関係なく、それまで通りにずっと生活しているというイメージが付与された、と考えられる。つまり、この構成には、中央から周辺へという空間的広がり表現された。また、過去・現在・未来(再生の継続)という時間軸、陸地とは関係なくずっと続いている海の営みという時間の多様性が表現されている、と捉えられる。

第 6 回箱庭制作面接の特徴の一つとして、直接的に表現された自己像がない点、また、自分個人の特性への気づきがほとんど報告されない点が挙げられる。この回で、自分自身との関連が語られたのは、以下の部分である。調査的説明過



写真 39 B 氏第 6 回作品

程で、筆者が、再生するという事についての連想を尋ねると、B氏は最近の生活の中で取り組みはじめたことや気持ちの回復について述べた。その後、筆者がこの箱庭における再生はどれくらいの年限がかかって起こってきたものかを尋ねた。すると、B氏は、自分自身でも矛盾するようだがと言いつつ、中央部の再生は感覚的には1年とか2年というわりと短い期間に起こったものであること、しかし、人の痕跡は、何十年、何百年前に自分とは無関係に作られたものが風に吹かれ、波に洗われて出てきたものというイメージがあると語った。そのような構成や語りについて、自省報告に「人としての自分（B氏内省、6-複数過程に亘って、調査・意味）、人の歩みの歴史（B氏内省、6-複数過程に亘って、調査・意味）」と記した。そして、第6回ふりかえり面接では、以下のように語った。「感覚的には1年とか、割合身近な感覚があるっていうことで。まあ、片っ方では自分自身の変化の兆しかなどかっていうことだけでも、もう片っ方では、昔から人の営みは変わらないのと、こういうことを繰り返してきたんだらうっていう、人としての自分とか、人の歩みの歴史っていうこの両方が、なんか（中略）そこにあるかなーって、意味として。<人としての自分っていうのは>というのは、今、このなんか、意欲が戻りつつあるのかなーっていう自分自身と、まあ、人一般に置き換えれば、いろんなことあるけれど、こういうことを繰り返して、あの、来てるってというのが、人の歩みかな。そういうものが、その両方、この、遺跡と、この木の再生っていうのを」。B氏は、これらの表現について、意欲が戻りつつある今の自分に関連させている。しかし、主要な力点は昔から変わらないより普遍的な意味での人の歩みの方にあった、と捉えられる。つまり、この回の全体の文脈としては、B氏は個人的存在としての自分に触れつつも、人の歴史の中に位置づいている存在としての自分に、より焦点化されている、と考えることができる。

#### 7) 第7回箱庭制作面接（写真40）

B氏は第7回箱庭制作面接で、4つの区画を作るとともに中央に十字形の構成を行った。4つの区画は、それぞれが小さな箱庭のような感じもあった。その後、それぞれの区画に、四季を表現していった。さらに四季という表現から、巡っているというイメージが湧いてきた。主な箱庭制作過程を示す。箱庭制作過程2～5に亘って、ケースの蓋（真珠を収納しているケースの蓋。9cm×6cm大のプラスチック製）で砂をならし、砂箱中央に十字形に水源様の水を深く掘った。

砂箱左奥の区画に花を植えた（箱庭制作過程7）、花を左奥の区画、椰子の木を左手前の区画に置いた（制作過程9）。ガラス片を左手前の区画に置いた（制作過程11）。獅



写真40 B氏第7回作品

子舞の頭部を左手前の区画に置いた(制作過程 13)。貝殻と帽子を左手前の区画に置いた(制作過程 15)。白色の石とクリスマスツリーを右奥の区画に置いた(制作過程 17)。右手前の区画に合掌造りの家を 2 軒置いた(制作過程 19)。左奥の区画にリスを置いた(制作過程 21)。クリスマスキャロルを歌う人たちを右奥の区画に置いた(制作過程 23)。実のなった木を右手前の区画に置いた(制作過程 25)。左手前の区画に水着の女性を置いた(制作過程 27)。馬車に乗る人を右手前の区画に置いた(制作過程 29)。鳥を左奥の区画に置いた(制作過程 31)。金魚を左手前の区画に置いた(制作過程 33)。裸の男子の人形を左手前の区画に置いた(制作過程 35)。制作過程 37 で、白い石を右奥の区画に置き、箱庭制作を終了した。

B 氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。砂箱中央の十字形の水源について調査的説明過程で少しだけ、このところをもっとこの、円形状に、こういう風にやって、丸こく、池みたいなどこを、作ろうかな、とかって思ったんです。でも、あの、そんなに、こう前面に、なんか、この部分があるっていうよりか、まあ、その、背後とか、根底とかにあって、っていうような(B 氏調査, 7-5) と語った。内省報告に背後、根底にあるもののイメージ(B 氏内省, 7-5, 調査・感覚), 中心・深部(B 氏内省, 7-5, 制作・意味) と記した。B 氏はこの構成に関して、十字形ではなく、円形の池のようにしようかとも思った。しかし、そうすると、この部分が前面に出てしまうイメージとなり、しっくりこなかった。そのため、この部分は、背後、根底にあり、周りの 4 つの区画の意味が現れ出るものというイメージにぴったりする、十字形に構成した、と捉えられる。

この十字形の構成について、B 氏は調査的説明過程で以下のように語った。それをどういう風に表現するか、っていうのは、なんか微妙なんですけどね。ええ、例えば、あの、宗教的に、その神様とか仏様とかっていうようなものとも言えるだろうし。(中略)地球を動かすような、そういった力だとか、言えるだろうし。でも、気持ちの、内的には、そういうことを見させる自分の中にある、なんか、うん、さあ、また、新しい年度をやっていくか、という気持ちを起こさせる、自分自身のなんか、内にあるようなものを、なんか、あの、現実の四季とかじゃなくて、こういうものを見させる、あの自分の感覚の奥にあるものみたいな。そういうものもあるして。で、そうすると、なんか表現しがたいなっていうか(B 氏調査, 7-全体的感想)。内省報告に自然に宿る中心、意識に宿る中心のイメージ(B 氏内省, 7-5, 調査・感覚), 生命(B 氏内省, 7-5, 調査・連想), 不思議(B 氏内省, 7-5, 調査・感覚) と記した。十字形の部分は、神様や仏様という直接的な宗教的イメージにとどまらず、巡るという客観世界の動きの中心や核になるものであり、動きを意識している自分の核でもあった。客観的時間の中心でもあり、時間の変化を見させ、新しい年度への気持ちを起こさせるような感覚の奥に存在する自分の内的な核でもあるという多義的な表現であった。

4 つの区画の構成について、以下のような B 氏の主観的体験が報告された。左奥の春の区画に関して、B 氏は自発的説明過程で以下のように語った。これから春に向かっていくんだなーって感じて。それで四季を作りたくなっただけですけども。その四季を作りたくなって、ったところも、あるんですけど。同時に、それが、あの巡ってるっていうんでしょうか(手を空中で左周りに円を描きつつ)。(中略)そういう、あのイメージも湧いてきました。で、それで、そういうイメージの中で、春って(中略)いうことで、花が咲いてくるとか、動物がひ

よっこり顔,出してくるとか,鳥が飛びかうとか (B氏自発,7-複数過程に亘って)。花に関して内省報告に再生 (B氏内省,7-7,制作・意味)と記された。

左手前の夏の区画に関して、B氏は自発的説明過程で以下のように語った。夏のイメージにあうようなそういう木とか,夏祭りのイメージだとか(中略)海とかの海岸のイメージが結びついて。それで,貝殻とか,その夏向きのようなイメージを抱かせるような帽子だとか。(中略)夏の風物詩のイメージの金魚 (B氏自発,7-複数過程に亘って)。

右手前の秋の区画に関して、B氏は自発的説明過程でやや枯れたイメージだとか,あと,秋に実がなるものとか。(中略)そういった枯れたイメージのところで,なんか,黙々と働く人がいたり (B氏自発,7-複数過程に亘って)と語った。

右奥の冬の区画に関して、B氏は自発的説明過程で冬のイメージというようなところで。そのクリスマスツリーじゃなくてもよかったんですけど,雪が,その,かぶったようなとか。(中略)白い,その雪がかぶったような石 (B氏自発,7-複数過程に亘って)と語った。

#### 8) 第8回箱庭制作面接 (写真41)

第7回箱庭制作面接と第8回箱庭制作面接の間に、予想しなかった転任の打診がB氏にあった。第8回箱庭制作面接は、B氏の転任が、ほぼ決まった後に行われたため、構成内容はそれが強く反映したものとなった。主な箱庭制作過程を示す。箱庭制作過程1から3に亘って、船出していくイメージが湧いたため船を選び、砂箱左側中央から砂を掘り、そこへ船を置いた。制作過程4で、さらに砂を掘り左側から右に広げ、銀杏の葉のような形に掘った。制作過程5で、右側に海を作った。七福神の宝船を海に置いた(制作過程6)。陸に木を植え(制作過程8)、イルカを海に置いた(制作過程12)。ガラスの小瓶を砂箱左に置いた(制作過程14)。ルーペを砂箱中央に置き(制作過程16)、それを覗くように小人を置いた(制作過程18)。人を導く天使を制作過程19で選び、制作過程20でそれを小人の背後に置いた。ほうきにまたがった人を手前の丘に置いた(制作過程22)。海に生き物を加えた(制作過程24)。制作過程26で、船を砂箱右奥に置き、最後に七福神の宝船の位置を修正して、箱庭制作を終えた。

B氏の主な主観的体験の語りや記述を記す。海の七福神の宝船やイルカなどの構成について、B氏は自発的説明過程で以下のように語った。いろいろなものが行きかって、その、全くの、なんにも無しの先に行くっていうことじゃなくて。おもしろいことだとか、いろんなその、収穫みたいなものがありそう。そういう、期待 (B氏自発,8-複



写真41 B氏第8回作品

数過程に亘って)。これらの構成には、転任や将来への期待が示された。

ガラスの小瓶について、B氏は自発的説明過程で船で出ていくってことの中に、置いていくものとか、いろんなことがある (B氏自発, 8-13) と語り、内省報告に思い出 (B氏, 8-13, 制作・意図), 一旦、置いていかなければならないモノ (B氏, 8-13, 制作・感覚), 未練 (B氏, 8-13, 制作・連想) と記した。今いる土地での人との繋がりや仕事から離れなければならないことへの未練が示された。

ルーペとそれを小人が覗く構成について、先に何があるのかなとかっていうところを、のぞき見るっていうところなんだけども、やああ、困ったことになったなーという自分自身もある (B氏自発, 8-複数過程に亘って) と語り、内省報告に、将来を見つめつつ迷う (B氏, 8-18, 制作・意図) と記した。

人を導く天使について、B氏は自発的説明過程で心配せずに、(中略)導かれるままに行きなさいっていうような、あの、そういったものも感じる (B氏自発, 8-19) と語った。内省報告に以下のように記された。不思議な導きと信頼 (B氏内省, 8-19, 制作・意図), 信仰と信頼 (B氏内省, 8-19, 制作・感覚), 委ねる (B氏内省, 8-19, 制作・連想)。今回の転任にあたって、B氏は不思議な導きを感じた。そして自己の信仰を基盤として、導かれるままに委ねて進むことを選んだ、と捉えられる。

ほうきにまたがった人について、B氏は自発的説明過程で簡単にはそういう風にはいかせないぞっていうような、そういうようなものも感じる (B氏自発, 8-21) と語り、内省報告に追いかけられる、阻止される (B氏, 8-21, 制作・意図), 抵抗 (B氏, 8-21, 制作・感覚) と記した。B氏が転任することに対して、一部の人から抵抗があることが示された。

箱庭制作過程 26 の船の構成について B氏は自発的説明過程で出ていくのは自分だけではなく、他の、あの、いろんな方も、あの、居てっていう感じで。まあ、この楽しいこともあるかな (B氏自発, 8-26) と語り、内省報告に仲間や共通の関心がある人々のイメージ (B氏, 8-25, 制作・意図), 安心感 (B氏, 8-25, 制作・連想) と記した。最後には再び、転任先の仲間など共通の関心をもつ人々がイメージされ、楽しみや安心を感じ、箱庭制作を終えた。

B氏第8回(最終回)箱庭制作面接の調査的説明過程で、B氏は今回の箱庭制作を含む、直近複数回の箱庭制作に関する全体的な感想として、以下のように語った。日常生活での変化として、第7回箱庭制作面接と第8回箱庭制作面接との間に、B氏に思いがけない転任の打診があった。それは歓びであるとともに、あまりにも予想を超えた打診であったため、戸惑いをも感じさせるものであった。箱庭の、その、制作をしながら、で、何回くらい前かな、2回くらい、2回くらい確実にあったと思うんですけども、その、言うとしんどい思いを、そのしつつ、という中で箱庭を作り始めて。また、新しい年度の、そういう歩みがまたやってくるっていうような、そういう、あの、気持ちの上での変化とか。まあ、自己修復の兆しみたいなものが出てきて、その中で、こういう話が出てきて。あの、うん、まあ、その、導かれるままに、その、出ていくかっていうところに辿り着いてったというところでは、まあ、あの、不思議さを感じるるとともに、あの、一つの、あの、うん、区切りっていうのが、なったのかなという感じるんですけど。<なるほど。なるほど>それがまあ、具体的な、その、●(転任先地名)に行くことでの区切りなのか。それはほんとに今月末にならないと。ただ、なんか、そういう

ことでは、その、傾向からいって、いろいろあったけど、また、新しい年度から、また、気持ち新たに歩むかみたい、取り組むかみたいなどには、行き着いたのかなっていう感覚はあります(B氏調査, 8-全体的感想)。その語りについて、内省報告に、不思議(B氏内省, 8-全体的感想, 調査・連想)と記した。先に記したように、第6回箱庭制作面接と第7回箱庭制作面接で、再生のテーマや新しい年度に向けて心を新たにしようとする思いが現れた。そのような流れの中で、再出発の打診が現実生活でもあった。このような外的・内的状況の中で、今回の箱庭制作面接で、天使に導かれるままに、新たな場所に出ていくという構成が生まれた。実際に新しい土地に行くという点においても、気持ちの上でも、一つの区切りかと感じた。外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開に、B氏は不思議を感じた、と捉えることができる。

このような不思議な外界と内界の一致について、第8回ふりかえり面接でB氏は[実言うと、制作を始める、その、この始めた段階から、実はなにかしらの、なんか、準備期間だったのかなとかという風にも思える、と。あんまり、それを言うと、宗教かってなるんですけど‘笑’、でも、実際、そういうプロセスを歩んできたんだよな一つっていうのは、思うんですよね]と述べた。B氏は外界と内界の一致が箱庭制作面接の開始時から準備されていたように感じており、それを宗教的な不思議さと重ね合わせて考えていた、と捉えられる。筆者は、B氏が箱庭制作面接の中でも、日常生活においても、自分自身の心や生き方、周りの状況や人々に対して、真摯に向き合い、自己の課題に主体的に取り組んでいたことが、このような展開や気づきに寄与している側面もある、と捉えた。

## **XII-2. B氏の主観的体験の考察**

### **1) 宗教性を中心とした心や生き方の変容の考察**

#### **(1) 第1回箱庭制作面接**

B氏の第1回箱庭制作面接から第8回箱庭制作面接に亘って、箱庭制作者の主観的体験について、宗教性を中心とした心や生き方の変容の観点から考察する。

B氏第1回箱庭制作面接で砂箱中央に構成された泉は、B氏にとって、核になるものであり、その核を中心にして、様々なものが構成されていった。その核となるものは神の表現であり、B氏にとって、こんこんを湧きでるような躍動感をもつ生命の源でもあった。続けてB氏は、その源に宿る命やそこで憩う動物の表現を行った。木々の構成はその泉の生命が周辺に広がり及んでいくという主観的体験の表現であった。その後、構成された人々の生活もまた、直接的な言及はないものの、中央の泉を核として存在するものである、と推測できる。その構成に示されたB氏の主観的体験には、泉の生命の広がり、人々の生き様、生活にまで及んでいっているように、捉えることができる、と考える。木々を追加した次の箱庭制作過程8で、B氏は「生活感のあるものがほしいと思う」。これは、制作過程7までの構成によって喚起された思いだと捉えることができる。また、B氏が感じた生きていることの実感(B氏内省, 1-12, 制作・意図)や、人々への愛おしさや安心感や暖かさ、子どもの創造力の豊かさは、泉の生命の広がりであり、神の愛を基盤とし、神に守られて成り立っている世界が表現された、と解釈できよう。キリスト教では、神が人を創造し、生きる者とし、エデンの園を



人が耕し守るようにされたとされる(創世記,2章7節,15節)。生活が営めることの喜びや感謝(B氏内省,1-14,制作・感覚)は,自分も含めた人が生きることができていることに関するB氏の神への感謝だと捉えられる。

船と海は,B氏にとっての未知の世界の表現であった。内省報告によると,この構成は世界の豊かさと自分の小ささを思い起させるものであり,同時に砂箱中央の泉と外海とに繋がりを示すものでもあった。B氏は,外海の先には,自分にとっては未知だが,神が創造された世界があるという意味で,泉と外海とは繋がりをもったものと捉えられたと推察できる。怖いけど魅力がある外海,未知の世界に,B氏は好奇心をもち,自分を広げるために,その世界を覗き,冒険・探求しようとしたと考えられる。この探求は,B氏の主観的体験では,外海,未知の世界の探求とされているが,心理学的には,箱庭制作面接を通して,自分の無意識の世界を覗き,探求していこうとする志向性と解釈することができよう。

このような未知の世界への探求の構成の後に,祈る人の構成がなされた。B氏にとって,何が起こるかわからない未知の世界への探求は祈り心なしには行いえないものであった。内省報告によると,この構成には,人が生きることが探求の旅であり,自分も今までずっと旅をしてきたように感じられるとともに,未来への祈りが表現されていた。さらに,祈る人には,世界を包み,見守る神様を祈る人で表現したい(B氏内省,1-43,制作・意図)というB氏の思いが込められており,B氏は神に人と世界が守られるようにと願った。

銃を持つ人,悲しむ人の構成や合唱する人たちの構成がなされた。銃を持つ人,悲しむ人の構成には,世の中にある不幸や生きることの困難が示され,そのことにB氏は胸がつまる思いをした。しかし,それらの構成を行った後には,人の世は不幸ばかりではなく,幸せなみたいなものも出来事として,ひょっこり,(中略)起こりうるんだ(B氏調査,1-複数過程に亘って)と思った。内省報告によると,この構成は,愛や友人や家族,喜びや感謝の表現であった。

その後,箱庭制作過程64であやめや花束を選び,制作過程65であやめを水源の上に,花束を水源の左に置くという構成をB氏は行った。人の世の不幸と幸せの両方に目を向け,それを実感したことにより,B氏は,人や世界を創造し,守る神への感謝を,花をささげるという行為によって表した,と捉えられる。箱庭作品を創造するほぼ最後の過程において,B氏の意識は本来の創造主である神に自然と立ち返り,B氏は,世界の豊かさを思い起こし,それは神様の守りのおかげであることを再認識し,感謝の念をもって,泉の生命力に花をささげた,と理解できる。

このように,B氏第1回箱庭制作面接は,宗教性,信仰が中心的なテーマとなった。それはB氏の心のあり様や生き方にとって,まさに核となるものであり,宗教観・信仰に基づいた世界観が表現された。

## (2)第2回箱庭制作面接

第2回箱庭制作面接では,まず,日常生活の中での攻撃的な人々やそれに苦しんでいる自分の心情の表現が構成された。この回の最初の箱庭制作過程で,B氏は,壁を感じた。内省報告によると,それは重いものを感じて蓋がされた感じであった。そして,その感覚に合った仕切りを見つけ,それを砂箱中央に置いた。その構成には,壁や重さというイメージや感

覚,心苦しいという思いが今の気持ちの中央にあるという主観的体験が反映していた。

箱庭制作過程 4 と制作過程 5 のかごは,取り組みが抜け落ちていく殺伐感の表現であった。葉をつけていないバオバブの木は,自分が枯れている,疲れている感じが表された。自己像である亀は,イグアナという侵襲者に追われており,B氏は重苦しさやしんどさを感じていた。チェーンソーと斧をもった人形も人間の攻撃性・暴力性を表しており,その攻撃性に対して,B氏は憎しみや怒りを感じていた。これら一連の主観的体験には,B氏が,日常生活において激しい攻撃性に曝され,心身ともに疲弊し,殺伐感や憎しみや怒りなどを感じていたことが示されていた。

箱庭制作過程の途中で,B氏の主観的体験に変化が生じた。B氏は思い出が残っていることに気づき,箱庭制作過程 22 でルーペを選んだ。内省報告によると,それは生きることへの関心が絶えていないこと,土俵際で立っているようだが,なんとかまだ足を残している感覚の表現であった。その後,左右に走る水の道を作り,その左端に亀を置いた。内省報告やふりかえり面接での報告によると,B氏は自分が乾いていることに気づいた。同時に,砂漠を歩いているわけではなく,寄るべきものとしての神,支えてくれた仲間の存在に気づいた。そして,他の存在から助けを受けている自分がたどっていく道筋として,水の道を作った。続く,花,ガラス瓶,天使の構成では,B氏が一方で不安を覚えつつも,ほっとする空間があり,将来への期待,将来の祝福や平安を望む思いが芽生え始めたこと,また,過去における良い思い出や人々との繋がりは侵されず,否定しえないことへの気づきが表現された。B氏は箱庭制作過程 35 で,十字架を亀の背に載せた。この構成は,今自分がしている苦労は,イエスが歩んだ道に通じるものとの感じ,イエスへの共感の深まりを示すものであった。

B氏は,第2回箱庭制作面接の前半では,日常生活における様々な苦しい出来事やそれに対する自分の心情を巡る構成を行ったが,途中から神やイエス,仲間たちの支えを思い起こし,箱庭制作過程のほぼ最終段階では,イエスへの共感をさらに深めることができた,と考えることができる。

### (3) 第3回箱庭制作面接

第3回箱庭制作面接では,砂箱右奥隅に置かれた自己像である星の王子様が,身近なところから将来に向けて鳥瞰したり,思い出を思い返すというテーマの構成がなされた。そこに構成されたものは,山あり谷あり,障壁もありという生き様であったことが,第3回ふりかえり面接で語られた。

箱庭制作過程 3 で砂箱右奥隅に置かれた星の王子様は自己像であった。制作過程 11~17 の砂箱右奥と左手前の針葉樹は隔てであり,その内側と外側を隔てていた。

2体の祈る人形や橋や十字架は,祈りや信仰と関連していた。祈る人形には,なにか一つ大きなことがあればとん挫してしまいうような状況,これからの不安定な道への祈り心が表されていた。橋には,橋を渡る決断という意味が表現されていた。内省報告によると,この構成には,神に守られて,危険や停滞と乗り越えてきたという思いが込められていた。十字架は,B氏の信仰とその信仰によって,重いものはないにしても,全体のバランスがよくなっていくことへの願いが表されていた。内省報告やふりかえり面接での報告によると,十字架には,信仰が支えになったという実感や,現実の障害や思い悩みに対し

て信仰が実際的な力になり、自分の意思で耐えてきたことの表現であった。B氏の人生は山あり、谷あり、障壁もありというものであった。そのような状態であったからこそ、信仰が支えになったことや、現実の障害や思い悩みに対して信仰が実際的な力になっていたことなどを実感、再確認できたことは、B氏にとって大きな意味があった、と考えられる。

かたつむりには、自分の遅々とした歩みとそれをじれったく思う気持ち、トンボにはふんわりとした軽やかさへのあこがれが示されていた。舵きりをするミッキーマウスには、今も危険や停滞を避けることができていない舵きりの難しい現状が表されていた。

ポストや真珠や雨(ガラスのつぶ)やミニカーを用いた意外な構成から自分の心や生き方への気づきがあった。それは、ポストや真珠には、思わぬ時にいい知らせがあったり、いいことがあったりもするというイメージが付与されていた。雨は、みずみずしさやうるおいのイメージであるとともに、生きていけば誰にも起こる自然の理を B氏は思い起こすことになった。ミニカーは気晴らしや楽しみの大事さや、自分の生き方は面白みの生き方だろうかとの思いが現れていた。これらの主観的体験は、山あり、谷あり、障壁もありという生き様を補償するようなものであり、今後の課題である、と捉えられる。

#### (4) 第4回箱庭制作面接

第4回箱庭制作面接は、第2回および第3回箱庭制作面接とは雰囲気の違いがなされた。箱庭制作面接当初から、ゆったりとしていられる気分を感じ、それがロッキングチェアに表現された。その後、構成された風景から、B氏は、かつて行ったことのある土地やそこにいた人々のことを思い出した。その土地やその人々とのつながりの中で、自分が心地よく、くつろいでいた感覚を思い出した。第4回箱庭制作面接では、信仰や宗教性を巡る言及は直接的にはなかったが、B氏が心地よいと感じ、くつろぐことできた人々は、キリスト教精神を一つの重要な基盤としてもつ施設の人々であった。

#### (5) 第5回箱庭制作面接

第5回箱庭制作面接の箱庭作品は、日常生活での苦しい状況が色濃く反映されたものとなった。砂箱の奥の構成には、ちょっと怒っている自分、悲しんでいる自分、ぼかしちゃったと感じる自分、のんびりしたい思い、えいやーと気合を入れようとする自分など渦巻く情緒が表現された。星の王子様は自己像であり、ルーペを使って、砂箱奥のネガティブな要素も含んだ自分に渦巻く情緒を覗きこみ、抑圧的に観察していた。

星の王子様の背後に置かれた教会、橋、大砲、ワニ、小瓶、ベッドに横たわるタキシードを着た人形、子どもの人形は、自分の背後にある念慮していることが示された。B氏は自身の体調がすぐれず、仕事上の困難や緊張感を抱えていた。ワニは、B氏が被っている攻撃性が表現されていた。

しかし、そのような困難な状況の中でも、B氏はそれに向き合おうとしていた。仕事上のことで背負っているものがたくさんあり、自分への攻撃に随分消耗し、体調も悪い中で、B氏はさらに別の乗り越えるべき課題をも抱えていた。しかし、それらに対して、ひどく落ち込むとか、投げ出すとかという姿勢ではなく、わりと冷静に事態に向き合っていることが示された。筆者には、B氏が現状や自分自身に真摯に向き合い、関わっているように感じられた。

第5回箱庭制作面接では、B氏の上を示したことは違う側面についての気づきも現れた。

B氏は、針葉樹を砂箱四隅に置いた。その構成について内省報告に無意識の領域（B氏内省、5-6、制作・意図）、今は脇に追いやられている諸々の心の部分（B氏内省、5-6、制作・感覚）、と記された。B氏は、この構成に関して、四隅ぎりぎりまで構成する強さ・馬力が自分にはないという自分の特性だ、と語った。これに類似の、森によって区切りができるという構成は、第2回および第3回箱庭制作面接にも表れていた。このような構成が連続することによって、B氏は構成の象徴的意味について、気づくことができた、と捉えることができる。しかし、第6回箱庭制作面接以降は、四隅に森を作ること、丸い枠に限定するといった構成は現れない。この変化は領域の拡大(河合隼雄,1969,p.47)、と捉えることができる。

#### (6) 第6回箱庭制作面接

第6回箱庭制作面接の箱庭作品は、今までの作品と非連続的な作品と感じられるほど、構成が大きく異なっていた。作品のテーマは、再生であり、再生が中心部から周辺へ広がっていった。そして、海の生き物は、石仏や埴輪に表された人の営みの遺跡や陸地の状況とは関係なく、それまで通りにずっと生活しているというイメージが付与された、と考えられる。つまり、この構成には、中央から周辺へという空間的広がりが表現された。また、過去・現在・未来（再生の継続）という時間軸、陸地とは関係なくずっと続いている海の営みという時間の多様性が表現されている、と捉えることができる。

第6回箱庭制作面接の特徴の一つとして、直接的に表現された自己像がない点、また、自分個人の特性への気づきがほとんど報告されない点を挙げることができる。しかし、一部で、再生というテーマと自分自身との関連が語られた。再生について、B氏は最近の生活の中で取り組みはじめたことや気持ちの回復について述べた。ところが、中央部の再生は感覚的には1年とか2年というわりと短い期間に起こったものであること、人の痕跡は、何十年、何百年前に自分とは無関係に作られたものが風に吹かれ、波に洗われて出てきたものというイメージがあると語った。内省報告やふりかえり面接によると、B氏は、島の再生や人の生活の痕跡について、意欲が戻りつつある今の自分(人としての自分（B氏内省、6-複数過程に亘って、調査・意味）)に関連させている。しかし、主要な力点は昔から変わらないより普遍的な意味での人の歩み(人の歩みの歴史（B氏内省、6-複数過程に亘って、調査・意味）)の方にあった、と捉えることができる。つまり、この回の全体の文脈としては、B氏は個人的存在としての自分に触れつつも、人の歴史の中に位置づいている存在としての自分に、より焦点化されており、主要な力点は昔から変わらないより普遍的な意味での人の歩みの方にあった、と考えることができる。

#### (7) 第7回箱庭制作面接

第7回箱庭制作面接は、第6回箱庭制作面接に続いて、抽象度の高い作品であった。B氏は、第7回箱庭制作面接で4つの区画を作るとともに中央に十字形状の構成を行った。十字形の部分は、周りの4つの区画の背後、根底にある中心となるものであった。

4つの区画は、それぞれが小さな箱庭のような感じもあり、それぞれの区画に四季を表現していった。さらに四季の構成から、巡っているというイメージが湧いてきた。巡るという時間の流れは、B氏が今まで箱庭制作面接を重ねる中で、日常生活でも様々なことがあった過去と、新しい年度に向け心を新たにするような思いが反映したものである、と捉えられる。

つまり、十字形の部分は、神様や仏様という直接的な宗教的イメージに加えて、巡るといふ客観世界の動きの中心や核になるものであり、動きを意識している自分の核でもあった。客観的時間の中心でもあり、時間の変化を見させ、新しい年度への気持ちを起こさせるような感覚の奥に存在する自分の内的な中心でもあるという、B 氏に不思議さを感じさせる多義的な表現であった。

また、4 つの区画に表現された四季の自然や人々の生活は、十字形の部分に支えられた地上の営みのイメージであり、B 氏の直接的な言及はないのだが、それは根底にある神を基盤とした地上世界の豊かさの表現である、と推察できよう。

#### (8) 第 8 回箱庭制作面接

第 7 回箱庭制作面接と第 8 回箱庭制作面接の間に、予想しなかった転任の打診が B 氏にあった。第 8 回箱庭制作面接は、B 氏の転任が、ほぼ決まった後に行われたため、構成内容はそれが強く反映したものとなった。

箱庭制作過程 1 で、船出していくイメージが湧き、そのイメージを基にして、構成されていた。今回の突然の、予想しなかった転任に対して、B 氏は複雑な思いを抱えていた。転任や将来への期待、安心感と共に、現在の人々との繋がりから離れなければならない未練や、転任先で自分が役立つのかという将来への迷いがあった。また、一部の人には、B 氏が転任することへの抵抗もあった。

そのような複雑な思いを抱えつつ、人を導く天使が置かれた。今回の転任にあたって、B 氏は不思議な導きを感じた。そして自己の信仰を基盤として、信頼し導かれるままに委ねて進むことを選んだ、と捉えることができる。

B 氏は、第 8 回箱庭制作面接の調査的説明過程の最後と第 8 回ふりかえり面接で、今回を含めた今までの箱庭制作面接について、思いを語った。第 6 回箱庭制作面接から、箱庭制作に自然や自分が修復されていくテーマが、意図せず顕れ始めたことや、第 7 回箱庭制作面接で構成された多義的な表現について語った。そのような箱庭制作面接の流れの中で、再出発の打診が現実生活でもあった。外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開に、B 氏は不思議を感じていた。ふりかえり面接の報告によると、B 氏は外界と内界の一致が箱庭制作面接の開始時から準備されていたように感じており、それを宗教的な不思議さと重ね合わせて考えていた、と理解することができる。また、B 氏は箱庭制作面接の中でも、日常生活においても、自分自身の心や生き方、周りの状況や人々に対して、真摯に向き合い、自己の課題に主体的に取り組んでいたことが、このような展開や気づきに寄与している、と筆者は捉えた。

ここで、B 氏の箱庭制作面接における主要なテーマ宗教性・信仰について、改めて考えたい。第 1 回箱庭制作面接～第 3 回箱庭制作面接、第 7 回箱庭制作面接と第 8 回箱庭制作面接で、宗教性・信仰がその回の主なテーマとなった。宗教性・信仰は、第 1 回箱庭制作面接の泉に関して考察したように、B 氏の心や生き方において核になるものであるため、これが箱庭制作面接の主要テーマとなることは当然である。本面接が、そのような個人としての重要なテーマを表現できる場となったことが、箱庭制作面接が B 氏にとって意義ある場となったことの基盤だった、考えられる。

しかし、箱庭制作面接として、より重要なことは、第8回箱庭制作面接や第8回ふりかえり面接で語られたように、B氏が宗教性・信仰のテーマに関して、不思議さを体験したことにある、と考えられる。本来的に、宗教性・信仰は、人間を超えたものへの人の思い・体験であるため、不思議な感覚・体験はそれと切り離せないものであろう。しかし、箱庭制作面接の場合、宗教的表現、信仰に関する表現を、意図的・意識的に構成することもできる。そのような意図的・意識的な構成で終わっている場合には、不思議さは生じてこないだろう。B氏が宗教性・信仰のテーマに関して不思議さを体験したことは、B氏の箱庭制作面接における宗教的表現が意図的・意識的構成にとどまっていなかったことの証左の一つと考えることができる。

その不思議さの体験は、以下の第8回箱庭制作面接および第8回ふりかえり面接におけるB氏の語りに集約されている。第8回箱庭制作面接でB氏は導かれるままに、その、出ていくかっていうところに辿り着いてったというところでは、まあ、あの、不思議さを感じると語った。第8回ふりかえり面接では、この不思議さに関して以下のように語った。[制作を始める、その、この始めた段階から、実はなにかしらの、なんか、準備期間だったのかなとかという風にも思える、と。あんまり、それを言うと、宗教かってなるんですけど‘笑’、でも実際、そういうプロセスを歩んできたんだよな一っていうのは、思うんですよね。 (中略)不思議としか言いようがないところがあって、(中略)外的な要因のことに、それが、どういう風に、どうしてそんな風に、言えるのかっていうことは説明しがたいっていうか。というところがあって、なんか、まあ、そこがいいところでもあるんだけど、わかんない人にはわかんないだろうなっていう世界だろうなっていう‘笑’。そういう風に思うんですけど]。このような事象に関して、ユング心理学的な考察が可能である。例えば、セルフやVI章に記したイメージの展望的機能という概念から説明することもできるだろう(p.80参照)。しかし、本項の目的は、B氏の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味の考察にあるため、B氏の主観的体験の語りの文脈に沿って考察していきたい。

先に挙げたB氏の主観的体験の語りは、B氏の信仰における神の働きに関する内容を含んでいる、と考えられる。それは、神が、人知を超えた計画をもって、一人一人の人間に働きかけてくれるということであり、人はその計画に導かれ、使命を与えられて生きていくということである、と考えられる。箱庭制作を始める段階から、何かの準備期間だったのかと思うという言葉と不思議、説明しがたいという言葉は、神の計画の不思議さを物語っている、と理解できる。そのような神の計画の基で、B氏は転任した場所での使命を与えられる。そして、B氏はその神の導きに従い、導かれるまま、新しい使命を果たすべく新しい地に向かおうとする。このような内容を含んだ語り、と理解できる。そのような神の働きを箱庭制作面接でB氏が実感したことは、一人の人間に神が働き、力を及ぼしてくれるという信仰上の教えをB氏がまさに自らのこととして体験した事態であったと考えられる。

B氏は箱庭制作過程の中で、自らの宗教性・信仰を巡る内的プロセスを照合し、受け止め、表現することができた。そして、その表現・構成から自分の心や生き方への気づきをえることや再確認をすることができた。継続的な箱庭制作面接における内界と構成との交流から、作品の変化や自分の心の変化・成長を実感していった。本章2)で考察するが、その変化に

は第 6 回および第 7 回箱庭制作面接での心の深層からの表現・構成も寄与した,と考えられる。変化の重要なテーマとして,宗教性・信仰があった。そして,最終回を迎えるころに,外界・箱庭制作面接・内界の一致という不思議な体験が起こり,それを B 氏は自らの信仰との関係の中で,意味づけることができた。このような体験を通して,B 氏は神の偉大さ,不思議さを再確認し,信仰をより深めることができた,と理解できる。

この不思議な体験の基盤となった事柄についても考察したい。それは,第 1 回箱庭制作面接～第 3 回箱庭制作面接,第 7 回箱庭制作面接で,B 氏が示した自己の信仰への真摯な態度である,と考えられる。B 氏は,それらの箱庭制作面接で,神の守りや支えを実感・体験していた(第 1 回箱庭制作面接～第 3 回箱庭制作面接)。小さきものとして,神の守りに謙虚に感謝し,花をささげるという行為を行った(第 1 回箱庭制作面接)。信仰を共にする仲間からの支えや助けがあったことを再確認した。苦難を体験したキリストへの共感が深まった(第 2 回箱庭制作面接)。信仰が,実際の思い悩みとかいような障害などに関わっていく際に,実際的な意味での力になっていることを再確認した(第 3 回箱庭制作面接)。根底にあり,客観的時空間の核でもあり,自己の内的な核でもある存在に思いを向けた(第 7 回箱庭制作面接)。

また,信仰を背景とした B 氏の思いや真摯な生き様も不思議な体験を生んだ基盤の一つと考えられる。山あり,谷あり,障壁もありという生き様の中にも,いい知らせやうるおいという自然からの恵みがあることに気づいた(第 3 回箱庭制作面接)。キリスト教精神を基盤とする施設の人々との心地よいつながりを想起し,実感した(第 4 回箱庭制作面接)。他者の攻撃性や体調などに困難を抱えつつも,現状に真摯に向きあい,関わっていた(第 5 回箱庭制作面接)。

このような信仰に裏打ちされた態度や真摯な姿勢を,継続的な箱庭制作面接の中で,B 氏は一貫して示していた。B 氏の一貫した態度と箱庭制作面接の連続性の促進機能(Ⅸ章)が相まって,宗教性に関する不思議な体験やその気づきが生まれた,と理解することができる。

## 2) 心の多層性の観点からの考察

本項では,ユング心理学的な知見を参照して,1) 宗教性を中心とした心や生き方の変容とは異なる観点から考察する。ユング心理学では,心は多層的である,と考える(河合隼雄,1967,pp.93-95)。心の多層性の観点から,B 氏の第 6 回および第 7 回箱庭制作面接について考えたい。

先に,第 6 回箱庭制作面接の箱庭作品は,今までの作品と非連続的な作品と感じられるほど,構成が大きく異なっていた,と述べた。また,B 氏第 7 回箱庭制作面接は,第 6 回箱庭制作面接に続いて,抽象度の高い作品であった,と述べた。それ以前の,第 2 回箱庭制作面接から第 5 回箱庭制作面接においては,現実世界のテーマが比較的多く含まれていた。そのような箱庭制作面接の流れの中で,第 6 回および第 7 回箱庭制作面接の作品は特異的な作品であり,それが筆者に非連続的な印象を与えたのだ,と考えられる。

その特異的・非連続的な作品となった要因は,それらの作品が生み出された心の次元・層が,第 2 回から第 5 回箱庭制作面接のそれとは異なるため,と考えることができるのではないか。第 6 回箱庭制作面接の作品のテーマは,再生であった。再生が中心部から周辺へ広が

っていった。この再生に関して、B氏は、一面として意欲が戻りつつある今の自分に関連させていた。第6回箱庭制作面接の調査的説明過程で再生に関して、感覚的には、あの、この1年とか2年とか、わりあい短いような、その感覚があったりする（B氏調査、6-複数過程に亘って）と語った。この語りが箱庭制作過程で表現された再生の時間感覚を正しく説明しているとすれば、再生は、直近（約1ヶ月）の意欲が戻りつつある今の自分と直接的な関連がないことになる。すると、この再生が何を表しているかは具体的には不明だが、1年とか2年とかの時間感覚を伴った再生のイメージである、と捉えることができる。

この構成には、中央から周辺へという空間的広がり、何百年前という過去・現在・未来（再生の継続）という時間の関連性、陸地とは関係なくずっと続いている海の営みという時間の多様性が表現されている、と捉えられた。この表現においても、第6回箱庭制作面接の構成はB氏の現実世界における個人的体験を超えた、より普遍的なものが表現された、と考えることができる。

また、第6回箱庭制作面接の作品の特徴の一つとして、直接的に表現された自己像がない点、自分個人の特性への気づきがほとんど報告されない点があった。島の再生や人の生活の痕跡について、意欲が戻りつつある今の自分に関連させつつも、主要な力点は昔から変わらないより普遍的な意味での人の歩みの方にあった、と捉えられた。今回の全体の文脈としては、個人的存在としての自分よりも、歴史的な存在である自分により焦点化されていた、と考えることができた。この点からも、第6回箱庭制作面接の構成は、B氏の個人的な意識体験を超えたものが表現されていた、と考えられる。

第7回箱庭制作面接は、第6回箱庭制作面接に続いて、抽象度の高い作品であった。4つの区画に表現された四季の風景は、折々の人々の生活や自然のあり様の表現であり、決して抽象度が高いものではない。第7回箱庭制作面接の抽象度を高めているのは、中央の十字形の構成とその主観的体験である。十字形の構成は、神や仏という宗教的なイメージでもあり、地球を動かす力、そのようなことを見させる自分の感覚の奥にあるようなものである、表現しがたい多義的な表現であった。また、B氏は、中央の十字形について調査的説明過程で前に、なんか、この部分があるっていうよりか、まあ、その、背後とか、根底とかにあって、っというところ（B氏調査、7-全体的感想）とも語った。これらの語りから、中央の十字形は、4つの区画に表現された四季の風景とは、心の次元・層が異なる表現である、と考えることができる。

B氏第6回および第7回箱庭制作面接の非連続性や特異性は、心の多層性による次元の異なる表現に起因する、と考えることができる。第6回および第7回箱庭制作面接の作品は、B氏の心の深層より生じたイメージを含んだもの、と考えることができる。第6回箱庭制作面接の再生のテーマや時間の多義性、第7回箱庭制作面接の砂箱中央の十字形の部分に、深層のイメージが顕れている、と考えることができよう。そして、このような内的プロセスが、第8回箱庭制作面接や第8回ふりかえり面接で語られた外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開の母胎となった、と考えることができよう。

次に、第6回箱庭制作面接で生じた領域の拡大について、心の多層性との関連から考察したい。第5回箱庭制作面接で、砂箱四隅に森が構成された。その構成について、B氏は内省



報告に無意識の領域（B氏内省,5-6,制作・意図）, 今は脇に追いやられている諸々の心の部分（B氏内省,5-6,制作・感覚）と記した。ところが第6回箱庭制作面接以降,砂箱全面を用いた構成がなされた。先に,第6回および第7回箱庭制作面接の作品は,B氏の心の深層より生じたイメージを含んだものと考えられることができる,と記した。この考えが的を射ているのであれば,第6回箱庭制作面接以降の領域の拡大について,理解が可能となる。この領域の拡大は,深層に向かったの垂直方向への意識の深化によってもたらされたもの,と理解できる。あるいは,B氏の意識が,心の深層のイメージとつながりを持ち,それを受け止め,表現できるようになったため,と捉えることもできる。このような垂直方向の深化が,水平方向の領域の拡大を生んだ,と考えられる。第5回箱庭制作面接では無意識の領域であり,心の脇に追いやられていた心の領域に,B氏は触れ,受け止め,表現できるようになったため,以後,その領域を森として表現しなくなった。つまり,意識化・顕在化していないため,その内容が明示的にならない部分が四隅の森として構成された。しかし,第6回箱庭制作面接以降は,それが顕在化し,領域の拡大につながった,と考えられる。

## XIII 章. 総合考察

### XIII-1. 本章の目的と構成

本研究の第1研究は,a.継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験(subjective experience)を精緻に分析し,概念化することを通して,箱庭制作面接が箱庭制作者の自己理解や自己成長をどのように促進するのか,その機能について検討することを目的とした。目的 a は,以下の2つの下位目的から成っていた。a-1.箱庭制作面接の中心的過程である箱庭制作過程に主に焦点を合わせ,箱庭作品が制作されていく過程において,どのような促進機能が生じるのかを検討する。a-2.箱庭制作面接が継続することによって,箱庭制作過程においてどのような促進機能が生じるのかを検討する。第1研究では,目的 a を達成するため,2名の箱庭制作者の継続的な箱庭制作面接における主観的体験の語りや記述のデータを M-GTA によって分析し,箱庭制作面接の促進機能について理論生成した。

第2研究は,b.継続的な箱庭制作面接における,箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開,その個人的意味を検討すること,を目的とした。目的を達成するために,2人の箱庭制作者それぞれの主観的体験の語りや記述に関して,質的研究による系列的理解によって,筆者が設定したテーマについて分析・考察した。

IX章にも記したが,第2研究で採用した質的研究による系列的理解は,本研究の目的 b を達成するために,オリジナルに考案した研究方法である。本研究の目的 b を達成するためには,M-GTA とは異なる研究方法が必要となった。a.M-GTA では,調査参加者個人のまともは保持されないため,各個人の事例の継時的な変化を追うことができない。そのため,目的 b を達成するためには,事例研究方法による分析が必要となった。b.しかし,本研究で収集されたデータは,多元的な方法で収集された詳細なデータである。一般的な事例研究方法では,詳細で多元的なデータを十分に活かすことができないことが危惧された。詳細で多元的なデータを精緻に比較・検討するとともに,それらの検討を通して,データを総合的に把握する手続きが必要になった。そこで,質的研究による系列的理解を考案し,その研究方法によって,第2研究を行った。

研究方法の名称を内実により適合させるために,この研究方法を「単一事例質的研究」と呼ぶことにしたい。「単一事例質的研究」を以下のように定義する。「箱庭制作面接に関する単一事例質的研究」は,多元的な方法で収集された詳細なデータを基礎資料として,各調査参加者の主観的体験のデータに対して,a.箱庭制作過程毎の分析,b.箱庭制作面接毎に,箱庭制作者の主観的体験の変容や関連性に関する分析,c.各調査参加者の全面接の分析,を精緻に行う研究方法である。「単一事例質的研究」は,系列的理解を実施する点では事例研究方法と共通点をもつが,詳細で多元的なデータを精緻に比較・検討するとともに,それらの検討を通して,データを総合的に把握する手続きを採用している点において,事例研究方法とは異なっている。「単一事例質的研究」は,箱庭制作過程に関するデータをミクロな視点から精緻に分析する方法論と,事例研究方法による継続した面接過程である箱庭療法過程に関して系列的理解を行う方法論を統合した方法と考えることができる。このような方法の採用は,目的 b に適うと同時に,詳細で多元的なデータを活かす研究方法となりうると考える。

本章総合考察は,1.本研究の調査方法・分析方法について考察すること,2.箱庭制作面接に

における促進機能について総合的に考察すること,3.継続的な箱庭制作面接における連続性について考察すること,を目的とする。

本研究では,本研究の目的を達成するために,調査方法と分析方法において,多元的方法や方法のトライアンギュレーションを採用した。その調査方法と分析方法の有効性と限界について,2節で考察する。

本研究では,箱庭制作面接の中心的な促進機能を,箱庭制作面接の促進要因間の『交流』であると解釈した。促進要因間の『交流』は,箱庭制作面接における促進機能の核となる。それに対して,本研究の M-GTA のカテゴリーや概念は,促進要因間の交流であるため,それぞれが箱庭制作面接の促進機能を持ちうる。しかし,それらの促進機能は限局的であり,箱庭制作面接全体の促進機能の一部を担うものである,と考えることができる。と言うものの,箱庭制作面接における促進機能の機微を捉える上では,カテゴリーや概念レベルでの促進機能も重要な観点となる。このレベルでの理解は,箱庭制作面接の実践に最も密接に関連している,と捉えることができる。本章で考察する,複数のコアカテゴリーに亘って見いだされた促進機能は,単一のコアカテゴリーのみに見いだされたカテゴリーや概念と比較すると,より包括的な促進機能である,と考えることができる。そのため,本章の目的 2 を設定し,包括的な促進機能を含めて,箱庭制作面接における促進機能について,3 節で総合的に考察する。

本研究では,継続的な箱庭制作面接における連続性について,p.1 に挙げた a-2 と b の 2 つの目的を設定し,異なる分析方法によって考察した。この 2 つの目的・分析方法について 4 節で総合的に考察する。

5 節に,今後の課題について記す。

## XIII-2. 本研究の調査方法・分析方法についての考察

本研究では,本研究の目的を達成するために,調査方法と分析方法において,多元的方法や方法のトライアンギュレーションを採用した。その調査方法と分析方法の有効性と限界について,考察する。

### 1) 調査方法

本研究における調査は,(1)箱庭制作面接の,1.箱庭制作過程,2-1.自発的説明過程と 2-2.調査的説明過程,(2)箱庭制作面接のビデオを視聴しての内省報告作成,(3)箱庭制作者の内省報告を筆者と共有化するふりかえり面接,(4)全面接過程についてのふりかえり面接から構成されている。これらのうち,1つのセットとなる(1)から(3)の調査構造を図示すると図 7 のような包含関係となる。各面接,各過程について,方法論の観点から記述していく。

#### (1)箱庭制作面接 1.箱庭制作過程

箱庭制作過程で,筆者は見守り手あるいは広い意味でのセラピストとして,その場にいた。しかし,それを,従来の調査方法にあえて翻訳すれば,参与観察をしていたというようにも捉えることができるだろう。そこで,図 7 では,一種の留保の意味もこめて,()付の参与観察とした。

#### (1)箱庭制作面接 2-1.自発的説明過程

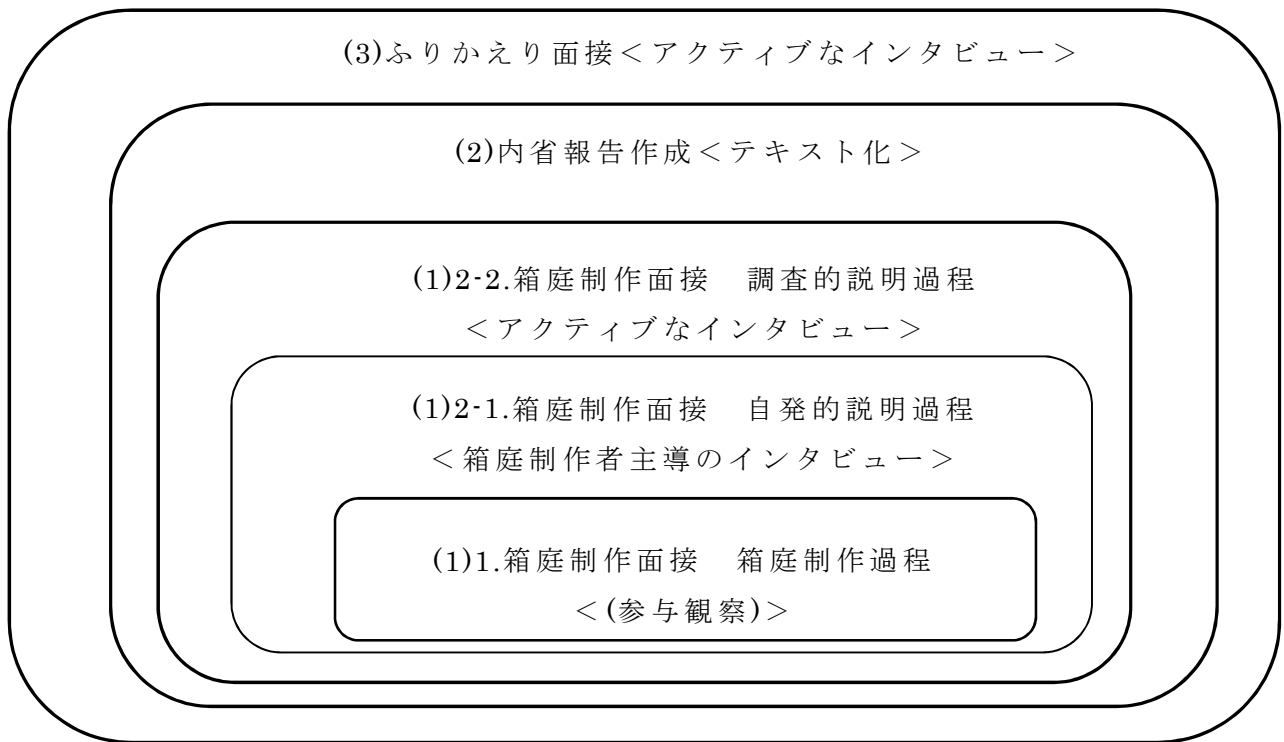


図 7 調査構造図

自発的説明過程で,筆者は,箱庭制作者の自発的な語りを傾聴することを基本的な態度として臨んだ。そのため,これは箱庭制作者主導のインタビューと考えることができる。

#### (1)箱庭制作面接 2-2. 調査的説明過程

調査的説明過程では,筆者は,より積極的に対話や質問を行い,箱庭制作過程と自発的説明過程における,箱庭制作者の主観的体験の言語化を促した。そのため,これはアクティブ・インタビューと捉えることができる。アクティブ・インタビューは,インタビュアーとインタビュイーが協同で知識を構築することに貢献していることを認め,それを意識的・良心的にインタビューデータの産出と分析に組み込んでいく(Holstein & Gubrium,1995 上淵他訳 2003,p.22)。この調査的説明過程でなされたことは,アクティブ・インタビューと考えることができる。

#### (2)内省報告作成

箱庭制作面接のビデオを箱庭制作者・筆者が視聴し内省報告を書き綴った。箱庭制作者・筆者の内的プロセスが文章化された。そのため,これは,内的なプロセスをテキスト化する行為と捉えることができる。

#### (3)ふりかえり面接

ふりかえり面接では,箱庭制作者が箱庭制作過程,自発的説明過程,調査的説明過程に関する内省報告を行い,筆者と共有化するとともに,筆者が明確化すべきと考えた点に関して確認した。そのため,この面接もアクティブ・インタビューと捉えられる。

記録方法も複数の方法を採用した。a.箱庭制作面接は,ビデオ録画された。b.内省報告作成は,エクセルファイルで作成され,箱庭制作者の内省報告のプリントアウトと電子データは筆者とも共有された。c.ふりかえり面接は録音された。

このように、参与観察、インタビュー、テキスト化という多元的なデータ収集を行った。また、記録方法としても、ビデオ録画、録音、テキストと多様な方法を用いている。そして、各面接、各過程が時系列で包含関係となっている。このように本研究の調査方法は、多元的・体系的なデータ収集を行っており、多元的方法・方法のトライアングレーションと捉えることができる。調査方法において、多元的方法・方法のトライアングレーションを採用したことによって、箱庭制作者の主観的体験の語りや記述を精緻に分析するための詳細な基礎データを収集することができた。

本研究では箱庭制作者から、詳細で、豊かな主観的体験が報告された。それには、多元的方法・方法のトライアングレーションの要因に加え、箱庭制作者の研究への関与の強さや内的プロセスを言語化する能力の高さなどが寄与していると考えられる。

箱庭療法では、イメージ表現の生命力が重視され、言語化には慎重な態度が求められている。それゆえ本研究では、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進と言語化を促す調査方法とを両立するため、言語化に関して慎重な関わりを心がけた。

しかし、内省報告、ふりかえり面接は、本研究において必要な調査方法であるものの、その課題・限界も示唆された。

A氏第4回ふりかえり面接で、A氏は、[箱庭制作面接では深まっていく感じだが、ふりかえり面接では平行移動するような感じ]と語った。筆者は、ふりかえり面接がA氏の自己理解・自己成長を阻害していないか危惧し、質問した。A氏は[大きな支障はない]と答えたが、ふりかえり面接は箱庭制作者の内的プロセスの深まりを小休止させる危険性が示唆された。そこで、ふりかえり面接を慎重に継続するが、A氏の自己理解・自己成長の促進が本面接の第一目的であることを再確認した。

また、ビデオ視聴による内省報告作成は、研究への関与・動機づけが強くないと継続が難しいため、調査参加者の選択や意思確認に慎重な検討・配慮が必要である。さらに、内省報告により、過度の知性化を起こさないための配慮も必要だった。本研究では、知性化を疑わせる内省報告箇所に対して、ふりかえり面接での質問を控え、それ以上の言語化を回避した。そうすることによって、知性化をできる限り避け、箱庭制作におけるイメージの生命力やイメージの自然な流れを尊重できるよう、配慮した。

## 2) 分析方法

同一データに対して2つの異なる分析方法を併用する意義について考察する。

a.本研究では、木下(2009)で推奨されているように(pp.34-36)、M-GTAの分析結果であるカテゴリー、概念を意識しつつ、M-GTAと単一事例質的研究を併用することが、研究目的に照らして効果的であると判断した。

M-GTAでは「被面接者個人のまとまりは保持されない」(木下,2003,p.104)。そのため、M-GTAによる分析では、事例の継時的な変化を追うことは困難であった。しかし、単一事例質的研究の分析によって、各箱庭制作者個人のまとまりを保持した上で、事例の継時的な変化に対して系列的・多層的・総合的に分析することができた。

b.本研究では、M-GTAの標準的な研究に比べ具体例を多く示す工夫を行ったが、それで

も M-GTA を用いた分析では例示できるディテールには限りがあった。しかし、単一事例質的研究を実施することによって、より多くのディテールを直接的に記述し、連続性に関する単一事例の全体像を厚く記述すること (thick description)\*1 によって、多層的・総合的に分析することができた。

c. 本研究では、箱庭制作面接の連続性に関して、M-GTA と単一事例質的研究の 2 つの研究法を用いて考察した。M-GTA の分析では、箱庭制作面接の連続性がもつ促進機能という機能面に焦点を合わせることができた。単一事例質的研究では、面接テーマに関する箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味という、継続的な箱庭制作面接に表現された心理的内容の理解に焦点を合わせることができた。両研究法を併用することによって、箱庭制作面接を機能と内容の両側面から多面的・総合的に分析・考察することが可能になった。

この両方法論の併用は、分析方法における多元的方法、方法のトライアングレーションと理解することができる。分析方法の多元的方法、方法のトライアングレーションによって、箱庭制作者の主観的体験の語りや記述を多面的・総合的に分析できたため、継続した箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験の語りや記述を精緻に分析するとともに、より総合的な考察が可能となった。

### XIII-3. 箱庭制作面接における促進機能についての総合考察

第 1 研究では、M-GTA による分析によって、箱庭制作面接の促進要因間の『交流』が、箱庭制作面接の中心的な促進機能であると解釈した。そして、コアカテゴリーごとに概念やカテゴリーについて、データに密着した考察を行った。その考察を通して、M-GTA の複数のコアカテゴリーに亘る箱庭制作面接の促進機能が見いだされた。複数のコアカテゴリーに亘って見いだされた箱庭制作面接の促進機能には、1) 装置や構成による内的プロセスの喚起、2) 装置や構成への内的プロセスの付与、3) 自律性や多義性などのイメージ特性、4) 意識の図と地、図地反転による気づき、5) ミニチュア・ミニチュア選択・構成の他の構成との関連・連動、6) 直観的な意識、7) 連続性による促進があった。複数のコアカテゴリーに亘って見いだされた促進機能は、単一のコアカテゴリーのみで見いだされたカテゴリーや概念と比較すると、より包括的な促進機能である、と考えることができる。複数のコアカテゴリーに亘って見いだされた、包括的な促進機能は、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に、より広範に、より高く寄与していると考えられる。1) “装置や構成による内的プロセスの喚起”は、[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]と[構成により喚起される内的プロセス]とが統合された包括的な促進機能である。2) “装置や構成への内的プロセスの付与”は、<ミニチュアに付与された内的プロセス>と[構成に付与された内的プロセス]とが統合された包括的な促進機能である。3) “自律性や多義性などのイメージ特性”は、<イメージの自律性>、[ミニチュアの多義性]、[構成による表現の多義性]、[枠外のイメージ]、[連続性とイメージ特性との関連]など、コアカテゴリー①、②、④、⑩、⑫に亘って見いだされた。4) “意識の図と地、図地反転による気づき”は、コアカテゴリー①、④に見いだされた。5) “ミニチュア・ミニチュア選択・構成の他の構成との関連・連動”は、[他の領域の構成への影響]、[ミ

ミニチュアの他領域との関連]と,[構成を巡る内的プロセスのミニチュア選択への影響]内の2具体例(◆具体例 87, ◆具体例 88)が統合された包括的な促進機能である。6)“直観的な意識”は,コアカテゴリー①, ②, ④に亘って見いだされた。7)“連続性による促進”は,コアカテゴリー⑪, ⑫に見いだされた。この包括的な促進機能の内,“意識の図と地, 図地反転による気づき”と“直観的な意識”は, M-GTA による分析によって,直接的に生成された概念ではない。“意識の図と地, 図地反転による気づき”と“直観的な意識”は, M-GTA による分析時点では,概念として生成されなかったが, M-GTA の概念やカテゴリーをデータに基づき詳細に考察する中で見いだされた。その意味では,“意識の図と地, 図地反転による気づき”と“直観的な意識”はデータに基づかず理論的に生成された促進機能ではなく, データに密着して生成された促進機能であると考えられることができる。

本節では,『交流』と包括的な促進機能に加えて, M-GTA の概念やカテゴリーの内,箱庭制作面接の促進機能に高く寄与していると考えられる一部の概念やカテゴリーを使って,箱庭制作面接の促進機能に関して,総合的に考察する。この総合考察では,箱庭制作面接の促進機能についてのエッセンスをより端的に示すことを目的とする(図 8)。V 章から VIII 章までの考察では, M-GTA のカテゴリーや概念は,促進要因間の交流であるため,限局的ながらも促進機能をもつと考えたため,個々のカテゴリーや概念について詳細に考察した。しかし,そのような考察では,各カテゴリーや概念が,箱庭制作面接の促進機能に対して,どの程度寄与しているのかの比重を明示することができなかった。そこで総合考察では,箱庭制作面接の促進機能に高く寄与していると考えられるものに焦点化し,本研究のデータに基づいて,現時点で考えられる箱庭制作面接の促進機能のエッセンスを描写する。また, V 章から VIII 章までの考察では,カテゴリーや概念の記述・説明に焦点化されたため,箱庭制作面接の流れに沿った記述にはなっていない。総合考察では,箱庭制作面接の流れを意識して,できる限り実際の箱庭制作面接の流れに近い形で,促進機能について記していく。

第 1 研究では, M-GTA による分析から,箱庭制作面接の中心的な促進機能を,箱庭制作面接の促進要因間の『交流』であると解釈した(図 3, p.25)。箱庭制作面接の促進機能に共通・通底するのは,『交流』である。箱庭制作面接は,促進要因の『交流』というダイナミックな動きによって,箱庭制作者の自己理解・自己成長を促進する。このことを前提として,以下に論を進めていく。

箱庭制作面接は現物の〈もの〉を使用する点に心理面接としての特徴がある。しかし,〈もの〉が〈もの〉に止まっているは,心理面接として機能しない。a.〈もの〉が〈ところのこと〉になる必要がある(藤原, 2002, p.128)。一方で, b.箱庭療法において,意識が勝ちすぎることの弊害が指摘される場合がある(河合隼雄, 1991, pp.132-134;他)。この a と b が箱庭制作面接で両立するためには,《創造における受動性と能動性》が重要となる。創造における受動性は,箱庭制作面接において,箱庭制作者の内的プロセスが心の奥から自然発生的に浮かび上がるのを待つ態度である。創造における能動性は,浮かんできた内的プロセスを捉えようとする積極的な態度であり,捉えた内的プロセスを実際に形作り,表現していかうとする能動的な内的プロセスである。例えば,

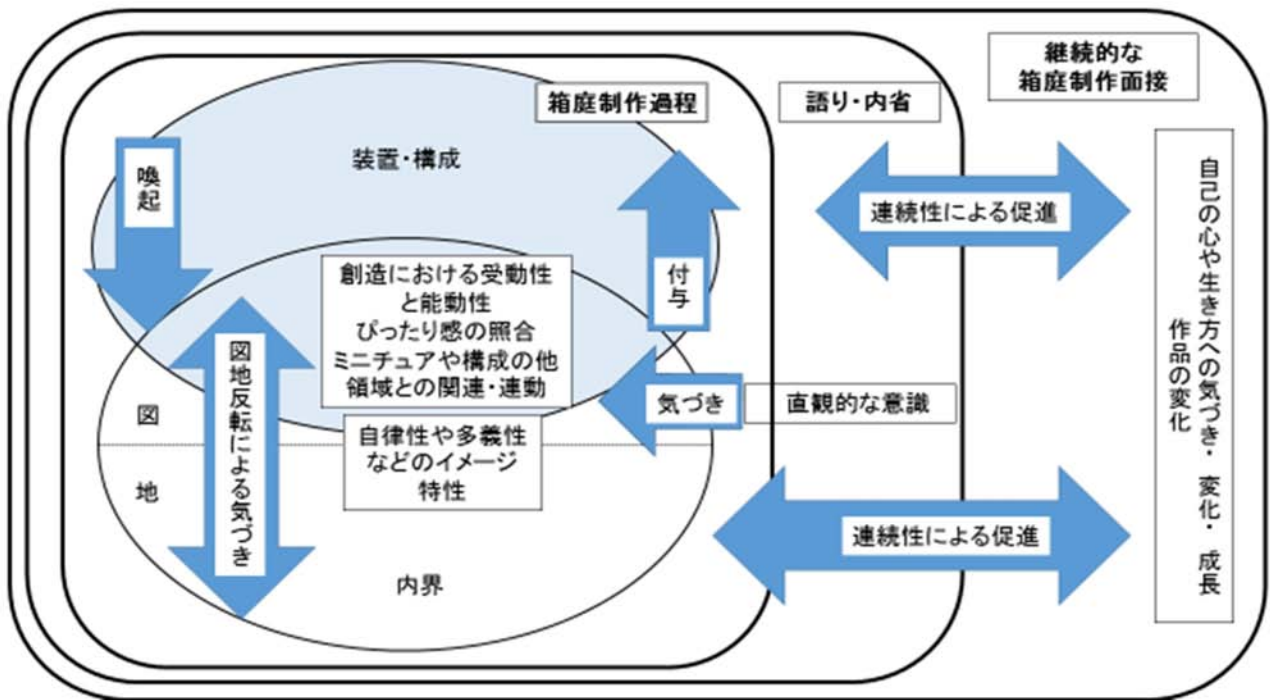


図8 促進機能の総合考察図

◆具体例 143 : A氏第4回箱庭制作面接制作過程2(◆具体例 37, pp. 70-71 の抜粋)

博物館で、あの曼荼羅の展示会をやっていたので<はああ>観て来たんですよ(中略) そいであの丸い図形とか、おもしろいなと思って、ま、でも、ね、そんなのを作りたいと思っているわけでもなく。でも砂を見ていたら、う、渦巻きだというふうに思ったので、すー‘息を吸う音’ちょっとどうなるかわからなかったんだけど、渦巻きが浮かんできてどうも消えないから、うんじゃあ作ってみようと思ったのが、今日の‘筆者に顔を向けて’作品なんです( A氏自発, 4-2) のそんなのを作りたいと思っているわけでもなく。でも砂を見ていたら、う、渦巻きだというふうに思ったのでは創造における受動性である。渦巻きが浮かんできてどうも消えないから、うんじゃあ作ってみようと思ったは、創造における能動性である。箱庭制作者の内的プロセスが心の奥から自然発生的に浮かび上がるのを待ち、浮かんできた内的プロセスを捉え、捉えた内的プロセスを実際に形作り、表現していくことによって、箱庭制作面接は<こころのこと>になると同時に、意識が勝ちすぎる可能性は軽減する。

第1研究では、“装置や構成による内的プロセスの喚起”と“装置や構成への内的プロセスの付与”が、<もの>が<こころのこと>になる包括的な促進機能の一部であると考えられた。

まず、“装置や構成による内的プロセスの喚起”について考察する。“装置や構成による内的プロセスの喚起”は、装置・構成と内界の『交流』によって生じる。砂やミニチュアという装置や構成によって、箱庭制作者の内的プロセスが喚起される。例えば、

◆具体例 144 : A氏第8回箱庭制作面接箱庭制作過程5(◆具体例 2, p28)



白い陶器の肌が床に伏せている義母の弱々しい感じをイメージさせる。それで大切に扱わなければという気持ちが私の中におきてきた(A氏内省, 8-5, 制作・感覚)は, 白い女性の人形のミニチュアに喚起された A 氏の内的プロセスである。例えば,

◆具体例 145 : A 氏第 3 回箱庭制作面接制作過程 13(◆具体例 22, p. 53 の抜粋)

いろいろ試そうと思って, ふっと亀の置き方を変えたらばくうん>あー, 急になんか違う感じになって, がらりと。あのああ, 沖へ出て行くのも気分がいいなと思ってくうんうん>沖へ出て行く風に決めましたね (A 氏自発, 3-13) は, 構成から喚起された A 氏の内的プロセスである。

装置や構成に箱庭作者の内的プロセスが喚起されることは, 箱庭制作面接の促進機能の中でも, 基礎的・基盤となる促進機能の一つである。内的プロセスの喚起は, 箱庭制作面接が促進機能を発揮する最初のステップと位置づけることができる。

もう一つの基礎的・基盤となる箱庭制作面接の促進機能は, 装置や構成に箱庭作者が内的プロセスを付与することである。“装置や構成への内的プロセスの付与”は, 装置・構成と内界の『交流』によって生じる。例えば,

◆具体例 146 : B 氏第 2 回箱庭制作面接制作過程 2(◆具体例 9, p. 39)

気持ちを重たくさせる重さを表現したい(B氏内省, 2-2, 制作・意図), 壁(B氏内省, 2-2, 制作・意味)は, B 氏が仕切りのミニチュアに付与した内的プロセスである。例えば,

◆具体例 147: B 氏第 6 回箱庭制作面接複数過程に亘って(◆具体例 30, pp. 63-64 の抜粋)

どちらかというと, 気持ち的には, 再生してく, という印象, 気持ちがあつて。だから, そういうようなところでは, そういう木々が生えてきて, 草が, 実の(?), 生えてきて, 多少なりとも, 実のなるものをこうやってついているような状況の中で, 鳥もやってきて, 巣を作ったりとかというものを, その, この中心に置きたかったと(B氏自発, 6-複数過程に亘って)は, B 氏が島の中央に横に寝かせて置いた樹木に付与した内的プロセスである。

装置や構成による内的プロセスの喚起, と, 装置や構成への内的プロセスの付与によって, <もの>が<こころのこと>になっていく。

装置や構成に内的プロセスが喚起され, 装置や構成への内的プロセスの付与が, 箱庭制作面接の最初のステップとなるが, 構成が箱庭作者の内的プロセスにぴったりな表現となるためには, [ぴったり感の照合]が必要となる。喚起され, 付与された内的プロセスと, ミニチュアや構成がぴったりであるかを照合し, ぴったりな感じを確かめることによって, 箱庭制作作者はそのミニチュアや構成にぴったり感をえることができる。[ぴったり感の照合]は装置と構成と内界 3 要因の『交流』である。例えば,

◆具体例 148: A 氏第 1 回箱庭制作面接複数過程に亘って(◆具体例 104, pp. 139-140 の抜粋)

大事なもののなので。あまりこう(間)まあ, おごそかな雰囲気って言いすぎかもしれ

ないけれど。うん、そういう感じ(間)がよかったんですね。簡単には触れていけない、な。  
うん。(間)だからそれが、わたしの中に何かもってるものがちゃんとあってるかなあってちゃんと確認してましたね (A 氏調査, 1-複数過程に亘って) は, [ぴったり感の照合] の一例である。このような [ぴったり感の照合] を経ることによって, ミニチュアや構成は箱庭制作者の内的プロセスを的確に反映したものとなる。

箱庭制作面接にはイメージが深く関与している。イメージは, 「意識と無意識, 内界と外界の交錯するところに生じてきたもの」(河合隼雄, 1969, p.17) である。本研究では, 自律性, 多義性, 枠外のイメージなどのイメージ特性が見いだされた。イメージは自律性や多義性などの特性を本来的にもっていると言われる。あるいは, 一義的にイメージや意味が固定されにくいミニチュアや構成から箱庭制作者は多様なイメージを喚起されるとも考えることができる。また, 箱庭制作者が構成を認知し, 意味づける際に意図しない変遷が生まれると捉えることもできる。“自律性や多義性などのイメージ特性” は複数のコアカテゴリーに亘って見いだされた包括的な促進機能の一つであり, 装置と構成と内界 3 要因の『交流』である。例えば,

◆具体例 149 : A 氏第 8 回箱庭制作面接制作過程 10 (◆具体例 40, p. 75 の抜粋)

だからすごく不思議なんですけど、これ作っている最中、この辺の動物を、なじみの動物を置く時に、なんかこれが母ではなくなって私になっていくようになっていうような感覚が少しあって、<あ、なるほど>うん、あれあれあれと思いながら (A 氏調査, 8-10) は, 意図とは関係なくイメージが移り変わる A 氏の主観的体験の語りである。“自律性や多義性などのイメージ特性” は, 箱庭制作者の意図とは関係なく生じる。そのため, “自律性や多義性などのイメージ特性” は, 箱庭制作面接で箱庭制作者の意図を超えた作品が作られる一因となる。他にも, 箱庭作品が箱庭制作者の意図を超えたものとなる要因がある。その一つとして, “意識の図と地, 図地反転による気づき” を挙げることができる。箱庭制作者は, 自分の内的プロセスのすべてに気づいているわけではなく, 内界には気づいていない内的プロセスも存在する\*2。“意識の図と地, 図地反転による気づき” は包括的な促進機能の一つであり, 装置と構成と内界 3 要因の『交流』である。例えば,

◆具体例 150 : A 氏第 4 回箱庭制作面接制作過程 4~6 (◆具体例 4, pp. 29-30 の抜粋)

A 氏第 4 回箱庭制作面接には以下のような具体例があった。鳥の巣は目に入っていたんです‘見守り手の顔を見ながら’。<ふん、うん、うん>で、でも、なんだろうこう素直に手が伸ばせなくて<ふうん>ベンチやら貝殻にしてたんですけど、(A 氏調査, 4-複数過程に亘って) (中略) 素直に手が伸ばせない (間 7 秒) これ、あの、貝殻もそうでしたけど<うん>貝殻も、この、巣も、<うん>卵を抱えた巣もそうなんですけど、<うん>すごくその女性のことを<うん>意識させる感じが<うん>私にはあるんですよ。<うん、うん、うん>特にこれは‘巣を指差しながら’こう子どもをかえすっていうね。<そうだね>うん私は<ふん>子どもがいないというところで<ふん>何か引っかかっている様な気も<うん>しますね (A 氏調査, 4-6)。このように鳥の巣から喚起される, 女性や子どもを意識させられ

る感じは、調査的説明過程で初めて気づいたことが明示的に語られている。また、A氏第4回ふりかえり面接には、[あの時はね。私の声が震えだしたのは自分でもわかって、思わぬところから自分の何か大事なところが明らかになってきたっていう驚きのような、戸惑いのような気持ちもあったんですね]という語りがある。

ミニチュアや構成を巡る内的プロセスには、多様な意味やイメージのうち、ある時にはその一つの側面が図となるが、別の場面では、図地反転が起こり他の側面が図となるという特性をもつ場合があると考えられる。図地反転することにより、箱庭制作者は、ミニチュアや構成の多様な意味やイメージに関する気づきや、自己への気づきをえることができる。このような“意識の図と地、図地反転による気づき”もまた、箱庭作品が箱庭制作者の意図を超えたものとなる一要因である。

箱庭制作面接では、装置や構成に喚起・付与された内的プロセスが、砂箱の中に作品として作りあげられていく。その作品を制作する過程の中で、構成がばらばらになるのではなく、ある程度のまとまりをもった表現となっていくことがよく起こる。“ミニチュア・ミニチュア選択・構成の他の構成との関連・連動”は、ミニチュアやミニチュア選択や構成が、他のミニチュアや構成と関連性や連動性をもつことに寄与する。“ミニチュア・ミニチュア選択・構成の他の構成との関連・連動”によって、あるミニチュアが他のミニチュアとの関連の中で構成されたり、ある領域が他の領域と関連性をもっていく。“ミニチュア・ミニチュア選択・構成の他の構成との関連・連動”は、包括的な促進機能の一つであり、装置と構成と内界3要因の『交流』である。例えば、

◆具体例 151：A氏第2回箱庭制作面接制作過程 11(◆具体例 83, p. 120)

ちょっと奥の方の山の上の方だったら、ああいう石を置けるなと思って、石を置いてくうんうん>そうした時に、この人たちも、山の奥のほうだったらいてもらってもいいなくはあー>この辺の手前のほうにはちょっと置けない<置けない>うん手前のほうにいる生き物とはちょっと違う生き物のような気がして置けなかったですね(A氏自発, 2-11)は、埴輪と土偶というミニチュアと他領域との関係性について、A氏が語ったことである。この具体例では、埴輪・土偶は、石や山との関連性・類似性をもつと同時に、動物や人とは異質性をもつことが、構成に影響したことが示された。

次の具体例は、他の領域の構成への影響を示している。

◆具体例 152：B氏第1回箱庭制作面接複数過程に亘って(◆具体例 60, p. 95)

B氏は、第1回箱庭制作面接の箱庭制作過程2で、中央の砂を掘り、底の青の色を出して、泉(水源)を創った。制作過程2について、内省報告には以下のように記された。生命の源(B氏内省, 1-2, 制作・意図)、深部からこんこんと湧きでる、つきない泉(B氏内省, 1-2, 制作・感覚)、神、生命(B氏内省, 1-2, 制作・連想)。制作過程6で、B氏は、「水の恵みを受けて育つ木々を探し、水源周り」に置いた。制作過程6について、内省報告に、泉の生命が周辺に広がる(B氏内省, 1-6, 制作・意図)、生命が広がり及ぶ(B氏内省, 1-6, 制作・感覚)、育み(B氏内省, 1-6, 制作・意味)と記された。B氏は、泉が生命の源であり、大事で、中心

にくるものであると感じた。そして、泉の生命が周辺に広がり、木々が育まれる様を表現した。このように、ある領域が他の領域に影響を及ぼし、複数の領域に関連性・連動性が生まれている。

このように複数の制作過程が連動して、構成に結びつきが生まれることによって、箱庭制作面接に、ストーリーが生まれると考えることができる。複数の制作過程が連動して、構成に結びつきが生まれ、箱庭制作面接にストーリーが生まれることによって、箱庭制作者は自己の内的世界をまとめたものとして表現できるとともに、その構成は自分の物語が表現されたものとなる。

ここまで、《創造における受動性と能動性》、「装置や構成による内的プロセスの喚起」、**“装置や構成への内的プロセスの付与”**、[ぴったり感の照合]、「自律性や多義性などのイメージ特性」、**“意識の図と地、図地反転による気づき”**、「ミニチュア・ミニチュア選択・構成の他の構成との関連・連動」について考察してきた。これらは箱庭制作過程における促進機能である。これらの促進機能が働くことによって、箱庭制作過程で、箱庭制作者の内界にぴったりの表現、あるいは、自分の意図を超えた表現が生まれる。そのような表現は、箱庭制作者の自己の内的プロセスへの理解を深化させたり、自己成長の促進に寄与する。

次に、箱庭制作過程だけでなく、説明過程における語りや内省報告も含めた、箱庭制作面接の促進機能について考察する。**“直観的な意識”**は、箱庭制作過程、説明過程における語りや内省報告における包括的な促進機能である。箱庭制作面接では、ミニチュアや構成のイメージや意味が明確には把握できなくても、**“直観的な意識”**に基づいてミニチュアが選ばれ、箱庭作品が構成される場合がある。そして、説明過程における語りや内省を通して、ミニチュアや構成のイメージや意味に箱庭制作者が気づくことがある。上に挙げた◆**具体例 150** (p.236)は、**“直観的な意識”**の表れと解釈することができる。鳥の巣から触発された内的プロセスについて、制作時に、少なくとも、素直に手が伸ばせないという身体感覚は存在していた。箱庭制作過程では、鳥の巣から触発された内的プロセスの内的意味やイメージを明確に意識することはなくても、ミニチュアによって触発された自己への影響を身体感覚として捉え、鳥の巣を手にとることを留保するという行動をとっていたことになる。そして、調査的説明過程で素直に手が伸ばせないという身体感覚を再度照合した後に、女性のことを意識させる感じが明確になり、語られた。**“直観的な意識”**は、箱庭制作過程において、構成が箱庭制作者の意図を超えたものとなる一要因であると同時に、説明過程における語りや内省を通して、ミニチュアや構成のイメージや意味に箱庭制作者が気づき、自己理解を深めることに寄与する。

以上、単一回の箱庭制作過程と説明過程と内省報告に関する促進機能について、考察してきた。本節では、各コアカテゴリーでの考察に比べると、箱庭制作面接の促進機能についてのエッセンスをより端的に示すことを心がけた。

本研究では、継続的な箱庭制作面接における促進機能も視野に入れ、考察してきた。継続的な箱庭制作面接における促進機能については、次節に記す。

#### XIII-4. 継続的な箱庭制作面接における連続性に関して

本研究の目的として、継続した箱庭制作面接に焦点を合わせた以下の2つの目的があった。第1研究では、a-2.箱庭制作面接が継続することによって、箱庭制作過程においてどのような促進機能が生じるのかを検討する、を目的とした。第2研究の目的は、b.箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討することであった。本節では、継続的な箱庭制作面接における連続性に関して、1) M-GTA と 2) 単一事例質的研究の両方法論において見いだされた連続性に関する理論を総合的に考察する。

##### 1) M-GTA により見いだされた連続性

M-GTA の分析結果の内、継続した箱庭制作面接の連続性に関係するのは、コアカテゴリー⑩【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】と⑪【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】である。検討の結果、連続性の促進機能が確認された。箱庭制作面接の連続性により、箱庭作品、箱庭制作者の心や生き方に変化が生まれ、箱庭制作者の自己理解・自己成長が促進されることが見いだされた(図8 “連続性による促進”の「作品の変化」,「自己の生き方への気づき・変化・成長」に向かう右向きの矢印)。例えば、

##### ◆具体例 153 : A氏第3回箱庭制作面接制作過程 11(◆具体例 138, p. 169 の抜粋)

A氏は第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程 11について、内省報告に以下のように記した。  
最近の私は以前と比べて、いろいろな場面で、いろいろな自己開示をするようになってい  
(中略)私自身は、これまではひょっとしたら随分尊大な自己イメージを持っていたのかも  
しれない。それが、尊大さは薄れ、ただの、ある意味でとても平凡な一人の人間としていられ  
るようになったのかもしれない (A氏内省, 3-11, 調査・意味)。A氏は、この箱庭制作過程における構成やその構成についての語りを通して、自分の心や生き方の変化に気づいた、と捉えられる。継続した箱庭制作面接では、箱庭制作者のあるテーマが連続して表される場合がある。そのテーマを巡る表現の変化から箱庭制作者が自己理解を深めることができる。また、その変化は箱庭制作者の自己成長の表れであると考えることができる。

また、箱庭制作面接の連続性が、箱庭制作者のイメージ体験(自律性,集約性,象徴性など)を促進することが見いだされた((図8 “連続性による促進”の「作品の変化」,「自己の生き方への気づき・変化・成長」からの左向きの矢印)。例えば、

##### ◆具体例 154 : A氏第8回箱庭制作面接制作過程 10(◆具体例 135, p. 168)

A氏は第8回箱庭制作面接で、砂箱中央に白い女性の人形を置いた。その後、その周りに、今までの箱庭制作面接で使用した動物を置いた。A氏は、女性のミニチュアを意識的には義母と捉えており、イメージの自律性や集約性が体験されていなかった。しかし、以前使ったなじみの動物を置くこと(連続性)により、自律性や集約性を体験できた。そして、調査的説明過程で私にも母にも共通する何かがあるなっている(中略)女性っていう命を持っている何か、意味のようなものを感じるというかね (A氏調査, 8-10) と語った。この構成を通して、自分と母に共通する女性という命がもっている意味を感じることもできた、と捉えられる。箱庭制作面接が継続して実施されることによって、連続性が箱庭制作者のイメージ特性

の体験に影響を与える場合がある。箱庭制作面接の連続性が箱庭制作者のイメージ体験を促進する場合があると考えられる。箱庭制作面接の連続性は、箱庭制作面接としての促進機能を持ち、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与すると考えることができる。

[面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]は、a.外的状況と内的状況の一致、面接内外の内的プロセスの交流、b.継続した箱庭制作面接と日常生活とを含めた時間の連続性という2つの要素が統合された事象に関する概念であると考えることができた。継続した箱庭制作面接と日常生活とを含めた時間の連続性の中で、面接内外のプロセスが交流し、連動することによって、箱庭制作者の自己理解・自己成長の促進に寄与していることが確認できた。これは、箱庭制作面接の内外で、自己についての気づきや課題などの内的プロセスに、箱庭制作者が主体的に取り組み、その体験を深化しようとする態度によって生起する箱庭制作面接の促進機能と考えられた。

## 2) 単一事例質的研究により見いだされた連続性

A氏の単一事例質的研究では、以下の5点が見いだされた。a.面接の展開に従って、箱庭作品のテーマと制作者の自己像であるミニチュアに変化がみられた。それらの変化に制作者の心の変容が表されていた。b.宗教性(命、守り、神聖な場所・生き物)は、本面接において、重要なテーマの一つであった。面接が展開していく中で、宗教性が自己の内側に根付いた喜びを、箱庭制作者は実感できたと捉えられた。c.以前には受け入れることができなかった自己の女性性を、箱庭制作者は箱庭制作面接を通して、受け入れることができた実感した。d.自己の多様性や能動性の獲得、他者との関係性の変容が、連鎖的に生じていったことが確認された。e.箱庭制作における受動性と能動性との協働、箱庭制作面接内外の真摯な取り組みが、箱庭制作者の心の変容を促進した。箱庭制作と命、特に女性という命に共通する、受動性と能動性の協働と、制作への関与の強さ・深さが、箱庭制作者の心の変容と面接の展開を促進した重要な要因の一つと考えられた。また、箱庭制作者は箱庭制作面接内外で主体的に自己の課題に取り組んでいた。この真摯な取り組み、深い関与も箱庭制作者の心の変容の大きな要因の一つと考えられた。

B氏の箱庭制作面接では、宗教性・信仰が主要なテーマとなった。そのため、B氏の単一事例質的研究では、a.宗教性を中心とした心や生き方の変容の観点と b.心の多層性の観点から検討された。a.では、宗教性を中心とした心や生き方に関して、B氏の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味が確認された。b.では、心の多層性の観点から、B氏第6回および第7回箱庭制作面接の箱庭作品の非連続性・特異性や、第6回箱庭制作面接以降の領域の拡大について検討された。

単一事例質的研究によって、それぞれのテーマにおける箱庭制作者の心理的状态の変容や面接の展開、その個人的意味が見いだされた。両氏の箱庭制作面接への系列的理解によって、両氏への個別的理解を深めることができた。

面接の連続性に関して、本研究ではM-GTAと単一事例質的研究の2つの研究方法を用いて

検討した。M-GTA の分析では、継続的な箱庭制作面接の連続性をもつ促進機能という機能面に焦点を合わせることができた。単一事例質的研究では、面接テーマに関する箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味という、継続的な箱庭制作面接に表現された心理的内容の理解に焦点を合わせることができた。両研究法を併用することによって、箱庭制作面接を機能と内容の両側面から多面的・総合的に分析・検討することが可能になったと考える。

### XIII-5. 今後の課題

本研究は、箱庭制作者の主観的体験の語りや記述をデータとして、M-GTA による分析を通して、箱庭制作過程における促進機能に焦点を合わせた第 1 研究と、調査参加者ごとに単一事例質的研究による分析を実施した第 2 研究から構成されている。両研究法を併用することによって、箱庭制作面接を機能と内容の両側面から多面的・総合的に分析・検討することが可能になったと考えるが、焦点を合わせることができなかつたテーマも少なくない。

a.第 1 研究は、箱庭制作面接の中心的過程である箱庭制作過程に主に焦点を合わせ、箱庭制作過程にはどのような促進機能があるのかを考察することを目的の一つとした。そのため、コアカテゴリー①, ②, ④を取り上げ、考察した。そのため、本研究では、コアカテゴリー⑤【制作過程と作品の交流】、⑥【制作過程と外界・日常生活の交流】、⑦【単一回の制作過程・作品と説明過程の交流】、⑧【単一回の制作過程・作品と見守り手の交流】、⑨【説明過程と見守り手の交流】、⑩【箱庭制作面接のプロセスと内省の交流】を取り上げていない。これらのコアカテゴリーの中で、⑧は単一回の箱庭制作過程において、見守り手がどのように関与しているかという見守り手の役割に関係する重要なコアカテゴリーと考えることができる。また、⑦～⑨を総合すると、箱庭制作過程や説明過程における箱庭制作者と見守り手との関係性に焦点が合わせられるだろう。箱庭制作面接における見守り手の役割や箱庭制作者と見守り手との関係性という重要なテーマに焦点を合わせ、分析・理論生成することが今後の課題として最重要なものである。

b.第 1 研究は、箱庭制作面接の促進機能に焦点を合わせたものの、「XIII-3. 箱庭制作面接における促進機能についての総合考察」に記したように、第 1 研究の考察を進める中で“意識の図と地、図地反転による気づき”と“直観的な意識”のように、M-GTA による分析によって、直接的に生成された概念ではない包括的な促進機能が見いだされた。この点を踏まえると、M-GTA による分析・理論生成が充分であったかに疑問が残る。本来であれば、M-GTA による分析・理論生成の中で、“意識の図と地、図地反転による気づき”と“直観的な意識”を概念化すべきだったと考えられる。本研究では、「XIII-3. 箱庭制作面接における促進機能についての総合考察」で、包括的な促進機能を加え、M-GTA による分析の不完全さを補完したが、その補完で充分であったのか、今後検討する必要があるだろう。

c.本研究は 2 名の調査参加者のデータを基にしている。複数名の調査参加者のデータに基づいて研究できたことは一定の成果と考えることができる。しかしながら、箱庭制作者は皆個性的であり、さらなる調査参加の申し出があれば、その調査参加者のデータを加え、研究を深化させることができるだろう。

d.本研究は,心理的に健康な調査参加者のデータに基づいた研究であり,臨床事例に焦点を合わせることができていない。本調査方法は,通常の箱庭療法の手続きに,調査的説明過程,VTR視聴による内省報告作成,ふりかえり面接を追加している。これらの追加は,本研究の目的を達成するためには必要である。しかし,本調査方法を臨床事例に適用することは侵襲性が高く,適切ではない。そのため,本研究で見いだされた知見の内,どの知見が,どの程度,臨床事例における箱庭療法に対して一般化可能なのかを,本調査方法をそのまま臨床事例に適用する形で,検証することはできない。本研究の知見の適用可能性は,M-GTAという【応用者】の実践・研究,つまり,多くの箱庭療法家による実践や,生成された理論の【応用】などによる評価を待つということになる。本研究の知見が【応用者】によって評価され,箱庭制作面接や箱庭療法に関する知見がさらに修正・追加され,充実・深化していくことを願いたい。



注：

### Ⅲ章

- \*1 p.20 筆者は、両調査参加者に対して、研究目的、研究方法、データの管理、研究を公表する場合の調査参加者への内容の確認と加筆修正などについて、文書および口頭で説明し、調査参加者より文書にて同意を得た。また、本調査研究は、2008年1月21日に南山大学研究倫理審査委員会の承認を受けている。
- \*2 p.24 図3の結果図は、まずはA氏のデータを基に、M-GTAによって作成され、論文として公表された(楠本,2012)。その後、B氏のデータも加え、M-GTAの分析を行ったが、結果図を大きく変更する必要はなかった。促進要因の「セラピスト」を「見守り手」に変更した。また、「説明過程」と「見守り手」の位置を左右入れ替えた。概念名やカテゴリーには修正が必要であったため、その修正を行った。

### V章

- \*1 p.31 直観的な意識という用語は、箱庭制作者の主観的体験のデータを説明するために考えた、筆者の造語である。この用語の直観はユング心理学の概念である、心の4つの機能の1つとしての「直観」ではなく、より一般的な用語として使用した。例えば、ファンデンボス監修の『APA心理学大事典』(VandenBos,2007 繁 柘・四本 監訳 2013,p.610)では、直観は「瞬間的な洞察や知覚。意識的な推論や内省に対比される」と説明されている。『心理学辞典』では、「ある対象の非分析的、無媒介的把握・理解の方法を直観とよぶ」と記されている(田中,1999,p.595)。これらの説明にある、非分析的で、意識的な推論や内省と対比されるような理解の方法という意味で、本研究では直観という用語を使用する。

箱庭制作者の主観的体験のデータの分析は、A氏第1回箱庭制作面接から開始した。A氏第1回箱庭制作面接のデータには、本研究に◆具体例103(pp.138-139参照)として挙げた主観的体験のデータがあった。この具体例では、調査的説明過程の語りと、内省報告の記述では、一見矛盾したような報告になっているが、それをどのように理解すればよいだろうかと考えていく中で、「意味の認知は伴わないが、ぴったりだと感じる意識」と定義できるような意識のあり様があると想定することで、説明が可能になると考えた。そして、その概念をどのように名づけることが適切か検討する中で、直観的な意識とすることにした。

◆具体例103では、調査的説明過程で語られているように、ガラス瓶(壺)の中に大事なものがまだ入っているか出ているのかわからない感じのものというぴったり感に基づいて、A氏はガラス瓶を選択した、と捉えることができた。しかし、内省報告にある主観的体験の記述は、調査的説明過程で筆者の応答があるまでは、ガラス瓶を拾い上げていないという構成やその意味について、明瞭には意識化していなかったことが示されている、と考えた。総合すると、この具体例では、箱庭制作に関わる意識は、大事なものがあることを箱庭に表現しつつ、それをそのままにしていることと、ちゃ

んと拾い上げていないことの「意味」に気づいていない作者の内的状態をも、非常に巧みに、ぴったりの形で表現している、と理解することができると考えた。

この具体例のように、構成の「意味」に気づいていないにも関わらず、自分の内的プロセスにぴったりの構成が可能となる意識は、直観という心理的機能と類似していると考えた。また、◆**具体例 103**にあるように、当該の箱庭制作過程では、ミニチュア選択や構成に箱庭作者の意識的な関与があるため、意識的な制作過程であると考えた。

\*2 p.35 本研究は、箱庭作者の主観的体験の語りや記述のデータに密着した理論生成を目指した。データに密着した理論生成を達成するために、基本的には箱庭作者の主観的体験の具体例を検討するにあたって、考察がその具体例のデータから離れてしまわないように心がけた。当該の具体例のデータだけでは考察を深化させることが難しい場合、当該具体例に関連する他の主観的体験のデータを使用して、考察を行った。

しかし、当該具体例に関連する箱庭作者の主観的体験のデータを精査しても、考察の深化に役立つデータが見つからない場合があった。そのような場合には、先行研究を参照・引用した。先行研究を参照・引用する場合に意識したのは、以下の2点である。a.箱庭作者の主観的体験のデータから離れず、かつ、主観的体験のデータを考察する上で、説明力の高い概念であること。b. aの条件が満たされるのであれば、幅広く複数の学派の理論を参照・引用する。

上のような姿勢で、先行研究を参照・引用したため、[ミニチュアにより喚起される内的プロセス]の促進機能を考察する場合に、ユング派の研究者(河合隼雄)の言及、図と地というゲシュタルト療法の概念、前概念的体験という Gendlin の概念など複数の学派の理論・概念を参照・引用した。

\*3 p.35 概念生成およびカテゴリー形成に関しては、木下康仁、『ライブ講義 M-GTA 一実践的質的研究法修正版 グランウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂、2007 の 1-15,1-17 などを参照されたい。

## VII 章

\*1 p.139 A 氏の具体例内の th は筆者を指す。

## XI 章

\*1 p.181 A 氏の具体例内の th は筆者を指す。

\*2 p.196 A 氏の単一事例質的研究について、楠本(2013c)の査読者から以下のようなコメントをいただいた。「制作者が『他者』の視点を取り入れていったこと、『自分をこえたもの』との関わりを考え続けたことは、真の意味で『他者を孕む』という『妊娠』のプロセスをたどった、と考えられる。単に作品を『産み出す』だけでなく、まさに、箱庭制作における主観的体験そのものが、『生産的』であった」と言えよう。

### XIII 章

\*1 p.232 **thick description** は,Geertz が提唱した概念であり,厚い記述,または,ぶ厚い記述と訳されることが多い。「社会的行為を厚く記述するとは,特定のエピソードを特徴づける状況,意味,意図,方法,動機などを記録することによって社会的行為を解釈し始めることである。記述が厚くなるのは,このような解釈をさしはさむという特質のためであって,単に細目の詳しさだけの問題ではない」(Schwandt,2007 伊藤他訳 2009,p.3)。

\*2 p.236 心の構造の説明概念には,「意識,個人的無意識,普遍的無意識」,「意識,前意識,無意識」,「意識の図と地」などがある。第 1 研究では,“**意識の図と地,図地反転による気づき**”だけでなく,「意識と無意識の相互作用」(河合隼雄,1967,p.146)などユング心理学の理論を参照したり,意識と無意識の協働という考えを用いて,データを考察する場合があった。

しかし,XIII 章では“**意識の図と地,図地反転による気づき**”のみを取り上げた。第 1 研究は,箱庭制作者の意識化された主観的体験の語りや記述のデータに密着して生成された理論である。そのため,データに密着した考察を行う際,無意識という概念を安易に使用するとデータから離れてしまう怖れがあり,慎重な使用が必要であった。「意識の図と地」という概念は,無意識という概念に比べ,意識の比較的表層部分における心理的現象についての説明概念であると考えることができ,第 1 研究における考察において参照しやすい概念であった(Perls,1969 倉戸監訳 2009,pp.26-27;Perls,1973 倉戸監訳 1990,p.17, p.21;倉戸,2011,pp.20-21)。そのため,XIII 章では“**意識の図と地,図地反転による気づき**”を中心に考察した。

氏原(1990)の「意識の場」理論は,ユング心理学の理論と「図と地」という概念を統合的に捉えているため(pp.65-78),データに密着して箱庭制作面接の促進機能を考察する際に,参照することが有効であった。

箱庭療法は,ユング派のセラピストが中心となって研究され,ユング心理学の理論に基づく,多くの知見が積み重ねられている。第 1 研究において,考察を深めようとする際にデータに密着した分析を行いたくても,説得力のあるデータを見いだせない時があった。そのような際には,箱庭制作面接の促進機能についての考察を深めるために,夢分析や箱庭療法の実践を基礎としたユング心理学の知見を参照することが有効であった。ユング心理学の知見を参照する場合にも,データからできるだけ離れない考察を心がけた。

#### 謝辞 :

箱庭制作面接に参加し,主観的体験のデータを共有してくださったお二人に,深く感謝しています。お二人のとても豊かなデータに支えられたおかげで,本研究を深めていくことができました。また,論文を作成するたびに,内容を確認くださり,公刊を許可していただいたことにも感謝しています。

佛教大学石原宏先生には,長年に亘って,的確なご指導をいただきました。箱庭制作者の

主観的体験のデータを分析し、それを筋の通った論文にまとめ上げていく道は、試行錯誤の連続で、紆余曲折に満ちたものでした。石原宏先生の丁寧なご指導のおかげで、ようやく本研究をまとめることができました。深く感謝申し上げます。

東山弘子先生、鈴木康広先生を初めとする佛教大学教育学研究科臨床心理学専攻の先生方には、査読や中間発表会や授業など様々な場面でご指導いただいたことにお礼を申し上げます。

東山紘久先生には、私が大阪教育大学大学院に在学していた頃からご指導いただきました。箱庭療法を初めとする心理療法の基礎を東山紘久先生の実践的なご指導によって、身につけることができました。その後も研究会等でご指導いただき、深謝の意を表したいと思います。

南山大学丹羽牧代先生には、本研究を開始する以前から、箱庭制作面接における箱庭制作者の語りに関する共同研究で、ご教示いただきました。また、丹羽牧代先生のご専門の立場からサポートいただいたことに深く感謝いたします。

最後に、長年に亘って、長時間、私が本研究のために、時間を使うことを許してくれた家族に感謝の念を表します。本研究に時間や労力を集中することを許してくれたのおかげで、本研究をようやく完成させることができました。

#### 引用文献：

- 秋山さと子(1986).解説 マイヤー,C.A. 秋山さと子(訳)(1986). 夢の治癒力—古代ギリシヤの医学と現代の精神分析 筑摩書房,pp.162-194.
- 朝比奈 太(2013). 箱庭療法に関する表象連関理論 心理臨床学研究,31(5),747-757.
- Bless, H., & Forgas, J.P. (2000). *The message within: The role of subjective experience in social cognition and behavior*. Philadelphia, PA: Psychology Press.
- Bloor,M., & Wood,F.(2006). *Keyword in qualitative methods:A vocabulary of reseach concepts*. London:Sage.
- (ブルア,M.,&ウッド,F. 上淵寿(監訳) (2009). 質的研究法キーワード 金子書房)
- Bradway,K., & McCoard,B.(1997). *Sandplay:Silent workshop of the psyche*,London: Routledge.
- Charmaz,K.(2006). *Constructing grounded theory:A practical guide through qualitative analysis*.London:sage.
- (シャーマズ,K. 抱井尚子・末田清子(監訳) (2008). グラウンデッド・セオリーの構築—社会構成主義からの挑戦 ナカニシヤ出版)
- Denzin,N.K.(1978). *The research act* 2nd ed.Chicago:Aldine.
- Denzin,N.K.(1989). *The research act* 3rd ed.Englewood Cliffs,N.J.:Prentice Hall.
- Denzin,N.K., & Lincoln,Y.S.(2000). Introduction The discipline and practice of qualitative research,In N.Denzin & Y.S.Lincoln(eds.), *Handbook of qualitative Reserch*.2nd ed.London,Thousand Oaks,New Delhi:Sage.pp.1-29.

- (デンジン,N.K.,&リンカン,Y.S. 平山満義(訳) 序章一質的研究の学問と実践 デンジン,N.K. & リンカン,Y.S. 平山満義(監訳) 岡野一郎・古賀正義(編訳) (2006). 質的研究ハンドブック 1巻一質的研究のパラダイムと眺望 北大路書房 pp.1-28.)
- 遠藤由美(2007). 主観性の社会心理学—内なる経験の社会的機能 実験社会心理学研究,46(1),37-39.
- Flick,U.(1995). *Qualitative Forschung*.Hamburg:Rowohlt.
- (フリック,U. 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子(訳) (2002). 質的研究法入門—<人間の科学>のための方法論 春秋社)
- 藤原勝紀(2001). 三角イメージ体験法—イメージを大切にする心理臨床 誠信書房
- 藤原勝紀(2002). 臨床イメージ法と箱庭 岡田康伸 (編集) 現代のエスプリ別冊 箱庭療法の本質と周辺 箱庭療法シリーズⅡ 至文堂 pp.126-141.
- Gendlin,E.T.(1981). *Focusing*.New York:Bantam Books.
- (村山正治・都留春夫・村瀬孝雄(訳)(1982). フォーカシング 福村出版)
- 後藤美佳(2004). 箱庭表現に伴う「ぴったり感」の PAC 分析 箱庭療法学研究, 16(2), 15-29.
- 花形武(2012). 初回箱庭制作における内的プロセスについて—箱庭制作経験のない大学生・大学院生を対象に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて 箱庭療法学研究, 25(2), 91-100.
- 花形武(2014).箱庭制作において紙ミニチュアを用いた場合の内的プロセスの特徴の検討—初回箱庭制作の質的研究 箱庭療法学研究, 27(2), 27-38.
- 秦真理子(1998). 箱庭制作過程に関する研究—ビデオを用いた検討を中心に 日本箱庭療法学会第 12 回大会発表論文集,44-45.
- 東山紘久(1994). 箱庭療法の世界 誠信書房
- 弘中正美(1995). 表現することと心理的治癒 千葉大学教育学部研究紀要,43(1),55-65.
- 弘中正美(2002). 玩具 岡田康伸(編) 現代のエスプリ別冊 箱庭療法の現代的意義 箱庭療法シリーズⅠ 至文堂 pp.84-86.
- 弘中正美(2014). 遊戯療法と箱庭療法をめぐって 誠信書房
- 平松清志(2001). 箱庭療法のプロセス—学校教育臨床と基礎的研究 金剛出版
- Holstein,J.A., & Gubrium,J.F.(1995). *The active interview,the United States,London and New Delhi*:Sage.
- (ホルスタイン,J.A. & グブリアム,J.F. 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行(訳)(2004). アクティヴ・インタビュー—相互行為としての社会調査 せりか書房)
- 石原宏(1999). PAC 分析による箱庭作品へのアプローチ 箱庭療法学研究, 12(2), 3-13.
- 石原宏(2002). 箱庭箱庭制作者の主観的体験に関する研究—「PAC 分析」の応用と「一つのミニチュアを選び,置く」箱庭制作 岡田康伸(編) 現代のエスプリ別冊 箱庭療法シリーズⅡ 箱庭療法の本質と周辺 至文堂 pp.57-69.
- 石原宏(2003). 箱庭制作過程に関する基礎的研究—「一つのミニチュアを選び,置く」とい

- う箱庭制作の数量的データの検討 京都大学大学院教育研究科紀要,49,455-467.
- 石原宏(2008). 箱庭制作者の体験からみた箱庭療法の「治療的要因」に関する心理臨床学的研究 平成17・18・19年度科学研究補助金若手研究(B)研究成果報告書
- 石原宏(2013). クライアントとセラピストの関係性の違いが箱庭表現に及ぼす影響についての一考察—箱庭療法の臨床事例で起きたある出来事を手がかりに 佛教大学教育学部論集,24,1-19.
- 伊藤真理子(2005). イメージと意識の関係性からみた箱庭制作過程 箱庭療法学研究, 17(2), 51-64.
- Jung.C.G.(1921). *Psychologischen typen*. Rascher Verlag,Zürich.  
(ユング,C.G. 林道義(訳)(1987). タイプ論 みすず書房)
- Kalff,D.(1966). *Sandspiel Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche*. Rascher Verlag:Zürich und Stuttgart.  
(カルフ,D. 大原貢・山中康裕(共訳)(1972). カルフ箱庭療法 誠信書房)
- 片畑真由美(2006). 臨床イメージにおける内的体験についての考察—箱庭制作体験における「身体感覚」の観点から 京都大学大学院教育学研究科紀要, 52. 240-252.
- 河合隼雄(1967). ユング心理学入門 培風館
- 河合隼雄(1977). 無意識の構造 中公新書
- 河合隼雄(1982). 昔話と日本人の心 岩波書店
- 河合隼雄(1991). イメージの心理学 青土社
- 河合隼雄(1994). 能動的想像法について シュピーゲルマン,J.M.・河合隼雄 町沢静夫・森文彦(訳)(1994). 能動的想像—内なる魂との対話 創元社,pp.3-33.
- 河合隼雄(2003). 臨床心理学ノート 金剛出版
- 河合隼雄(編)(1969). 箱庭療法入門 誠信書房
- 河合隼雄・中村雄二郎・明石箱庭療法研究会(1984). トポスの知—箱庭療法の世界 TBSブリタニカ
- 河合俊雄(2002). 箱庭療法の理論的背景 岡田康伸(編) 現代のエスプリ別冊—箱庭療法の現代的意義 箱庭療法シリーズI 至文堂 pp.110-120.
- 木村晴子(1985). 箱庭療法—基礎的研究と実践 創元社
- 木下康仁(2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研への誘い 弘文堂
- 木下康仁(2007). ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- 木下康仁(2009). 質的研究と記述の厚み—M-GTA・事例・エスノグラフィー 弘文堂
- 近田佳江・清水伸介(2006). 制作者の主観的体験からみた箱庭表現過程 北星学園大学社会福祉学部北星論集,43,35-57.
- 楠本和彦(2012). 箱庭箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用(交流)に関する質的研究 箱庭療法学研究, 25(1),51-64.
- 楠本和彦(2013c). 箱庭箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究 箱庭療法学研究, 25(3),3-17.
- 倉戸ヨシヤ(2011). ゲシュタルト療法—その理論と心理臨床例 駿河台出版

- 共同訳聖書実行委員会(1987). 聖書 新共同訳一旧約聖書続編つき 日本聖書協会
- Meier,C.A.(1948). *Antike Inkubation und Moderne Psychotherapie*,Zürich.
- (マイヤー,C.A. 秋山さと子(訳)(1986). 夢の治癒力—古代ギリシャの医学と現代の精神分析 筑摩書房)
- 三木アヤ(1977). 自己への道—箱庭療法における内的訓練 黎明書房
- 光元和憲(2001). 箱庭療法へのいざない 光元和憲・田中千穂子・三木アヤ 体験箱庭療法Ⅱ—その継承と深化 山王出版 pp.6-29.
- 森津太子(2008). 検索容易性の経験が社会・認知的判断に及ぼす効果 放送大学年報,26,47-54.
- 中道泰子(2010). 箱庭療法の心層—内的交流に迫る 創元社
- 織田尚生・大住誠(2008). 現代箱庭療法 誠信書房
- 岡田康伸(1984). 箱庭療法の基礎 誠信書房
- 岡田康伸(1993). 箱庭療法の展開 誠信書房
- 岡田康伸(1999). イメージ療法と箱庭療法 藤原勝紀(編) イメージ療法 現代のエスプリ 387 至文堂 pp.137-144.
- 大石真吾(2010). 箱庭制作における砂の作用に関する一研究—作り手の主観的体験にもとづいて 箱庭療法学研究, 22(2), 63-71.
- 大石真吾・高橋優佳・森崎志麻・浅田恵美子・井芹聖文・千秋佳世・加藤奈奈子(2011). 特別養護老人ホームに箱庭を持ち込む試み 心理臨床学研究, 29(3), 317-328.
- Perls,F.S.(1969). *Gestalt therapy verbatim*:Real People Press.
- (パールズ, F.S. 倉戸ヨシヤ(監訳) 日高正宏・倉戸由紀子・井上文彦・中西龍一・宮井研治・山田治・土本薫(訳)(2009). ゲシュタルト療法バーベイティム ナカニシヤ出版)
- Perls,F.S.(1973). *The gestalt approach & eye witness therapy*:Science and behavior Books.
- (パールズ, F.S. 倉戸ヨシヤ(監訳) 日高正宏・井上文彦・倉戸由紀子 (訳)(1990). ゲシュタルト療法—その理論と実際 ナカニシヤ出版)
- Rogers,C.R.(1959). A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework. In Koch, S. (Ed.), *A study of a science, III Formulations of the person and the social context*.
- (ロジャーズ, C.R. 伊東博(編訳)(1967). ロージャーズ全集 8 岩崎学術出版)
- 齋藤眞(2002). 治療要因 岡田康伸(編) 現代のエスプリ別冊 箱庭療法の現代的意義 箱庭療法シリーズ I 至文堂 pp.121-134.
- 齋藤清二(2005). 慢性疼痛:痛みは語りうるのか? 臨床心理学 金剛出版 pp.456-464.
- 齋藤清二(2014). 事例を通じた仮説生成と検証 森岡正芳・大山泰宏(編) 臨床心理職のための「研究論文の教室」 臨床心理学増刊 6号 金剛出版 pp.128-134.
- Schwant, T.A. (2007). *The SAGE dictionary of qualitative inquiry 3rd edition*, London & New Delhi: Sage.
- (シュワント, T.A. 伊藤勇・徳川直人・内田健監(訳) (2009). 質的研究用語事典 北大

路書房)

- 清水亜紀子(2004). 箱庭制作場面への立ち会いの意義について—ビデオ記録を用いたプロセス研究の試み—箱庭療法学研究, 17(1), 33-49.
- Solms, M., & Turnbull, O. (2002). *The brain and the inner world: An introduction to the neuroscience of subjective experience.* in U.S.A. by OTHER PRESS., and in the U.K. by Karnac Books, a subsidiary of Other Press Inc.
- (ソームズ, M. & ターンブル, O. 平尾和之(訳) (2007). 脳と心的世界—主観的経験のニューロサイエンスへの招待—星和書店)
- 田嶋誠一(1992). イメージ体験の心理学 講談社現代新書
- 田中俊也(1999). 直観 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 有斐閣 p.595.
- 千葉友里香(2013). 箱庭を語ることにおけるイメージ変容の体験—4つの体験型とその意味—箱庭療法学研究, 26(1), 17-30.
- 氏原寛(1990). 心の一生—ユング派に依るこころの原風景—ミネルヴァ書房
- VandenBos, G.R. (editor in chief) (2007). *APA Dictionary of Psychology.* Washington, D.C. American Psychology Association.
- (ファンデンボス(監修) 繁榊算男・四本裕子(監訳) (2013). APA 心理学大事典 培風館)
- Wegner, D. M., & Gilbert, D. T. (2000). Social psychology the science of human experience. In H. Bless & J. P. Forgas (Eds.), *The message within: The role of subjective experience in social cognition and behavior.* Philadelphia, PA: Psychology Press, pp.1-9.



## 初出一覧：

- I 章 「楠本和彦 (2013a).箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究 人間関係研究 南山大学人間関係研究センター,12,54-70.」および「楠本和彦 (2013b).箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討—多元的方法・方法のトライアンギュレーション,M-GTA を中心に 人間関係研究 南山大学人間関係研究センター,12,71-94.」の一部に加筆修正した。
- II 章 「楠本和彦 (2013b). 箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討—多元的方法・方法のトライアンギュレーション,M-GTA を中心に 人間関係研究 南山大学人間関係研究センター,12,71-94.」の一部に加筆修正した。
- III 章 「楠本和彦(2011). 箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み 佛教大学大学院紀要教育学研究科篇, 39,103-120.」および「楠本和彦(2012). 箱庭箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用(交流)に関する質的研究 箱庭療法学研究, 25(1),51-64.」および「楠本和彦 (2013a).箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究 人間関係研究 南山大学人間関係研究センター,12,54-70.」の一部を加筆修正した。
- IV 章 「楠本和彦(2012). 箱庭箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用(交流)に関する質的研究 箱庭療法学研究, 25(1),51-64.」の一部を加筆修正した。
- V 章 「楠本和彦(2015).M-GTA による箱庭制作過程の促進機能に関する研究 —コアカテゴリー①【内界と装置の交流】に焦点を合わせて— 人間関係研究 南山大学人間関係研究センター,14,133-168.」の一部を加筆修正した。
- VIII 章 「楠本和彦 (2014a).M-GTA を用いた箱庭制作面接における連続性に関する促進機能についての検討 人間関係研究 南山大学人間関係研究センター,13,71-101.」の一部を加筆修正した。
- X 章 「楠本和彦 (2013c).箱庭箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究 箱庭療法学研究,25(3),3-17.」を一部加筆修正した。
- XI 章 「楠本和彦 (2013c).箱庭箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究 箱庭療法学研究,25(3),3-17.」を一部加筆修正した。
- XII 章 「楠本和彦 (2014b).箱庭制作者の主観的体験に対する系列的理解を中心とした質的研究 人間関係研究 南山大学人間関係研究センター,13,102-138.」の一部を加筆修正した。
- XIII 章 「楠本和彦 (2013b). 箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討—多元的方法・方法のトライアンギュレーション,M-GTA を中心に 人間関係研究 南山大学人間関係研究センター,12,71-94.」の一部に加筆修正した。

資料 1 第 2 回箱庭制作面接における主な主観的体験

制作過程	自発的説明過程	調査的説明過程	内省報告	ふりかえり面接
<p>(3) [川]によって二つに分けられた土地を見ている]</p>	<p>【制作中の苦しさ】(3)しばらく作ってて、苦しいですよ。なんかくはあ、苦しい&gt;うん。苦しいっていうかね。人がないとか。寂しいとか。二つに分かれちゃったなと思って。(後略)</p>		<p>(3)【制作・感覚】大地もいまだ生命がなく、乾燥していて、荒涼としたイメージが私に迫ってきた。「こんなに広い川を作ってしまったてどうしよう」「生命のない大地がおそろしい」と感じていた。</p>	
<p>(9) [ライオン、羊、恐竜を手にとる。恐竜は柵に戻す。ライオンは陸地の右手前に、茂みの陰から草食獣をねらうような位置に置く]</p>			<p>(9)【制作・意味】ライオンに恐竜といった力強いもの、時に凶暴なものに憧れのよくな、親近感のような感覚を抱く。自分が生きていくためには、時に相手を喰らうことも必要。</p>	
<p>(11) [白い石を左の陸地奥、川岸に置く。左手前の山を奥に移し、ふもとに土偶と埴輪を置く]</p>	<p>【石と土偶、埴輪】(11)この辺の手前のほうにはちよつと置けない。手前のほうにいる生き物とはちよつと違ふ生き物のような気がして置けなかったですね。</p>	<p>【土偶、埴輪】(11) なんか命なんだけど、命を持って人として持ってきたんですけれどね。半分命じゃないものになっっている、っていうか。何ていって言うんでしょうね。人間ではない命になっるとか。そういう感じがして、こゝ動物や人の世界には、ちよつと、いけないんだな、入ってきちゃっていい。そういう感じですかね (後略)</p>	<p>(11)【制作・感覚】土偶もいのちの表現だと思っていたが、ふもとに置いたことで、命としての人間の代わりのようでもあるし、山の番人のような気もしてきた。【制作・意味】石は「かたまり」。自然の造形物だけれども、生命感も薄くて動き出すことがないもの。私が左側に置きたかった命とは、そのようなものだったのではないか。はつきりとした形をまだ持たない、抽象的なものがよかつたのだと思う。</p>	<p>【土偶、埴輪】(11)土偶はだいたい神様の方に近い。象徴的になってしまっている。深く土の中にもぐって何世紀も経って命の感覚がひどく微かになってしまっている。 【お山】(11)信仰の対象になるようなお山のイメージがありましたね。そうすると、お山のふもとに土偶達はいかにもふさわしい。ちよつと山と平地とのちよつと境目辺りに居てくれると、ちよつとあいがいい。</p>
<p>(12) [柵に青い鳥を見つけて、白い石の上ののせる]</p>	<p>【青い鳥】(12)実はずっと作ってる最中、なんか、こゝう、どうしていいんだらうとかね。すごい苦しいんですよ。あの青い鳥を見つけて、置いた時、ああよかつたと思いましたが。&lt;ふうん、苦しさは&gt;なくなりましただね。&lt;はい。ほつとしました。あれも何か他のものを探して行って、たまたま眼に入っ、青い鳥がああ、これだあ。あの青い鳥を置いた段階でほとんどもうこれでもいいかな、完成にしてもいいかと思っただんですけれども。(後略)</p>		<p>(12)【制作・運想】青い鳥が目に入ってきた瞬間に、幸せの青い鳥、という言葉が思い浮かんでいった。【制作・意味】青い鳥は意図しないところからやってきた意図を超えているという感じかもしれない。これを見つけた途端、私がそれまで作っていた箱庭の調子・トーンが変わった。箱庭ではなくて、変わったのは私の心の調子かもしれない。</p>	
<p>(13) [鴨の親子を川に浮かべる]</p>	<p>【川の鴨】(13)もうちよつと何か命というか感じたいなと思っ、柵に戻って。で、この鳥を見つけて。(中略)こゝうのんびり遊んでる感じのにして。</p>		<p>(13)【制作・意図】青い鳥を置いたことで、気持ちに余裕が出たように感じた。</p>	

ワークシート7 (自発的説明過程)

概念7: ミニチュアに付与された内的プロセス ~~その要素や構成の内的意味~~

定義: 意図, 感覚・イメージ・感情, 連想, 意味という内的なプロセスがミニチュアに対して付与される様

~~ミニチュア, またはその要素 (色, 大きさ) や構成 (ミニチュアの位置や方向) が持っている内的意味~~

バリエーション:

- \* あの辺も安心? した, 色のトーンがいい感じかなと思って。ちょっと, 遠くにあるのかおごそかな感じなのか。ああいう白っぽいのが, いい色だなと思って (A氏自発, 1-10)

(中略)

- \* えーっと, この貝は, 二つはエー, 貝殻を漁っていたらば 思いがけなくきれいな 貝が出てきたので, ちょっとうれしくなつてくはあ>何かこう, 大事な物とかご褒美のような, なんかそんなつもりで, 浜に打ち上げられている物としてそこに置きましたくなるほどなるほど> [注: ペンギンの横にある貝] (A氏自発, 6-10)

(中略)

- \* えっと。今日はですね。今日, 今ごろ, 今日の気分っているところで, ●ったんですけども。その, 壁を感じているな, ということ。で, この壁というところを, 最初に思いました。 (B氏, 2-(1), 自発) まあ, 壁っているところで, 壁があるという意味で, なんとなんの壁なのかっていう感じで, 左右に分ける壁っているところ。 (B氏自発, 2-2)

- \* で, その壁を, ●けというところと, あと, その籠を置いてったんですけども, 籠というところはその取り組んでるところが, それこそ, その, 何かやったことというのが抜け落ちててしまうような, そういう殺伐感というのがあって。で, まあ, 籠っていう。で, そうですね。ほんでまあ, 籠を置きました。 (B氏自発, 2-2)

(中略)

理論的メモ:

- ・ A氏自発, 1-10 では, 色のトーン→遠さ, おごそかな感じ
- ・ 調査的説明過程概念 3, 報告概念 17 に同様の概念あり。

(中略)

- ・ 概念7はミニチュアとその要素に限定する。構成に関しては, 別に概念を立てる。

(中略)

- ・ 具体例の検討によって, 概念名と, 定義に「内的なプロセス」という言葉を入れ, 修正する。

(後略)

資料3 A氏 箱庭作品



A氏第1回作品



A 氏第 2 回作品

255



A 氏第 3 回作品



A 氏第 4 回作品

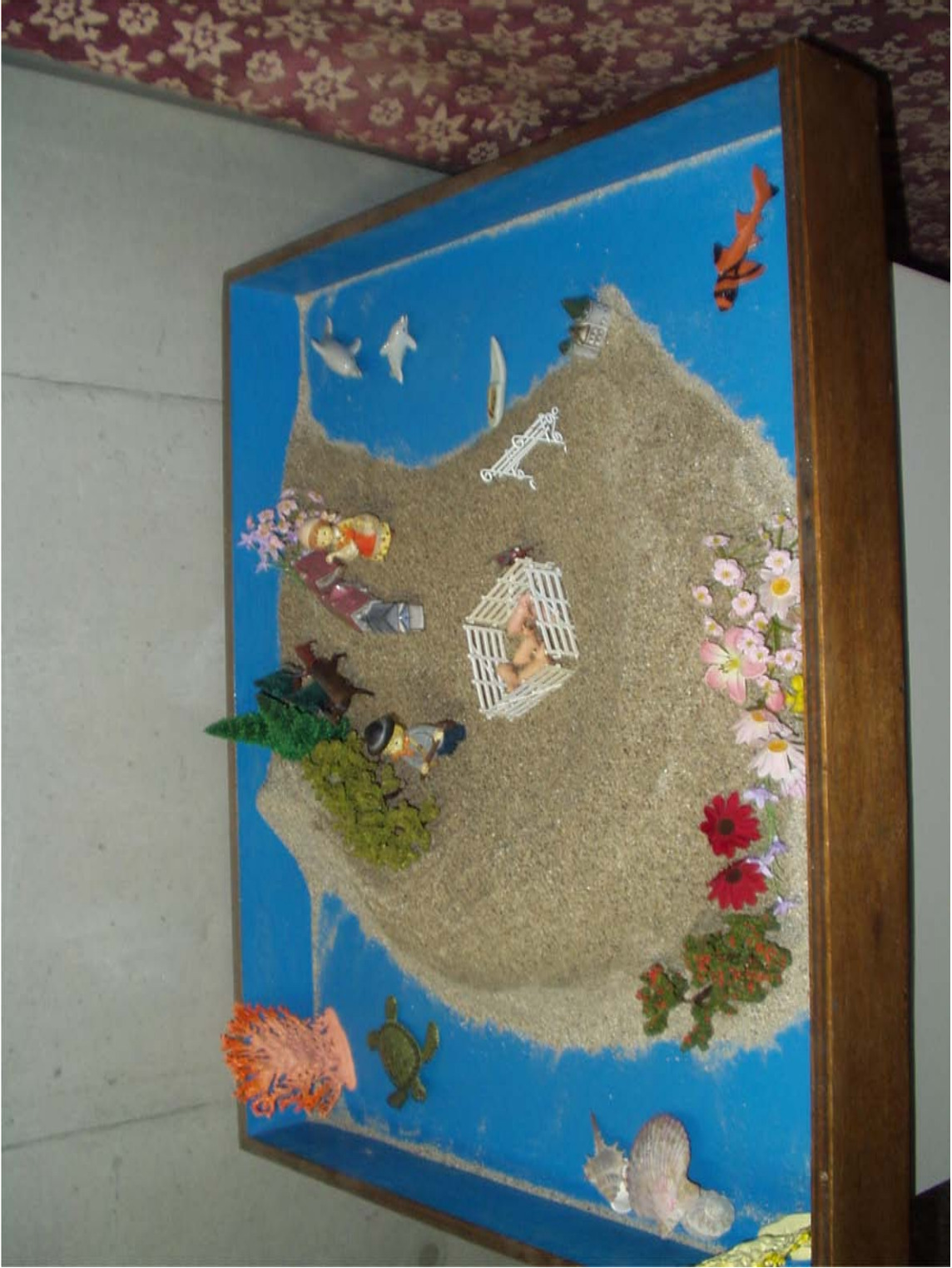


A 氏第 5 回作品





A 氏第6回作品



A 氏第 7 回作品



A氏第7回再構成後の作品



A 氏第 8 回作品



A 氏第 9 回作品



A氏第10回作品

資料 4 B 氏 箱庭作品



B 氏第 1 回作品



B 氏第 2 回作品





B 氏第 3 回作品



B 氏第 4 回作品



B 氏第 5 回作品



B 氏第 6 回作品



B氏第7回作品



B 氏第 8 回作品